長崎県文化財調査報告書 第124集

原の辻遺跡

幡鉾川流域総合整備計画(圃場整備事業)に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 I

1995

長崎県教育委員会

原の辻遺跡航空写真（南から）

1号溝状遺構

1号溝状遺構遺物出土状況

7 号溝状遺構

1 号溝状遺構遺物出土状況

石敷遺構

通路状遺構

T18区柱穴群

銅剣・銅鏃

鉄器

貨泉

木製楯

木製短甲

手斧の柄・漆製品

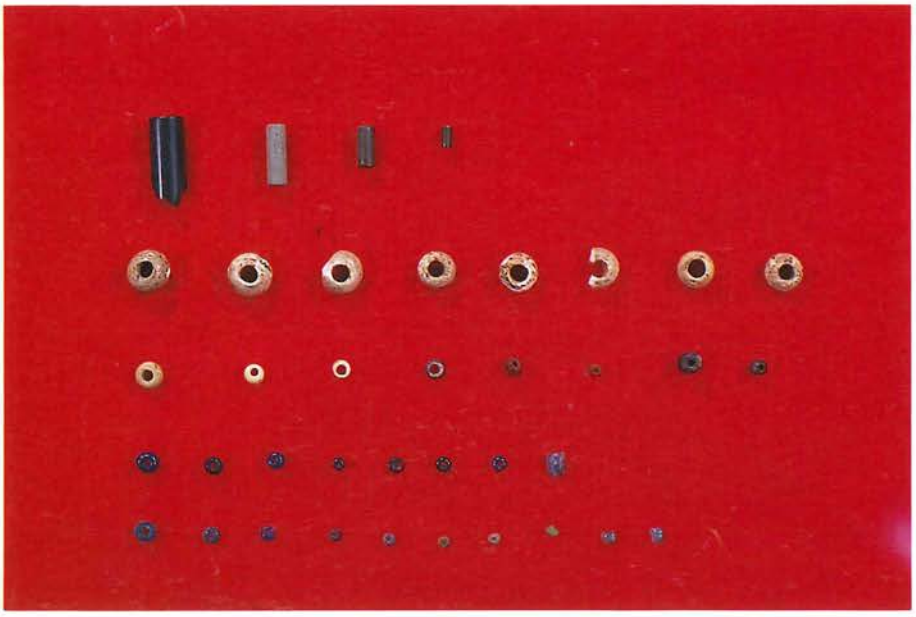
瓦質土器

瓦質土器出土状況

陶質土器

搬入土器

土師器



装飾品

序

本書は，県営の幡鉾川流域総合整備事業に伴い長崎県教育委員会・芦辺町教育委員会・石田町教育委員会が協力して平成５年度に実施した原の辻遺跡緊急発掘調査報告書である。

今回報告する調査地区からは，弥生時代から古墳時代にかけての遺構群が検出され，数多くの遺物が出土しました。

特に，弥生時代の三重に巡る環濠の一部が発見され，大規模な多重環濠集落跡であることが発掘調査で明らかになりました。

これらの調査成果によって，三世紀頃に書かれた中国の歴史書『三国志』魏書東夷伝倭人の条いわゆる「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の中心集落であることが判明し，全国の注目を集めました。また，遺跡の重要性から鑑みて当該工事区域内の環濠の大部分を含む地域約５ヘクタールについて工事から除外し，非農用地の設定がなされ文化財保存区域となりました。

このことは，地元の皆様をはじめ関係者及び関係機関の熱意の賜物と感謝しております。

これらの埋蔵文化財は，私たちの祖先から永く培われてきた貴重な文化遺産であり，後世に引き継ぐことが私たちの責務であります。今後，原の辻遺跡も関係各位のご理解とご協力を賜り，国史跡として指定されるよう努めると共に発掘調査も継続して実施する予定であり，今後の調査成果が期待されるところでございます。

本書が，埋蔵文化財の保護並びに学術研究の資料として役立てれば幸いに存じます。

本書を刊行するにあたり，関係各位からご協力・ご指導を賜りましたことに対して心から感謝申しあげます。

平成７年３月

長崎県教育委員会教育長　宮　崎　政　宣

例　　言

1．本書は，長崎県壱岐郡芦辺町及び石田町に所在する原の辻（はるのつじ）遺跡の発掘調査概要報告書である。

2．本書は，幡鉾川流域総合整備計画に伴い，平成５年４月22日から平成６年３月31日まで実施した緊急発掘調査の概要を記すものである。

3．調査は，芦辺町教育委員会及び石田町教育委員会が主体となり，長崎県教育委員会が指導にあたった。

4．発掘調査は，長崎県文化課壱岐教育事務所駐在係長副島和明・同文化財保護主事山下英明・芦辺町文化財調査員松永泰彦が従事し，整理作業は上記のほか長崎県文化課主任文化財保護主事宮崎貴夫の助力を得た。調査関係者及び調査協力者は，Ⅳ調査経過の項に記して謝意を表した。

5．本書の執筆は次の通りである。

Ⅰ……川口洋平（県文化課）

Ⅱ……石尾和貴（県文化課）

Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ－１・Ⅴ－３ (2)～(4)・Ⅴ－４ (5)・Ⅵ……副島

Ⅴ－２・Ⅴ－３ (1)・Ⅴ－４ (1) (4) (7) (8) ……山下

Ⅴ－４ (2) (3) (6) ……松永

6．本書の付編として，次の方々に玉稿をいただいた。記して感謝の意を表したい。

・朝鮮半島系の土器……武末純一（福岡大学助教授）

・動物遺存体……松井章（国立奈良文化財研究所主任研究官）
茂原信生（京都大学霊長類研究所教授）

・人骨……松下孝幸（土井ケ浜遺跡人類学ミュージアム館長）

・自然科学分析……古環境研究所

・木簡……平川南（国立歴史民俗博物館教授）

7．本書の作成にあたり，整理作業において下記の協力を得た。

分類整理　横山順

復元整理　加藤博江・豊永直子・比留澤睦子・平田勝子・柴山健美・平田けい子・富場章子

遺物実測　山口優・平尾典子・村田登代子・大坂敏代・上川久美子・平田明美・筌瀬明宏・境靖紀・是田敦

製　　図　加藤寿子・瀧野百合子・中田ゆき枝・江口由美

8．本書掲載の写真撮影は，遺構を副島・松永が，遺物を横山・山下が主におこなった。

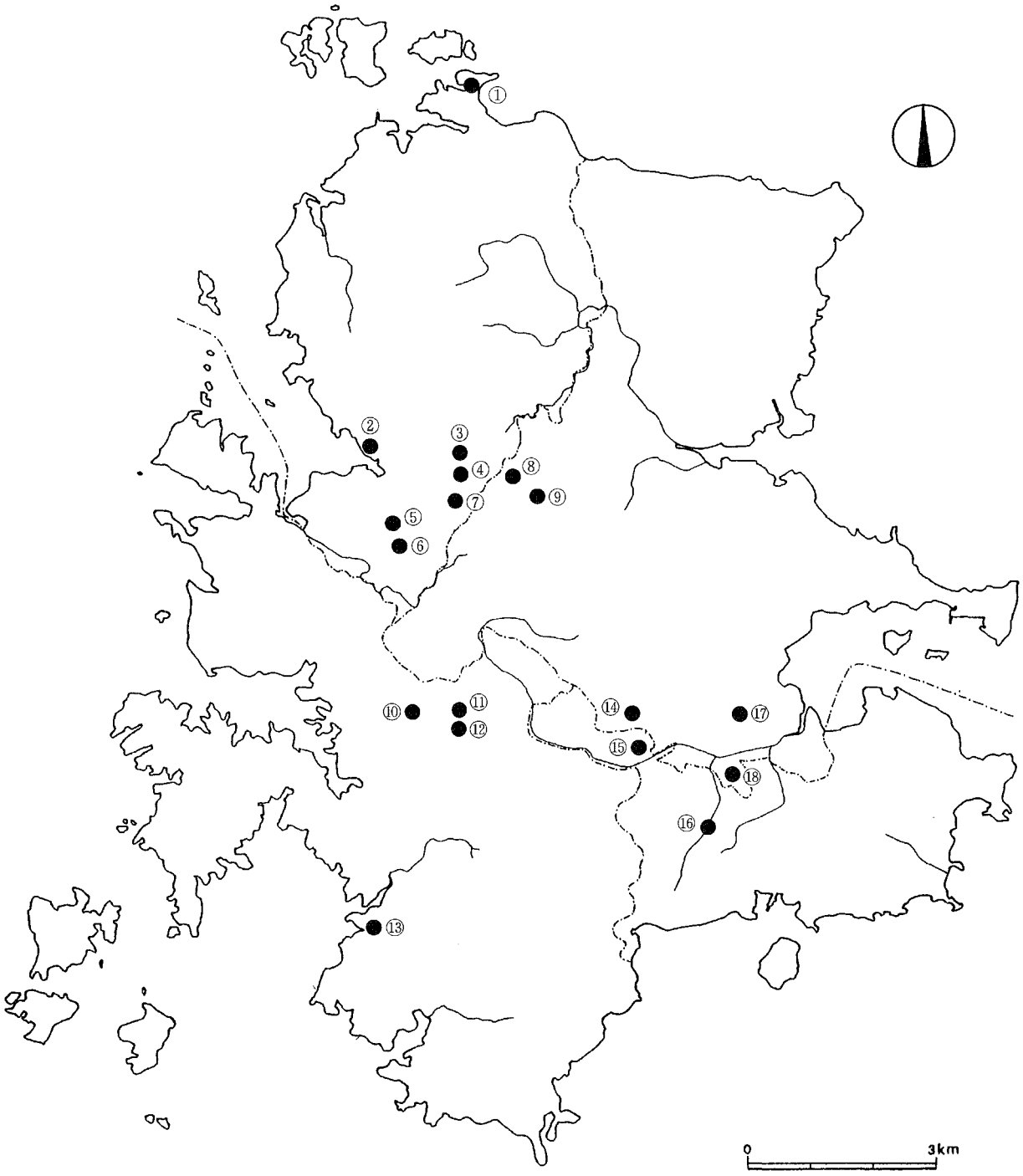
9．本書関係の遺物・図面・写真は原の辻遺跡発掘調査事務所で保管している。

10．本書の編集は，付編を副島が，その他を山下がおこなった。

本 文 目 次

Ⅰ．遺跡の立地と歴史的環境……1
Ⅱ．原の辻遺跡の考古学調査……6
Ⅲ．調査に至る経緯……11
Ⅳ．調査経過……12
　1　範囲確認調査……12
　2　緊急発掘調査……14
Ⅴ．調　査……15
　1　調査概要……15
　2　土層……25
　3　遺構……26
　　(1)　溝状遺構……26
　　(2)　石敷遺構……38
　　(3)　柱穴群……38
　　(4)　通路状遺構……44
　4　遺物……45
　　(1)　土器……45
　　①　大溝出土土器……45
　　②　5号溝出土土器……45
　　③　搬入土器……57
　　(2)　石器……58
　　(3)　青銅器類……71
　　(4)　鉄器……75
　　(5)　木器……79
　　(6)　骨角器……95
　　(7)　土製品……99
　　(8)　装飾品……99
Ⅵ．まとめ……102
Ⅶ．付　編……163
　朝鮮半島系の土器……165
　原の辻遺跡出土の動物遺存体……189
　長崎県壱岐・原の辻遺跡出土の弥生時代人骨……209
　自然科学分析調査報告……221

　長崎県壱岐郡原の辻遺跡出土の木簡……1



	遺跡名	町名	時代		遺跡名	町名	時代
①	串山ミルメ浦遺跡	勝本	縄文~奈良	⑩	戸田遺跡	郷ノ浦	弥生
②	松崎遺跡	勝本	縄文	⑪	天手長男神社遺跡	郷ノ浦	弥生
③	掛木古墳	勝本	古墳	⑫	車出遺跡	郷ノ浦	弥生
④	笹塚古墳	勝本	古墳	⑬	名切遺跡	郷ノ浦	縄文
⑤	対馬塚古墳	勝本	古墳	⑭	興触遺跡	芦辺	弥生~中世
⑥	カラカミ遺跡	勝本	弥生	⑮	興原遺跡	石田	弥生~中世
⑦	双六古墳	勝本	古墳	⑯	椿遺跡	石田	弥生~奈良
⑧	県指定史跡 鬼の窟古墳	芦辺	古墳	⑰	県指定史跡 天ノ塚山古墳	芦辺	古墳
⑨	県指定史跡 壱岐国分寺跡	芦辺	奈良・平安	⑱	原の辻遺跡	芦辺・石田	弥生~中世

壱岐島主要遺跡分布図（1/100,000）

Ⅰ．遺跡の立地と歴史的環境

１．地理的環境

壱岐島は，九州と朝鮮半島の間に浮かぶ東西約15km，南北約17km，面積139km²の小規模な島である。行政的には長崎県に属するが直接航路はなく，佐賀県の呼子とフェリーで約１時間，福岡県の博多と２時間半で結んでいる。このため経済・文化的には福岡の圏内にある。

島は全体的に起伏が少なく，最高峰である岳の辻で213mにすぎない。北方に位置する峻険な対馬と対照的で，しばしば「女性的」と形容される。島の基盤は第三紀の堆積岩で，その上を玄武含が覆って低平な地形を形成する。島の南東部には「深江田原（ふかえたばる）」とよばれる平野があり，長崎県下では有数の穀倉地帯として知られている。原の辻遺跡はそこに舌状に伸びた台地を中心に広がっている。その面積は約80haで，現在の芦辺町と石田町にまたがっている。台地の標高は高い所でも18m程度であるが，平野全体を見渡せるほどの好位置にある。遺跡の北側には幡鉾川が東に流れ，約１km離れた内海に注いでいる。古代には駅家が置かれていた印通寺港は遺跡の南北約１kmの位置にあり，現在は九州本土と航路で結ばれている。

２．歴史的環境

壱岐島は古くからその地理的条件のため，大陸との中継点として重要な役割を果たしてきた。その名があらわれる最古の文献である３世紀の歴史書『魏志倭人伝』には「一支国」として登場し，弥生時代末の壱岐の様子が書かれている。「一支国に着く。官をまた卑狗といい，副官を卑奴母離という。竹林・叢林が多く，三千ばかりの家がある。やや田地があり，田を耕してもなお食べるには足らず，また南北に行き米を買うなどする。」簡単ながら非常に貴重な記述であるといえよう。壱岐では現在約60箇所の弥生時代の遺跡が知られているが，原の辻遺跡はその中で最も規模が大きく，出土した遺物は質，量ともに他をしのいでいることから，この一支国の中心集落と考えられている。この遺跡については大正時代から紹介され，幾度か調査されてきた。そして平成５年度からの調査では台地を取り巻く多重の環濠が確認され，全国的に注目されるようになった。現在，原の辻遺跡は「魏志倭人伝に記載された国の都が唯一特定された遺跡」として評価されている。

島内では，原の辻遺跡に次ぐ遺跡として島の北西部にあるカラカミ遺跡が知られている。高地に位置し環濠を巡らせているが，原の辻遺跡に比すと規模は小さく遺物の内容もやや劣っている。島内には，原の辻遺跡を中心としていくつかの集団があったと思われるが，カラカミ遺跡はその中でも有力なものではなかったかと推測される。

弥生時代から古墳時代の推移については不明な点が多い。原の辻遺跡は集落としては古墳時代初頭まで続いたと考えられるが，その後どうなったかを知る手がかりは今のところ乏しい。現在，壱岐島内には４世紀代の古墳が知られておらず，最古のものと考えられている大塚山古墳は５世紀代のもので原の辻遺跡を見下ろす山の上に築かれている。この頃までは付近にそれを築いた勢力があったと考

第１図　周辺遺跡分布図（１/2,500）

番号	遺跡名	所在地	種別	立地	時代
1	定光寺前遺跡	芦辺町湯岳本村触	遺物包含地	平野	弥・古・平・中
2	覩上山1号墳	芦辺町湯岳本村触字目細	古墳	丘陵	古墳
3	覩上山2号墳	芦辺町湯岳本村触字辻の米	古墳	台地	古墳
4	堂山1号墳	芦辺町深江南触字羽廣田	古墳	丘陵	古墳
5	堂山2号墳	芦辺町深江南触字羽廣田	古墳	丘陵	古墳
6	堂山3号墳	芦辺町深江南触字羽廣田	古墳	丘陵	古墳
7	都城遺跡	芦辺町湯岳今坂触	遺物包含地	丘陵	弥・古・中
8	興触遺跡	芦辺町湯岳興触	遺物包含地	丘陵	先・縄・弥・古
9	興原遺跡	石田町湯岳興触字大川・興・古川	遺物包含地	丘陵	先・弥・古
10	壱岐国安国寺跡	芦辺町深江栄触	寺跡	山	中世
11	安国寺前遺跡	芦辺町深江栄触	遺物包含地	台地	弥・古・中
12	大塚山古墳	芦辺町深江栄触	古墳	丘陵	古墳
13	清水遺跡	芦辺町深江栄触字清水	墓地	丘陵	弥生
14	鶴亀鬼屋古墳	芦辺町深江鶴亀触	古墳	丘陵	古墳
15	俵山古墳	芦辺町深江鶴亀触字俵山	古墳	丘陵	古墳
16	俵山1号墳	芦辺町深江鶴亀触字俵山	古墳	丘陵	古墳
17	閨繰遺跡	芦辺町深江鶴亀触字閨繰	墳墓	丘陵	弥生
18	松尾遺跡	芦辺町深江鶴亀触字松尾	墓地	台地	弥生
19	玉塚古墳	芦辺町深江鶴亀触字松尾	古墳	丘陵	古墳
20	神ノ嶺古墳	石田町池田西触字神ノ嶺	古墳	丘陵	古墳
21	坂本古墳	石田町池田西触字上池田	古墳	丘陵	古墳
22	鶴田遺跡	石田町池田仲触字鶴田	墳墓・遺物包含地	台地	弥生
23	原の辻遺跡	芦辺町深江鶴亀触・石田町石田西触ほか	集落跡・墳墓	台地	先・弥・古・奈・平・中
24	柏田古墳	石田町石田東触字柏田	古墳	丘陵	古墳
25	平山3号墳	石田町石田東触字平山	古墳	丘陵	古墳
26	平山2号墳	石田町石田東触字平山	古墳	丘陵	古墳
27	平山1号墳	石田町石田東触字平山	古墳	丘陵	古墳
28	遉辻遺跡	芦辺町深江平触字遉の辻	墳墓	台地	弥生
29	重山塚	石田町筒城西触字泉	墳墓	丘陵	中世
30	西福寺古墳	石田町筒城西触字谷川	古墳	丘陵	古墳
31	久善ノ辻黒曜石原産地	郷ノ浦町平人触字久善ノ辻	遺物包含地	丘陵	
32	真弓館跡	石田町池田仲触字真弓	館跡	丘陵	中世
33	伝遣新羅使墓	石田町池田東触字石田峯	墳墓	丘陵	奈良
34	椿遺跡	石田町池田東触字椿	遺物包含地	台地	古・奈・平
35	浦山城跡	石田町池田東触字浦山	城跡	丘陵	中世
36	津の宮遺跡	石田町石田西触字津の宮	墳墓	丘陵	弥生
37	白水遺跡	石田町石田西触字白水	遺物包含地	台地	縄・弥
38	中尾遺跡	石田町池田東触字中尾	遺物包含地	丘陵	弥・古
39	黒木遺跡	石田町本村触城ノ辻	城跡	丘陵	中世
40	石田城跡	石田町石田東触字久保	城跡	丘陵	中世
41	小塚原1号墳	石田町石田南触字西ノ久保	古墳	丘陵	古墳
42	小塚原3号墳	石田町石田南触字西ノ久保	古墳	丘陵	古墳
43	小塚原2号墳	石田町石田南触字西ノ久保	古墳	丘陵	古墳
44	志自岐遺跡	石田町石田南触字志自岐	遺物包含地	丘陵	弥・古
45	池田遺跡	石田町石田南触字浜田	遺物包含地	平地	弥生

表1　周辺遺跡地名表

えられるが，考古学的には証明されておらず今後の調査が期待されている。

6世紀から7世紀になると古墳は集中的に造られるようになる。島内には約270基の古墳が知られているが，これは長崎県の古墳の約半数にのぼり，島の規模からすると驚くべき数である。その中でも代表的なものとして県内最大規模の前方後円墳である双六古墳（全長約90m）や同じく県内最大の円墳である鬼の窟古墳（直径約45m），そして金銅製の馬具が出土した笹塚古墳（直径約38m）などがあげられる。これらはいずれも島の中央に造られており，付近に中心勢力があったことを裏付けている。また離島の首長墓としては破格のものであることから，中央政権との結びつきの強さを指摘する意見もある。だが7世紀も後半になると壱岐島は，国内での政略的な拠点から国防上の拠点へとその位置づけを変化させるようになる(1)。

663年，朝鮮半島の白村江で日本が新羅に敗れたことを受けて九州各地の防衛が強化されるが，最前線である壱岐島にも烽と防人が置かれている(2)。8世紀になると壱岐は島でありながら国の扱いを受け，国府そして国分寺(3)が置かれ官道なども整備されたようである。9世紀には新羅などへの警戒から大宰府とのやりとりが頻繁に行われたことが文献でわかる(4)。原の辻遺跡では，この奈良・平安時代の木簡が出土しており，この頃付近に官衙などが存在したことが推測されている。

註

(1) 森　浩一　「海の生活—玄界・瀚海の海人」『日本通史』第1巻　岩波書店　1993

(2) 『日本書記』巻27

(3) 壱岐直の氏寺を転用　『延喜式』巻21

(4) 『続日本後紀』巻4など

参考文献

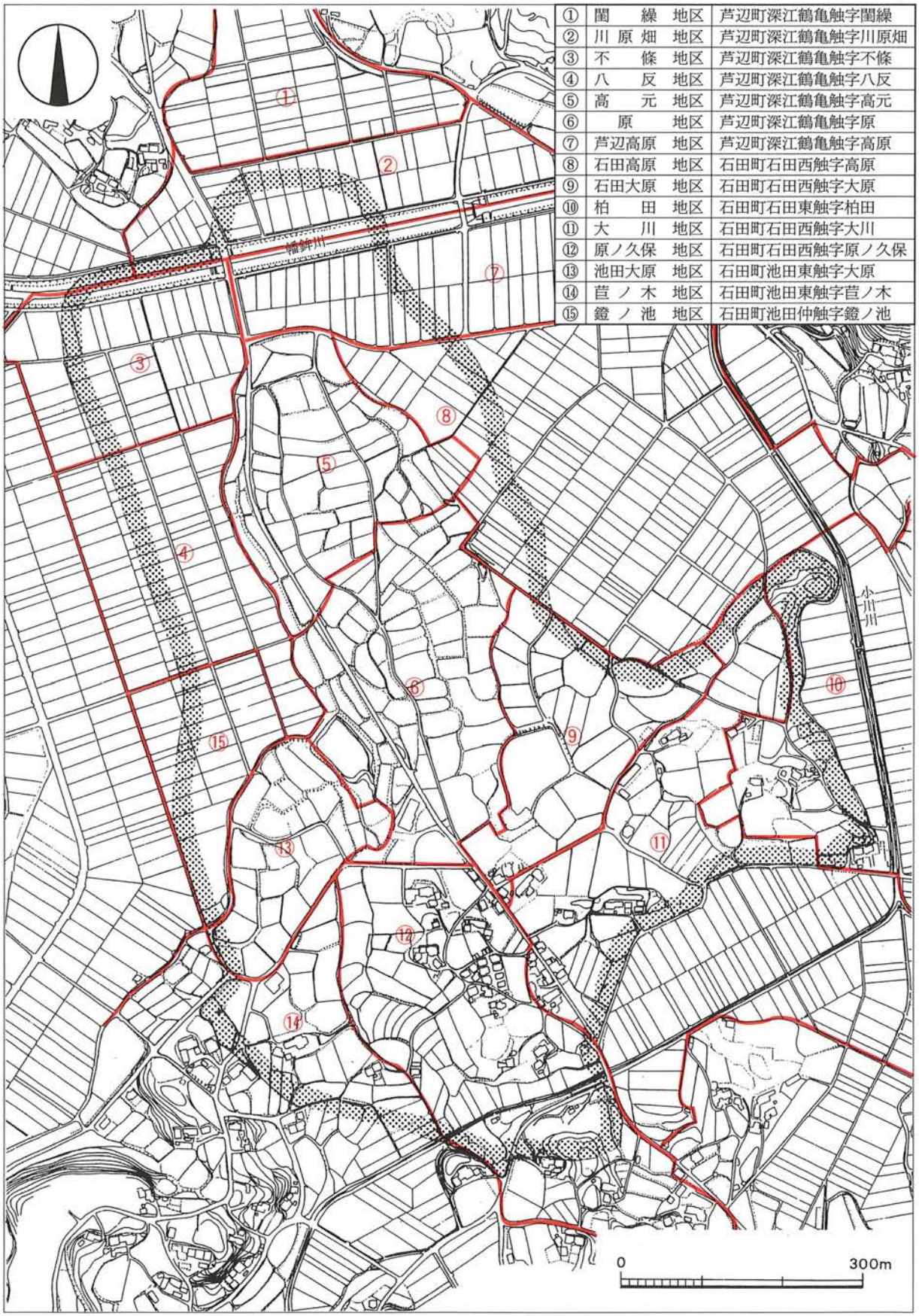
1．藤田和裕　『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第26集　長崎県教育委員会　1976

2．藤田和裕　『原の辻遺跡II』長崎県文化財調査報告書第31集　長崎県教育委員会　1977

3．藤田和裕・安楽　勉『原の辻遺跡III』長崎県文化財調査報告書第37集　長崎県教育委員会　1978

4．正林　護・宮崎貴夫『カラカミ遺跡』勝本町文化財調査報告書第3集　勝本町教育委員会　1985

5．横山　順「壱岐の古代と考古学」『玄界灘の島々』　小学館　1990



①	闇　繰　地区	芦辺町深江鶴亀触字闇繰
②	川原畑　地区	芦辺町深江鶴亀触字川原畑
③	不　條　地区	芦辺町深江鶴亀触字不條
④	八　反　地区	芦辺町深江鶴亀触字八反
⑤	高　元　地区	芦辺町深江鶴亀触字高元
⑥	原　地区	芦辺町深江鶴亀触字原
⑦	芦辺高原　地区	芦辺町深江鶴亀触字高原
⑧	石田高原　地区	石田町石田西触字高原
⑨	石田大原　地区	石田町石田西触字大原
⑩	柏　田　地区	石田町石田東触字柏田
⑪	大　川　地区	石田町石田西触字大川
⑫	原ノ久保　地区	石田町石田西触字原ノ久保
⑬	池田大原　地区	石田町池田東触字大原
⑭	苣ノ木　地区	石田町池田東触字苣ノ木
⑮	鐙ノ池　地区	石田町池田仲触字鐙ノ池

第２図　遺跡全体図及び地区割図（１/7,000）

II．原の辻遺跡の考古学調査

原の辻遺跡の調査は，１．戦前の調査，２．九学会および東亜考古学会の調査，３．昭和49年～54年の長崎県教育委員会による調査，４．昭和55年以降の諸工事に伴う調査，５．平成３年以降の幡鉾川流域総合整備事業に伴う調査，の５期に分けられる。ここでは１から４までの調査の歴史について述べることにする。

１．戦前の調査

第二次世界大戦前の原の辻遺跡の調査は，主に地元郷土史家によって進められている。遺跡発見の正確な年代ははっきりしないが，松本友雄氏は自著の中で「私が始めて此の遺趾地から遺物の出ることを知ったのは，明治三十七八年頃（中略）であった（中略）原の辻の県道より西側の畑地に土器破片が沢山散列して居たのを若干採集して帰ったことを記憶してゐる(1)」と述べており，明治期には原の辻一帯が遺跡として知られていたことがわかる。しかし，本格的な調査は大正期に入ってからのようである。松本氏は「私が原の辻を調査したのは石田校に奉職して（大正十二年四月カラ昭和二年三月マデ）居た際で就中大正十五年が最も業蹟の見るべきものがあった(2)」と述べ，石器や土器などを採集している。その概要は『考古学雑誌』に紹介されており(3)，中央学界の知るところとなった。その後松本氏は，原の辻遺跡のほか，同じ壱岐にある弥生時代のカラカミ遺跡の研究も含めて，『先史時代の壱岐研究』という著作を昭和４年に発表している。

昭和14年，原の辻遺跡一帯で幹線道路の建設工事にともなって耕地整理が行われ，その埋め立て用の土取り工事が遺跡台地先端部で進行していた際，当時壱岐中学校に勤務していた鴇田忠正氏が土取

調　査　年	調　査　者	調　査　地　区	調　査　原　因
大正年間	松本友雄，山口麻太郎		
昭和14年	鴇田忠正	高元	耕地整理に伴う土取り工事
昭和26，28，29，36年	九学会，東亜考古学会	高元・原ほか	学術調査
昭和49年	県教委	石田大原	畑地水田化工事
昭和50年	県教委	高元・原	学術調査
昭和51年	県教委	原・石田大原・大川・柏田	学術調査
昭和52年	県教委	原ノ久保・苣ノ木	学術調査
昭和54年	県教委	苣ノ木	学術調査
昭和55年	県教委	高元・原	電話ケーブル路線新設工事
昭和60年	県教委	原	深江池浚渫工事
平成２年	県教委・芦辺町教委	高元	災害復旧工事
平成３～４年	県教委・芦辺町教委・石田町教委	川原畑・不條・石田高原ほか	幡鉾川流域総合整備計画

表２　原の辻遺跡発掘調査史一覧

りの進行に応じて詳細な土層の観察とともに遺物の取り上げを行っている（高元地区）。鴇田氏の報告[4]によると，下位から第１層・第２層・第３層と，三層の包含層が確認されている。それぞれの年代は，第１層は「標式的須玖式容器と同時代のもの」，第２層は「第一層築造年代よりさして遅れたものとは考へられない」，第３層は「第二層形成年代に比し多少時間的に遅れる」と推定され，「何等紀年の徴すべき遺物を出土せざる本遺跡形成年代の上限を前漢末に置き，その下限を王莽の時代を下ること遠からざる時代，即ち西暦一世紀前半期に置くを至当と考へるものである」とまとめている。また，遺跡の性格を，「北九州弥生式系文化の影響下に育成され」ている一方で，「顕著な史前時代的文化が存有」していると述べている。この調査は，今でいう緊急発掘調査に当たり，制約のある調査ではあったが，北部九州の土器編年の中に位置づけての考察がなされており，きわめて示唆的である。

また，詳しい調査時期は分からないが，山口麻太郎氏は「壱岐島の先史遺跡地帯について[5]」の中で，島内を「利用港湾を中心に，各遺跡の持つ性格と，伸びて行った地理的条件とによって結びつけ」て，６つの遺跡地帯に分け，その第一地帯として深江印通寺遺跡地帯をあげている。山口氏によると深江遺跡地（原の辻遺跡とその周辺一執筆者註）では，「台地突端の北辺から同隣接東辺」（高元地区），「台地表面」（高元・原地区），「現津合橋の下手側川底」（川原畑・芦辺高原地区），「坊主橋の上手側（中略）川底」の４地点で遺物が発見され，数ヵ所で甕棺や箱式石棺が確認されている。

その他，島外の研究者も来岐している。大正10年には鳥居龍蔵氏が，昭和５年には森本六爾氏が原の辻遺跡を訪れている[6]。森本氏の報告によると「堀切県道の東側切断崖に沿ふて略ぼ南北に長く埋まってゐた合口甕棺」を松本友雄氏の案内で発掘している。この甕棺は「筑紫平野に多く見る甕棺の器形と規を一にして」おり，長さ35cm前後の小形のものであった。

２．九学会および東亜考古学会の調査

戦後の原の辻遺跡の調査は，京都大学を中心とする学会によって始められた。昭和26年，考古学や地理学など９つの学会いわゆる九学会連合で対馬の共同調査が行われたが，その内第６班として水野清一京都大学教授を主任として原の辻遺跡の調査が行われた（高元地区）。この調査の成果は，水野清一・岡崎敬両氏によって概報にまとめられている[7]。それによると，二層の包含層が確認され，第１層（上層）からは弥生時代後期前半の土器，石器，骨角器，鉄製品[8]，銅鏃，貨泉などが，第２層（下層）からは弥生時代中期後半の土器，石器，骨角器などが検出されている。また，両氏は同概報の中で第一層（上層）の土器について「つぼはなお須玖式のおもかげをのこすが，かめはもはや須玖式をはなれ，後期の高三瀦式に似ている。したがって，この第一層式を，後期の須玖式とよぶことも，前期の高三瀦式とよぶことも可能であるが，要するに，その中間形式で，むしろ現在では原の辻上層式とよんでおく方がよいとおもう」と述べ，弥生土器編年の型式名として提唱されている[9]。

昭和26年，対馬調査団の一つの班として来島した調査団は，翌昭和27年からは東亜考古学会として独立し，壱岐の考古学調査を行った。原の辻遺跡の調査は，東亜考古学会としては昭和28・29・36年に行われている。昭和28年には，遠賀川式土器が出土し，須玖期の竪穴式住居跡が検出された。また，

鋤頭・鎌などの鉄製農具が出土している[10]。

昭和29年の調査については，藤田国雄氏によると[11]，「一メートル近く地山を掘鑿した溝を伴う須玖期の平地住居址」に「朝鮮金海式の漢式の壺が伴って発見」されている。そして，漢式土器の伴出は「その分類編年を壱岐の弥生式土器の編年を手掛りとして推すことの可能性を示すものである。と同時に，壱岐の弥生式土器を今迄のように北九州の編年に準拠して組立てるというよりは，壱岐自体の更に細分した編年で北九州の編年を検討出来る程度に出土遺物も豊かになった」とまとめられている。

昭和36年の調査については，秋山進午氏によると[12]，「発見した遺物には銅鏃，管玉片，ガラス小玉などの他，鍬先，釣針等の鉄製農具や魚猟具を含む多数の鉄器や漢式土器片など」が含まれていた。そして「第一次調査（昭和26年の調査—執筆者註）で東西方向において明らかとなっていた層位関係に加えて，これを横切る南北方向に対して層位を明らかにし，その南端で明瞭な土器の層位を検出し得たのは第一の収穫といえよう。更に，これに応じてガラス小玉がほぼ原の辻に伴なうことや，ひいて鉄器，銅鏃，貨泉などの所属に見通しを得ることが出来た」とし，「壱岐の弥生式文化は漢式土器のごとく本土で発見の乏しいものもあるにはあるが，土器形式をはじめ鉄器，ガラス玉などいずれも北九州と規を一にしている」とまとめられている。

3．昭和49年～54年の長崎県教育委員会による調査

東亜考古学会の調査以降，原の辻遺跡の調査はしばらく行われなかったが，昭和40年代の大規模開発の波が壱岐にも押し寄せ，この遺跡は再び注目されることとなった。

昭和49年，畑地の水田化工事の際，弥生時代前期から中期にかけての墓域が発見された（石田大原地区）。調査面積1,000m²の中に甕棺52基（須玖式を主体に城ノ越式もみられる），箱式石棺19基，溝状遺構4条が検出された。また，銅剣1点，鉇1点，玉類約100点が出土している[13]。

この調査を契機として，従来「原の辻遺跡」と呼ばれていた台地の周囲にも遺跡が拡がることが予想され，翌昭和50年から長崎県教委によって範囲確認調査が実施された。

昭和50年の第1次調査では，現在に至るまでの遺構・遺物の出土地点，出土状況の聞き取り調査と，従来「原の辻遺跡」と呼ばれていた台地の試掘壙による調査が行われた（高元・原地区）。聞き取り調査では，畑地の水田化に伴って，台地の各地で遺物の出土したことが記憶されており，また，遺構として墓地の存在が知られていた。試掘調査では，漢式土器を含めて多数の土器（弥生時代中期中頃から後期前半）などが出土し，岩盤を切り込んだ生活址と思われる遺構，V字溝になると考えられる遺構などが確認された[14]。

昭和51年の第2次調査では，台地の南東にある別の台地が調査対象とされた（石田大原・柏田・大川地区）。加えて，第1次調査で検出したV字溝になると思われる遺構の解明も行われた。その結果，玉類などを副葬する弥生時代後期の墓域が確認され，同じ地番内において多量の玉類・漢式鏡片・銅釧などが表採された。また，第1次調査で不明のまま残した溝状の遺構が，底は平らであるが一種のV字溝になることも確認された。さらに，この溝は，使用が中止されたあとで土器などの破損品ある

いは不要物の捨て場として使われていたため，弥生時代中期後半から終末期にかけての良好な資料が得られた(15)。

昭和52年の第３次調査では，第２次調査区より南西方向の地点が調査対象とされた（原ノ久保・苣ノ木地区)。その結果，新たに３カ所の墓域および，第１・２次調査とは別のＶ字溝が確認された(16)。

昭和54年には，第３次調査で確認されたＶ字溝の走行方向とその性格を探る目的で調査が行われた。その結果，西側延長部分はすでに重機類によって削平されていたものの，東側部分は大きく弧を描きながら北東方向に延びていることが確認された。溝内からは甕棺の破片が出土しており，このＶ字溝は墓地を区画するために設けられていたと考えられる。

４．昭和55年以降の諸工事に伴う調査

範囲確認調査によって，従来「原の辻遺跡」と呼ばれていた台地の周辺にまで遺跡が拡がることが確認されて以降，体系的な調査は行われていないが，諸工事に伴う緊急発掘調査によって若干ではあるが資料の増加をみている。

昭和55年には，電話ケーブル線路の新設工事に伴い，台地西側端部において発掘調査が実施された(高元・原地区)。出土遺物の大半は弥生時代中期から後期にかけての土器で，石器はわずかだった。この調査は電柱埋設に伴う調査であったため面積は限られたものであり，また，土手部分の傾斜地が大部分という制約もあり，層位的な遺物の取り上げには至らなかった(17)。

昭和60年には，深江池の浚渫工事に伴い，深江池内で発掘調査が実施された(原地区)。少量ながら旧石器時代および弥生時代の遺物が出土したが，出土状況から東側台地からの流れ込みの結果と考えられる。

平成２年には，災害復旧工事に伴い，台地先端部の東縁において発掘調査が実施された（高元地区)。この調査地点は，昭和14年に鴇田氏が調査した地点と昭和26年に九学会が実施した調査地点との中間に位置しており，昭和26年同様，上層と下層に分かれて包含層が確認された。前者は弥生時代後期，後者は弥生時代中期の遺物が主体であった(18)。

註

(1) 松本友雄「探古日録」二（昭和６年，県立長崎図書館蔵・稿本）

(2) 註(1)に同じ

(3) 松本友雄「壱岐国考古通信」(一)（『考古学雑誌』第17巻第２号，昭和２年）

(4) 鴇田忠正「長崎県壱岐郡田河村原ノ辻遺跡の研究」(柴田実編『日本文化史研究』，昭和19年）

(5) 『山口麻太郎郷土研究集』分冊第三集（文末に「本稿は昭和十五年に一応完成し，廿一年三月第三回現地史談会で『壱岐の開発と印通寺浦』と題して発表したものであるが，本書編纂にあたってさらに稿を整理した。昭和卅五年十一月七日」の注記がある）

(6) これについては，註(1)のほか，松本友雄「探古日録」巻三（昭和７年，県立長崎図書館蔵・稿

本）に詳しい。また，森本六爾「壱岐島の一甕棺」（『考古学』第４巻第10号，昭和８年）

(7) 水野清一・岡崎敬「壱岐原の辻弥生式遺蹟調査概報」（九学会編『対馬の自然と文化』，昭和29年）

(8) 原の辻遺跡出土の鉄製品については，岡崎敬「日本における初期鉄製品の問題」（『考古学雑誌』第42巻第１号，昭和31年）

(9) なおこれについては，高倉洋彰氏によって検討がなされている。高倉洋彰「原ノ辻上層式土器の検討」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻，昭和57年）

(10) 註(7)に同じ

(11) 藤田国雄「壱岐考古調査記」（『国立博物館ニュース』第89号，昭和29年）。また，藤田氏によれば，同じ昭和29年の春に，原の辻の開拓工事に伴って，細形銅剣・銅鉾が出土し，須玖式甕棺が伴出している。また，原の辻遺跡の北側に隣接する閏繰遺跡においても，須玖式最初期の箱式石棺と甕棺十数基が同位層に発見されている。なおこの銅剣・銅鉾の出土地点については，地元の方からの聞き取りによって，昭和49年に多数の甕棺や石棺が検出された地点（石田大原地区）に隣接した地点であることを確認している。

(12) 秋山進午「東亜考古学会第五次壱岐（原の辻）調査概報」（『九州考古学』17，昭和38年）

(13) 田川肇「原の辻・大原遺跡」（『日本考古学年報』27，昭和49年度，昭和51年）。報告書未刊。

(14) 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』（長崎県文化財調査報告書第26集，昭和51年）

(15) 長崎県教育委員会『原の辻遺跡（II）』（長崎県文化財調査報告書第31集，昭和52年）

(16) 長崎県教育委員会『原の辻遺跡（III）』（長崎県文化財調査報告書第37集，昭和53年）

(17) 長崎県教育委員会『長崎県埋蔵文化財調査集報XIV』（長崎県文化財調査報告書第101集，平成３年）

(18) 長崎県芦辺町教育委員会『原(はる)の辻(つじ)遺跡―災害復旧工事に伴う緊急発掘調査―』（芦辺町文化財調査報告書第６集，平成５年）

Ⅲ．調査に至る経緯

壱岐は，長崎県壱岐郡郷ノ浦町，勝本町，芦辺町，石田町の四町に行政的に分かれている。

壱岐島は，玄界灘に浮かび東西約15km，南北約17km程の円形状を呈し，面積約138km²で，標高約213mの岳の辻を最高に，100m前後の比較的平坦な溶岩台地で形成されている。

壱岐は，博多，対馬へ約67km，佐賀県呼子まで約26km程の距離で，古来から対馬と共に日本と中国大陸，朝鮮半島との文化の交流や交通，防衛上の重要な拠点であった。

この島の東南部に位置し，島内最大河川の幡鉾川（全長約9km）が西から東に流れ，その流域には壱岐最大の平野を形成している。

平成元年に県営幡鉾川流域総合整備事業の計画が策定され，県農林部局から県文化課へ遺跡の取り扱いについての協議がなされた。

工事計画および規模は，平成4年度から平成13年度の10か年計画で圃場整備・河川改修・農道整備を骨子とするもので，土地条件の改良や耕地の集団化，大型機械の効率的な運行など生産性の高い条件に整備し，地域農業の発展に期することを目的に，郷ノ浦町，芦辺町，石田町域の約340haの広範囲にまたがる大規模な計画であった。

この幡鉾川流域一帯の平野部分には，広範囲に分布する弥生時代の集落跡である原の辻遺跡の発見から昭和14年の幡鉾川（旧川内川）河川改修工事関係の耕地整理事業や昭和29年，30年代の圃場整備事業の工事範囲での甕棺墓，箱式石棺墓などの遺構や青銅製の銅剣，銅矛，銅鏃などの貴重な遺物が発見と共に，東亜考古学会，九学会の学術調査が実施されるなど重要な遺跡であることは認識されていた。そのために，今回の整備事業には，遺跡の重要性を鑑み，台地上の部分は予め工事計画範囲から除外した形での策定であった。ただ，現在の水田面下にどれほどの規模で分布するのかどうかについては不明であった。

県文化課は，計画区域内の分布調査を平成2年11月26日から同年11月29日に約340haについて実施した。

調査は，分布範囲が広大なことと計画区域が現水田面の為に，踏査を実施するのに困難を極めた。

その結果，区域内に新規発見の遺跡も含め13箇所の周知の遺跡と隣接する周知の遺跡8箇所の計21箇所の遺跡が確認された。その中で，隣接する遺跡については，現工事計画範囲であれば，工事着工に支障無いものと判断された。

IV. 調査経過

1．範囲確認調査

平成2年度に実施した分布調査の結果を基に，関係機関と協議を重ね，平成3年度と4年度の2か年にわたり，10遺跡についての範囲確認調査を文部省国庫補助事業として，当該教育委員会が調査主体で，県文化課の調査指導の基に実施した。

平成3年度の調査は，芦辺町域で原の辻遺跡の北側および西側の現水田部分に2m×2mの試掘壙を49箇所設定し，196㎡について実施した。また，石田町域で原の辻遺跡の東，西，南側の現水田部分に2m×2mの試掘壙を50箇所設定し，200㎡について実施した。

第3図　範囲確認調査試掘壙配置図（1/10,000）

芦辺町域の結果は，遺跡の西側及び北側部分で弥生時代の杭列遺構，溝状遺構が数条と中世の杭列遺構が検出された。また，ナウマン象の臼歯が１個発見され，広範囲に出土することが予察された。

石田町域の結果は，遺跡の東，西側に範囲が拡がり，杭列遺構等が検出された。また，南側については，小川川の蛇行域で遺物等確認されなかった。

両町域の調査結果から，20haの範囲に弥生時代や中世の時期の遺構，遺物が確認され，遺跡全体の範囲は，台地部分の60haを合わせると約80haの広大な面積に分布することが明らかになった。

原の辻遺跡の調査は，今後の調査も踏まえ，字名を利用して地区名称を附した。また，遺跡全域に30m×30mの網目方眼の大グリットを設定し，更に５m×５mの小グリットで区画し，西から東にｆ～ａ，Ａ～ｚ，イ～ヌと北から南へ１～35，南から北へ100～109と記号を附して調査を実施した。

鶴田遺跡は，原の辻遺跡の西方へ約250m離れた地点に在る弥生時代の墓域で，２m×２mの試掘壙20箇所，２m×５mの試掘壙３箇所を設定し，110m²について実施した。その結果，甕棺墓が１基検出され，更に墓域が拡がることが推察された。

平成４年度の調査は，安国寺前遺跡，興触遺跡，都城遺跡（芦辺町），興触遺跡，椿遺跡（石田町），車出遺跡，壱岐ノ戸遺跡，大宝遺跡（郷ノ浦町）の８箇所について調査を実施した。

原の辻遺跡と隣接する安国寺前遺跡は，平成３年度の原の辻遺跡の範囲確認調査の結果から遺跡の範囲が幡鉾川より更に北側へ拡がることが予測され，また，昭和29年の圃場整備事業で発見，調査された閨繰遺跡も含むことから今回の調査を実施した。

安国寺前遺跡は，２m×２mの試掘壙36箇所を設定し，144m²について調査を実施した。その結果，弥生時代の溝状遺構，柱穴群，土壙群や中世の水田跡等が検出され，安国寺前Ａ遺跡と安国寺前Ｂ遺跡に分布範囲が別れることが明らかになった。更に，原の辻遺跡の範囲も，北側の台地先端部から幡鉾川を越して約200m程北側へ拡がることが確認された。

他の遺跡の調査結果については，各遺跡の報告書作成の折りに触れることにしたいが，中世の城跡(館跡)である都城遺跡の重要な遺構群については，空堀も含めて工事区域から除外して，文化財の保存・保護に努め，将来的には遺構の復元など遺跡の整備を実施し，歴史公園化の実現に向けて，芦辺町教育委員会によつて土地の公有化が図られた。

平成５年度の調査は，原の辻遺跡の中心部分の東側に濠が検出されたので，西側部分の濠の有無についての確認調査を実施した。その結果，濠が巡ることが確認され，大規模な環濠集落跡と判明した。

また，芦辺町教委は，原の辻遺跡内を流れる幡鉾川の河川改修工事関係の範囲確認調査を実施し，約8,000m²の範囲の調査が必要となった。

郷ノ浦教委は，車出遺跡の範囲が平成４年度調査区の東側に延びることが推察されたので，継続し調査を実施した。

2．緊急発掘調査

平成３年，４年度の範囲確認調査の結果を基に，県文化課は農林部局，幡鉾川流域総合整備推進協議会，関係３町の教育委員会と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ね，調査と整備事業の年度別計画工事区域の施工箇所について，前年度に十分協議し，工事年度に緊急発掘調査を実施しすることになった。また，文化財保護の面から，圃場整備事業の農道建設及び排水路布設工事箇所については発掘調査を実施し，圃場面については基本的に盛土で遺構等を保存し工事を施工することになった。

調査は，当該遺跡の所在する町の教育委員会が調査主体で実施し，県文化課は整備計画が広域にまたがる事業のため，全面的に調査に協力することになり，２名の職員を壱岐教育事務所に駐在させて調査に従事させ，芦辺町教育委員会も１名の専門職員を採用して調査に当たることになった。

平成５年度の発掘調査は，遺跡の主体部分に当たり舌状に延びる台地の東側一帯が平成５年度の工事区域の農道建設及び排水路布設箇所を芦辺町904㎡，石田町4,065㎡の計4,969㎡について，平成５年４月22日から平成６年３月末日まで実施した。

その結果は，弥生時代の大規模な多重環濠集落跡と判明した。

本年度報告遺跡の調査及び整理関係者

調査指導	長崎県教育庁文化課壱岐教育事務所駐在係長	副島　和明
	〃　文化財保護主事	山下　英明
調査担当	長崎県壱岐郡芦辺町教育委員会文化財調査員	松永　泰彦
	長崎県壱岐郡石田町教育委員会	
調査関係者	長崎県教育庁文化課長	村田　善則
	〃　課長補佐（参事）	田川　肇
	長崎県教育庁壱岐教育事務所長	木村　晃一
	〃　総務課長	脇坂　正孝
	長崎県壱岐郡芦辺町教育委員会教育長	野本　茂生(前任)　今西　國善
	〃　教育次長	辻本　正
	長崎県壱岐郡石田町教育委員会教育長	後藤　正敏(前任)　町田　忠治
	〃　教育次長	山口　税
調査協力者	岡村　道雄，田中　哲雄，井上　和人，西田　健彦（文化庁記念物課）	
	佐原　眞，春成　秀爾，平川　南，永嶋　正春（国立歴史民族博物館）	
	工楽　善通，沢田　雅明，光谷　拓実，松井　章（国立奈良文化財研究所）	
	西谷　正（九州大学），小田富士雄，武末　純一（福岡大学）	
	茂原　信生（京都大学），渡辺　誠（名古屋大学），石黒　直隆（帯広畜産大学）	
	賀川　光夫（別府大学），高倉　洋彰（西南学院大学），金原　正明（天理大学）	
	松下　孝幸（土井ケ浜遺跡人類学ミュージアム），松島　義章（神奈川県立博物館）	

V. 調　　査

1．調査概要

調査は，遺跡東側一帯の芦辺町高元地区，石田町石田高原地区，石田大原地区と東南側の柏田地区の緊急発掘調査を実施した。ただし，柏田地区の道路建設部分の調査は，古墳時代前期の配石遺構群が検出され，約220㎡について実施したが詳細については本報告書に掲載したい。

調査地区は，１－２号道路建設部分及び１－１号排水路布設工事箇所を北側からＩ区，II区，III区，IV区，１－４号道路建設部分をＶ区，VI区，１－６号道路建設部分をIV区と呼称した。

ＩからVI区の調査区は，工事計画に合わせ，帯状に調査を実施した。また，調査区は，西から東へQからW，北から南へ４から21区（30m方眼）の中を東から１から36区（５m方眼）に区画して，Ｉ・II区から調査を実施した。各調査区の検出遺構は，検出地点によっては昭和29年，30年の圃場整備事業で，１m前後の掘削を受けていた。

Ｉ区の検出遺構は，１～６号溝状遺構，16号溝状遺構，大溝遺構，石敷遺構，１号土壙，貝塚が検出された。１～６号溝状遺構は，多重環濠の一部と考えられ，弥生中期から終末期，古墳時代前期の遺物が多量に出土した。また，弥生前期末の大溝遺構とその遺構を埋め立てて構築したと考えられる弥生後期の水場の施設と考えられる石敷遺構等である。

II区の検出遺構は，１，４号溝状遺構が検出された。１～６号溝状遺構と同様に，多重環濠の一部と考えられる。１号溝状遺構は，調査時点で弥生後期の土器が多量に出土したため，記録処置後に将来保存整備を実施し公開することを考えて，現状のまま砂をいれ埋め戻した。

III区の検出遺構は，９号，17号，18号溝状遺構と柱穴群が検出された。９号溝状遺構は，多重環濠の一部と考えられる。

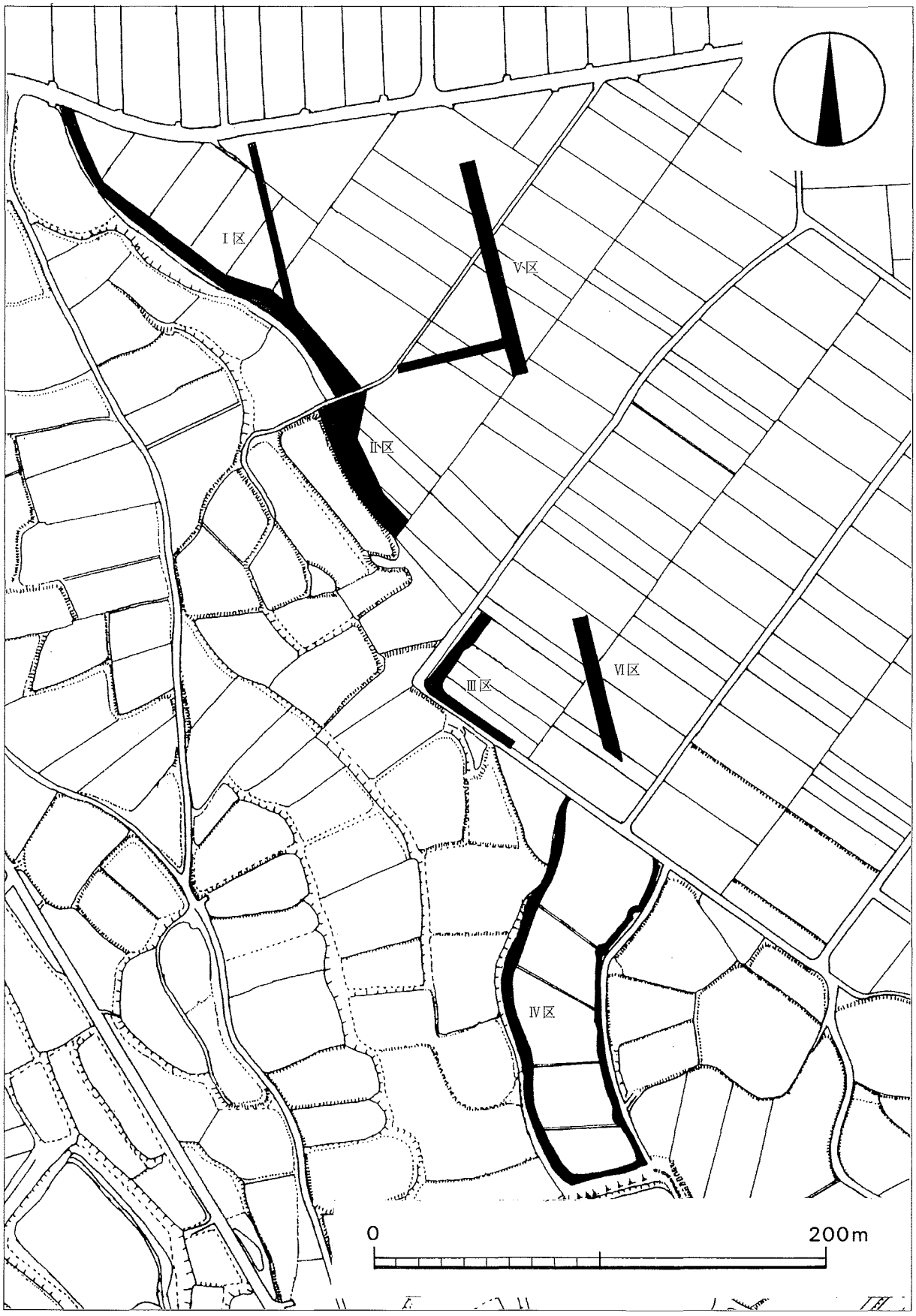
IV区の検出遺構は，７～８号，15号溝状遺構と柱穴群，２号土壙が検出された。IV区は浅い谷の部分に多重環濠の一部と考えられる溝状遺構が検出された。また，環濠内側の台地部分に柱穴群が検出された。

Ｖ区，VI区の検出遺構は，10号～14号，19号溝状遺構と柱穴群が検出された。10号，12号溝状遺構は，多重環濠の一部と考えられる。また，13号と14号溝状遺構間を通路として利用したと推察される。

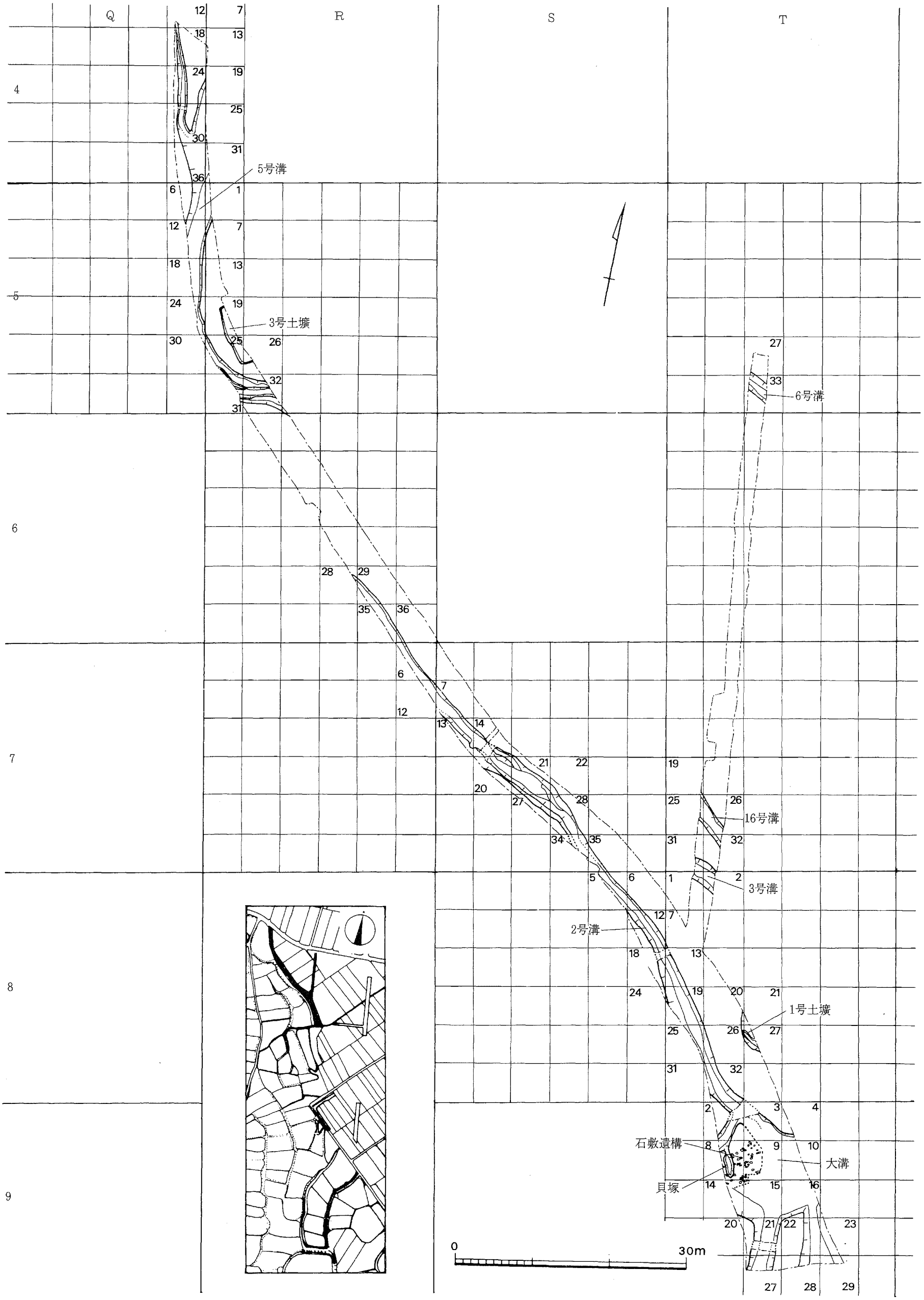
以上，Ｉ～VI区から検出された主な遺構は，多重環濠の一部と環濠外側の通路状遺構，内側の柱穴群等で，環濠内側の台地部分に集落を形成し，それを巡る環濠の一部が検出された。

原の辻遺跡の環濠は，防禦用と用排水路としての利用が調査状況から窺い知れる。

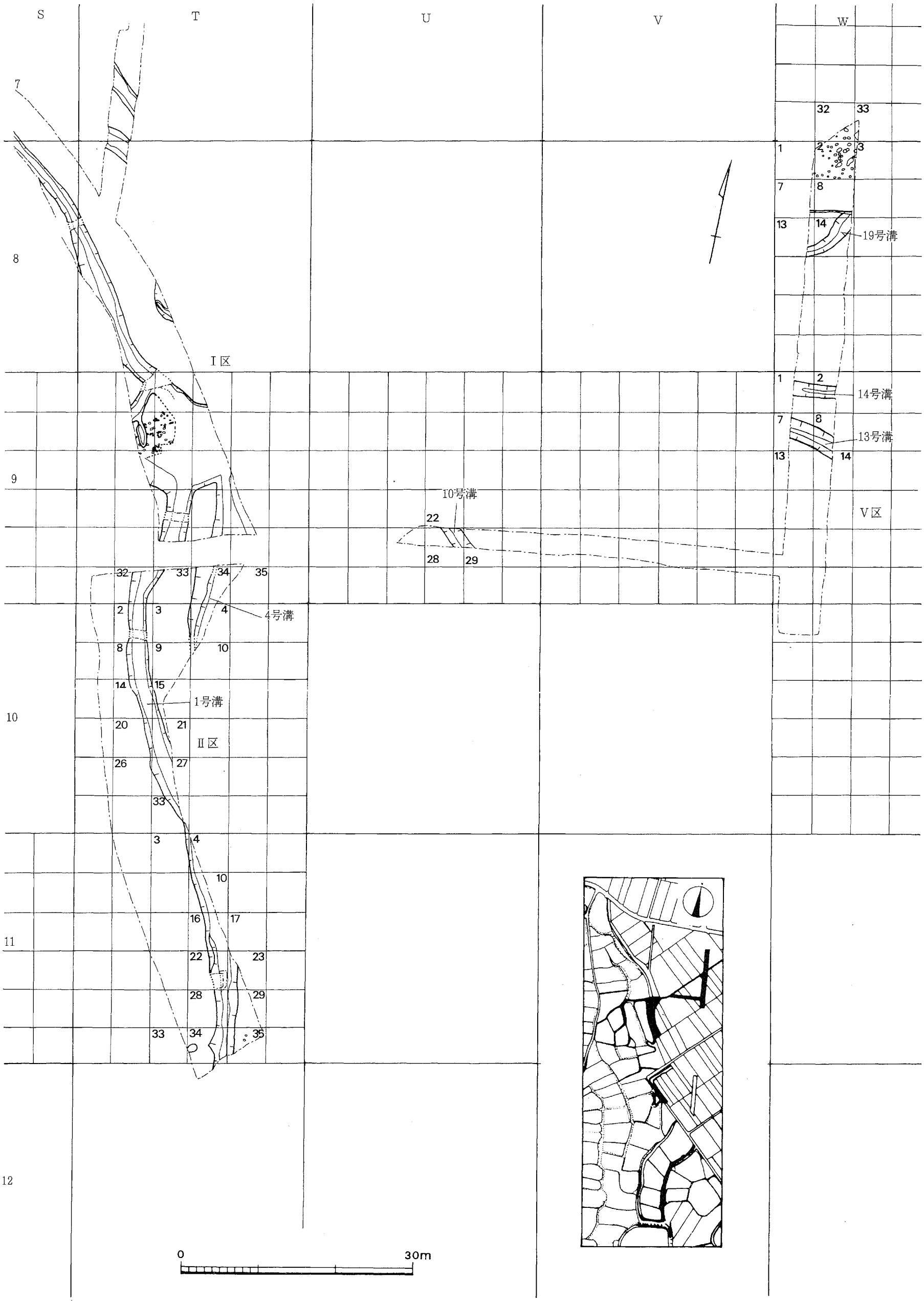
出土遺物は，弥生時代前期末から古墳時代前期にかけての土器，石器，青銅器，鉄器，骨角器，土製品，木製品，装飾品が多量に出土した。中でも，多重環濠の１，２，５号溝状遺構からの出土が顕著である。中国大陸及び朝鮮半島から搬入された遺物も多量に出土した。



第4図　調査区配置図（1/2,500）



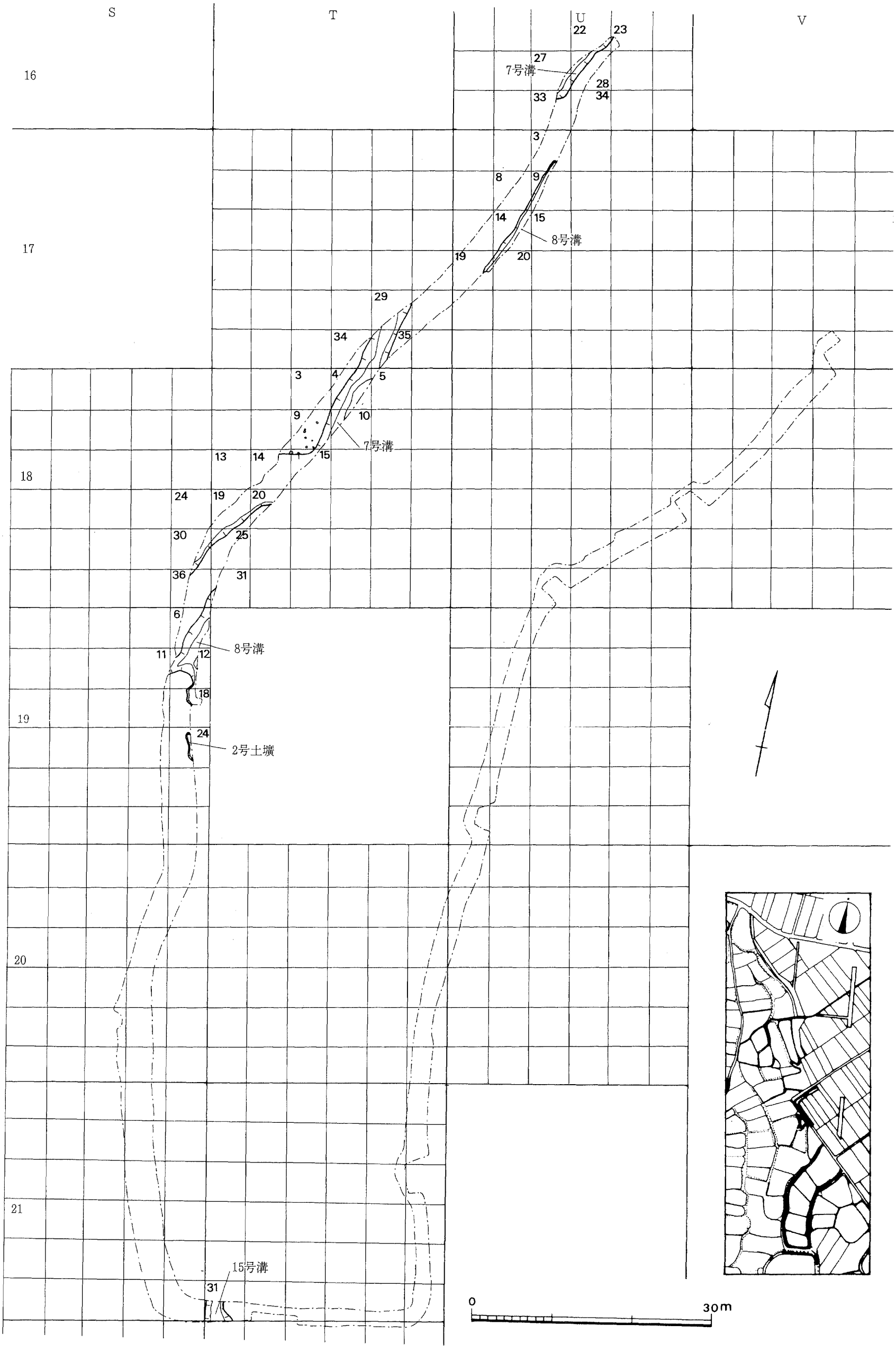
第5図　I区グリット配置図（1/500）



第6図　Ⅱ・Ⅴ区グリット配置図（1/500）

T
U
V
W
11
12
13
14
15
16
II区
III区
VI区
9号溝
17号溝
18号溝
12号溝
11号溝
0
30m

第7図　III・VI区グリット配置図（1/500）



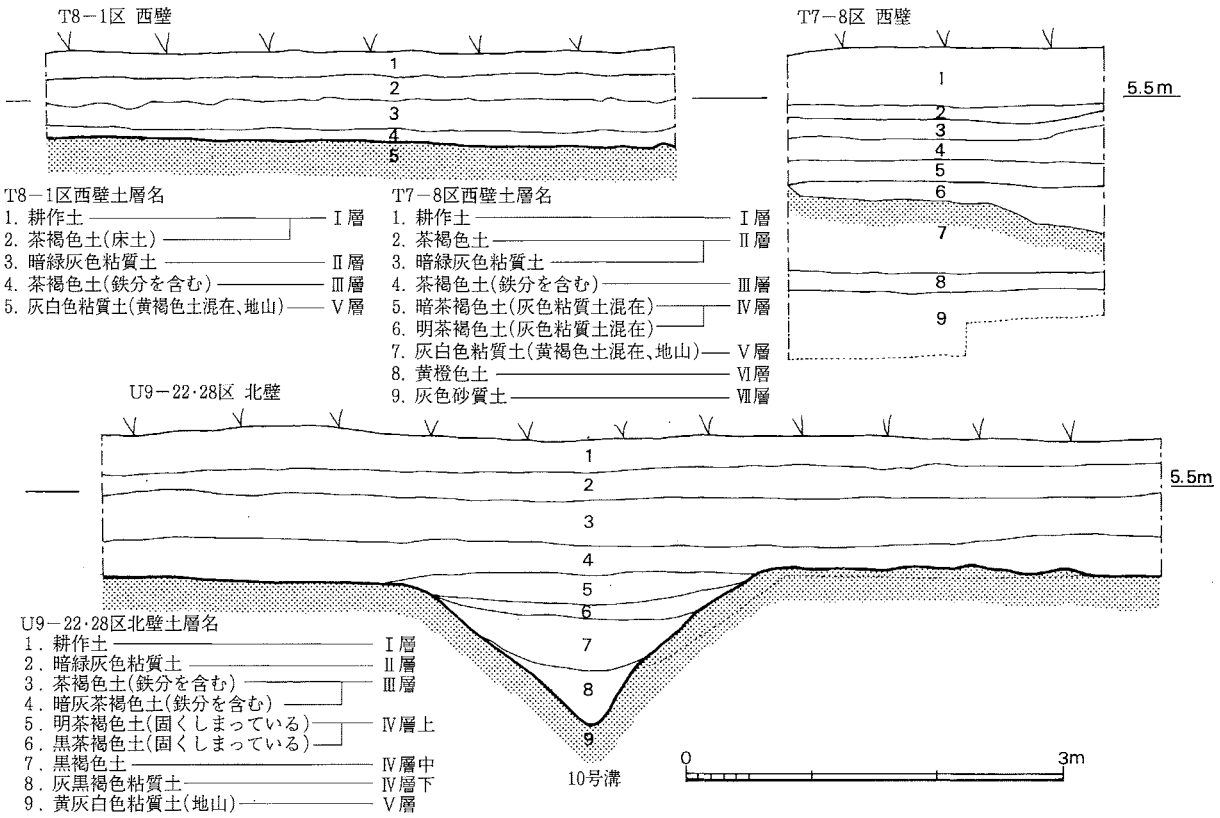
第8図　Ⅳ区グリット配置図（1/500）

2．土　層

今回の調査区は，以前の圃場整備によってかなり削平を受けており，一部遺構面まで影響を受けている地点がある。そのため土層は各地区によってばらつきがみられるが，Ⅰ区・Ⅴ区においては概ね基本的な土層を捉えることができた。

土層は基本的に5層に大別できる(第9図)。Ⅰ層は現耕作土，Ⅱ層は灰色系粘質土で旧田面土層と思われる。Ⅲ層は茶褐色系土層で鉄分を多く含む。旧田床土層であると思われる。Ⅱ・Ⅲ層には中世から近世の遺物がわずがに含まれる。弥生時代の遺物もかなりみられるが後世の撹乱による混入であろう。Ⅳ層は暗茶褐色系土層で弥生時代の遺物包含層である。この層は台地に近づくにつれ希薄になり，消滅している。また，環濠内の覆土もⅣ層として捉え，上・中・下に細分している。Ⅳ層上は茶褐色系土，Ⅳ層中は黒褐色系土，Ⅳ層下は黒褐色系粘質土・茶褐色系腐食土である。ただし，環濠内の覆土は複雑な堆積状況を呈しているところもあり，調査時において層位的に遺物を捉えることは困難であった。そのため，細分はかならずしも時間的な差異を現しているものではない。Ⅴ層は青灰色・黄灰白色などの粘質土で地山である。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の台地縁辺部はⅡ・Ⅲ層が検出されず，表土直下が地山となっている。環濠は，その地山を掘り込んで形成されているが，部分的に浅く，幅も狭いところがあり台地縁辺部の掘削は著しいようである。



第9図　土層断面実測図（1/60）

3．遺　構

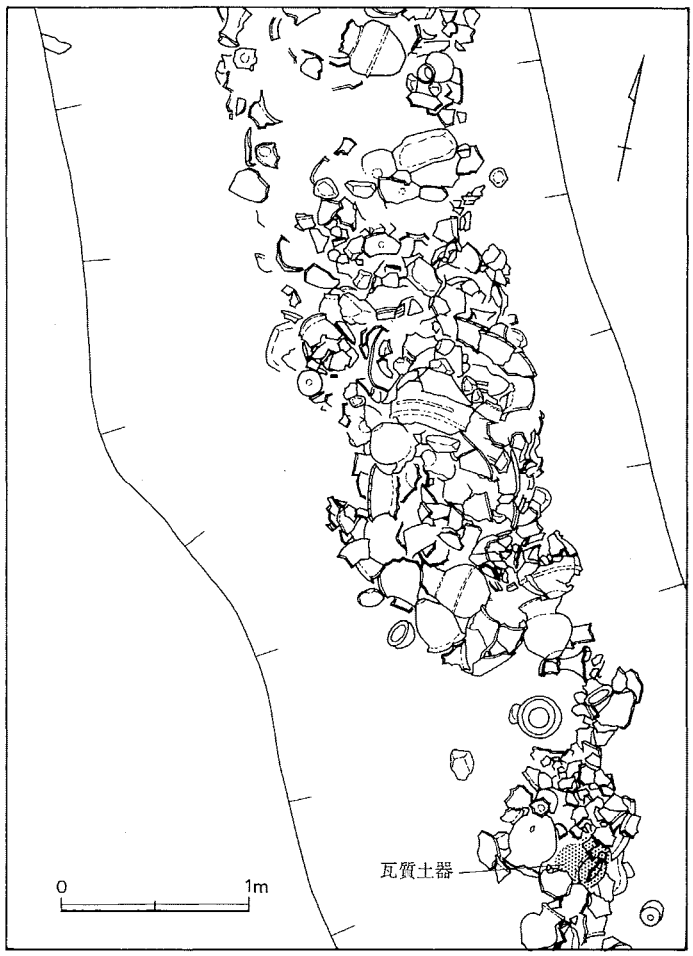
(1) 溝状遺構

溝状遺構は，全体で19箇所確認した。それぞれ便宜上１～19号まで番号を付けている。そのうち弥生時代の環濠としての機能を持つと思われるものは，１～10･12･15号である。その他，弥生時代の溝状遺構が11･13･14･16号，時期不明の溝が17～19号である。

ここでは，１～16号溝とⅠ区で検出した大溝の概要説明を行うが，出土遺物は大半が現在整理中であり，環濠形成の時期等は今後の検討課題である。

①　１号溝（第11図）

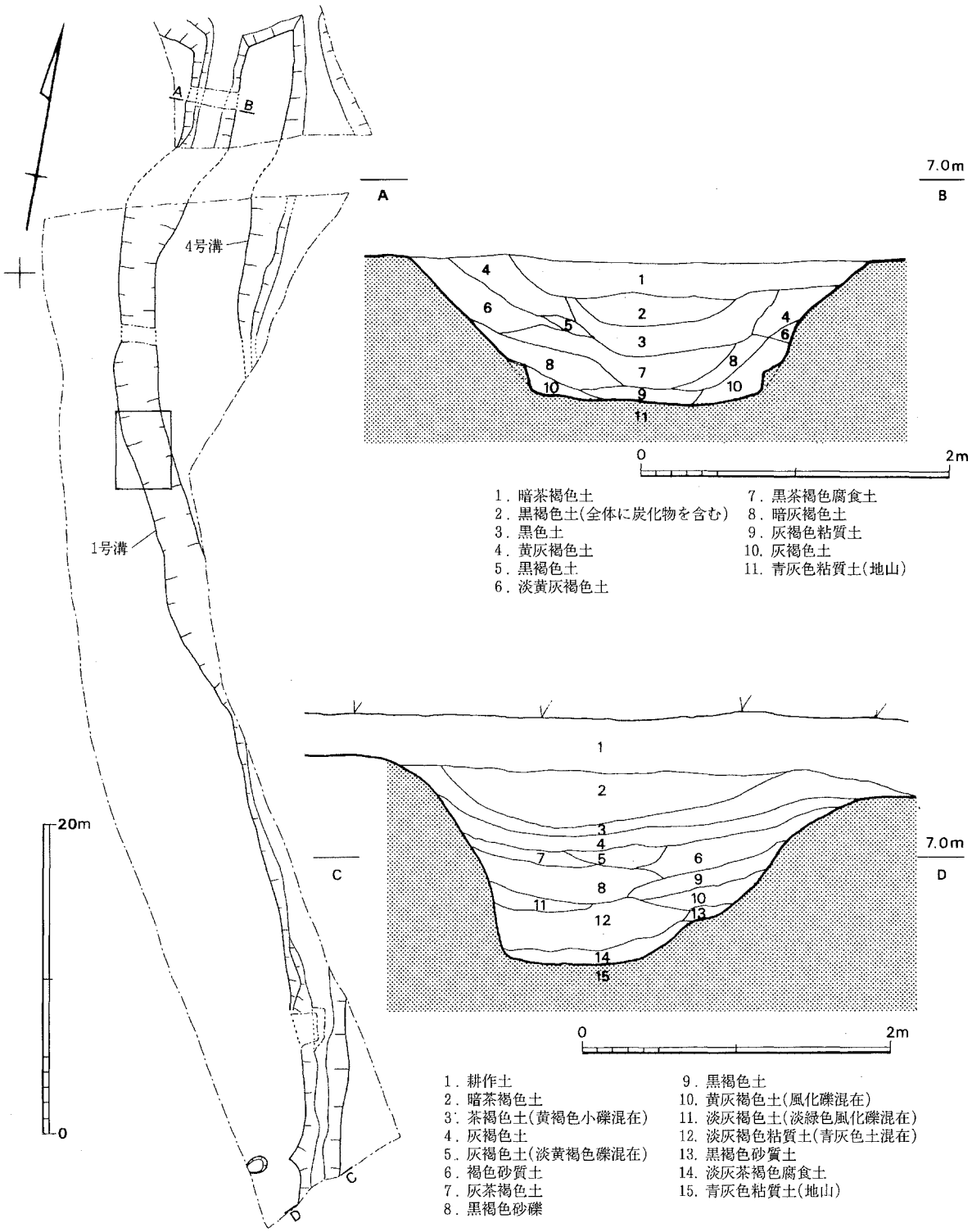
Ⅰ区南端からⅡ区にかけて検出した。南北方向に延び，やや蛇行しながら北端は大溝に取り付く。全長80m，幅2.2～3.6m，深さ0.9～1.3mを測り，断面は逆台形状を呈する。覆土は，上層が茶褐色系，中層は黒褐色系で遺物が多い。北端では最下層が灰色系の粘質土となり，その上に腐食土が堆積している。南端では中層に砂質土あるいは砂礫層があり最下層は腐食土であった。下層には自然流木が多く遺物は少ない。溝は青灰色粘質の地山層まで掘り込んでいる。遺物は，弥生中期～後期の土器が多く出土し，土師器も僅かにみられる。T10-８･14･15･20･21区では完形の土器が特に集中している状況がみられた(第10図)。そのほか，上層から銅鏃９本，中層から貨泉・鋳造鉄斧・朝鮮半島系の瓦質土器，下層から木製の矢柄などが出土している。溝の底面レベルは，南端で6.3m，北端で5.1mを測る。



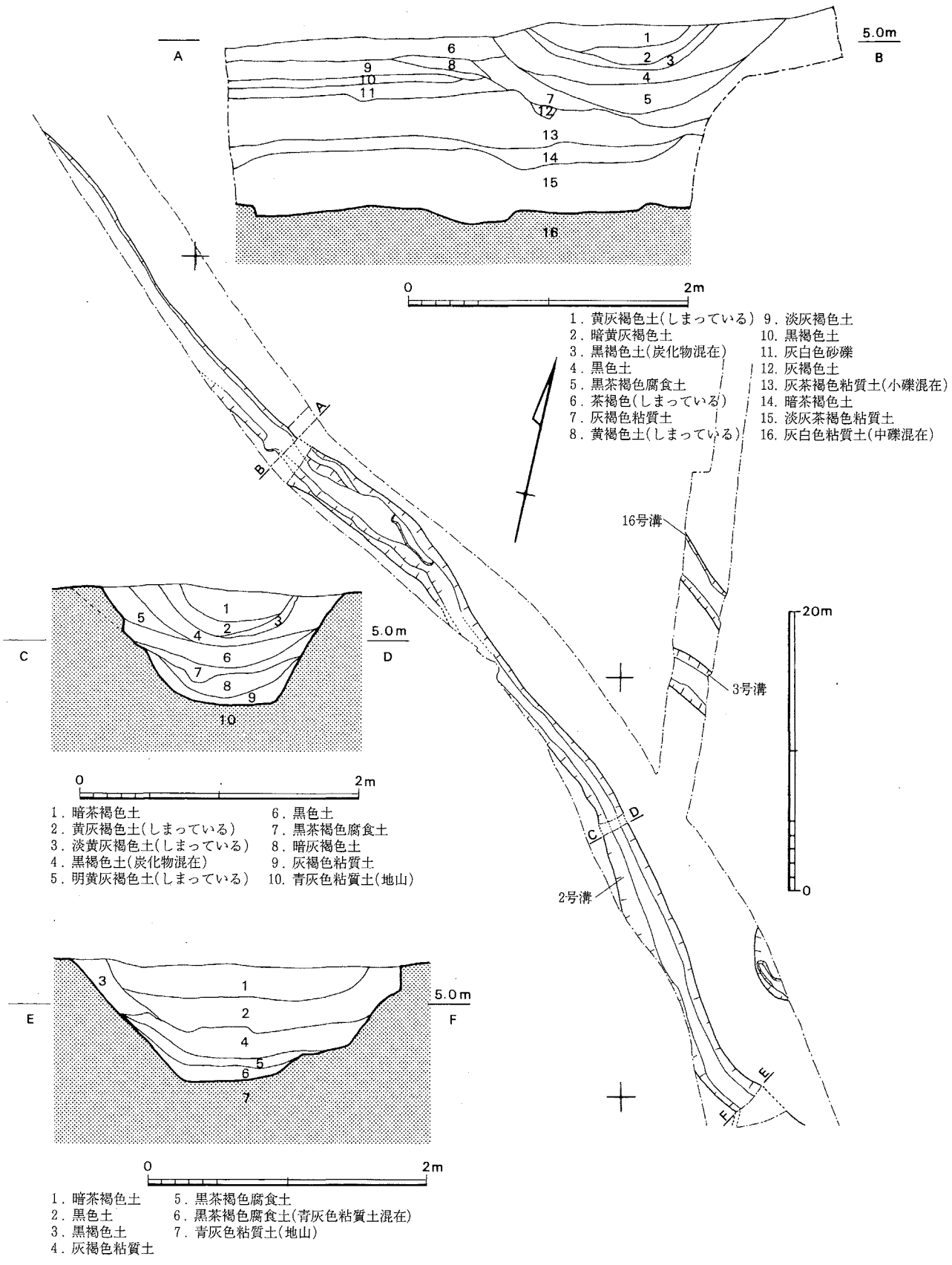
第10図　１号溝遺物出土状況平面実測図（１/40）

②　２号溝（第12図）

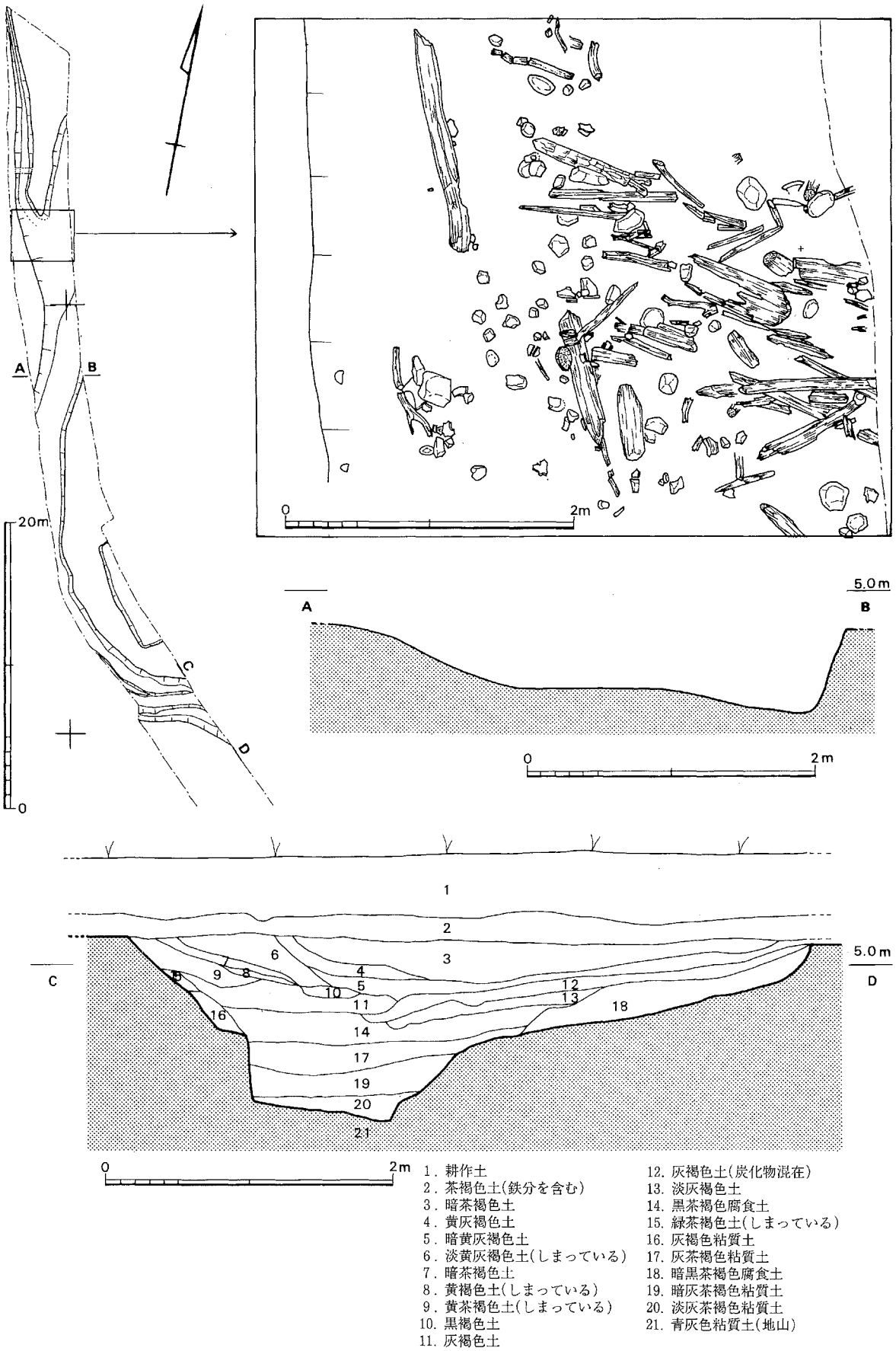
Ⅰ区南半で検出した。南東～北西方向に延び台地に沿って蛇行する。南端は石敷遺構を挟み二股に分かれ，一方は西へ延び，もう一方は大溝に取り付く。全長95m，幅1.6～3.2m，深さ62～90cmを測り，断面は北端でU字形状，南端で逆台形状を呈する。覆土は，上層が茶褐色系および灰褐色系，中層は黒褐色系土層である。最下層は腐食土が堆積するが，中央部では灰褐色系の粘質土が最下層にあ



第11図　1・4号溝平面実測図（1/400），土層断面実測図（1/40）

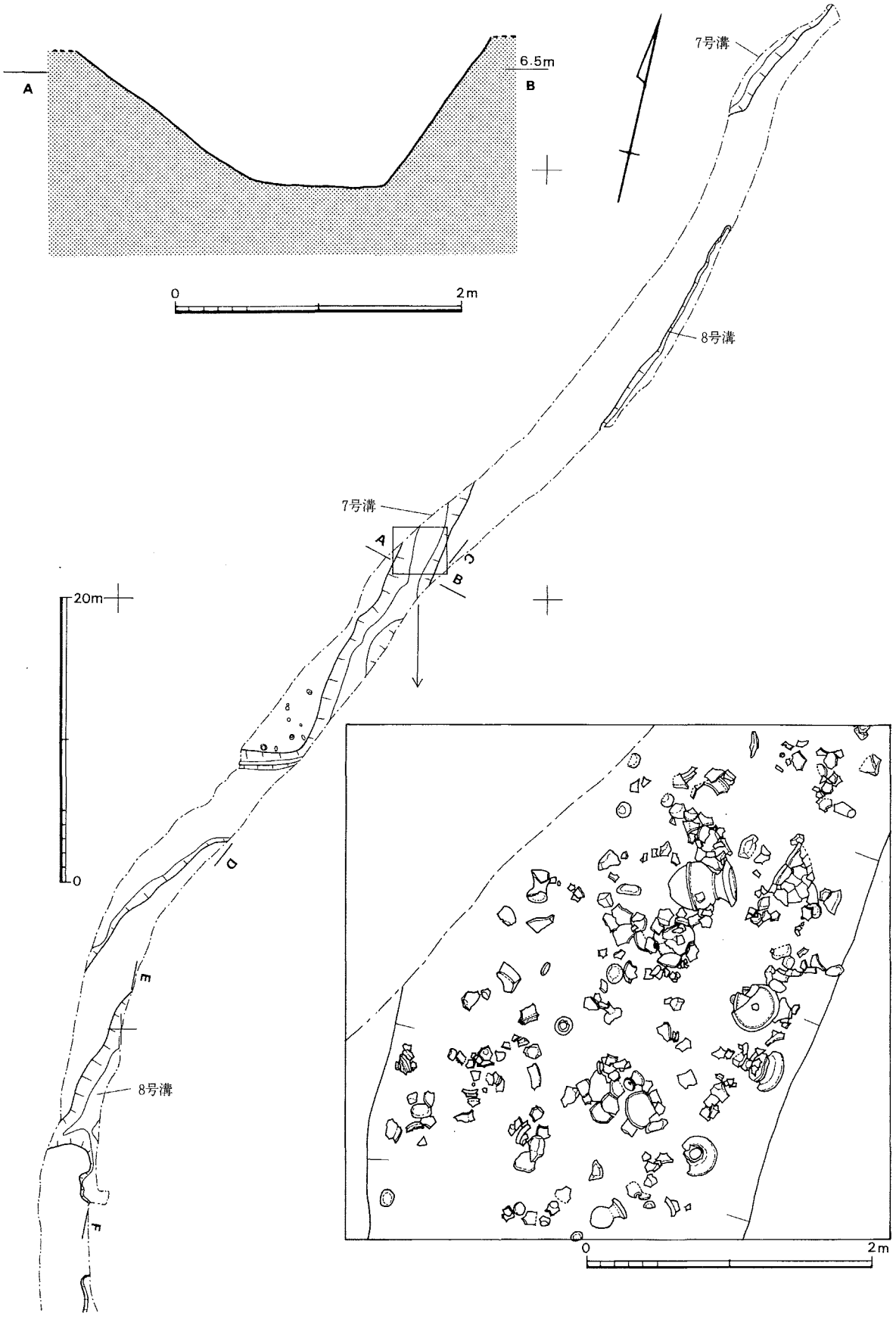


第12図　2・3・16号溝平面実測図（1/400），土層断面実測図（1/40）

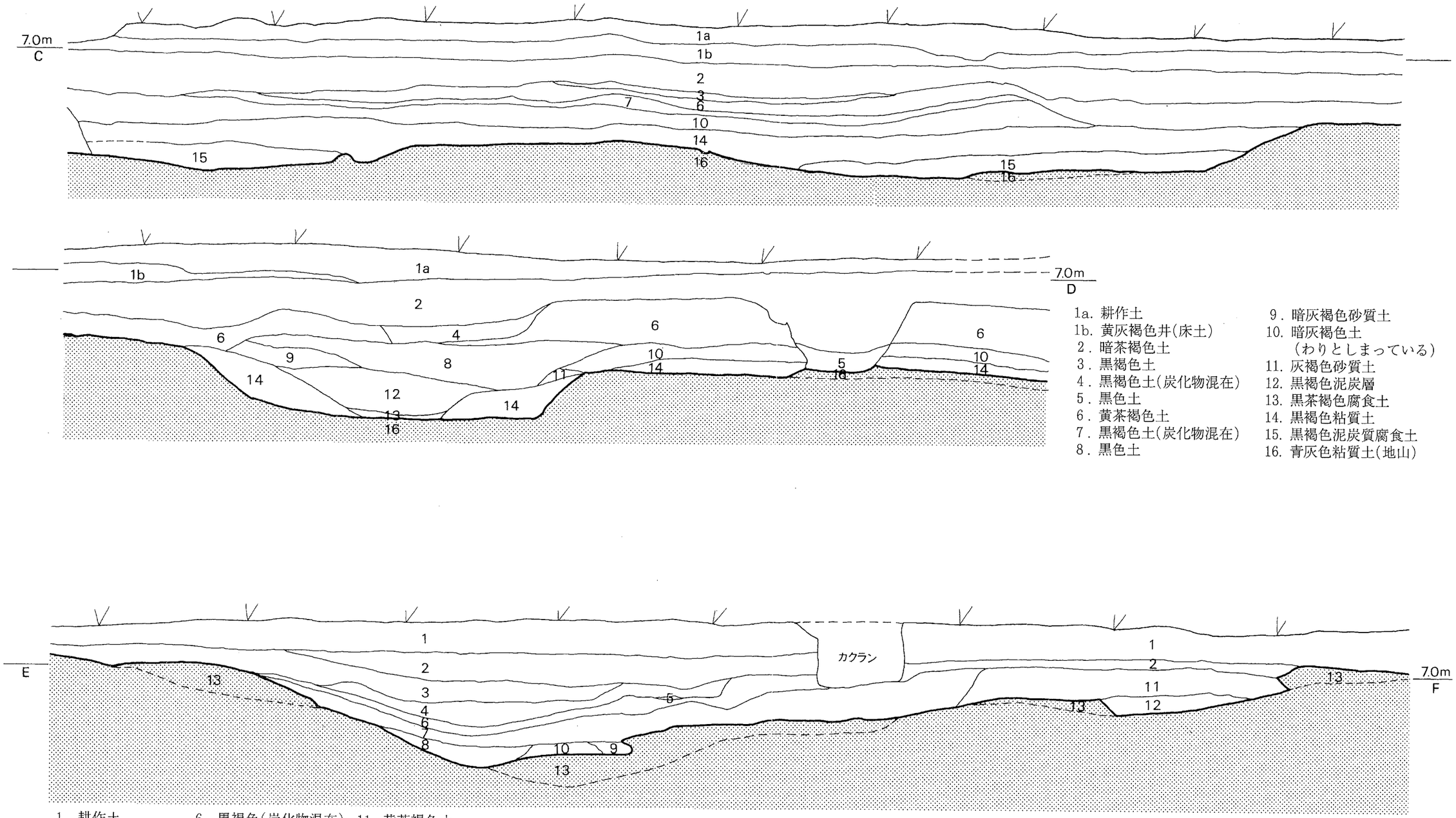


1．耕作土
2．茶褐色土(鉄分を含む)
3．暗茶褐色土
4．黄灰褐色土
5．暗黄灰褐色土
6．淡黄灰褐色土(しまっている)
7．暗茶褐色土
8．黄褐色土(しまっている)
9．黄茶褐色土(しまっている)
10．黒褐色土
11．灰褐色土
12．灰褐色土(炭化物混在)
13．淡灰褐色土
14．黒茶褐色腐食土
15．緑茶褐色土(しまっている)
16．灰褐色粘質土
17．灰茶褐色粘質土
18．暗黒茶褐色腐食土
19．暗灰茶褐色粘質土
20．淡灰茶褐色粘質土
21．青灰色粘質土(地山)

第13図　5号溝平面実測図（1/400），土層断面実測図（1/40）



第14図　7・8号溝平面実測図（1/400），遺物出土状況実測図（1/40）



1a. 耕作土
1b. 黄灰褐色井(床土)
2．暗茶褐色土
3．黒褐色土
4．黒褐色土(炭化物混在)
5．黒色土
6．黄茶褐色土
7．黒褐色土(炭化物混在)
8．黒色土
9．暗灰褐色砂質土
10. 暗灰褐色土
(わりとしまっている)
11. 灰褐色砂質土
12. 黒褐色泥炭層
13. 黒茶褐色腐食土
14. 黒褐色粘質土
15. 黒褐色泥炭質腐食土
16. 青灰色粘質土(地山)

1．耕作土
2．暗茶褐色土
3．黄茶褐色土
4．暗灰褐色
5．淡灰褐色粘質土
6．黒褐色(炭化物混在)
7．黒褐色粘質土
8．黒色泥炭層
9．黒色粘質土
10. 灰褐色粘質土
11. 黄茶褐色土
12. 黒褐色粘質土
13. 青灰色粘質土(地山)

第15図　7・8号溝東壁土層断面実測図（1/40）

り，その上に腐食土が堆積する。北側の土層は１～５までが溝内覆土で，ここは地山を掘り込んだものではない。遺物は，弥生中期～後期の土器が多く出土し，一部上層に土師器もみられる。そのほか，上層から銅鏃５本・鋳造鉄斧・骨角器，中層から鉄鎌・人骨，下層から木製品・人骨などが出土している。溝の底面レベルは，南端で4.4m，溝中央部（Ｓ８－５区）付近が4.8mと最も高く，Ｓ7-21区付近では4.2mと低くなる。北側のＳ7-14区では4.4mを測る。このように，２号溝は大溝に向かい傾斜する部分と，Ｓ７-21区に向かい傾斜している部分がある。Ｓ７-21区付近は地山も一段低くなっていることなどから，この周辺が溜りであったか，もしくは別の溝が取り付いている可能性もある。今回時間的制約もあり詳細に調査できなかったが，保存区域内でもあり今後再調査が必要であろう。

③　３号溝（第12・16図）

Ｉ区東側で検出した。２号溝と約８ｍの間隔を持ち，ほぼ並行している。全長3.2m，幅2.8m，深さ80cmを測り，断面は逆台形状を呈する。覆土は，上層が茶褐色系，中層は黒褐色系，最下層は地山粘質土を含む黒褐色粘質土で，その上に腐食土が堆積している。遺物は，弥生中期～後期の土器が多く出土し，土師器も僅かにみられる。そのほか，上層から銅鏃２本が出土している。溝の底面レベルは，中央部で3.7mを測る。

④　４号溝（第11図）

Ｉ区南端からII区北端にかけて検出した。１号溝と並行し，その間隔は３～５ｍである。北端は大溝に取り付く。全長23m，幅３ｍ，深さ1.2mを測り，断面はＵ字形状を呈する。覆土は，上層が黒色土，中層が黒褐色・灰褐色の腐食土，最下層は灰褐色系土層である。溝は淡灰褐色土層を掘り込んで形成している。遺物は，弥生中期～後期の土器が多く出土し，土師器も僅かにみられる。そのほか，上層から磨石・凹石等を含む拳大～人頭大の礫が多数出土している。４号溝は，溝を掘り込んだ土層と溝内覆土との明確な区別が付かず土層断面で溝の形状を確認した。そのため，溝の底面レベルの傾きは不明であるが，Ｉ区南端で4.5mを測る。また，II区北端の溝底部に直径20cm程の柱材が垂直に立った状態で検出された。これは，溝に架かる橋の脚柱とも考えられるが，脇を通る農道が崩落し始めていたため，記録せずに埋め戻さざるを得なかった。

⑤　５号溝（第13図）

Ｉ区北端で検出した。南北に延びるが，途中大きく西側に湾曲し南端は東に向かって延びる。北側では，幅１ｍ前後，深さ35cmの小溝が取り付く。全長44m，幅３ｍ，深さ0.6～1.2mを測り，断面は逆台形状に近い。覆土は，上層が暗茶褐色系あるいは黄灰褐色系，中層が灰褐色土あるいは黒茶褐色の腐食土層，下層が灰茶褐色粘質土である。遺物は，弥生中期～後期の土器が多く出土したが，上層には土師器もかなりみられる。そのほか，上層から拳大～人頭大の礫が多数出土している。また，銅鏃２本も上層から出土している。中層からは骨鏃・朝鮮半島系陶質土器，中～下層から木製短甲・礎板・ねずみ返しなど木製品が多く出土している。特に，Ｑ４-36区では，多数の自然流木や柱材などが集中してみられる。溝の底面レベルは，南端で3.9m，北側断面で4.1mを測る。溝は北から南への傾斜である。なお小溝も北から南へ傾斜している。

⑥　6号溝（第5・16図）

Ⅰ区東側3号溝の北約50mで検出した。ほぼ東西方向に延びる。全長2m，幅2.3m，深さ72cmを測り，断面はU字形状を呈する。覆土は，上層が暗茶褐色土，中層が暗茶褐色あるいは黄褐色土でいずれも炭化物が含まれる。下層は黒褐色粘質土である。溝は砂混在の緑色粘質土まで掘り込んで形成している。遺物は弥生後期の土器片が数点出土している。溝の底面レベルは，西壁で4.1mを測る。

⑦　7号溝（第14・15図）

Ⅳ区西側で検出した。南北に延びるが，中程で東側に膨らむ。北はいったん調査区外へ出るが，北30mの地点で溝の東側立ち上がりが10m程確認されており，7号溝の連続であると考えられる。全長34m，幅3m，深さ1～1.4mを測り，断面は逆台形状を呈する。覆土は，上層が暗茶褐色，中層が黒褐色系土層，下層は黒褐色粘質土，最下層は黒茶褐色の腐食土である。溝は青灰色粘質土の地山まで掘り込んで形成されている。7号溝はいったん中層まで埋まった後，南側に幅1.2m，深さ74cmの小溝が掘り直されていることが土層図により明らかであるが，調査時には判別が困難で小溝の方向・性格等は確認できなかった。遺物は，弥生中期～後期の土器が出土しているが，中層以下は中期土器が多い。溝の底面レベルは，北端で5.6m，南端で6.2mを測る。

⑧　8号溝（第14・15図）

Ⅳ区西側で検出した。7号溝と並行し南北に延びるものと思われるが，部分的にしか検出しておらず，明確ではない。北50mの地点で溝の西側立ち上がりが18m程確認されており，8号溝の連続であると考えられる。全長15m，深さ1.1mを測る。覆土は，7号溝とほぼ同様である。遺物は，弥生中期～後期の土器が出土している。溝の底面レベルは，土層図最下層で6mを測る。

⑨　9号溝（第7・16図）

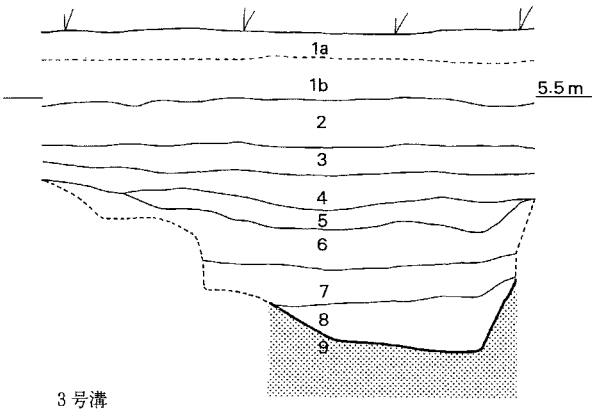
Ⅲ区北端で検出した。ほぼ東西方向に延びる。全長4.4m，幅2.4m，深さ65～68cmを測り，断面はU字形状を呈する。覆土は，上層が黒色土，中層が黒色泥炭層，下層が黒色腐食土である。溝は茶褐色の土層を掘り込んで形成されている。土層の堆積状況から，この付近が以前は自然流路であり，いったん埋没した後，溝を施工している可能性がある。遺物は，弥生中期～後期の土器が出土しているが，上層には土師器もみられる。そのほか，上層から銅鏃1本，中層から勾玉などが出土している。溝の底面レベルは，西壁で6.4m，東壁で6.3mを測る。

⑩　10号溝（第6・9図）

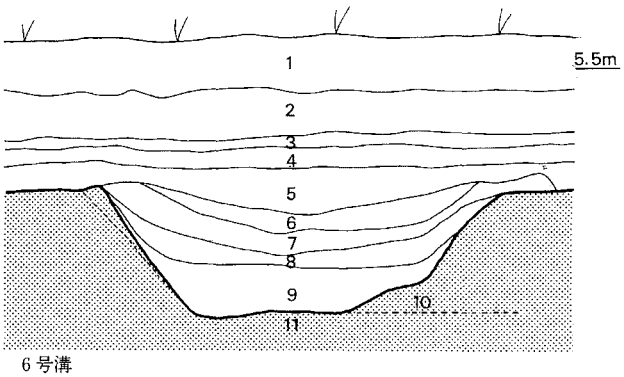
Ⅴ区西端で検出した。北西から南西方向に延びる。全長2m，幅2.4m，深さ1.1mを測り，断面はV字形状を呈する。覆土は，上層が茶褐色系，中層が黒褐色土，下層は灰黒褐色粘質土である。遺物は，弥生中期～後期の土器が僅かに出土している。溝の底面レベルは，北壁で3.6mを測る。

⑪　11号溝（第7図）

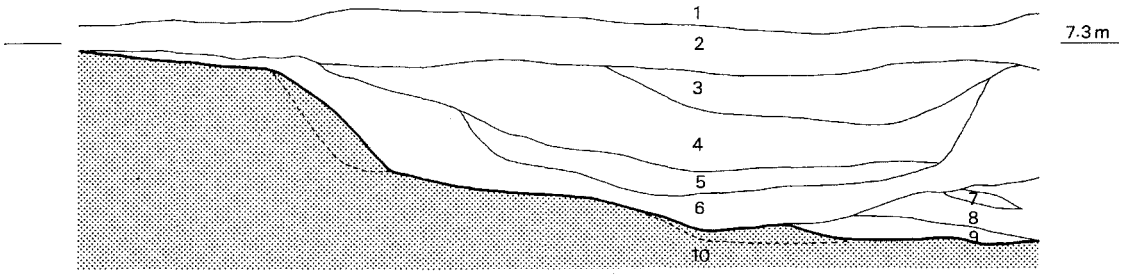
Ⅵ区中央部で検出した。南東から北西に延びる。南東端で溝は終結している。南側の立ち上がりは土壙で切られている。北西側はしだいに浅くなり，壁付近ではほとんど消滅する。全長10m，幅1.9m，深さは南東端で30cmほどである。覆土は，灰褐色粘質土・黒褐色腐食土である。遺物は，弥生中



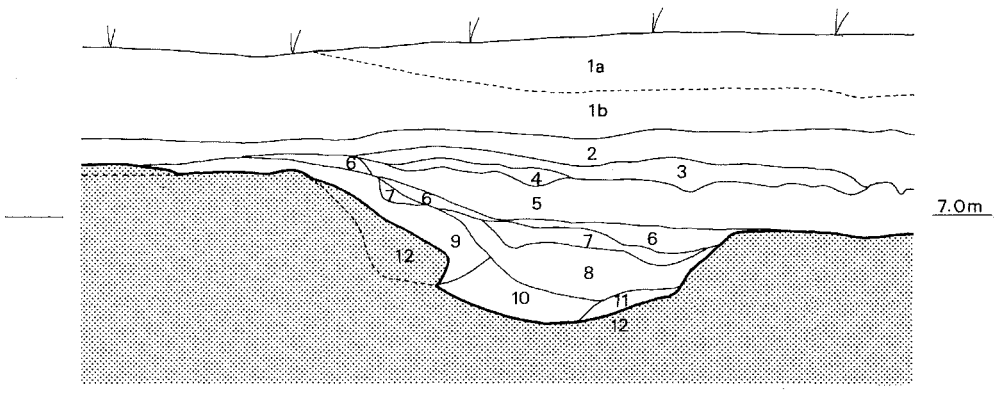
3号溝
1a. 耕作土
1b. 茶褐色土(床土)
2．暗緑灰色粘質土
3．茶褐色土(鉄分を含む)
4．暗茶褐色土
5．黒褐色土
6．黒色泥炭層
7．黒色腐食土
8．黒褐色土(灰粘質土混在)
9．灰白色粘質土(地山)



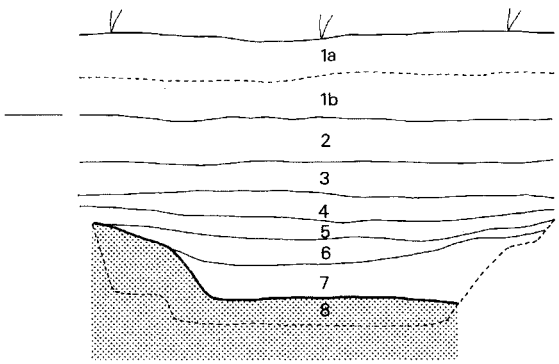
6号溝
1．耕作土
2．暗緑灰色粘質土
3．茶褐色土(鉄分を含む)
4．暗茶褐色土(灰粘質土混在)
5．明茶褐色土(灰粘質土混在)
6．暗茶褐色土(鉄分を含む)
7．暗茶褐色土(炭化物混在)
8．黄褐色(炭化物混在)
9．黒褐色粘質土
10. 灰白色粘質土(地山)
11. 緑色粘質土(砂混在)



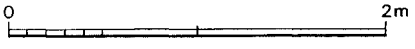
9号溝
1．埋土(農道)
2．黄灰褐色土(わりとしまっている)
3．黒色土(わりとしまっている)
4．黒色粘質泥炭層
5．黒色腐食土
6．茶褐色土(鉄分を含む、しまっている)
7．灰褐色土
8．黒褐色粘質土
9．暗灰茶褐色粘質腐食土
10. 明茶褐色砂礫層



15号溝
1a. 耕作土
1b. 茶褐色土(床土)
2．黒褐色土
3．黒色土
4．灰黒色砂質土
5．暗黒茶褐色土
6．黒灰褐色土
7．黒色土
8．黒色腐食土
9．灰褐色粘質土
10. 黒色泥炭層
11. 黒色砂質土
12. 青緑色土



16号溝
1a. 耕作土
1b. 茶褐色土(床土)
2．暗緑灰色粘質土
3．茶褐色土(鉄分を含む)
4．暗茶褐色土
5．茶褐色土(灰粘質土混在)
6．黒褐色土
7．黒褐色土(灰粘質土混在)
8．灰白色土



第16図　溝状遺構土層断面実測図（1/40）

期～後期の土器が出土している。また，多くの自然流木に混じり，杭材が出土している。

⑫　12号溝（第７図）

Ⅵ区北寄りで検出した。南東から北西に延びる。11号溝と6.5mほどの間隔を持ち，ほぼ並行している。全長17m，幅1.8～2.8m，深さ93cmを測り，断面は逆台形状を呈する。覆土は黒褐色泥炭・黒色腐食土である。溝は灰黒色粘質土を掘り込んで形成している。遺物は，弥生中期～後期の土器が出土している。また，多くの自然流木に混じり梯子や大鉢などの木製品が数点出土している。溝の底面レベルは，北側で4.0m，南側で3.9mを測る。

⑬　13号溝（第６・22図）

Ⅴ区中央部で検出した。ほぼ東西に延びる。全長６m，幅2.4～2.7m，深さ60～65cmを測り，断面はU字形状を呈する。覆土は，上層が茶褐色系，中層が灰白色土，下層が灰黒色土である。遺物は，弥生中期～後期の土器が僅かに出土している。また，下層からは自然流木が出土した。溝の底面レベルは，東側で4.0m，西側で3.9mを測る。

⑭　14号溝（第６・22図）

Ⅴ区中央部で検出した。13号溝と並行しほぼ東西に延びる。その間隔は3.0～4.5mである。13号溝と14号溝の間は通路として利用していたと考えられている。14号溝は西端で終結している。全長5.1m，幅1.9～２m，深さ80～84cmを測り，断面は逆台形状を呈する。土層及び出土遺物は13号溝と同様である。溝の底面レベルは，東側で3.81m，西側で3.87mを測る。

⑮　15号溝（第８・16図）

Ⅳ区南端で検出した。南北に延びる。全長2.5m，幅3.4～2.2m，深さ75cmを測り，断面は逆台形状を呈する。覆土は，上層が黒色土系，中層が黒色腐食土，下層が黒色泥炭層である。青灰色の地山まで掘り込んでいる。遺物は，弥生中期～後期の土器が僅かに出土している。また，須恵器の混入もみられた。中～下層は自然流木が多い。溝の底面レベルは，中央部で6.46m，西側で6.43mを測る。

⑯　16号溝（第12・16図）

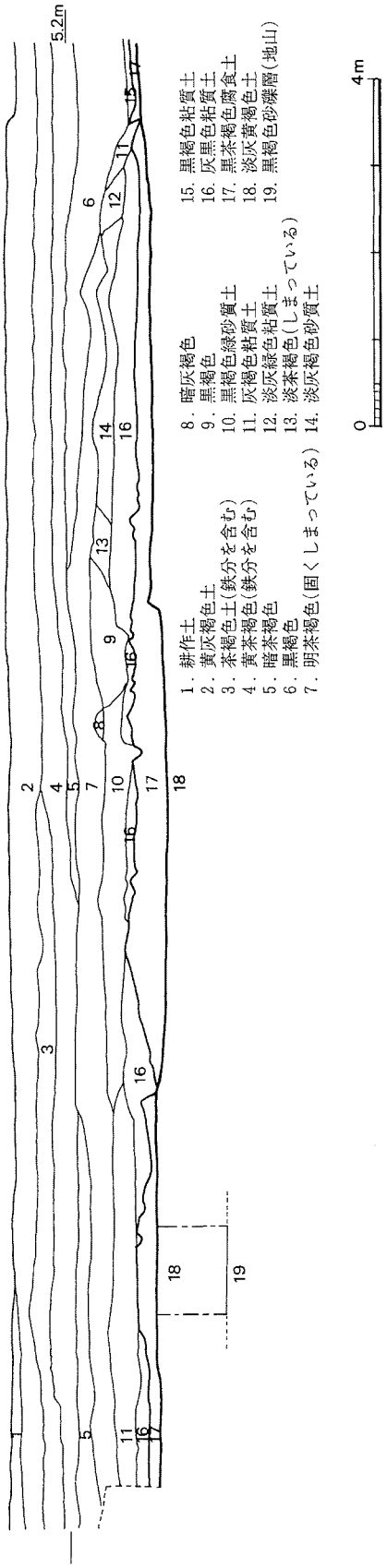
Ⅰ区東側で検出した。３号溝と３～５mの間隔を持ち，ほぼ並行している。全長4.5m，幅1.9m，深さ40cmを測り，断面は逆台形状を呈する。覆土は，上層が黒褐色土，下層が灰粘質土の混じる黒褐色土である。遺物は，弥生後期の土器が僅かに出土している。溝の底面レベルは，東側で4.2m，西側で4.4mを測る。

⑰　大溝（第５・17図）

Ⅰ区南側で検出した。東西方向に延びる。１・４号溝及び２号溝の一部はこの大溝に向かい傾斜している。全長8.4m，幅は西端で11.7m，深さは弥生土器包含層の下面まで1.2mで，地山までは２mを測る。土層（第17図）は，１・２が現耕作土，３～５までは旧耕作土である。６は４号溝の上層の土である。７は石敷遺構造成時の土で固くしまっている。９以下が大溝の覆土である。覆土は上層と下層に分けられる。９～16までが上層で，黒褐色系や灰褐色の粘質土・砂質土が混在している。遺物は弥生中期初頭～後期の土器が含まれる。17が下層で黒茶褐色の腐食土である。この層は弥生前期末

の土器を主体とする層である。更にこの下は80cmほど最下層の淡灰黄褐色粘質土が堆積している。その下は黒褐色砂礫層で地山である。出土遺物は，上層に弥生中期初頭～後期の土器が含まれるが，中期の土器が数では圧倒している。下層は弥生前期末の土器が主体である。そのほか下層からは木製楯・手斧の柄・織機部品・杓子・スプーン状木製品・透かし台付容器・漆塗容器脚片など木製品が多数出土している。最下層は一部しか掘り下げていないが，遺物は確認できなかった。溝の底面レベルは，東端の遺物包含層下面で4.2mを測る。

大溝は前期末の段階に，土器や木製品が流れ込み，それが下層に堆積したものと考えられる。1・2・4号溝は前期末の土器をほとんど伴わないことから，それ以降に環濠が形成され大溝に取り付けられたことが推測される。



第17図　大溝東壁土層断面図（1/80）

(2) 石敷遺構

石敷遺構は，調査区Ⅰ区のT－9区の2，3，8，9区に検出された。検出箇所は，大溝遺構と環濠の1，2，4号溝状遺構が検出された地点に当たる。台地の東側裾部に位置し，現在でも非常に出水が著しい箇所で，環濠と関連する水場の遺構である。

遺構の規模は，石敷き面で南北約5.5m，東西約5mの範囲に平面が方形状になるように，扁平な石を敷き並べている。ただ，石敷は西側に位置する水溜めの土壙の更に西側の断面に南北方向に石が敷き並べてある状況が観察されるので，西側に拡がるものと考えられる。また，その他の部分については，敷石がみだれているがあまり拡がらないようだ。

石敷の南端に東西約2m，上幅径約1.3m，下幅径約1m，深さ0.35mの長方形状を呈し，三方をコ字形に石で囲っている。その東側に，南北に長径約2.6m，幅約0.9m，下低で径2.2m，幅0.5m程の楕円形状の土壙が構築されている。

土壙は，丘陵から流れる水を溜める施設と考えられ，水は土壙及び環濠へ流れるように計画され，その水を利用する水場の施設として，石敷遺構があるものと考えられる。

これらの石敷遺構は，検出状況から弥生前期末の時期である大溝状遺構に多量に出土している木器類を埋めた状況で盛土し構築されている。盛土には，遺構の西南部分で厚く堆積した貝塚が見られ，石敷遺構下の盛土内には，弥生中期の遺物が出土している。

環濠の2号溝状遺構と合流することが確認されている。このことは，環濠の検出状況及び環濠内土層堆積状況をも踏まえ，原の辻遺跡の環濠は防禦用と共に水利用の用途も合わせたものであることが推測される。

(3) 柱穴群

① 調査区Ⅲ区検出の柱穴群

U－15区の9，13，14，19，20区に検出された。検出箇所は，北東方向に約50mで12号溝状遺構，南方向約30mで7号溝状遺構が検出された地点に当たる。

柱穴の検出面は，掘削を受けているために灰白色粘土層で確認された。遺構は，調査区の北側については明確でないが，南側では径30cm～70cm程の柱穴が30箇所確認された。更に，周辺に広がると考えられる。

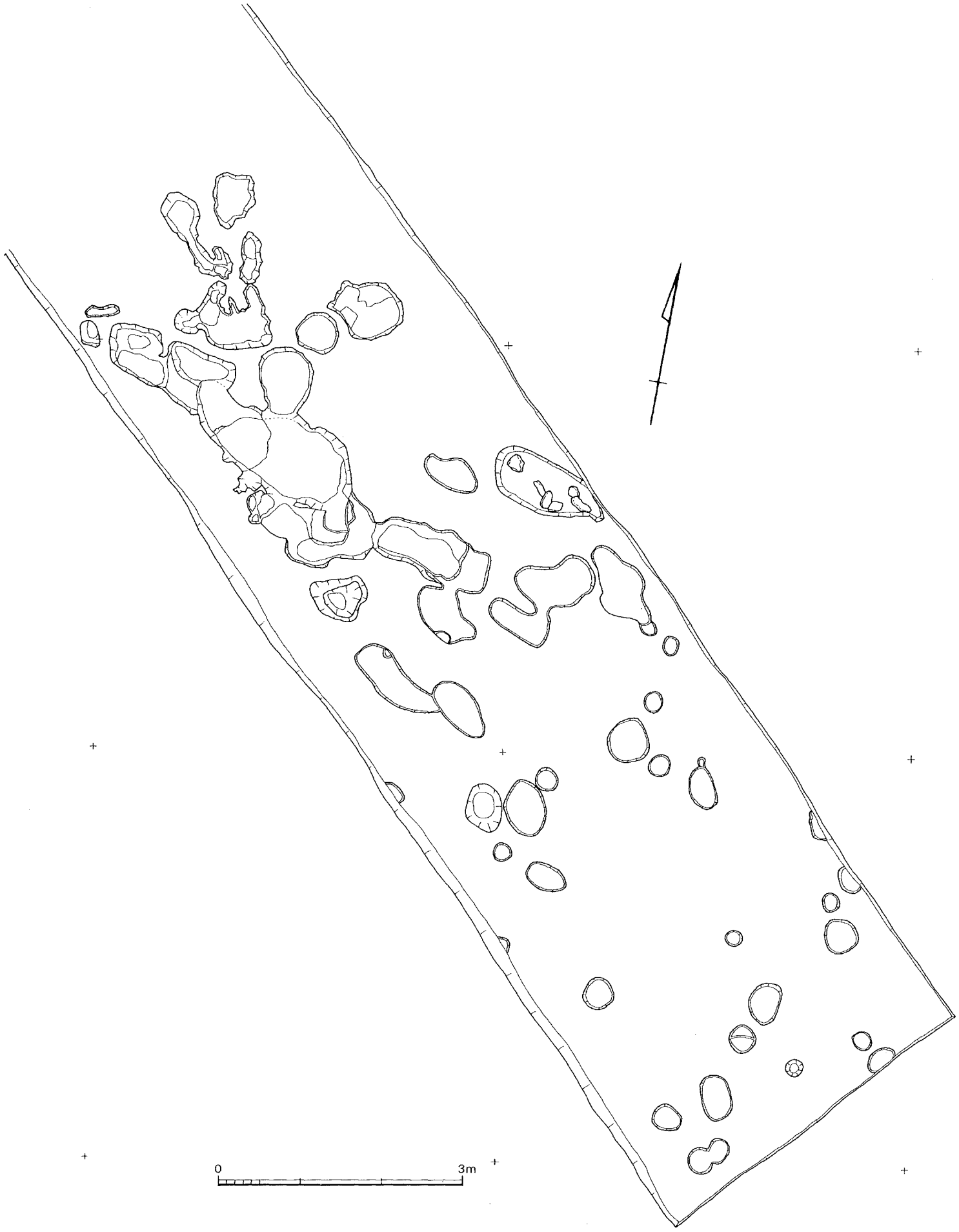
これらは，弥生中期～後期頃の建物遺構の柱穴群と推測され，規模等については不明である。

② 調査区Ⅳ区検出の柱穴群

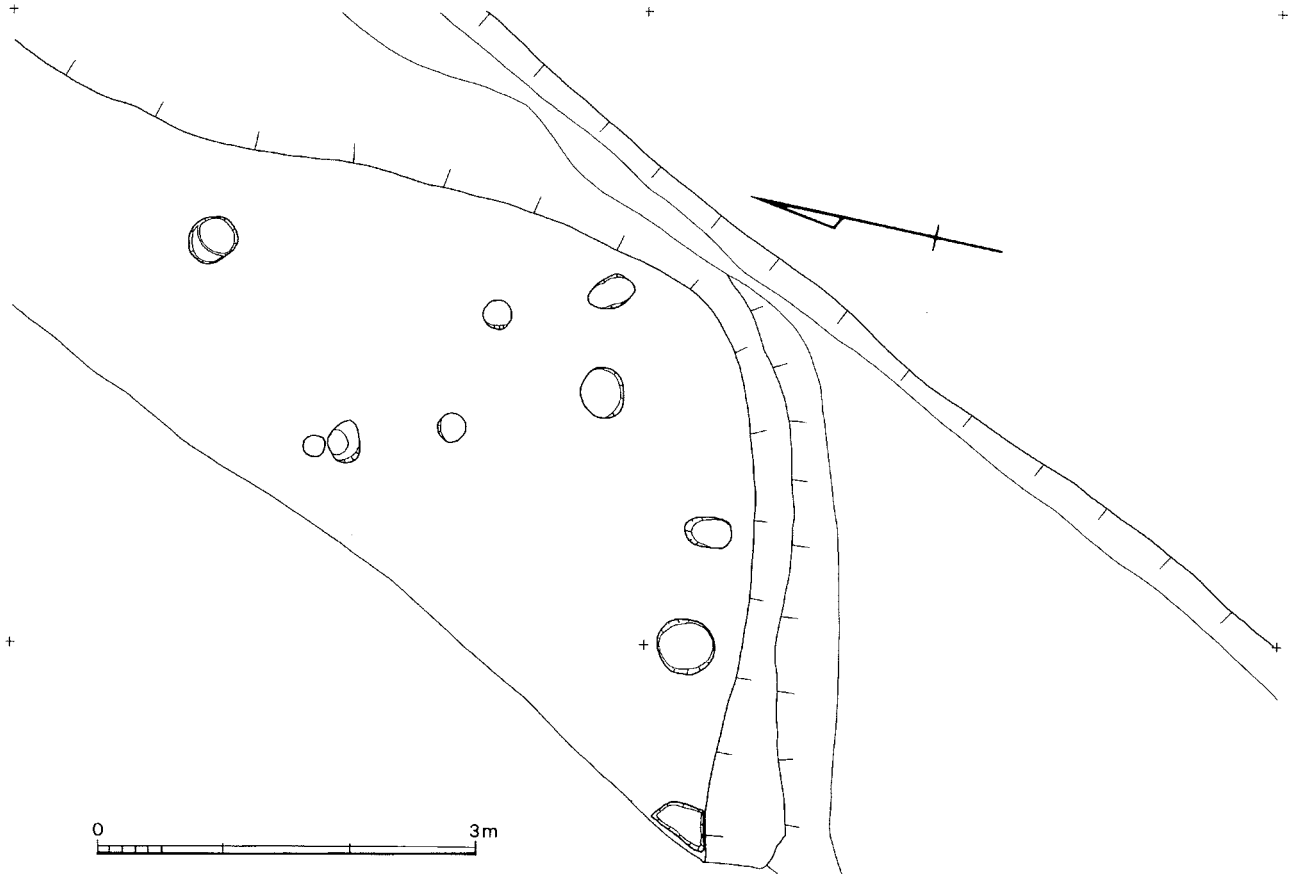
T－18区の9，15区に検出された。検出箇所は，環濠の7号溝状遺構の内側（西側）で，丘陵部分が張り出し，環濠が曲線を呈する部分に当たる。この附近も昭和30年代に圃場整備が実施された区域のため全面的に掘削を受けている。

柱穴は，9箇所確認されているが掘削を受けているために，浅い状況で検出されている。

第18図　石敷遺構平断面実測図（1/40）

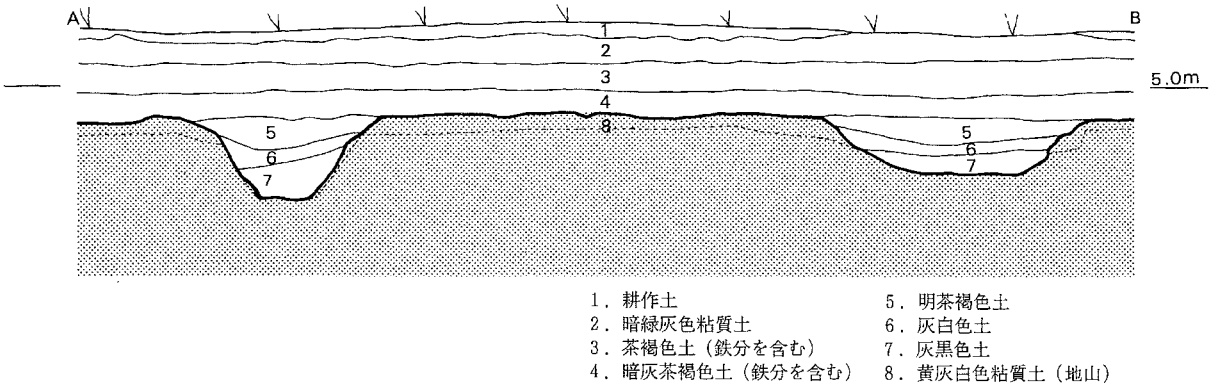


第19図　U15区柱穴群平面実測図（1/60）

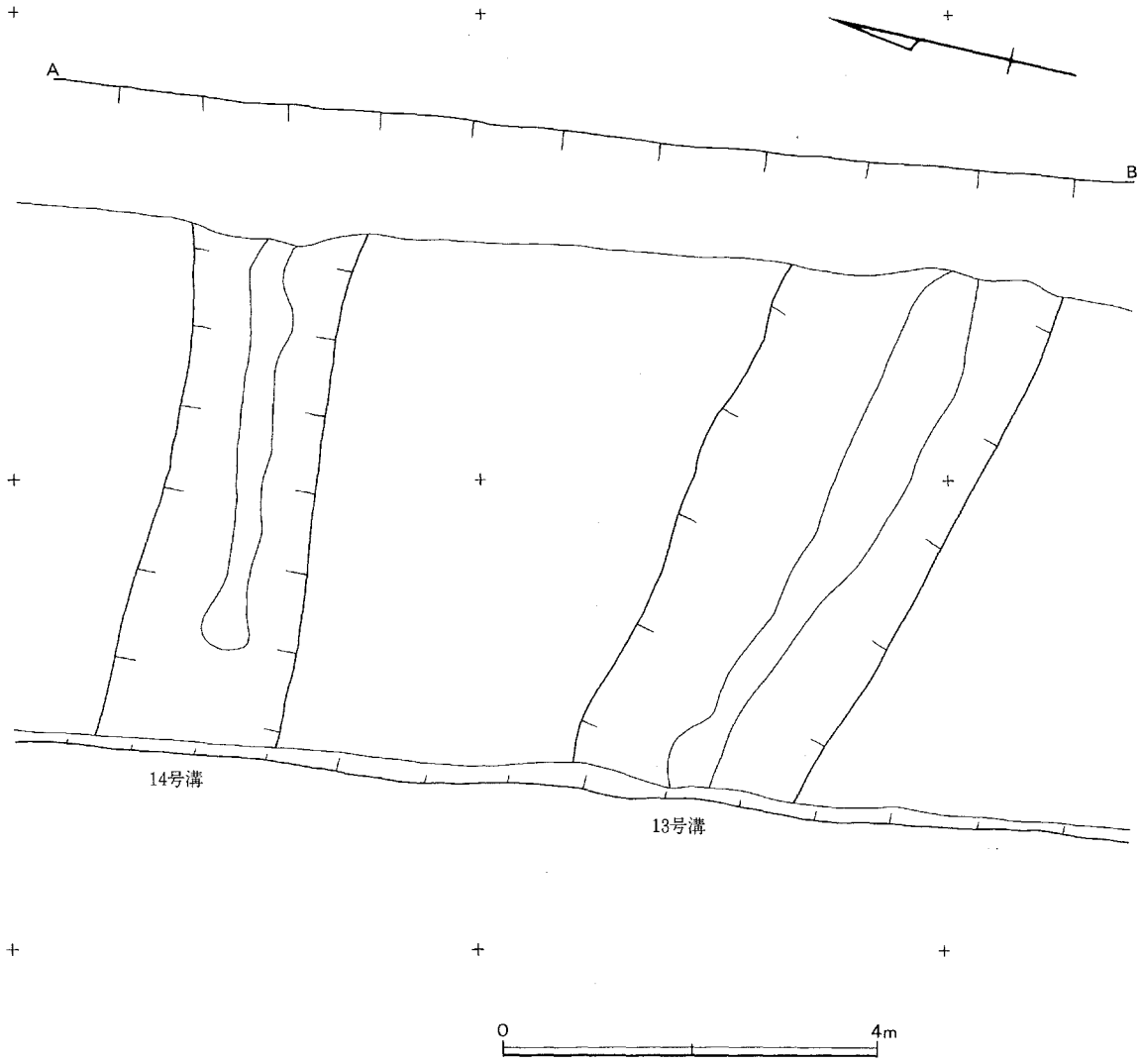


第20図　T18区柱穴群平面実測図（1/60）

第21図　W7・8区柱穴群平面実測図(1/60)



1．耕作土
2．暗緑灰色粘質土
3．茶褐色土（鉄分を含む）
4．暗灰茶褐色土（鉄分を含む）
5．明茶褐色土
6．灰白色土
7．灰黒色土
8．黄灰白色粘質土（地山）



第22図　通路状遺構平面及び土層断面実測図（1/80）

柱穴群の性格については，狭い範囲の調査区域のために定かではないが，環濠と関連した遺構で，環濠内の柵列群や環濠の通路としての橋等が推測される。

③ 調査区Ｖ区検出の柱穴群

Ｗ－７区の32，33区，Ｗ－８区の２区に検出された。検出箇所は，19号溝状遺構から南へ５ｍ程，通路状遺構から約26ｍ程の距離に当たる。

柱穴は，径20cm～30cmが28箇所，径50cmから70cm程が９箇所の柱穴群で，規模等については不明である。時期は，弥生中期から後期と考えられる。

遺構の性格については，19号溝状遺構との関連と柱穴群の広がりを，今後明らかにしていく必要があろう。また，遺跡の範囲が，さらに東側に広がり，範囲の見直しも検討する必要があろう。

(4) 通路状遺構

通路状遺構は，調査区Ｖ区のＷ－９区の１，２，７，８，１４区に検出された。検出箇所は，今次の調査で検出されたＩ区の石敷遺構から東へ約80ｍ程，Ｉ区の10号溝状遺構から北東に約45ｍ，Ｖ区の12号溝状遺構から北に約45ｍの距離に当たる。

遺構は，北側に14号溝状遺構が，南側に13号溝状遺構が北西方向に構築され，更に東西方向に延びることが推察される。

２つの遺構の詳細な規模等については，Ｖ－(1)の溝状遺構に述べてあるので省くが，通路状遺溝の記載上で若干述べることにする。

14号溝状遺構は，現計で幅約２ｍ，深さは約80cm～84cmで東へ傾斜している。13号溝状遺構は，現計で幅約2.4ｍ～2.7ｍ程で東側より西側が若干幅狭くなり，深さは約62cm程である。遺構内から，弥生時代の土器，木器類が出土している。

通路状遺構の規模は，東側で幅が4.5ｍ程，西側で3.0ｍ程で西側に向って狭くなっているに観察される。この遺構は，両側の溝間の部分を通行帯として利用し，溝状遺構と同様に東西方向に延びることが推測される。

構築時期については，13，14号溝状遺構の構築時期と同じと考えられるようだ。

4．遺　物

(1) 土　器

今回の調査で出土した土器は，夥しい数に上り大多数は現在整理中である。そのため今回の報告では弥生前期末～中期の土器が出土した大溝と，弥生中期～後期・古墳時代前葉の土器が出土した5号溝の資料に限定した。ただし，ここで示す土器も遺構の中の一部分の資料であり，かなり偏りがあると思われる。今後，整理作業が進展した時点で改めて正式報告する予定である。また，原の辻遺跡では瀬戸内系と思われる土器も出土しており，ここで合わせて報告したい。

①　大溝出土土器（第23図）

ここでは大溝下層出土土器のみ13点図化した。

壺形土器（1～7）

1・2は肩部に2条の沈線を施すものである。1は直線的に立ち上がる頸部から強く外反する口縁部を持ち，口縁端部は丸くおさめる。外面は黒塗りである。3は頸部から口縁にかけ緩やかに外反し，口縁端部には粘土を貼り付け，内側は僅かに突出し外端部は尖り気味におさめる。内外面ともに黒塗りである。4～7は肩部に沈線及び文様を組合わせて施すものである。4～6は貝殻による羽状文あるいは綾杉文を施し，4は肩部から頸部にかけて縦方向への施文が特徴である。7は爪形状文を施し，肩部上端には径5㎜程の焼成後の穿孔がある。無形壺であろう。

甕形土器（8～13）

口縁部が緩やかに湾曲しながら外反するいわゆる如意形口縁のものがほとんどである。9・13は屈曲の度合いがやや強いが内面に稜が付くほどではない。全て口唇部下端に刻目を施すが，12・13はやや深めに刻む。口縁部下への施文は，1～2条の沈線を施すもの（11･12），断面三角形の刻目突帯を施すもの（13）があるが，刺突文を施すもの（10）も出土している。12・13は胴部上半が僅かに膨らむ。

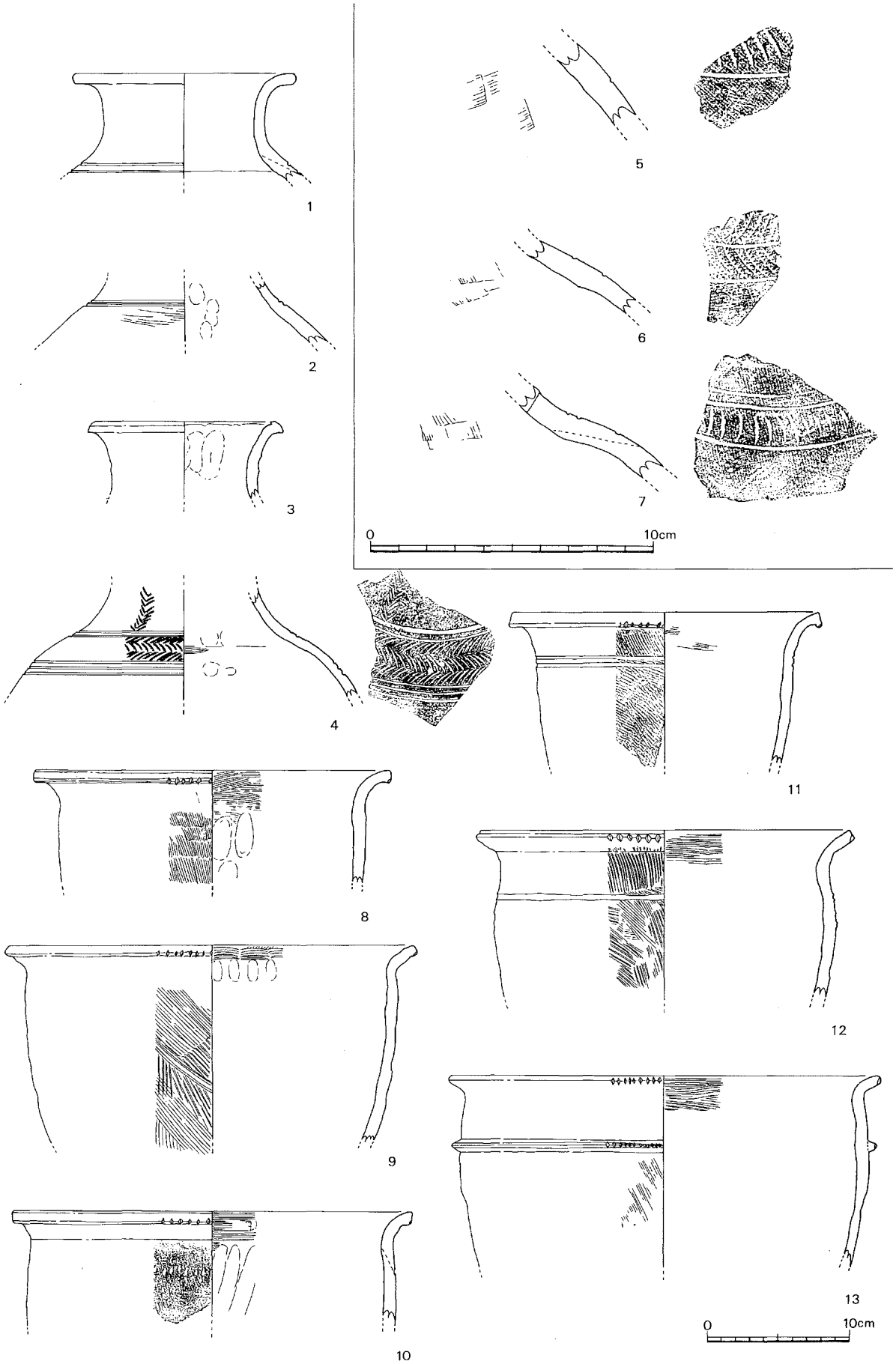
3は弥生中期初頭，他は弥生前期後半～終末に位置付けられよう。

②　5号溝出土土器（第24～30図）

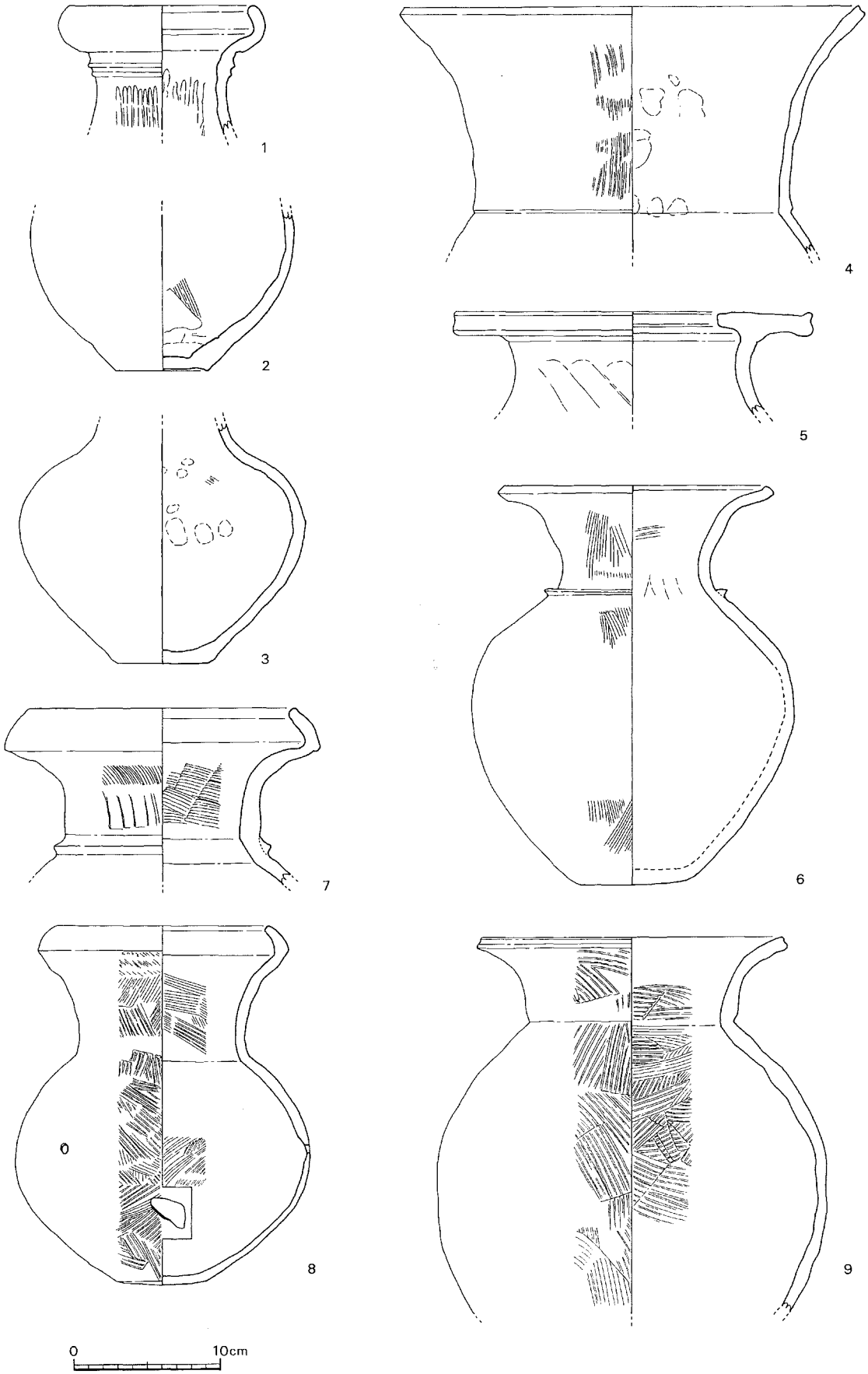
ここでは5号溝の中で出土遺物の多かったQ5－18区とQ5－12区出土の土器を中心に図化した。

壺形土器（1～21）

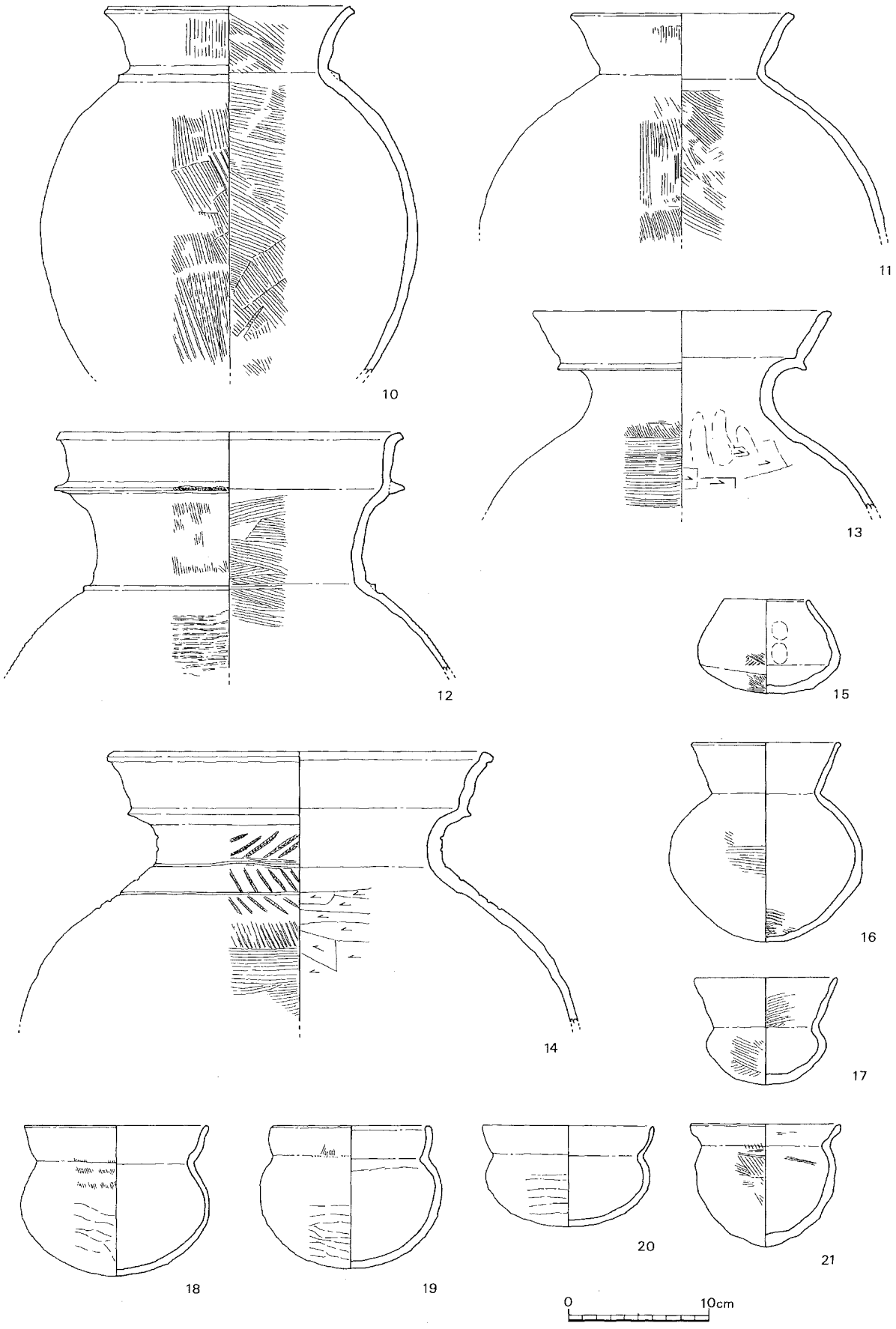
1はいわゆる袋状口縁壺である。口縁部直下に断面M字状の突帯を貼り付け，頸部外面には縦に暗文を施す。2・3は上部を欠くが1のような口縁部を持つ壺形土器であると思われる。1～3とも外面丹塗磨研仕上げである。4は広口壺である。胴部と頸部の境に段を有し，頸部外面には部分的に縦方向の暗文を施す。口縁部内側上半と外面は丹塗りである。5は断面T字状の口縁部を持ち，外側は僅かに垂れ，端部はくぼむ。口縁部と外面は丹塗りで，内面にも僅かに丹が残る。6はほぼ完形の広口壺である。胴中位よりやや上方に胴部最大径があり，胴部と頸部の境に断面三角形の突帯を持つ。



第23図　大溝出土土器（1/2・1/4）



第24図　5号溝出土土器①（1/4）

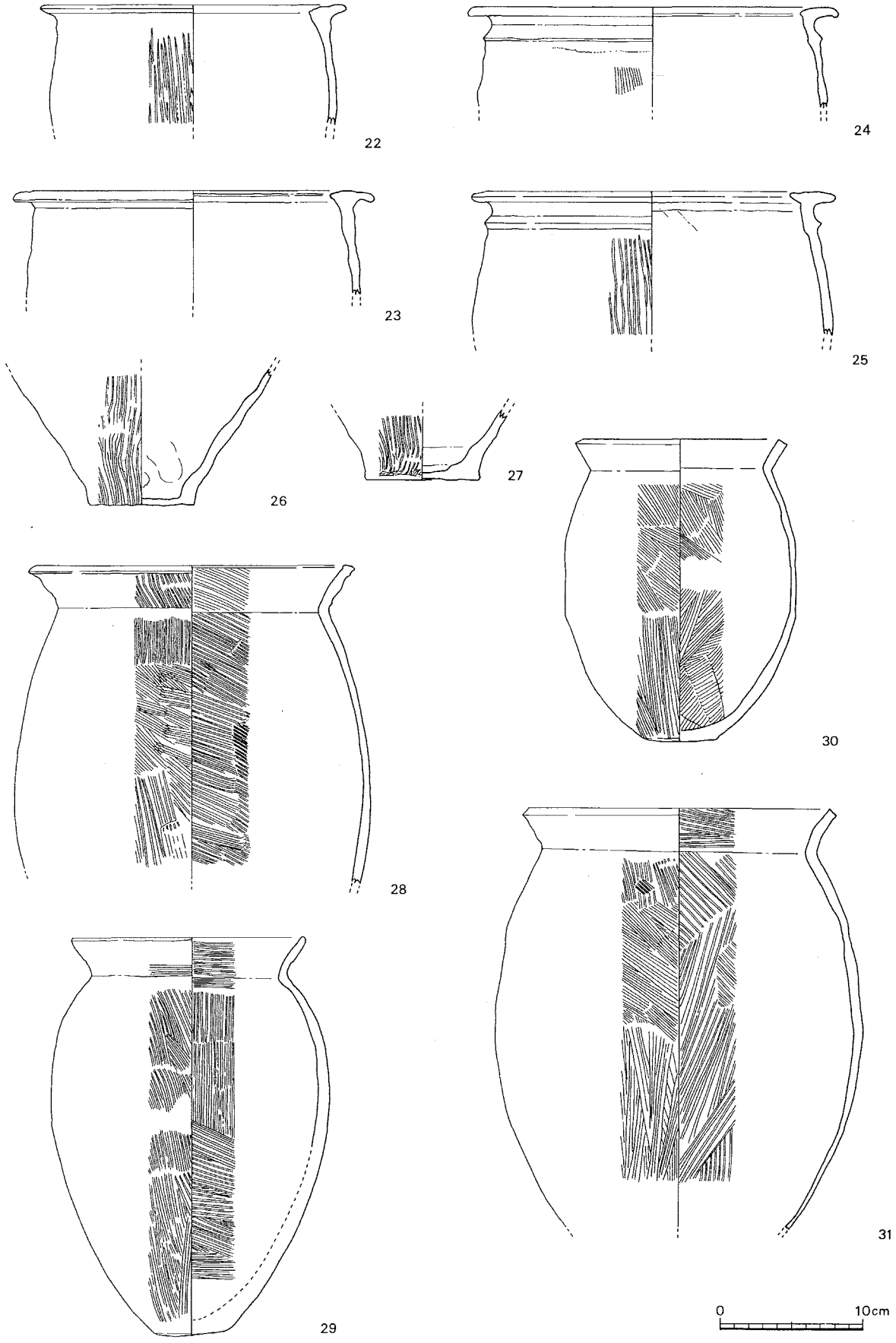


第25図　5号溝出土土器②（1/4）

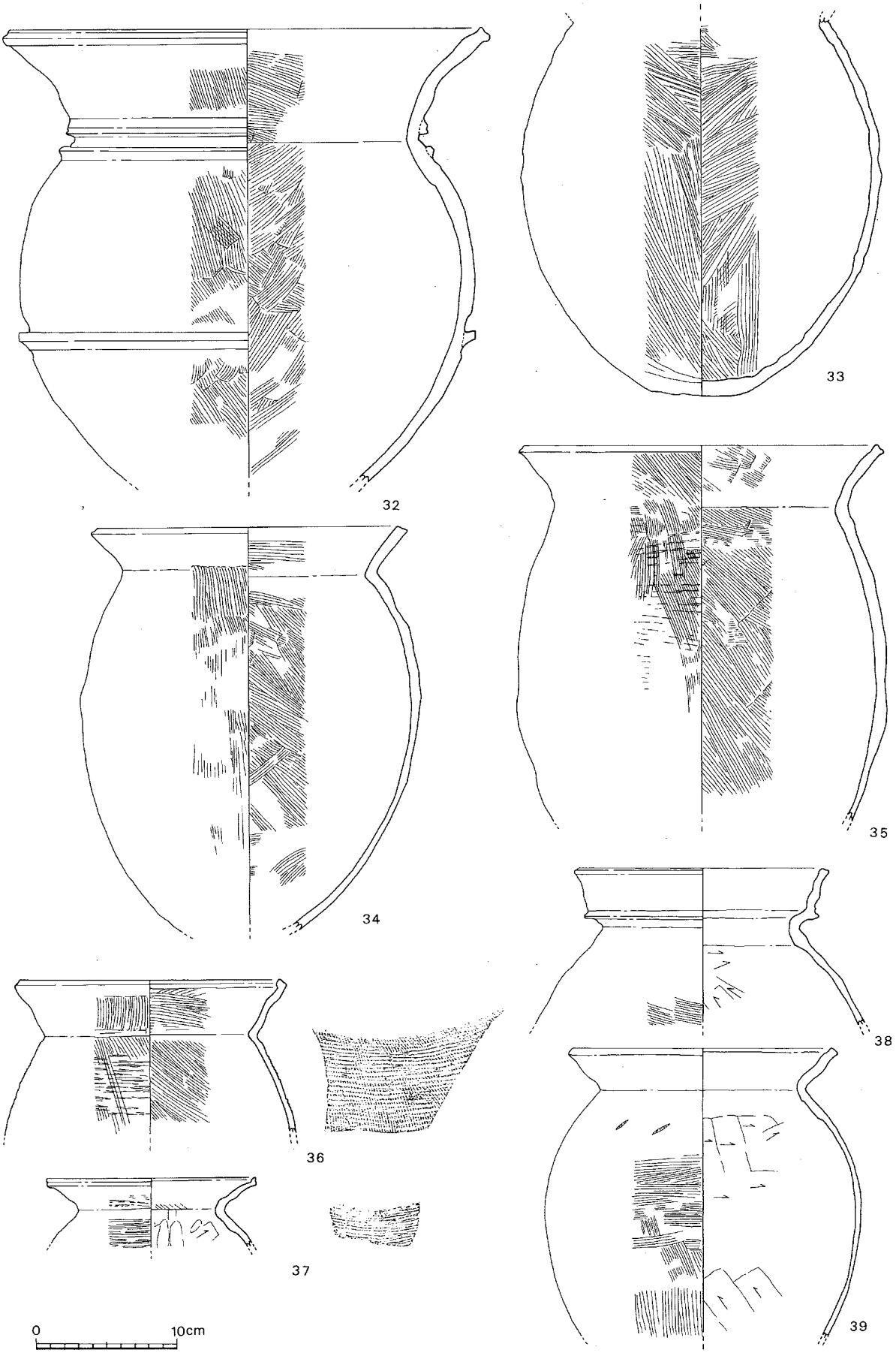
口唇部は上方をやや摘み上げ気味におさめている。底部は平底である。7・8は複合口縁壺である。7は胴部と頸部の境に断面三角形の突帯を持つ。8は胴部中位に径7㎜の穿孔と胴下位に不整形の穿孔がある。底部は凸レンズ状底である。9は広口壺である。胴部最大径は中位にある。口頸部は緩やかに外反し大きく開き，口縁端部は僅かにくぼむ。10・11は直立気味の短い口縁の付く壺形土器である。胴部は球形状を呈し，10は胴部と頸部の境に断面三角形の突帯を持つ。12～14は複合口縁壺である。12は長めの頸部が緩やかに外反し直立気味の口縁部へと続き，口縁端部は外方に屈曲する。頸部と口縁部の境は突帯状につまみ出し，先端部に刻目を施す。頸部と胴部の境には断面三角形の突帯を持つ。胴部外面にはタタキ目がみられる。灰白色を呈し，胎土に石英・黒色砂粒・金雲母を含む。13・14は山陰系の土器の特徴を持つものである。13は短めの頸部が急激に外反し，直線的な口縁部は外傾する。口縁下端はシャープに突出する。胴部内面はヘラケズリである。浅黄橙色を呈し，石英・赤色砂粒・金雲母を含む。14も13と同様の形態を持つ壺形土器でやや大型である。口縁端部は外側に肥厚させ，頸部に2条の沈線とヘラ状工具の押圧による綾杉文を施す。胴部内面はヘラケズリである。にぶい橙色を呈し，胎土に石英・角閃石・金雲母を含む。15～21は小型の壺形土器である。15は無頸壺で，内部に指頭痕が残る。16は口縁部が直線的で外傾しながら長く伸びる。口縁内部と胴外面上半は，部分的に朱彩が残る。17は胴部に対して口縁部が長く伸びる。胴部内面はヘラケズリである。18～20は胴部外面下半を手持ちヘラケズリで仕上げる。口縁部は外湾しながら立ち上がり，直立するものと外傾するものがある。16～20は畿内系であると思われる。21は胴部外面下半を縦方向に削り，底部は尖り気味に粗く造り出している。

甕形土器（22～45）

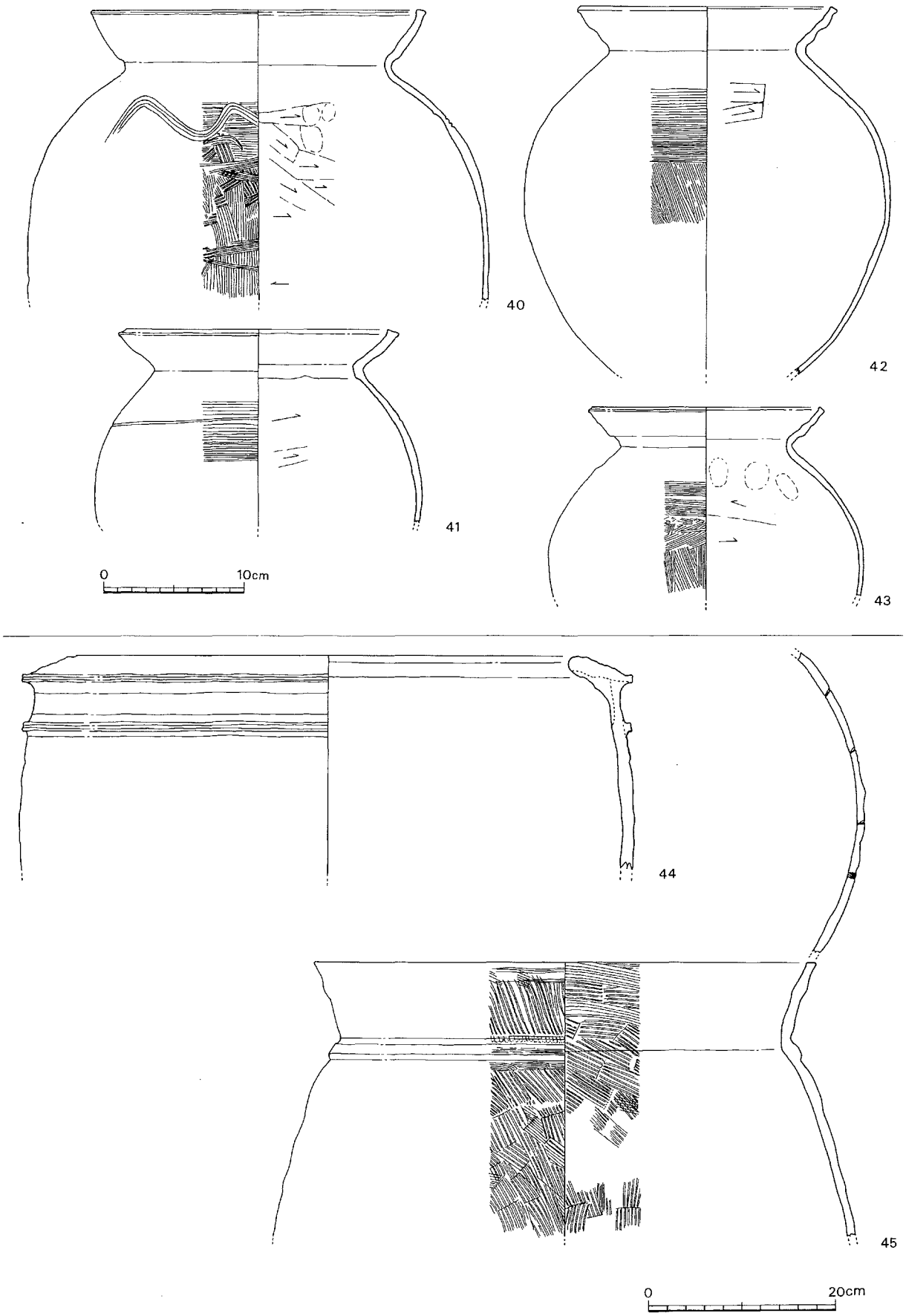
22～25は鋤先状口縁を持つ甕形土器である。22は口縁上面が内傾し，胴部との接続部は肥厚する。23は口縁部が内側にやや突出し，端部は垂れる。24・25は口縁部直下に断面三角形の突帯を持つ。24は口縁上面がやや内傾し，内側は僅かに突出する。25はほぼ水平の口縁部で，内側にかなり突出している。26・27は甕底部である。いずれも平底で，26は非常に薄いつくりである。28～31はく字状口縁を持つ甕形土器である。胴部外面下半に粗い板ナデ状の調整を施すことで共通する。29は胴部最大径が中位よりやや上方にあり倒卵形の体部をなす。口縁端は丸くおさめ底部は凸レンズ状底である。30は胴部最大径が中位にありラグビーボール状の体部である。口縁部は，端部にいくほど厚みを増す。底部は凸レンズ状底である。32は頸部が締まり長めの口縁部が大きく開く。頸部に2条，胴部に1条の断面コ字状突帯あるいはM字状突帯を持つ。33・34は28～30と同様の器面調整である。33は胴部がやや膨らむ。底部は凸レンズ状であるが丸底に近い。35の胴部外面はタタキの後，縦方向のハケ目調整を行う。口縁部と胴部の境が明瞭ではない。36は口縁部が直線的に立ち上がり，端部をつまみ上げる。胴部外面はタタキの後，縦方向のハケ目調整を行う。内面はハケ目調整である。黒褐色を呈し，胎土に石英・角閃石・金雲母を含む。37は庄内系の甕形土器である。胴部から強く外反する口縁部を持ち，やや外湾気味に立ち上がり，端部は上方につまみ上げる。胴部外面は細かいタタキ目が残る。内面はヘラケズリである。褐灰色を呈し，胎土に石英・黒色砂粒・金雲母を含む。38は山陰系の複合口縁甕



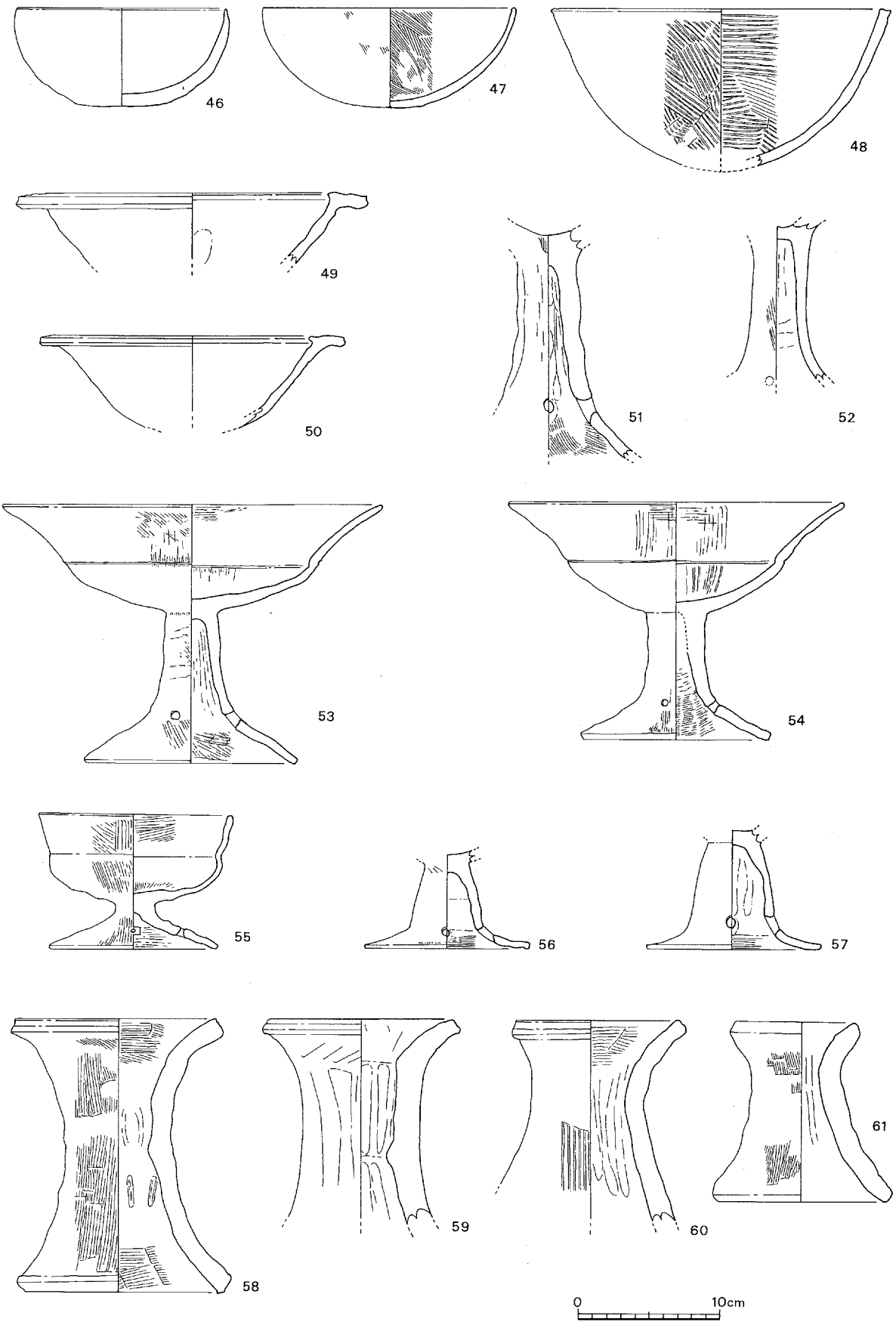
第26図　5号溝出土土器③（1/4）



第27図　5号溝出土土器④（1/4）



第28図　5号溝出土土器⑤（1/4・1/6）



第29図　5号溝出土土器⑥（1/4）

である。口縁部は胴部から強く外反し，更に上方に外傾しながら直線的に伸びる。反転部はシャープに突出する。口縁部から頸部外面はヨコナデ，胴部外面は横方向のハケ目調整である。内面はヘラケズリである。灰白色を呈し，胎土に石英・黒色砂粒を含む。39～43は布留系の甕形土器である。口縁部は内湾ぎみに外傾し，端部は内側に僅かにつまみ上げるもの（40～42）と，つまみ上げが明瞭でないもの（39・43）とがある。肩部は丁寧な横ハケ調整を施すが，櫛目波状文・沈線を施すものもある。胴部内面はいずれもヘラケズリである。44・45は甕棺である。44は口縁部が内外に突出し，外側に低く傾斜する。口縁部下には断面コ字状の突帯を持つ。口縁外端と突帯は横ナデによりややくぼみを持つ。丹塗りの痕跡が認められるが明瞭ではない。45はく字状に緩やかに外反し長く伸びる口縁を持つ。頸部には広めの突帯を貼り付け，口縁端部には間隔を置き刻目を施す。

鉢形土器（46～48）

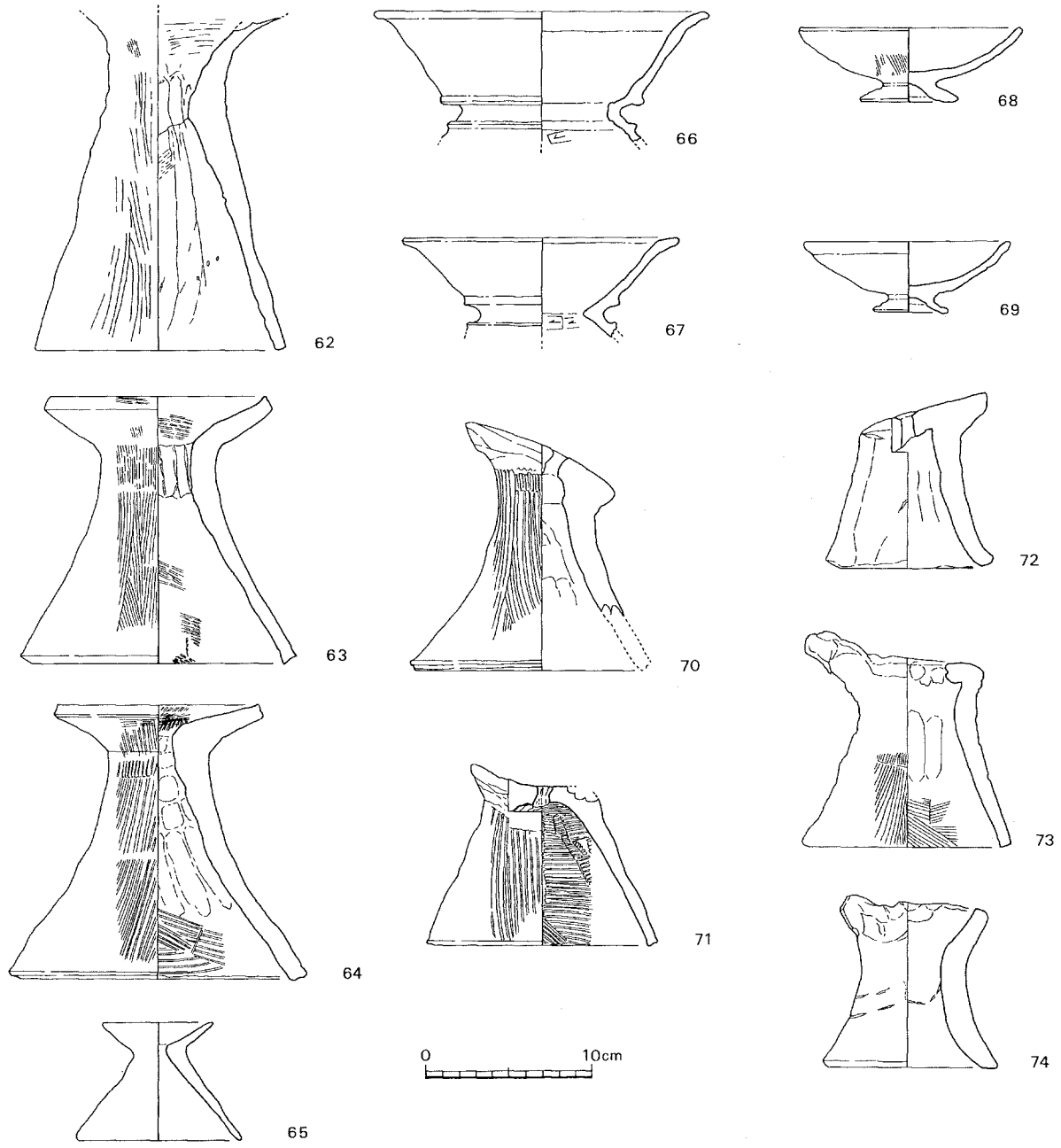
底部から口縁部まで屈曲なくそのまま伸びる鉢である。いずれも丸底であるが，48は深く不安定である。47は外面下半をヘラケズリで仕上げている。

高坏形土器（49～57）

49・50は鋤先状口縁を持つ高坏である。口縁部内側はやや突出し，49は口縁外端部が僅かに垂れる。51・52は高坏脚の筒部である。51は長めで，筒部と裾部の境に3個の穿孔がある。筒部から裾部への移行は緩やかである。内面にしぼり痕がみられる。52は51よりも裾部寄りに3個の穿孔がある。内面はナデておりしぼり痕は僅かに残る。53・54は坏部の屈曲がほぼ中位にあるが，外面の屈曲部は不明瞭である。内面は段をなす。いずれも筒部と裾部の境に3個の穿孔を持つ。55は特異な形態を持ち搬入品と思われる高坏である。坏部は下半が膨らみ，中位で屈曲しやや外傾気味に伸びる口縁部を持つ。短い脚部から裾部へと移行する。裾部の中位に4個の穿孔を持つ。口縁部には縦方向の暗文を施す。灰白色を呈し，一部に丹塗りの後が認められるが明瞭ではない。胎土に石英・白色砂粒・赤色砂粒・角閃石を含む。類例が三雲遺跡サキゾノ地区で出土している(1)。56・57は短いエンタシス状の筒部を持ち，筒部と裾部の境に2個の穿孔を持つ。

器台形土器（58～67）

58は胴部のくびれがほぼ中位にあり，上下に均等に開く。59はくびれがやや上位にあり，外面は下方向へのケズリがみられる。60・61はくびれ部が受け部付近にまで上がるが，胴部と受け部の屈曲は緩やかである。62～64は胴部から受け部への屈曲が著しい。63は受け部上端をつまみ上げる。64は受け部が皿状になる。65は畿内系の小型器台である。くびれが上位にあり直線的に上下に開く。橙色を呈し，胎土に石英・黒色砂粒・金雲母を含む。66・67は山陰系の土器で鼓形器台と呼ばれるものである。くびれ部分の上下が明瞭に突出し，受け部は外傾しながら大きく開く。66は受け部内面にヘラミガキ，裾部にヘラケズリがみられる。浅黄橙色を呈し，胎土に石英・赤色砂粒・白色砂粒・金雲母を含む。67は2号溝の出土であるが，参考までに掲載した。筒部の内面は鋭角に屈曲する。風化のため受け部内部の調整は不明だが，裾部内面はヘラケズリである。にぶい橙色を呈し，胎土に石英・白色砂粒・角閃石・金雲母を含む。



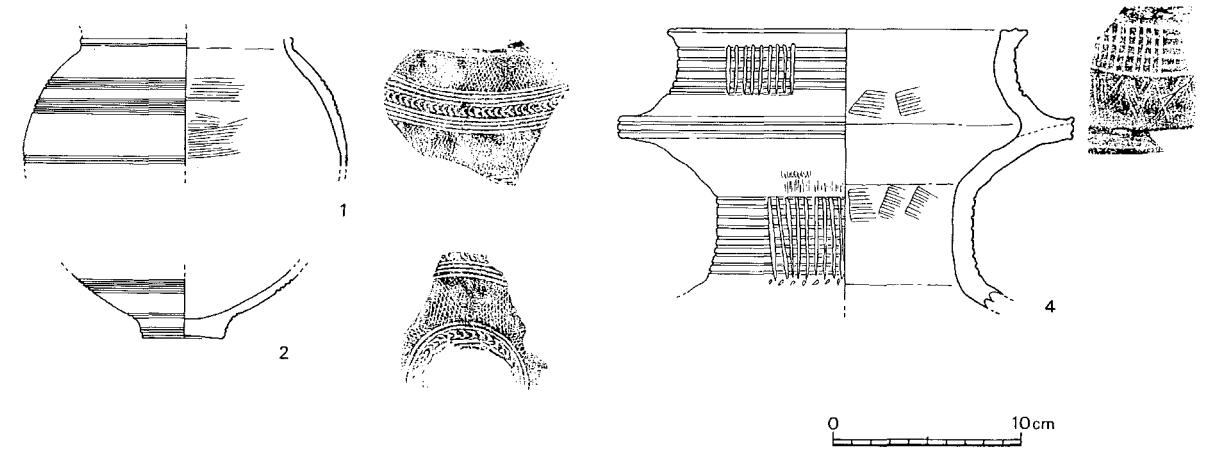
第30図　5号溝出土土器⑦（1/4）

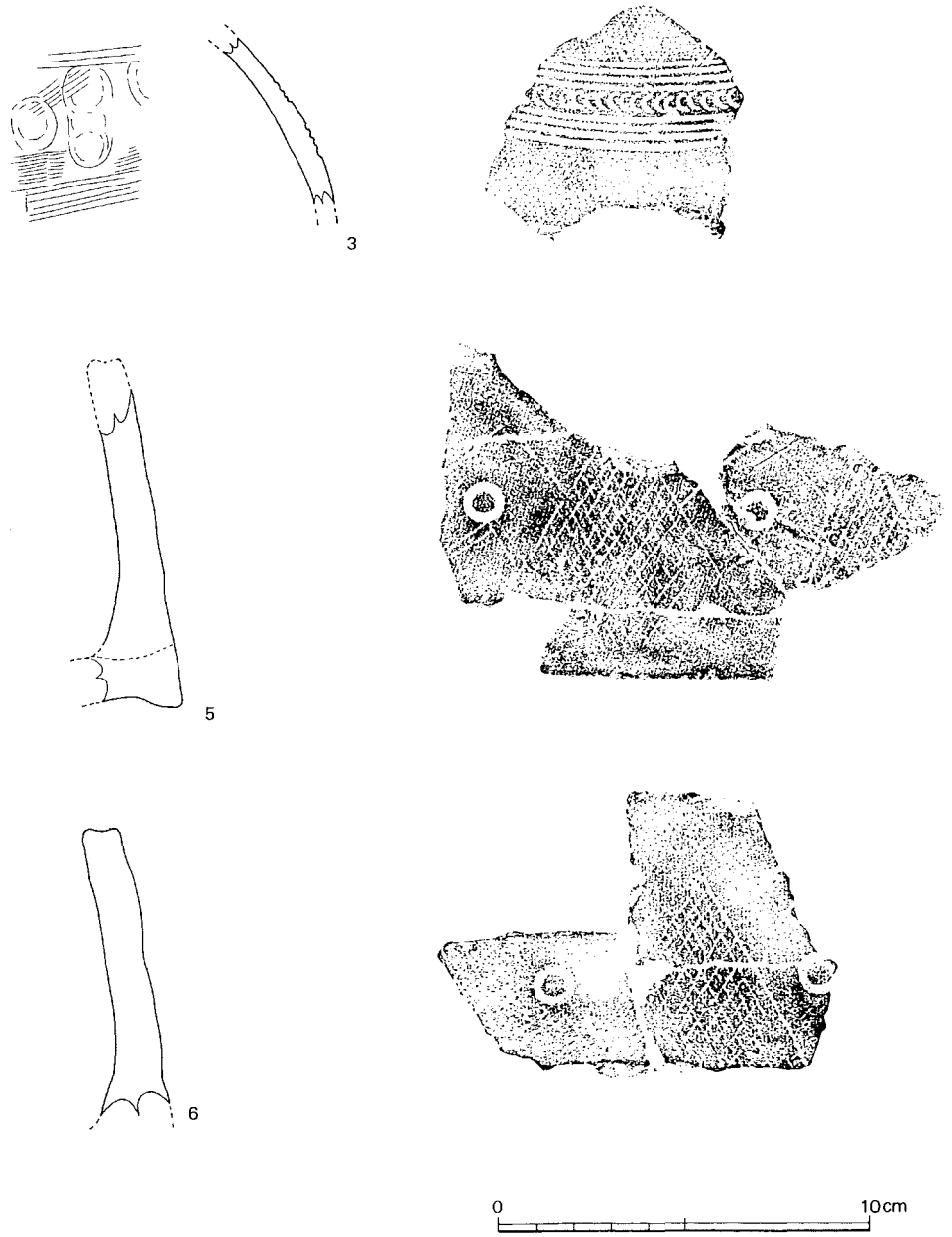
杯形土器（68・69）

いずれも山陰系の低脚付杯形土器である。皿状の杯部に短く開く脚部が付く。68は杯部内面はナデ仕上げ，外面には縦方向のハケ目がみられる。灰白色を呈し，胎土に石英・角閃石・金砂粒を含む。69は2号溝出土である。杯部内面がヘラケズリの後ナデ仕上げ，外面は縦方向のハケ調整の後，横ナデで仕上げてある。淡黄橙色を呈し，胎土に石英・角閃石・金雲母・赤色砂粒を含む。

支脚形土器（70～74）

沓形器台とも呼ばれるものである。70～72は受け部が面をなし中央に穿孔を持つ。73は筒状の胴部





第31図　搬入土器（1/2・1/4）

の上端に粘土を継ぎ足しつまみ部を造る。74は上下に開く筒形器台の受け部を左右からつぶし，つまみ部を造り出している。

以上5号溝出土土器について述べた。調査時に遺物を層位的に取り上げることが困難であり，また遺物について詳細な分析や検討も行っていない。そのため今後再検討の必要もあると思われるが，北部九州の一般的編年の中に位置付けると概ね次の通りである。22・44は弥生時代中期中葉，1～5・23～27・49・50は中期後葉，6は後期前葉，7・8・58・59は後期中葉，46・51・60・61は後期後葉，9・10・28～33・45は後期後葉～終末，11・34・35・52・62～64・70～74は後期終末～古墳時代初頭，14・15～21・36～43・47・48・53～57・65～69は古墳時代初頭～前葉に，ぞれぞれ位置付けられよう。

③ 搬入土器（第31図）

すでに，5号溝出土土器の中に畿内や山陰系と思われる土器も取り上げているが，ここでは瀬戸内系と思われる土器について述べることにする。

1～3は，いずれも破片であるが，その形状から壺形土器であると思われる。1・3は肩部片で，斜格子を持つ鋸歯文，平行沈線，半裁竹管文を組み合わせて施している。肩部と頸部の境には断面コ字形の突帯を持つ。1がにぶい黄橙色，3がにぶい橙色を呈し，いずれも胎土に石英・白色砂粒・赤色砂粒・金砂粒を含む。2は底部である。高台状の平底が付き，側面に平行沈線と半裁竹管文を施す。その上に斜格子を持つ鋸歯文，4条の平行沈線，高台側面とは逆向きの半裁竹管文を施す。残存部分はほとんど黒斑で占められているが，本来にぶい黄橙色を呈するものと思われる。胎土に石英・白色砂粒・赤色砂粒・金砂粒・角閃石を含む。4は大型の複合口縁壺の口縁部である。ほぼ直立気味の頸部から大きく外反し，反転部は鍔状をなし，内湾しながら口縁端部に続く。口縁上端部には2条の沈線を施す。鍔状反転部の上側には，6条の横平行沈線と9～10条を単位とする縦方向の沈線を5cm程の間隔で施し，その下に鋸歯文状の文様を施す。頸部には9条の横平行沈線及び9条を単位とする縦方向の沈線を5cm間隔で施している。また，頸部と胴部の境には刺突列点文を施す。にぶい橙色を呈し，胎土に石英・赤色砂粒・金雲母を含む。山口県周防の宮原遺跡に類例がある(2)。5・6は接合しないが同一個体であると思われる。その形態から大型の複合口縁壺の口縁部であると考えらるが，大型器台の可能性もある。いずれも外面に斜格子を持つ鋸歯文，山形文，竹管文を組み合わせて施す。にぶい橙色を呈し，胎土に石英・赤色砂粒・金砂粒を含む。

1・2・4は1号溝，3・5・6は2号溝出土である。1～3・5・6は類例を見ずその分布地域や時期も明らかではないが，施文や形態から瀬戸内系であると思われる。4と同様に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてのものであろうか。

註

(1) 柳田康男ほか『三雲遺跡III』福岡県文化財調査報告書第63集　福岡県教育委員会　1982

(2) 山本一郎「防長の弥生式土器」『山口県の弥生式土器』周陽考古学研究所報2　周陽考古学研究所　1979

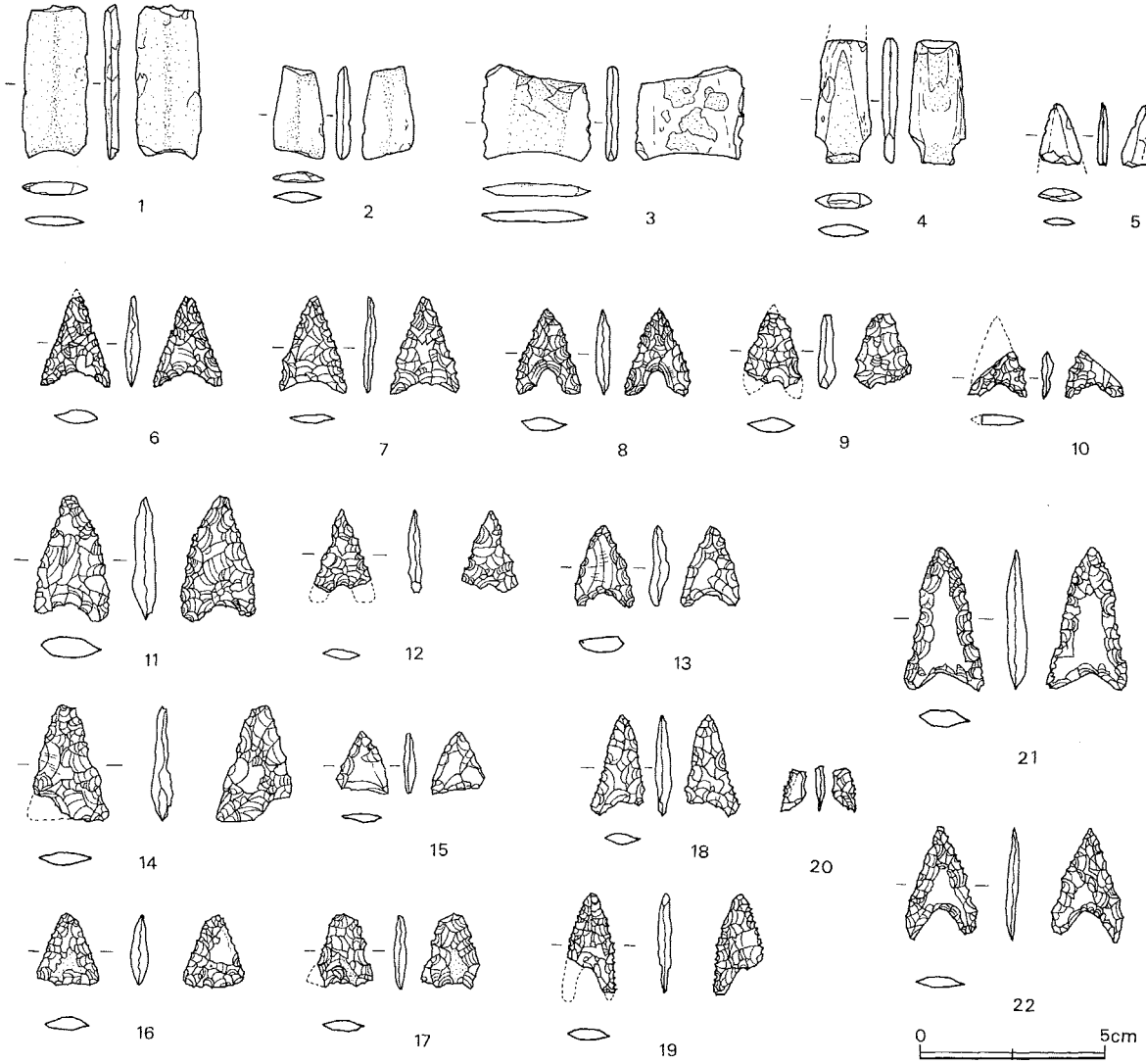
(2) 石器類

武器類・工具・農具・魚撈具などが出土した。

石　鏃（第32図）

1～5は磨製石鏃である。

1は，凹基式磨製石鏃である。断面レンズ状を呈し，鏑を有しない。基部は緩く湾曲する。先端部と逆刺の一部を欠く。鏃身，基部ともに研磨を施すが，片面は風化を受けている。現存長4.15cm，幅1.79cm，厚さ0.33cm，重さ3.6ｇを計る。材質は頁岩である。T9—21区3層より出土した。2は，小片のため形態が不明である。これにも鏑はなく断面レンズ状を呈する。基部，先端部とも欠損している。現存長2.46cm，最大幅1.37cm，厚さ0.3cm,重さ1.3ｇを計る。材質は頁岩で，R3区の排土表採品である。3は，凹基式磨製石鏃である。やや幅が広いが形態は1と同様である。現存長2.51cm，幅2.85cm，厚さ0.31cm，重さ3.7ｇを計る。T9—9区大溝の上面より出土した。黒色頁岩で全面に研磨を施す。4は，先端部，茎部を欠く有茎式磨製石鏃である。関部は弧状に削り込み，茎と区別する。現存



第32図　石器実測図①（1/2）

長3.34cm，幅1.45cm，厚さ0.4cm,重さ2.8ｇを計る。材質は頁岩製である。風化が著しい。U13—22区9号溝より出土した。5は，磨製石鏃の先端部である。

6～22は，打製石鏃である。

6は，二等辺三角形を呈する。刃部側縁を直線的に作り，基部は緩く湾入する。黒曜石製で重さ1ｇを計る。T8—1区3号溝より出土した。7も形態的に同様の作りである。8は，刃縁部が曲線をなし，基部を深く抉る。黒曜石製で重さ1ｇを計る。T9—21区1号溝より出土した。9は，逆刺の部分を両方とも欠く，黒曜石製で重さ1.1ｇを計る。T9—21区1号溝排土表採品である。10は，逆刺の部分のみで鏃身部を大きく欠損している。T8—32区2号溝排土表採品である。11は，大型の石鏃である。12は，逆刺部分を両方とも欠く。黒曜石製で重さ0.8ｇを計る。T8—18区2号溝排土表採品である。14は，先端部と基部端を欠いた平基式石鏃である。黒曜石製で重さ2.2ｇを計る。S8—12区2号溝内より出土した。15は，やや内湾した平基式石鏃である。材質は玄武岩系で重さ0.5ｇを計る。S8—5区2層より出土した。16は，やや外湾した平基式石鏃である。先端部と基部端を若干欠く。黒曜石製で重さ1.1ｇを計る。T8—33区2号溝排土表採品である。17も，平基式石鏃であるが，先端部と基部端を欠く。黒曜石製で重さ0.8ｇを計る。S7—35区排土表採品である。

18～20は，刃部側縁が鋸歯状に仕上げられた鏃である。8も，若干側縁が鋸歯状に仕上げられるが顕著ではない。18，19は鏃身が狭い。18は，逆刺部を欠くが，重さ1ｇを計る。材質は玄武岩系である。S7—26区2号溝内より出土した。19も逆刺部を欠くが，黒曜石製で重さ0.9ｇを計る。T9—9区大溝4層上面より出土した。20は，逆刺の断片である。S7—28区2号溝排土表採品である。

21は，凹基式石鏃である。刃部側縁が若干内湾する。主剝離面と基部内面は研磨を施している。黒曜石製で，重さ3.2ｇを計る。S8—13区2号溝内より出土した。22も凹基式石鏃である。基部は深く抉りを施している。主剝離面に若干研磨痕を残す。黒曜石製で，重さ1.1ｇを計る。T10—2区1号溝内より出土した。

石　剣（第33図）

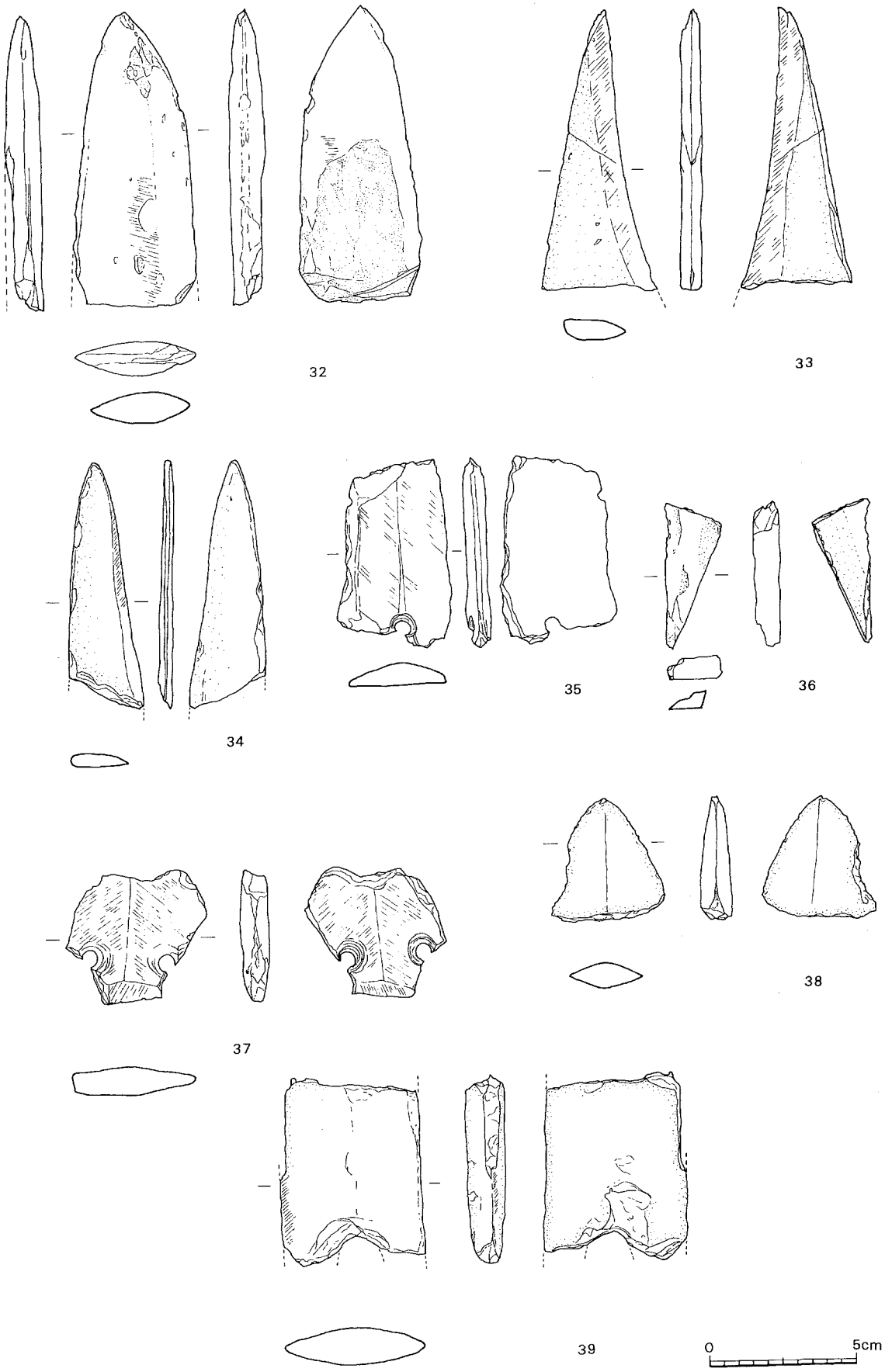
この調査では完形品の出土がなく，また遺物は小片であるため確実ではないが石剣として扱った。

23は，鉄剣形磨製石剣と思われる。現存長9.98cm，幅4.2cm，厚さ0.9cm，重さ41.8ｇを計る。石材の関係か，刃部は丁寧な研磨を施すが，鎬はなく敲打痕を残し平面をなす。石材は黒色頁岩である。T8—13区2号溝より出土した。24は，鋒部である。全体に風化を受けている。重さ54.0ｇを計る。25も脊のない鉄剣形磨製石剣と思われる。風化を受けている。28,29,31も25と同タイプの小片である。27は，身幅3.22cmと細く全体に研磨を施す。片面は刃部端を残し剝離している。30は，身幅2.54cmと細形で鎬を有する。全体に研磨を施すが，一部風化を受けている。

石　戈（第34図）

32は，石鎌の可能性もあるが，ここでは石戈の鋒部として扱った。現存長9.90cm，幅4.2cm，厚さ1.19

第33図　石器実測図②（1/2）



第34図　石器実測図③（1/2）

cm，重さ59.0ｇを計る。石材は黒色頁岩である。T10—21区２号溝上面より出土した。33も石鎌の可能性がある。厚さ0.63cmと薄く刃部のみ研磨を施す。刃部は内湾ぎみに緩くカーブする。関に至る張り出しの部分と考え石戈で取り上げた。T9—16区４層上面より出土した。34も石鎌の可能性が強い。現存長8.44cm，最大幅2.60cm，厚さ0.42cm，重さ11.6ｇを計る。T9—27区３層より出土した。35は，

第35図　石器実測図④（１/２）

長さ6.27cm，幅3.94cm，現存厚0.64cm，重さ19.8ｇを計る。鏃を研ぎ出し，孔を穿っている。孔の大きさは，外径0.92cm，内径0.55cmある。片面は剝離を受け不明である。石材は粘板岩系と思われる。37は，石戈の茎部分である。厚さ0.93cm，重さ25.6cm，孔の外径1.03cm，内径0.52cmを計る。孔はどちらも両面より穿っている。身と茎との段差はなく，茎の部分がわずかに傾斜している。身は鏑が僅かにうかがえる。蛇紋岩系の軟質な材質である。S19—30区４層上面より出土した。38は，鋒部である。現存長4.09cm，幅3.98cm，厚さ1.08cm，重さ15.8ｇを計る。材質は硬質の蛇紋岩系である。Q5—12区５号溝内より出土した。39は，現存長6.35cm，幅4.92cm，厚さ1.30cm，重さ58.5ｇを計る。全体に研磨を施す。鏑は明瞭ではない。石剣の可能性もあるが，基部側の窪みが穿孔に関わるものと考えここでは石戈とした。材質は黒色頁岩と思われる。T9—27区１号溝上面より出土した。

石　斧（第35図）

40は，抉入石斧の未製品である。長さ13.22cm，幅3.36cm，厚さ4.31cm，重さ340ｇを計る。材質は珪質頁岩でQ5—12区排土表採品である。41は，石斧の石材である。荒割りされただけの物で，長さ6.85cm，幅3.1cm，厚さ2.05cm，重さ71.5ｇを計る。43は，偏平片刃石斧の未製品である。長さ6.41cm，幅3.72cm，厚さ1.88cm，重さ62.5ｇを計る。石材は珪質頁岩である。T8—32区２号溝排土表採品である。45は偏平片刃石斧である。現存長4.9cm，幅1.74cm，厚さ0.46cm，重さ6.3ｇを計る。T9—15区４層上面より出土した。46は，石斧の石材である。幅2.81cm，厚さ1.74cm，重さ45ｇを計る。47は長さ3.75cm，幅2.32cm，厚さ1.05cm，重さ15.2ｇを計る。刃部，片側面のみ研磨を施す。T9—16区排土表採品である。48は，太型蛤刃石斧の刃部である。現存長4.02cm，幅4.71cm，厚さ2.81cm，重さ84.0ｇを計る。全体に風化を受けている。49は偏平片刃石斧である。長さ5.11cm，幅1.57cm，最大厚0.8cm，重さ10.6ｇを計る。材質は黒色頁岩である。R7—6区４層上面より出土した。

参考文献

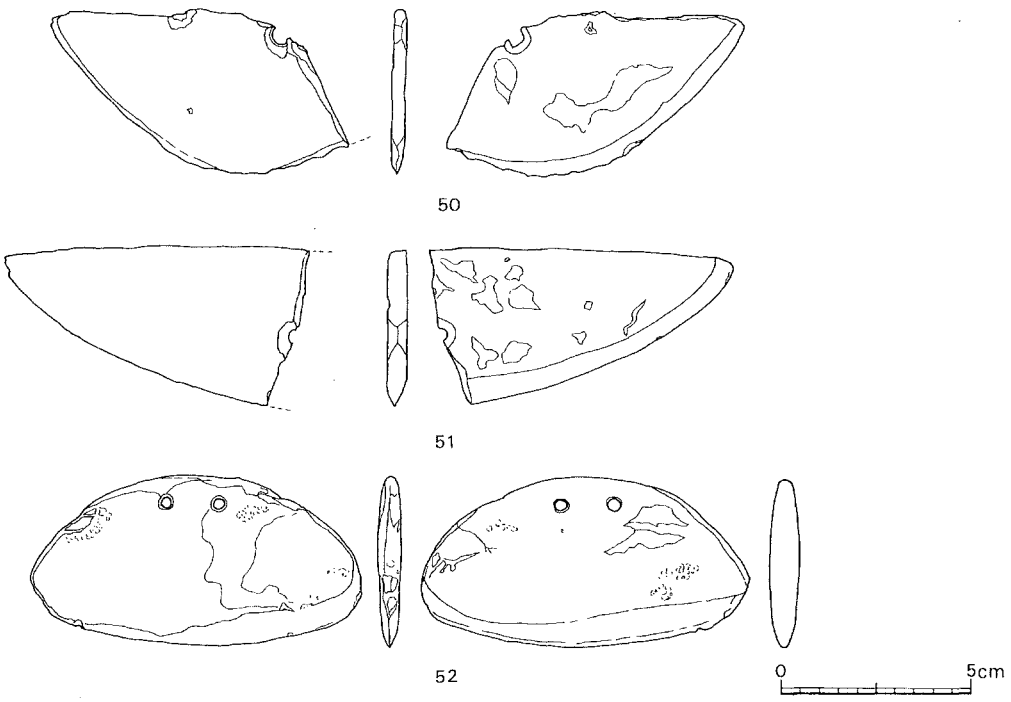
森本　晋「石鏃」『弥生文化の研究』９　雄山閣　1986
長沼　孝「磨製石剣・石戈」『弥生文化の研究』９　雄山閣　1986
下條信行「武器形石製品の性格」『平安博物館研究紀要』第７輯　古代学協会　1982

石庖丁（第36図）

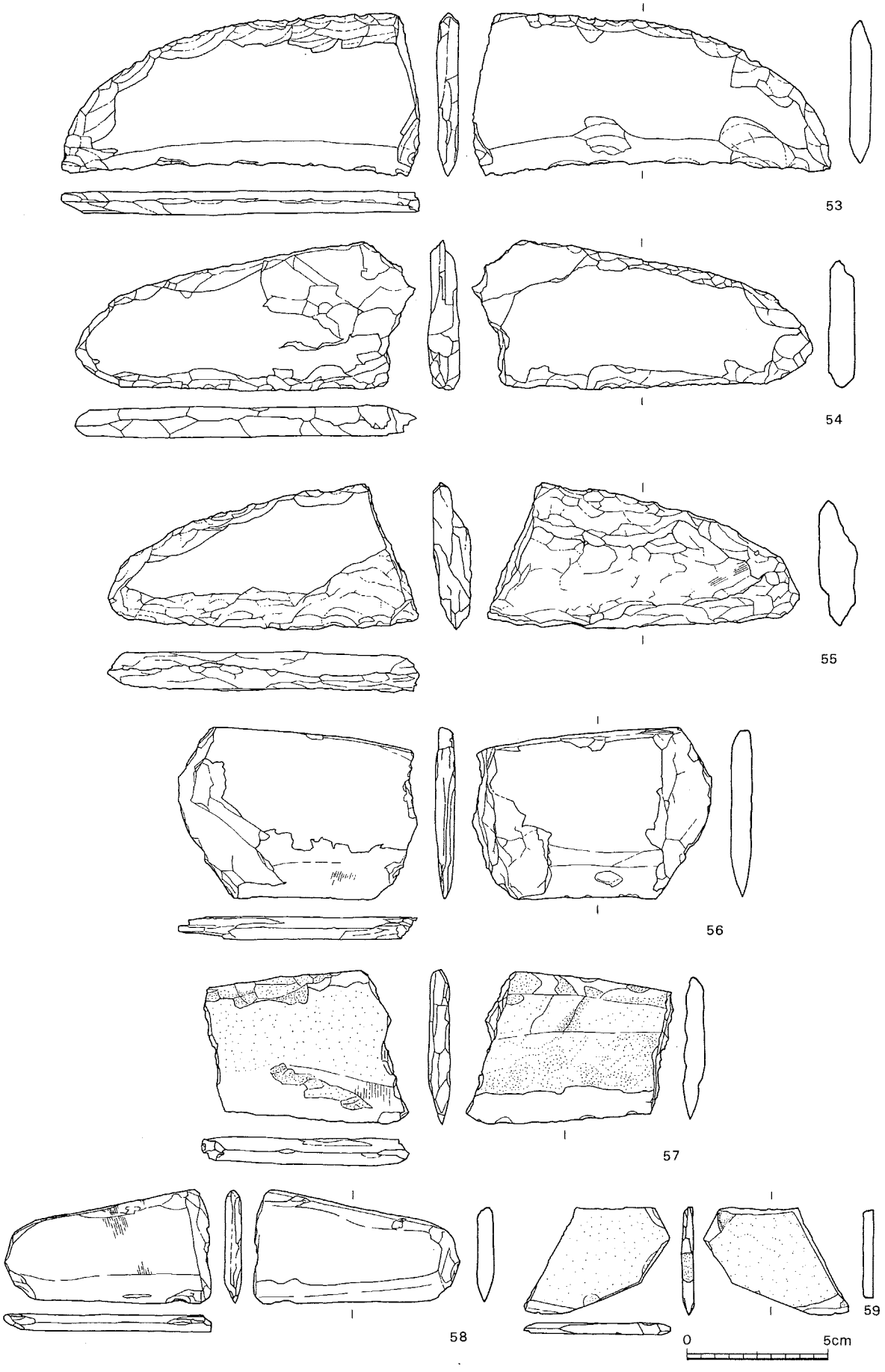
50は，背部が欠落しているが，外湾刃形石庖丁である。全体を研磨しているが，孔を穿つ敲打痕も見られる。刃部は明瞭な境が無い。現存長8.35cm，厚さ0.36cm，重さ16.3ｇを計る。材質は黒色頁岩と思われる。Q4—36区４層上面より出土した。51は，直背外湾刃横長形である。孔より1／2は欠落している。全体に研磨を施すが，凹凸も残る。刃は片刃仕上げである。現存長7.97cm，幅4.04cm，厚さ0.5cm，重さ25.4ｇを計る。材質は黒色頁岩である。T9—34区４号溝内より出土した。52は，背部，刃部ともに外湾した杏仁形石庖丁と呼ばれるものである。刃部は両面研ぎ出しで，孔は二穴である。全長8.67cm，幅4.4cm，重さ39.2ｇ，孔端3.40cm，3.73cm，孔間1.42cm，背孔0.69cmを計る。材質は頁岩と思われる。T9—10区より出土した。

石　鎌（第37，38図）

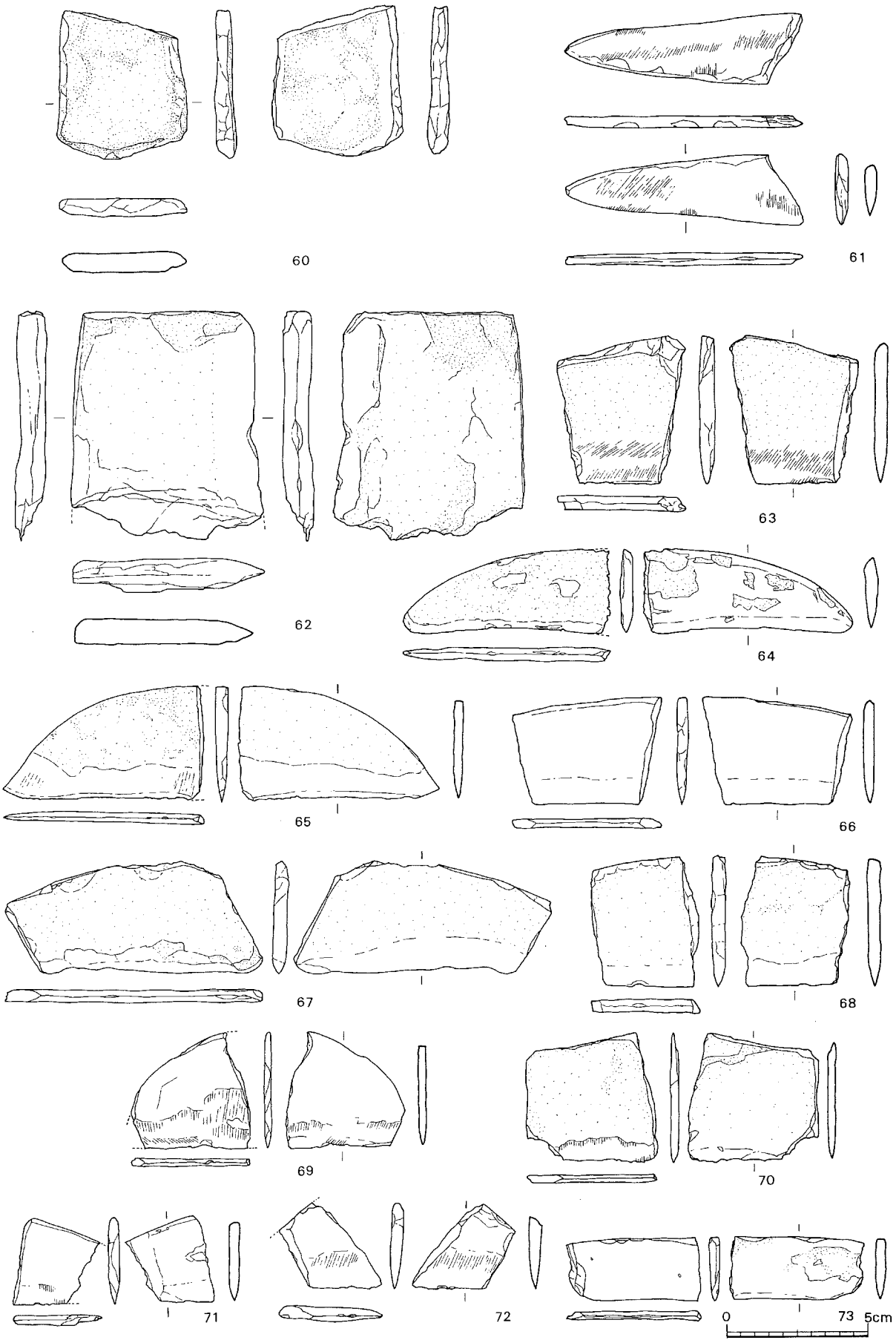
53は，板状剝片を素材とした，局部磨製の石鎌である。基部を欠くため本来の大きさはつかめない。現存長12.53cm，最大幅5.7cm，厚さ0.72cm，重さ89ｇを計る。背縁は交互剝離を施し，刃部は両面より研磨した直線両刃でやや内湾する。材質は黒色頁岩である。Q4—30区５号溝より出土した。54は，板状剝片を打裂整形した，未製品である。現存長11.83cm，幅5.17cm，厚さ0.97cm，重さ96ｇを計る。56は，先端部と基部を欠く大型の石鎌である。現存長8.48cm，幅5.97cm，厚さ0.77cm，重さ64.5ｇを計る。刃部は両面から研磨を施す。背縁も研磨し縁面をなす。身部は研磨を施すが，敲打痕を残す。材質は硬質の頁岩でる。T18—4区７号溝より出土した。57も先端部と基部を欠く石鎌である。背縁部は打裂整形後，研磨を施す。身部は敲打による調整である。刃部は両面を研磨する。現存長7.44cm，幅5.42cm，厚さ0.86cm，重さ50.5ｇを計る。R6—29区３層より出土した。58は，先端部が丸みをおび



第36図　石器実測図⑤（１／２）



第37図　石器実測図⑥（1/2）



第38図　石器実測図⑦（1/2）

た，直線刃の石鎌と思われる。現存長7.28cm，幅4.0cm，厚さ0.62cm，重さ30.8ｇを計る。身部は研磨を施すが敲打痕を残す。先端部は打裂痕が見られるものの，縁辺および刃部も研磨を施している。また欠損部に研磨痕がわずかに残るのが，本来の研磨面か２次的なものか不明である。59は，石鎌の基部と思われる。縁辺と刃部のみ研磨を施す。厚さ0.37cmである。Ｔ9―15区４層上面より出土した。60は，石鎌の基部である。縁辺を打裂調整を施し，わずかに刃部の研磨痕を見る。現存長5.13cm，幅4.6cm，厚さ0.67cm，重さ30ｇを計る。Ｔ9―27区４層上面より出土した。62は，先端部および基部を欠いた石鎌である。現存長7.93cm，幅6.36cm，厚さ1.03cm，重さ88.5ｇを計る。刃部と背縁のみ研磨を施す。64は，内湾刃の石鎌の先端部分である。全体に研磨を施す。現存長7.32cm，幅2.97cm，厚さ0.47cm，重さ13.4ｇを計る。Ｑ5―24区５号溝より出土した。65も石鎌の先端部分である。現存長7.22cm，幅4.06cm，厚さ0.37cm，重さ17ｇを計る。縁辺の調整は不明だが，板状剝片を整形し刃部のみ研磨を施す。Ｔ9―15区４層上面より出土した。67は，先端部と基部を欠く。現存長9.06cm，幅3.90cm，厚さ0.47cm，重さ29.2ｇを計る。刃部と背縁部のみの研磨と思われるが，全体に風化を受けている。Ｓ8―12区４層上面より出土した。69は，石鎌の先端部分である。板状剝片を整形し，縁辺と刃部のみ研磨を施す。現存長4.20cm，幅4.12cm，厚さ0.29cm，重さ7.6ｇを計る。Ｓ7―20区２号溝より出土した。70は，刃部のみ研磨痕を残す。厚さ0.28cmと薄く風化を受けている。長さ，幅は復原できない。Ｒ6―29区３層より出土した。71，72は，小片ではあるが，石鎌の先端部分である。71は厚さ0.31cm，重さ4.2ｇ，72は厚さ0.44cm，重さ4.9ｇでどちらも，刃部と背縁のみ研磨を施す。71はＴ9―10区３層，72はＴ9―15区４層より出土した。73は，58と同様に先端が丸みをもつタイプである。現存長4.79cm，幅2.27cm，厚さ0.34cm，重さ7.2ｇを計る。全体に研磨を施す。材質は黒色頁岩である。Ｔ9―15区３層より出土した。

参考文献

下條信行「石器の生産」『弥生文化の研究』５　雄山閣　1989
酒井龍一「磨製石庖丁」『弥生文化の研究』５　雄山閣　1989
水島稔夫「石鎌」　『弥生文化の研究』５　雄山閣　1989

紡錘車（第39図）

82は，直径4.83cm～4.75cm，厚さ0.8cm，重さ36.4ｇ，孔の径0.6cmを計る。材質は硬質の蛇紋岩系と思われる。T10—27区４層上部より出土した。83は，3／5を欠くが復原径4.5cm，最大厚0.4cm，現存重6.8ｇを計る。孔は径0.46cmで両面より穿つ。材質は黒色頁岩である。S7—28区２号溝内より出土した。84は未製品である。直径6.5cm～6.27cm，厚さ0.86cm，重さ65.5ｇを計る。中心部に錐による小さい孔が３点残る。もう片面は，中心部に小さい打痕点が無数に施され，その中に錐による孔が２点みられる。硬質の黒色頁岩製で，Q4—30区５号溝より出土した。85は，1／2を欠く大型の紡錘車である。復原径12.5cm，最大厚1.15cm，残存重140ｇを計る。孔は，復原径2.4cm～1.66cmで両面穿ちを行っている。材質は珪質頁岩と思われる。T10—20区より出土した。環状石斧の可能性もある。

石　錘（第39図）

74,75は棒状有孔石錘である。

74は，棒状をなし断面偏六角形を呈する。長さ12.57cm,最大幅2.79cm,重さ80ｇを計る。両端に直径0.05cmの孔を，直行する面に穿っている。材質は黒色頁岩でQ5—24区５号溝内より出土した。

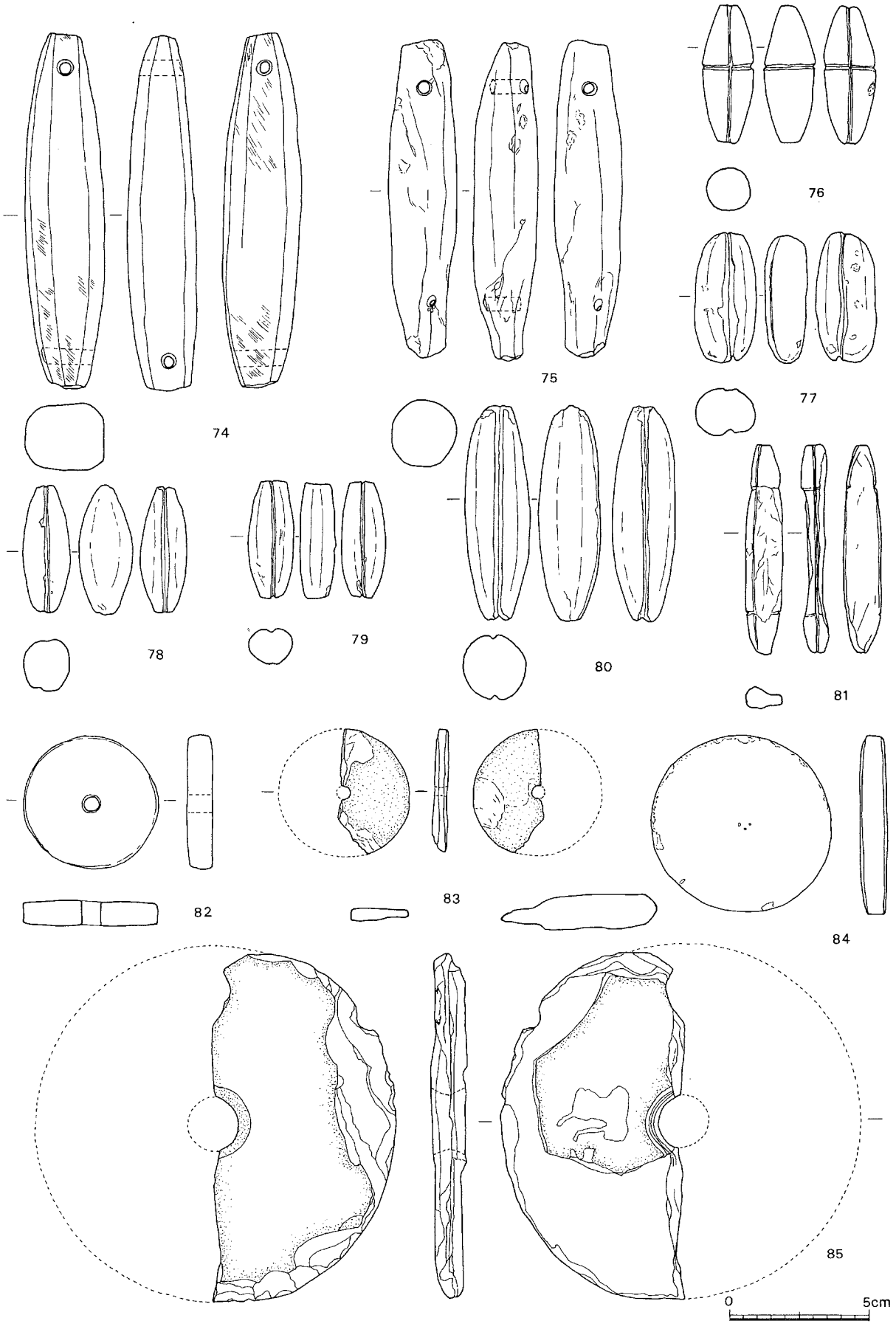
75は，断面歪な円形を呈する。両端は，両面より削りを施している。長さ11.28cm,幅2.2cm～2.4cm,重さ80ｇを計る。孔は直径0.58cmと0.44cm～0.36cmとが，ほぼ平行に穿たれている。材質は黒色頁岩で，T9—27区４層上部より出土した。

76～81は，有溝石錘である。

77は，ナマコの形態をした小石で，長軸方向に１条の溝を施している。長さ4.59cm，最大幅2.21cm，厚さ1.53cm，重さ21.4ｇを計る。材質は細粒砂岩である。R5—32区５号溝内より出土した。78は，紡錘状を呈し，長軸方向に１条の溝を施している。長さ4.52cm，最大幅1.93cm～1.7cm,重さ19.0ｇを計る。材質は黒色頁岩である。T10区１号溝排土表採品である。79も長軸方向に１条の溝を施している。長さ4.1cm，最大幅1.2cm～1.56cm，重さ10.8ｇを計る。黒色頁岩製である。80は，紡錘状を呈し，長軸方向に１条の溝を施している。長さ7.65cm，幅2.33cm，厚さ2.15cm，重さ48.8ｇを計る。T9—3区２号溝内より出土した。81は，長軸方向に１条の溝と，端部から約1.5cmの部分に横軸方向に１条の溝を２箇所に施している。長さ7.43cm，復原幅1.26cm，残存重9.0ｇを計る。長軸方向の溝の両面は剝離している。材質は黒色頁岩である。T９－３区２号溝より出土した。

その他の石製品（第40図）

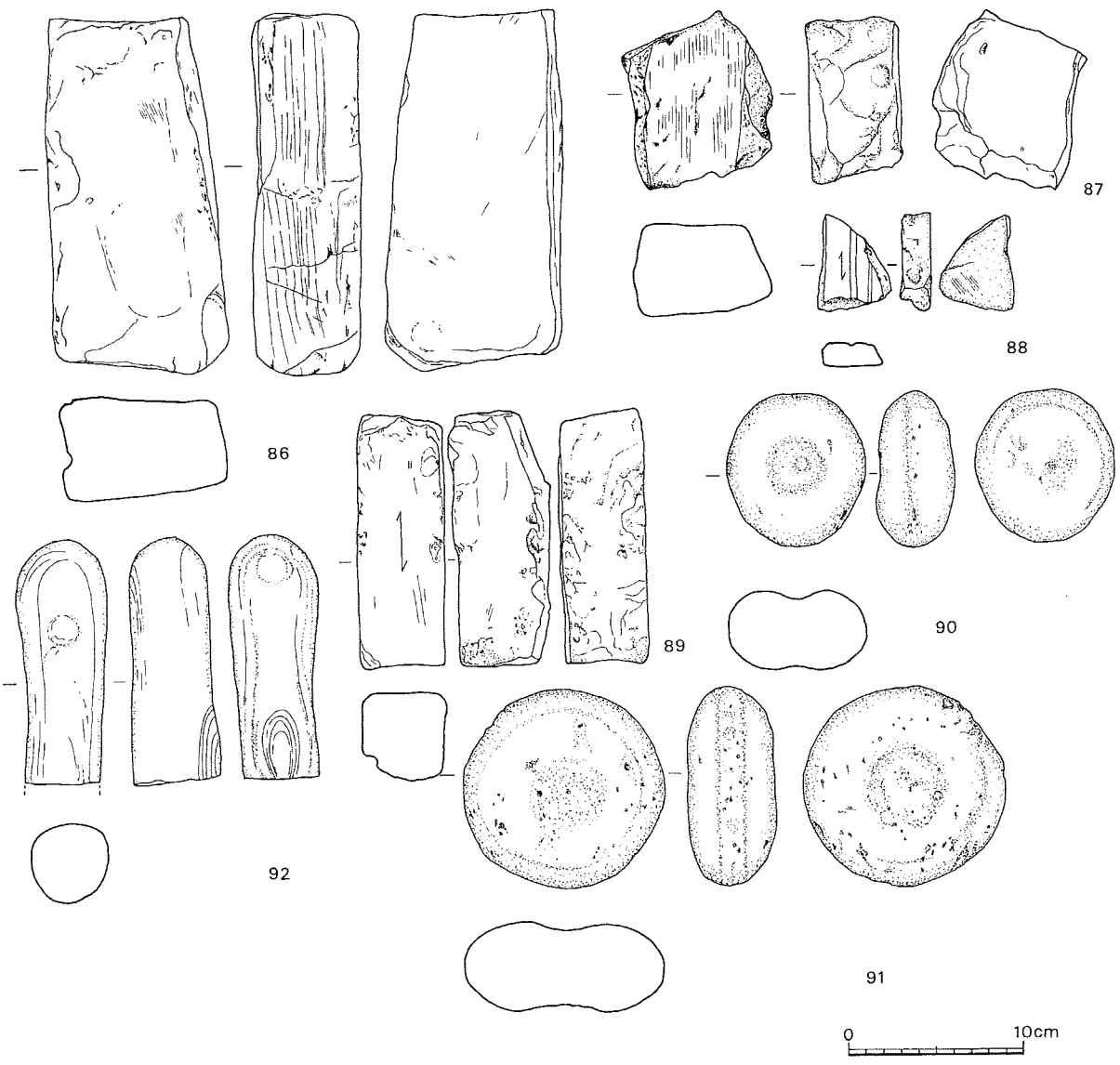
86～89は，砥石である。86は，長さ20cm，幅9.5cm，厚さ6.0cm，重さ2.26kgを計る。上下面とも使用痕を残す。材質は細粒砂岩である。R6—3区４層上面より出土した。87は，欠損品で，上面に使用痕を残す。現存長９cm，幅7.5cm，厚さ５cm，重さ0.54kgを計る。材質は中粒砂岩である。T9—21区３層より出土した。88は，小片であるが上下面に使用痕を残す。片面には錐状の物を研いだと思われる２状の溝状使用痕も残る。厚さ1.6cmを計る。材質は中粒砂岩である。89は，長さ14.3cm，幅47cm，



第39図　石器実測図⑧（1/2）

厚さ5.2cm，重さ0.74kgを計る。細粒砂岩で，上面のみ使用。S7—28区4層上面より出土した。

90，91は，凹石である。この遺跡で特に目につく石器である。ここでは紙面の関係で2点だけを紹介する。90は，径8.5～7.7cmの円礫で，厚さ3.9cm，重さ0.44kgを計る。上下中央部に径4.65cm，深さ0.38cm・径4.30cm，深さ0.56cmと殴打による窪みをもつ。T9—27区より出土した。91は，径11.0～10.7cmの円礫で，厚さ4.5cm，重さ1.04kgを計る。窪みは，径3.30cm，深さ0.66cm・径3.17cm，深さ0.23cmである。T9—27区3層より出土した。92は，スリ石と思われる。長さ14.0cm，幅5.3cm，厚さ4.2cm，重さ0.56kgで，断面楕円形を呈する。先端付近に赤色顔料が付着している。T8—19区3層より出土した。



第40図　石器実測図⑨（1/4）

(3) 青銅器類（第41図）

31本の銅鏃と貨泉，鉄剣形銅剣の出土があった。

銅　剣（第41図１）

１は，鉄剣形銅剣の一部と思われる。残存長7.4cm，幅2.48cm，厚さ0.73cm，重さ60ｇを計る。断面菱形を呈するが，刃部は刃止をしている。下方はわずかに狭まり，関部に連なるものかと思われる。Ｔ９－９区３層に現れたPitより出土した。

貨　泉（第41図２）

２は，貨泉である。外径2.30×2.29cm，厚さ0.16cm，重さ1.30ｇを計る。表面には右に『貨』，左に『泉』を配している。方孔の郭は裏面にだけあり，表面には無い。出土時に３つに割れていたが，現在保存処理をして復原を行っている。昭和26年に東亜考古学会が５号溝西側の台地を調査したおりも貨泉が出土しており，原の辻遺跡ではこれが２例目である。Ｔ10－23区１号溝内より出土した。貨泉は弥生時代の遺跡では９遺跡38枚の出土例が知られる。

銅　鏃（第41図３～33）

３～33は，有茎形の銅鏃である。

３は，腐食で芯部分が辛うじて残っている。現存長2.52cm，最大幅0.64cm，最大厚0.19cm，重さ0.7ｇを計る。Ｓ８－５区排土表採品である。

４も腐食が激しい。現存長3.04cm，最大幅0.95cm，最大厚0.30cm，重さ1.9ｇを計る。Ｔ９－3区IV層上面より出土した。

５は，鋒，茎をわずかに欠く，柳葉形有茎鏃である。逆刺は，鋳型による痕跡は見られるが研ぎだしていない。鏃身に樋に似た窪みがある。故意に作ったものか，鋳込時に偶然できたものかは不明である。長さ5.32cm，最大幅1.23cm，最大厚0.46cm，重さ5.4ｇを計る。Ｒ５－32区IV層上面５号溝より出土した。

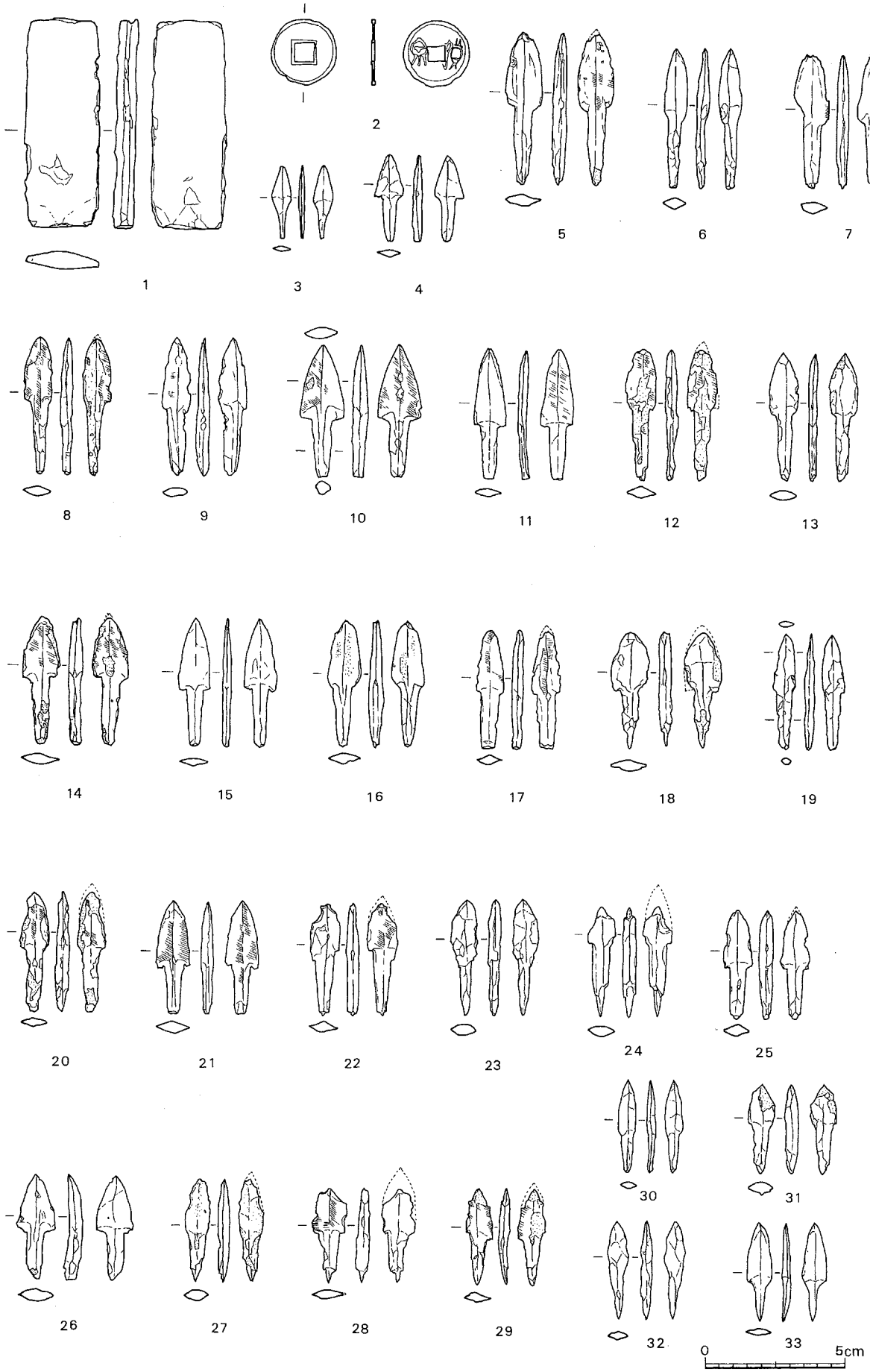
６は，腐食を受け剝離している。現存長4.91cm，最大幅0.80cm，最大厚0.39cm，重さ4.0ｇを計る。Ｔ９－10区III層より出土した。

７は，鋒，逆刺を欠いている。現存長3.04cm，最大幅0.95cm，最大厚0.30cm，重さ1.9ｇを計る。全体に風化を受け，薄い灰青色を呈する。鏑は僅かに見られる。現存長4.69cm，最大幅1.19cm，最大厚0.38cm，重さ3.5ｇを計る。Ｔ10－27区IV層上面より出土した。

８は，鏃身と茎を部分的に欠く。逆刺はあまり発達していない。全体に風化を受け，薄い灰青色を呈する。鏃身の片面は５と同様の窪みがある。現存長4.83cm，最大幅0.98cm，最大厚0.41cm，重さ3.9ｇを計る。Ｔ10－21区IV層上面より出土した。

９は，全体に腐食を受け灰白色を呈する。現存長4.19cm，最大幅0.96cm，最大厚0.38cm，重さ4.0ｇを計る。Ｓ7－13区の排土表採品である。

10は，有茎形の長三角形を呈した鏃である。鏑は明瞭である。逆刺は鋳型による痕跡は鋭いが，切



第41図　青銅器実測図（1/2）

り込まず茎と直角に研ぎ出している。長4.67cm，最大幅1.57cm，最大厚0.52cm，重さ7.9ｇを計る。Ｔ９―15区２号溝内排土表採品である。

11は，有茎形の槇葉形を呈した鏃である。鏑は明瞭で，逆刺も切れ込みは無いが残りが良い。茎が僅かに湾曲する。現存長4.61cm，最大幅1.14cm，最大厚0.32cm，重さ4.8ｇを計る。Ｔ９区排土表採品である。

12は，全体に腐食を受け鋒，逆刺，茎を欠いている。色は灰青色を呈する。現存長4.58cm，最大幅1.00cm，最大厚0.39cm，重さ3.2ｇを計る。Ｔ10―14区IV層１号溝上面より出土した。

13は，全体に腐食を受け灰黄色を呈している。現存長4.50cm，最大幅0.97cm，最大厚0.33cm，重さ3.5ｇを計る。Ｒ６―35区２号溝上面より出土した。

14は，有茎の柳葉形の鏃と思われる。鋒と鏃身片側部を欠く。鏑は明瞭である。腐食で青緑色を呈する。現存長4.45cm，最大幅1.22cm，最大厚0.44cm，重さ4.7ｇを計る。Ｔ10―2区III層より出土した。

15は，有茎の柳葉形の鏃である。全体に風化を受けているが，ほぼ原形を保っている。鏑も明瞭である。現存長4.48cm，最大幅1.13cm，最大厚0.35cm，重さ4.4ｇを計る。Ｔ９―10区III層より出土した。

16は，鋒と茎端を欠く。風化を受け灰緑色を呈する。鏃身に窪みが見られる。現存長4.46cm，最大幅1.09cm，最大厚0.53cm，重さ4.2ｇを計る。最大厚みは，断面円形の茎部分にある。Ｔ10区排土表採品である。

17は，有茎の柳葉形の鏃と思われる。ほぼ原形を保つと考えるが、鏑より片方は欠けている。鋳込時の未充塡と思われる。研磨は鏃身，逆刺部分に見られる。現存長4.81cm，最大幅0.97cm，最大厚0.40cm，重さ3.6ｇを計る。Ｒ５―31区５号溝より出土した。

18は，全体に腐食を受けている。鋒，逆刺，茎端を欠く。現存長4.05cm，最大幅1.16cm，最大厚0.49cm，重さ3.8ｇを計る。Ｔ９―32区IV層上面より出土した。

19は，腐食による剝離で原形は不明。現存長4.08cm，最大幅0.80cm，最大厚0.35cm，重さ2.3ｇを計る。Ｔ９―21区１号溝内より出土した。

20は，全体に腐食を受け周囲は欠けているが，鏃身中心部分は原形を保つ。５と同じタイプと思われる。鏃身は鏑が不明瞭で，鏑と平行に窪みがある。現存長4.16cm，最大幅0.94cm，最大厚0.42cm，重さ3.4ｇを計る。Ｔ10―９区II層より出土した。

21は，有茎の柳葉形の鏃である。風化に耐え，最近まで使用していたかと思える様な色調でよく原形を保つ。鏃身は鏑が発達し，研磨の条痕が明瞭に残る。逆刺は僅かに切れ込み，茎は四面に研磨を施し，断面楕円状を呈する。現存長3.98cm，最大幅1.18cm，最大厚0.42cm，重さ4.4ｇを計る。Ｓ8―５区１号溝内より出土した。

22は，先端部分，逆刺の一部，茎端を欠く。風化を受け灰青色を呈する。鏑は明瞭で，逆刺は僅かに切れ込む。現存長3.91cm，最大幅1.20cm，最大厚0.50cm，重さ1.9ｇを計る。Ｔ11―34区排土表採品である。

23は，全体に腐食を受け原形は不明である。現存長4.05cm，最大幅0.90cm，最大厚0.46cm，重さ3.5ｇを計る。Ｔ10―３III層より出土した。

24は，鏃身１／２と茎端を欠く。現存長3.86cm，最大幅0.95cm，最大厚0.42cm，重さ2.2ｇを計る。T11—28区IV層上面より出土した。

25は，全体に腐食を受けにぶい褐色を呈する。鏑は高く，逆刺は僅かに切れ込む。21，22タイプと思われるが，原形は不明である。現存長3.85cm，最大幅0.95cm，最大厚0.45cm，重さ3.9ｇを計る。T９—32区排土表採品である。

26は，有茎形の長三角形を呈した鏃と思われる。全体に腐食を受け，緩く湾曲している。鉛を思わせるにぶい灰黒色を呈する。現存長3.61cm，最大幅1.28cm，最大厚0.47cm，重さ4.9ｇを計る。S7—７区III層より出土した。

27は，全体に風化を受け，原形は不明である。うすい褐色を呈する。現存長3.60cm，最大幅0.82cm，最大厚0.39cm，重さ2.5ｇを計る。U13—22区９号溝上面より出土した。

28は，腐食を受け，鋒部分，茎を欠く。灰青色を呈する。22と同タイプで逆刺が僅かに切れ込む。現存長3.27cm，最大幅1.16cm，最大厚0.46cm，重さ1.5ｇを計る。T11—22区１号溝より出土した。

29は，腐食を受け原形は不明である。逆刺部分が茎と直角に研ぎ出されたタイプである。現存長3.34cm，最大幅0.92cm，最大厚0.33cm，重さ1.5ｇを計る。T10—9区II層より出土した。

30も，全体に腐食を受け，剝離をおこし芯部だけのもので原形は不明である。現存長3.39cm，最大幅0.68cm，最大厚0.31cm，重さ1.5ｇを計る。Ｔ８—２区III層より出土した。

31も，全体に腐食を受け原形は不明である。現存長3.09cm，最大幅0.84cm，最大厚0.43cm，重さ2.5ｇを計る。Ｔ８—２区３号溝より出土した。

32も，全体に腐食を受け原形は不明である。現存長3.19cm，最大幅0.61cm，最大厚0.30cm，重さ1.9ｇを計る。Ｔ３—31区２号溝排土表採品である。

33も，全体に腐食を受け原形は不明である。現存長3.36cm，最大幅0.88cm，最大厚0.22cm，重さ1.6ｇを計る。Ｔ８—25区２号溝上面より出土した。

以上，31点の銅鏃について述べたが出土箇所が溝の内，或いはその周囲もしくは排土内採集であり時代を特定できないのが残念である。形態的にもそのほとんどが風化，腐食を受けているため本来の形が摑めない。原形を保っていると思われる数点よりパターン分けすると５，７，８，14，20が逆刺部が茎と直角に研磨され，茎は断面円形に近い形を呈するグループである。15，21，11，12，22，25，28は，逆刺部が若干切れ込むように研ぎ出し，茎は断面楕円若しくは方形状を呈するグループである。10，26は長三角形を呈した鏃で逆刺は切り込まず茎と直角に仕上げている。このタイプはほかには見られず，２点だけである。

前者は福岡県御床松原出土例に見られるタイプで後者２例は大阪府巨摩・瓜生堂，大阪府瓜破出土例に近いタイプと思われる。

参考文献

田中勝弘「銅鏃」『弥生文化の研究』９　雄山閣　1986

(4) 鉄器（第42・43図）

鉄　斧（1～4）

1・2は袋状基部を持つ鋳造鉄斧である。1は2号溝（S 8—5区）出土で，基部に2条の突帯を持ち，刃部は両側に拡張されている。基部断面は錆化のため不整形であるが，本来長六角形を呈していたものと思われる。長さ9.3cm，基部幅8.4cm，刃部幅9.5cm，基部厚さ3.4cmを測る。2は1号溝（T 10—14区）出土である。基部に段を持つが錆化のため明瞭ではない。基部の断面は長方形で，基部より刃部が僅かに広い。長さ8.4cm，基部幅7.7cm，刃部幅7.9cm，基部厚さ3.1cmを測る。3は1号溝（T 11—16区）出土である。厚さ6～2㎜程の鉄板であるが，表面上端に沈線状の溝が認められ，1・2同様袋状基部を持つ鋳造鉄斧であると思われる。X線観察では側面が僅かに残るが，錆化のため不明瞭である。4は1号溝（T11—34区）出土で，袋状基部を持つ鍛造鉄斧である。袋部は密着せず現状で1cm程の間隔がある。現存長8.4cm，基部幅3.55cm，刃部幅3.95cm，基部厚さ2.0cmを測る。

鉇（5～7）

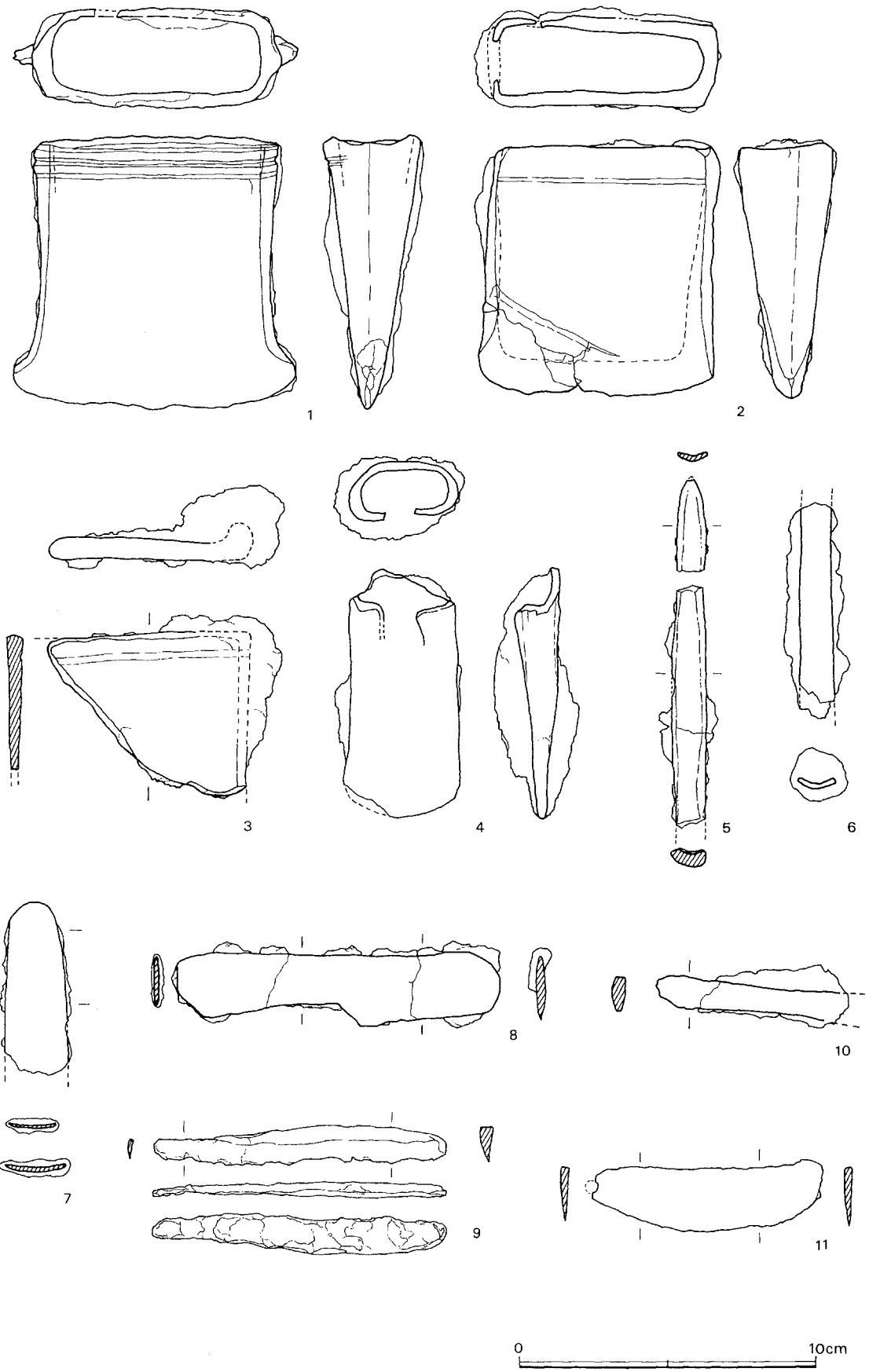
5は1号溝（T11—34区）出土で，3片に割れ身部と刃部先端は接続しないが同一個体であると思われる。断面は三日月形を呈し，刃部表面の鎬は認められない。先端部長さ3.1cm，身部現存長8.2cm，最大幅1.2cm，刃部の厚さ1㎜を測る。6は1号溝（T11—28区）出土で，断面より鉇と判断したが，錆化が著しく細部は不明である。現存長6.7cm，最大幅1.15cm，厚さ2㎜を測る。7は5号溝（R 5—31区）出土である。断面がやや湾曲しており，鉇と考えられる。先端部は丸くおさめる。5・6に比べると幅が広く，重量感がある。

刀　子（8～11）

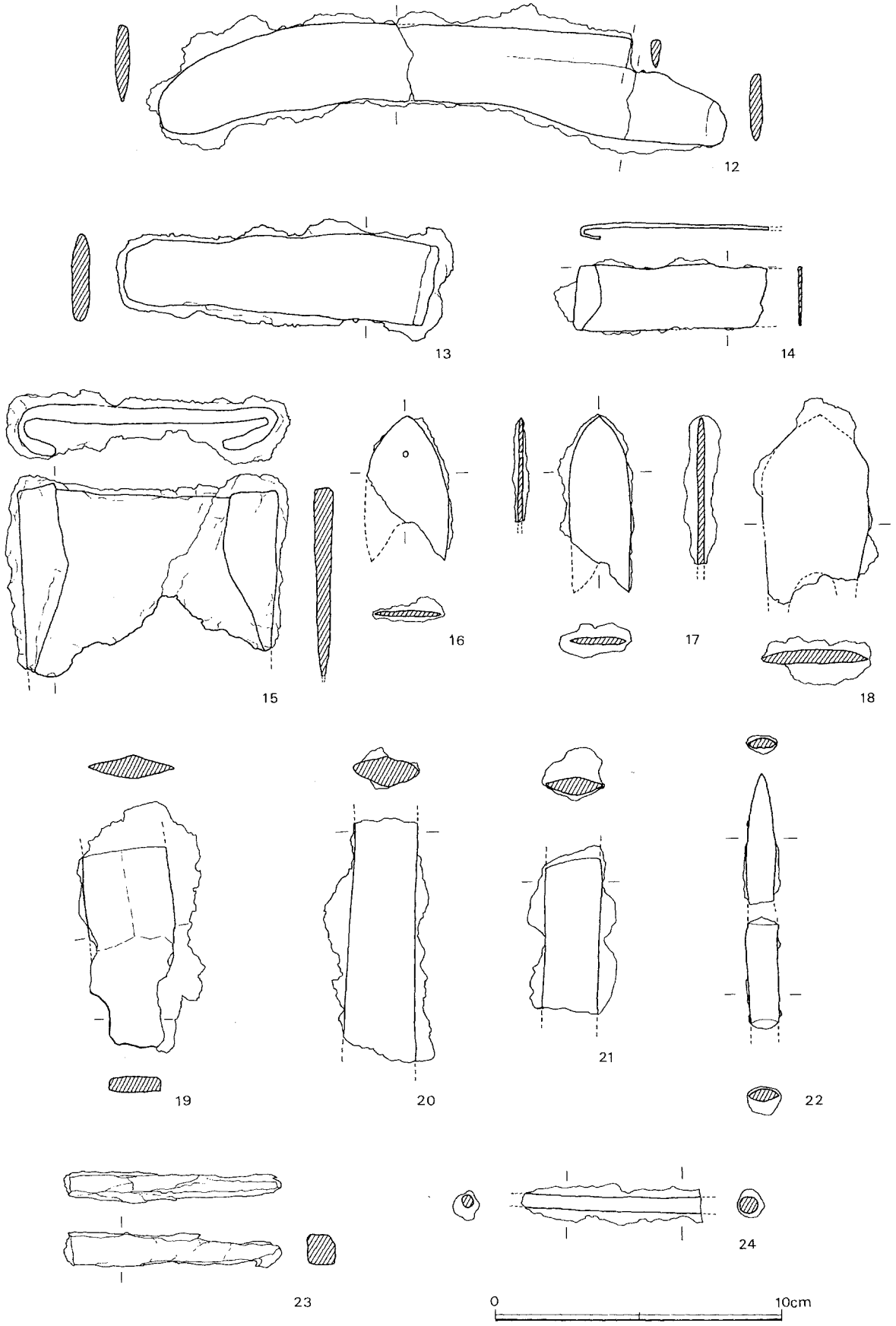
8は1号溝（T11—34区）の排土中より採集した。3片に割れるが，完形品である。茎を持つ刀子で片関をつくる。長さ10.9cm，刃部断面幅2.2cm，茎部断面幅1.7cm，厚さは刃部・茎部ともに2㎜前後である。9は明瞭な背を持つ刀子である。表面は僅かに稜が認められ，裏面は僅かに内湾する。長さ9.85cm，最大幅1.2cm，背部の厚さは最大で5㎜を測る。II区排土採集品である。10は1号溝（T11—16区）出土である。形状から刀子であると思われるが，全体に錆化が著しく細部は不明である。現存長6.0cm，幅1.1cm，厚さは最大4.5㎜を測るが，刀身内部も腐食し膨張しており，本来の厚さではない。11は4号溝（T10—4区）出土である。茎端部は一部欠損するが，半欠の目釘穴が認められる。刃部はやや湾曲している。現存長7.7cm，最大幅2.1cm，厚さは背部最大で3㎜を測る。

鎌（12～14）

12は2号溝（T8—25区）出土である。3片に割れるが完形の鉄鎌である。刃部は湾曲し，先端は丸くおさめる。身の断面は楔形である。基端部は僅かに折り返しがあるようだが，錆化のため明確ではない。背の一部には鎌本体とは別の金属片が付着している。長さ19.7cm，刃部幅2.65cm，厚さ5㎜，



第42図　鉄器実測図①（1/2）



第43図　鉄器実測図②（1/2）

基部幅2.3cm，厚さ4㎜を測る。13はⅠ区の排土採集品である。直刃の鎌で，基部は僅かに段を持つ。長さ11.0cm，断面幅3.05cm，厚さ6.5㎜を測る。14は2号溝（S 8—12区）出土である。刃部は直線的で，端部は1cm程折り返す。身は非常に薄く1㎜前後であり，手鎌と思われる。現存長6.65cm，断面幅2.05cmを測る。

鋤　先（15）

2号溝（S 8—18区）出土である。2片に割れ刃先部を欠損する。刃部は基部に比べ若干狭くなる。現存長6.7cm，基部幅9.0cm，厚さ6～2㎜を測る。

鏃（16～18）

16は1号溝（T11—34区）排土からの採集品である。無茎で基部は台形状に抉る。中央やや先端部よりに2㎜程の穿孔が認められる。長さ5.1cm，最大幅2.85cm，厚さ1.5㎜を測る。17は1号溝（T11—22区）出土である。無茎で基部は台形状に抉る。16に比べると細身で長い。長さ6.2cm，最大幅2.1cm，厚さ2.0㎜を測る。18は5号溝（Q 5—12区）出土で，分厚く大きめの無茎鏃である。基部は逆U字形に抉る。肩が張り基部はやや窄まる。長さ6.6cm，最大幅3.7cm，厚さ4㎜を測る。

剣（19～21）

19は5号溝東側の3号土壙（R 5—26区）から出土した。剣の基部で，長さ2.0cm，幅1.8cm，厚さ5.5cmの茎を持つ。刀身の断面は菱形，茎部の断面は長方形である。身の両面には明確な鎬が認められる。現存長7.0cm，身の幅3.0cm，厚さ8㎜を測る。20・21はいずれも1号溝（T11—28区）出土で，鋒と基部を欠損する鉄剣片である。断面は菱形で両面に鎬を持つようであるが，錆化のため細部は不明である。

その他の鉄器（22～24）

22は1号溝（T11—34区）出土である。断面は現状でレンズ状に見えるが，内部腐食のため膨張した可能性もあり，鉈であると考えられる。先端部は鋭く尖る。先端部片の長さは4.55cm，身部片の長さは3.9cm，最大幅1.2cmを測る。23はT10—9区Ⅱ層から出土した。方柱状を呈し，先端部には逆刺を持つ。現存長7.55cm，断面幅1.0cm，厚さ1.1cmを測る。魚撈具の一種であろうか。24はT10—14区の排土から採集した。円柱の棒状を呈す。両端径は3㎜程の差がある。現存長6.3cm，径4.5～7.0㎜を測る。用途は不明である。

(5) 木　器

①　大溝状遺構内出土（第44～48図，第54図）

1は，楯の左肩部分の一部と推定され，器の大部分を欠損している。器は，現長10.5cm，幅7.4cm，厚さ1.1～0.8cmで若干内湾している。器の表面に赤いベンガラの顔料が塗られ，4列に渡り穿孔があり，その部分は線状に圧痕が顕著である。穿孔は，24箇所で，器の材質は杉である。

2は，弓矢の矢柄の根挟み部分である。器は，長さ4.9cm，径0.85～1.5cm（内，身の長さ4.1cm）で，先端部は鏃の装着の為か切り込みが見られる。また，他方は凸状になるように長さが0.8cm,径0.5cm程で丸くなるように作出されている。先端部には，幅約1cmに桜の表皮が巻いてある。根挟み部分と矢柄を組み合わせて使用するものと考えられる。この資料は，「魏志倭人伝」に記載の竹製弓矢の矢柄を想定出来る貴重な遺物と考えられる。

3は，木鏃である。器長は，5.5cmで先端部に径0.9cmの最大幅をもち，基部は尖るように作出されている。

4は，器長22.5cmのスプーン状木器である。身の部分は，長径11cm，短径5.5cmで上面部分は平坦，裏面は半円状を呈し，厚さは2.7cmである。把の柄の部分は最大4.8cm，最小3.5cm厚さ1～1.6cmでバチ状を呈す。

5は，器長20cm,基部径11.8cmの円錐状を呈し，内面も円錐状に粗い調整加工で抉られ，先端部分は径4.7cm,幅3.2cmで丸く加工され，その上端部分は粗い整形のままで，くの字状に傾斜をもつ不明木器である。

6は，机の脚部と推測される。現長23cm，幅5cm～6.2cm,厚み3.3cm程の断面が楕円形状を呈す。器の上端部には,長さ2.7cm，幅1.8cm，高さ0.6cmの凸状の作り出しがあり，はめ込み式になっている。

7は，把手付き容器で，器の約半分を欠損している。容器は，楕円形状をなし,器高が9cmで深さ約5cmである。調整加工は入念で，鋭利な刃物で作り出されている。

8，9は，漆器で脚付き容器の脚部である。いずれも赤と黒色の顔料を使用している。

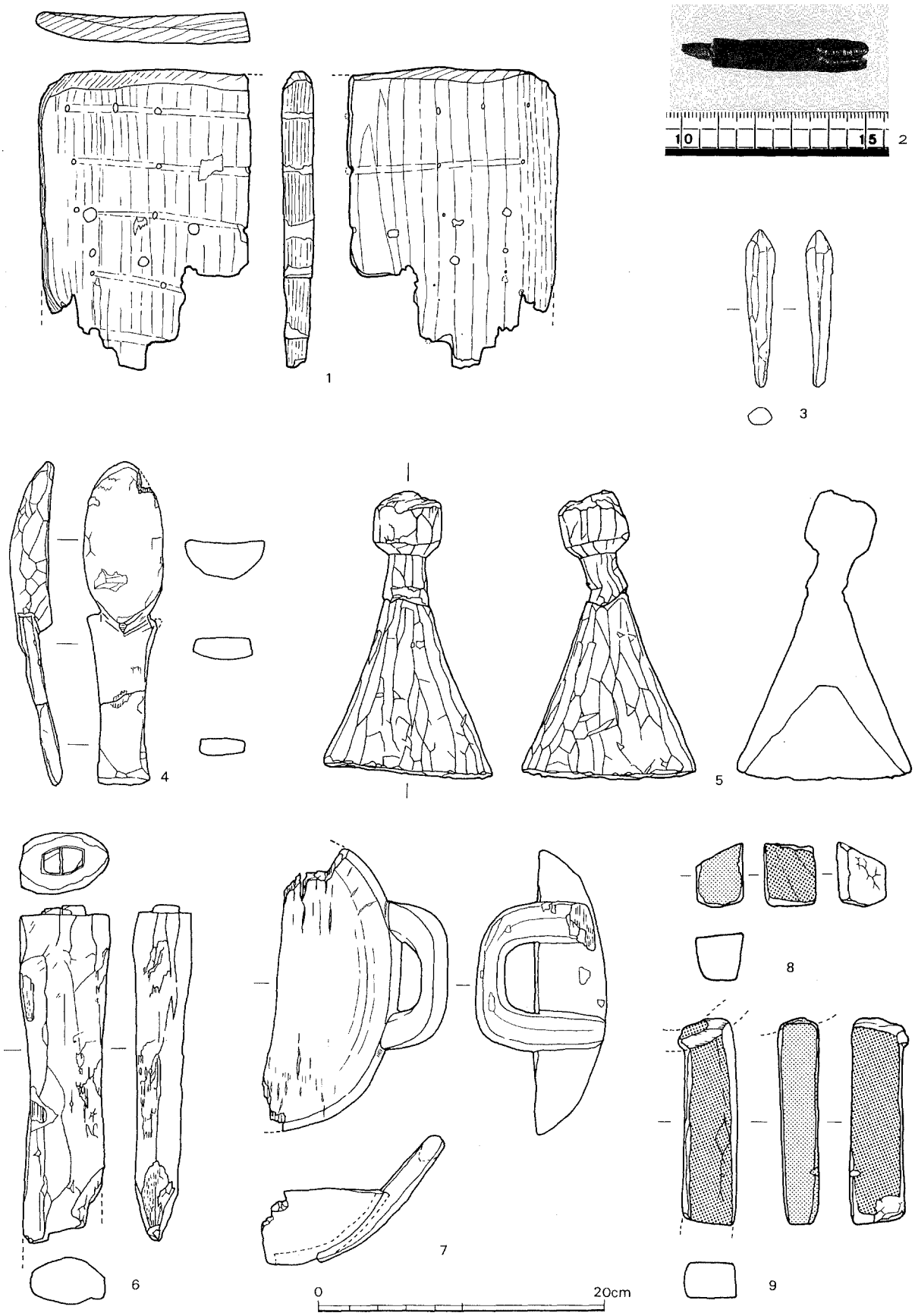
10，11は，機織り具の経巻具である。10は，器長63cm,幅7.8cmで両端に長さ7.5～9.5cmの把がある。また，把を除き器は長方形状を呈し，上端は平坦，下端は刃器状に両側から作出され，長径は44cmである。同幅の布幅のものが織れることが推測される。11は,体部の一部を欠損する。丸太の芯を利用し，端部は幅1cm程を残し丸く，他は抉りでもって加工を施し調整されている。

12は，木偶の未製品である。全長34cm，厚さ2cmで柄鏡状を呈し，裏面は粗い加工であるが他は入念な加工を施している。

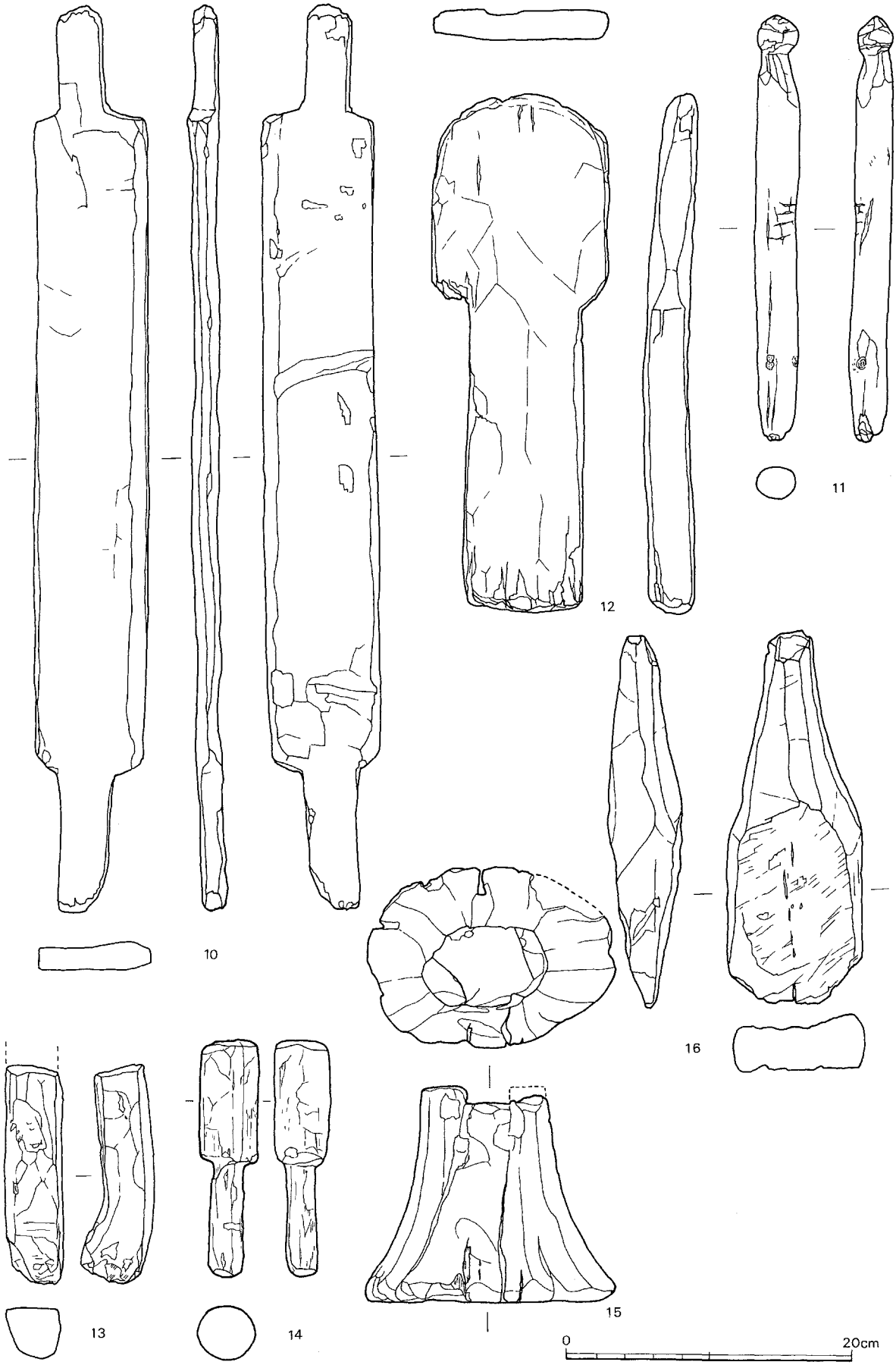
13は，不明木器の柄の一部分で，4面共に調整痕が著しい。

14は，横打である。器長16.5cmで円形棒状を呈し，長さ8cm,径4cmと長さ8cm，径2.3cmの部分に区画された小型のもの。全体の半面が焼けている。

15は，台座の性格をもつ台状木器で，一部欠損している。法量は，上端部の径8.5cm，下端部の径17.5cm，器高15cmで，上端部に斜めに幅3cm，深さ1cmの凹状の切り込みがある。



第44図　木器実測図①（大溝出土 1 / 4 ）



第45図　木器実測図②（大溝出土 1 / 4 ）

16は，しやもじの未製品である。法量は，器長26cm，最大幅9cm，最小幅3.5cmである。

17は，諸手鍬の未製品である。法量は，器長47.5cm,最大幅16.7cm，最小幅15cm，厚さ約2cm中央部分が若干狭く，円弧状に内反している。

18，19は，不明木器である。18は，建築材の一部と考えられ，現長52cm，幅８cm，厚さ約3.5cmで，一端に把手状の段と抉りが作出されている。19は，現長150cm，径９cmの丸太棒の一端に抉りを施したもの。

20，21は，扁平な板材である。21は，厚さ４cm程と部厚く，一端部分に切断痕が顕著である。

22～31は，手斧の柄で，30と31を除き未製品である。手斧は，扁平片刃石斧，鉄斧，方柱状片刃石斧の曲柄と蛤刃石斧の直柄の２つに分類され，曲柄は手斧の機能により細分されるようだ。

31は，方柱状片刃石斧を手斧の側面に装着したと推察される手斧の柄である。入念に加工が施され頭部は一側面が柄と一直線になるように作出され,頭部先端は紐で固定可能なように幅5cmの浅い溝が掘られている。法量は，器長58cmである。

23，25は，上面及び一側面に溝を穿き，方柱状片刃石斧等を装着する手斧の柄の未製品である。

27は，扁平片刃石斧，板状鉄斧の装着，26は袋状鉄斧の装着が考えられる。特に，鉄斧の装着が推察される形態としては，原の辻遺跡からは初めてである。

22，28は，手斧の柄の未製品である。中でも，22は他の手斧の形態と相違を示し，斧柄の頭部の部分が柄の部分から曲線的に作出されているのが特徴である。

30は，石斧装置部分を一部欠損しているが，大形の斧の柄部分である。柄の頭部がふくらみ，装着孔の前の段は片側のみに作出されている。法量は，器長78cmである。

55～57は，杭材である。

②　１号溝状遺構内出土（第49図）

32は，杓子である。身の部分は，径14.6cm，深さ５cmの半円錘状を呈し，身と柄が直角に近く，柄が長く，器高は約38cmである。

33は，不明木器で，扁平な板材にコ字形の切り込みが施されている。

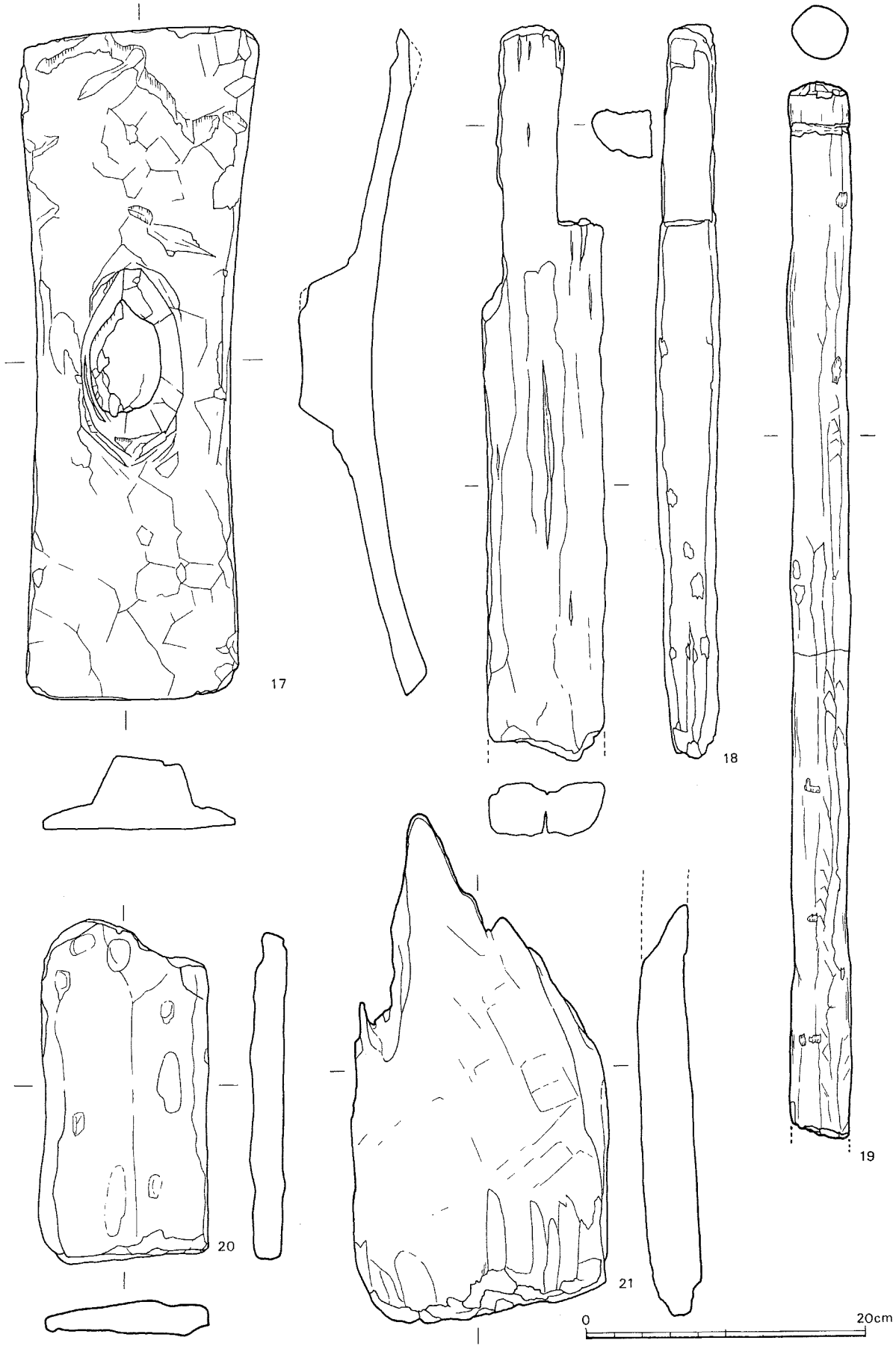
35は，身の半分を欠損しているが台脚付容器である。脚部分に５箇所の透かしが穿かれている。身の部分は，楕円形状を呈すようである。また，器高は８cmと低い。

36は，丸太材を利用し，両端を尖るように円弧状に削り，上面に径５cm，深さ2.5cm長方形の穴が穿かれたもので，性格は不明である。器全体は焼け，器長49.5cm，径９cmである。

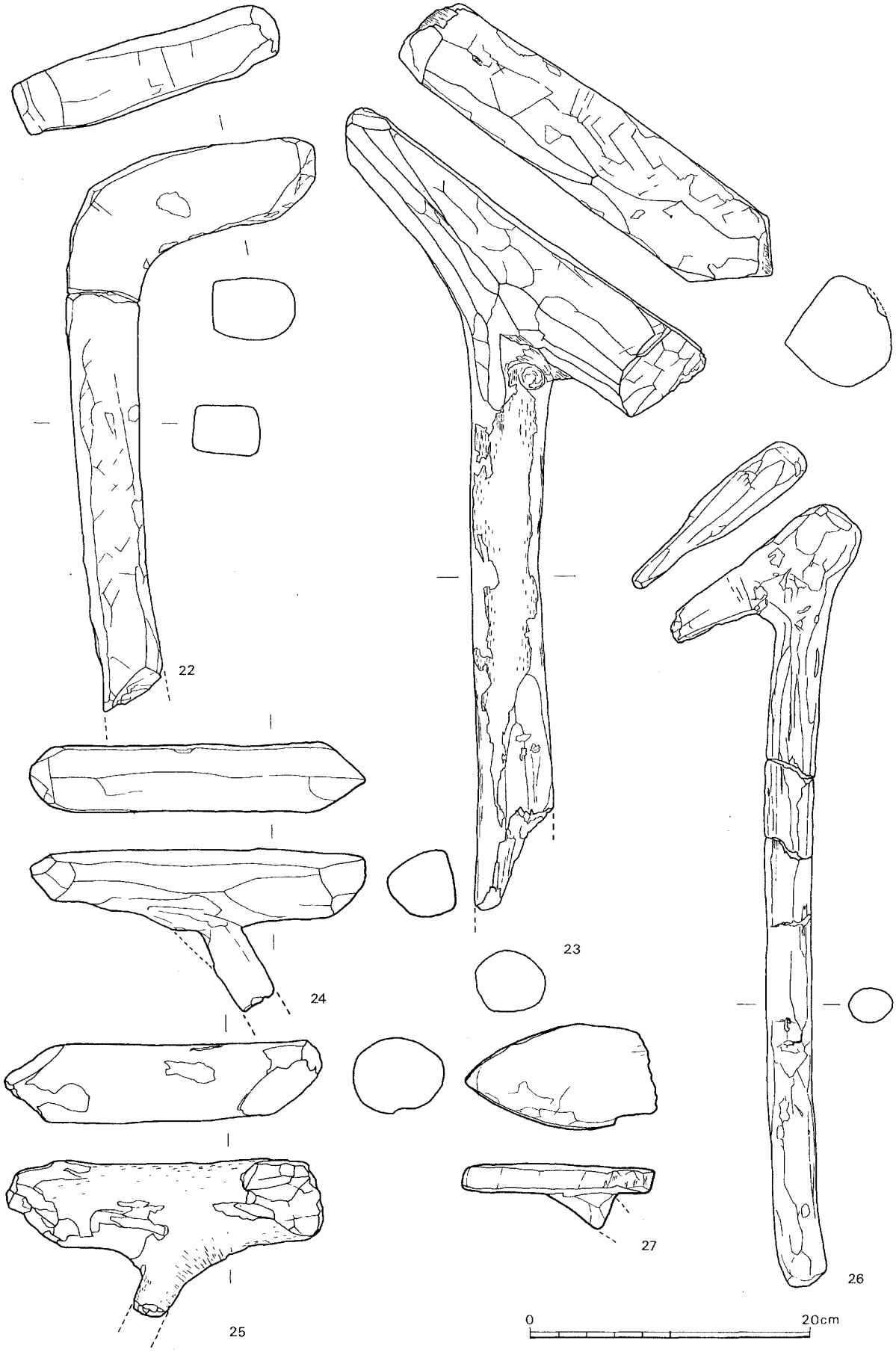
③　２号溝状遺構内出土（第49・50・53・54図）

34は，えぶりである。一部を欠損するが円弧状で，鋸歯状の刃縁を呈す。柄孔は，径3.5×2.5cmの長方形に穿かれている。規格は，現長幅34.5cm，高さ12cmで身の一部分を欠損している。

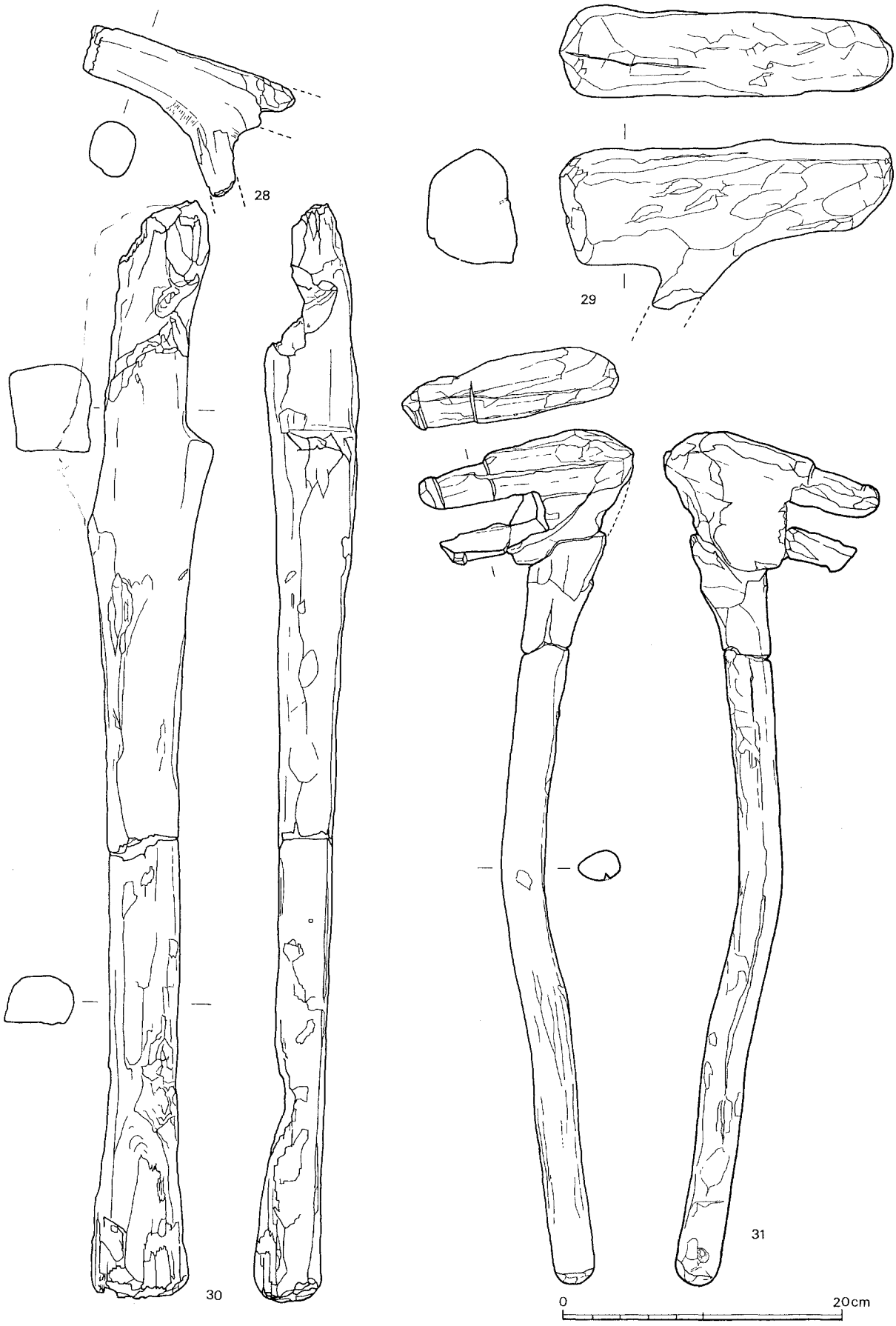
37は，手斧の曲柄の未製品である。柄は，大形で器長81.5cmで，粗削りの段階のもので，柄に木の皮が付着している。石斧装着溝が上面あるいは側面に施されるものと推察される。54，58は，杭材である。54の杭先端部は，右から３面加工で作出され，現長26cm，径12.5cmである。58は，３面加工で



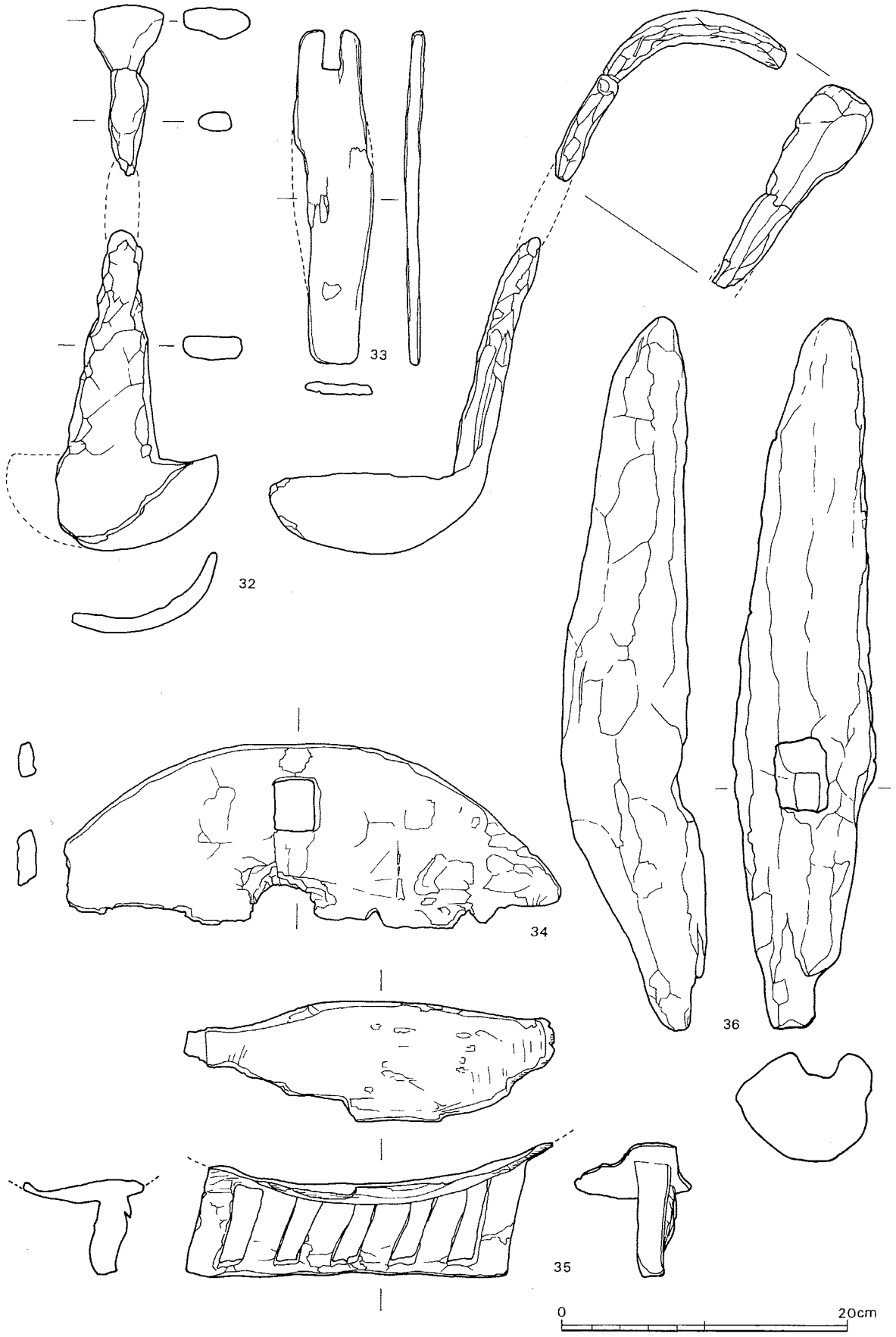
第46図　木器実測図③（大溝出土 1 / 4 ）



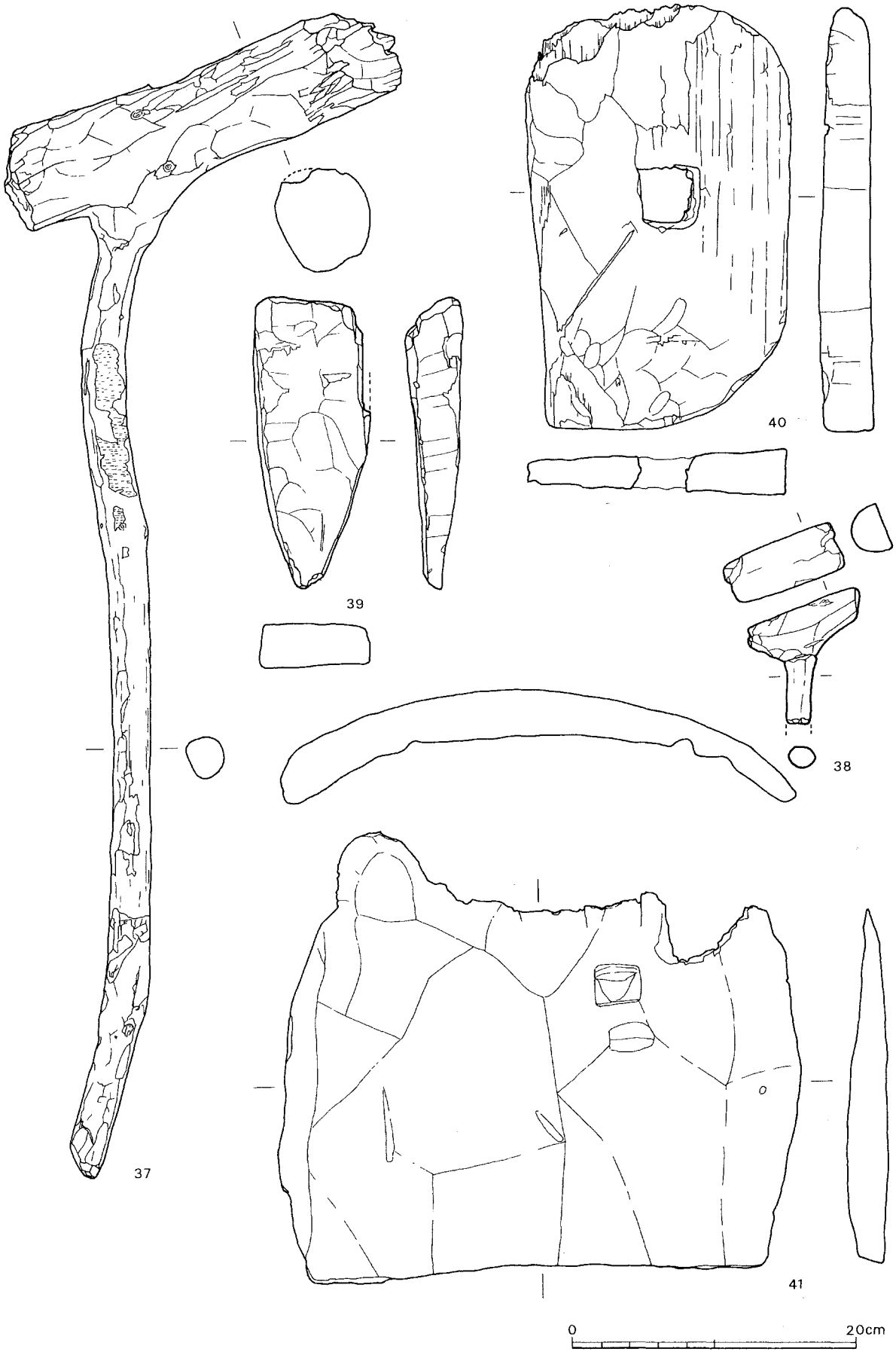
第47図　木器実測図④（大溝出土 1 / 4 ）



第48図　木器実測図⑤（大溝出土 1 / 4 ）



第49図　木器実測図⑥（1号・2号溝出土 1/4）



第50図　木器実測図⑦（２号・５号溝出土１/４）

作出され，現長138cm，径８cmである。

④　**４号溝状遺構内出土**（第51図）

42は，身の一部分を欠損するがほぼ完形に近く，柄の部分は身から鈍角に上方に延びて，短い。法量は，器長32cm，身の径17cm，身の深さ現長５cm，柄の長さ13cm程である。

⑤　**５号溝状遺構内出土**（第50・51・53図）

38は，手斧の曲柄の未製品である。石斧装着面と考えられる上面部分が平坦に加工されており，扁平片刃石斧か鉄斧の柄と推測される。

39は，部厚く扁平な杭材である。４面とも入念に加工を施している。

40は，ねずみ返しで，器長28cm，幅18cm，厚さ３～3.5cmで，身の中央部に径3.5cmの方形状の穿孔がある。

41は，一本木造りの短甲の未製品である。法量は，幅36.5cm，高さ31.5cmで，厚みは肩部から胴部にかけて肥厚する（１～３cm）。また，胴部は円弧状に外反し，一部加工痕が器面及び胴下底面に観察される。43は，杓子の未製品である。法量は，器長46cm，器高28.5cmで，身の径は15cm，厚さ6.5cm，柄の長さ33cm，柄の幅は３～4.5cmである。器は，身と柄が鋭角で長く，外反する形を呈すと推察される。44は，用途不明木器である。丸太材を利用し，柄と考えられる部分は断面長方形状に面を揃え，先端部は尖るように加工されているが未完成である。柄の部分は焼け，一部欠損している。45は，用途不明木器である。厚みが1cmの扁平の板材に２箇所の穿孔を施したもので，一部分欠損している。法量は，現長23.5cm，幅2.7～7.5cm，穴の径0.5cmである。52は，加工痕ある板材である。器の両端は切断加工し，材の内側は加工痕跡が著しい。法量は，器長32cm，幅18cm，厚み3.4～3.8cmである。53は，径17cm程の丸太材を利用した杭材で，断面が長方形状になるように作出されている。

⑥　**11号溝状遺構内出土**（第52・54図）

47は，玉杓子の柄の部分と推察される。器は，身と直角に延びる長い柄をもつものである。

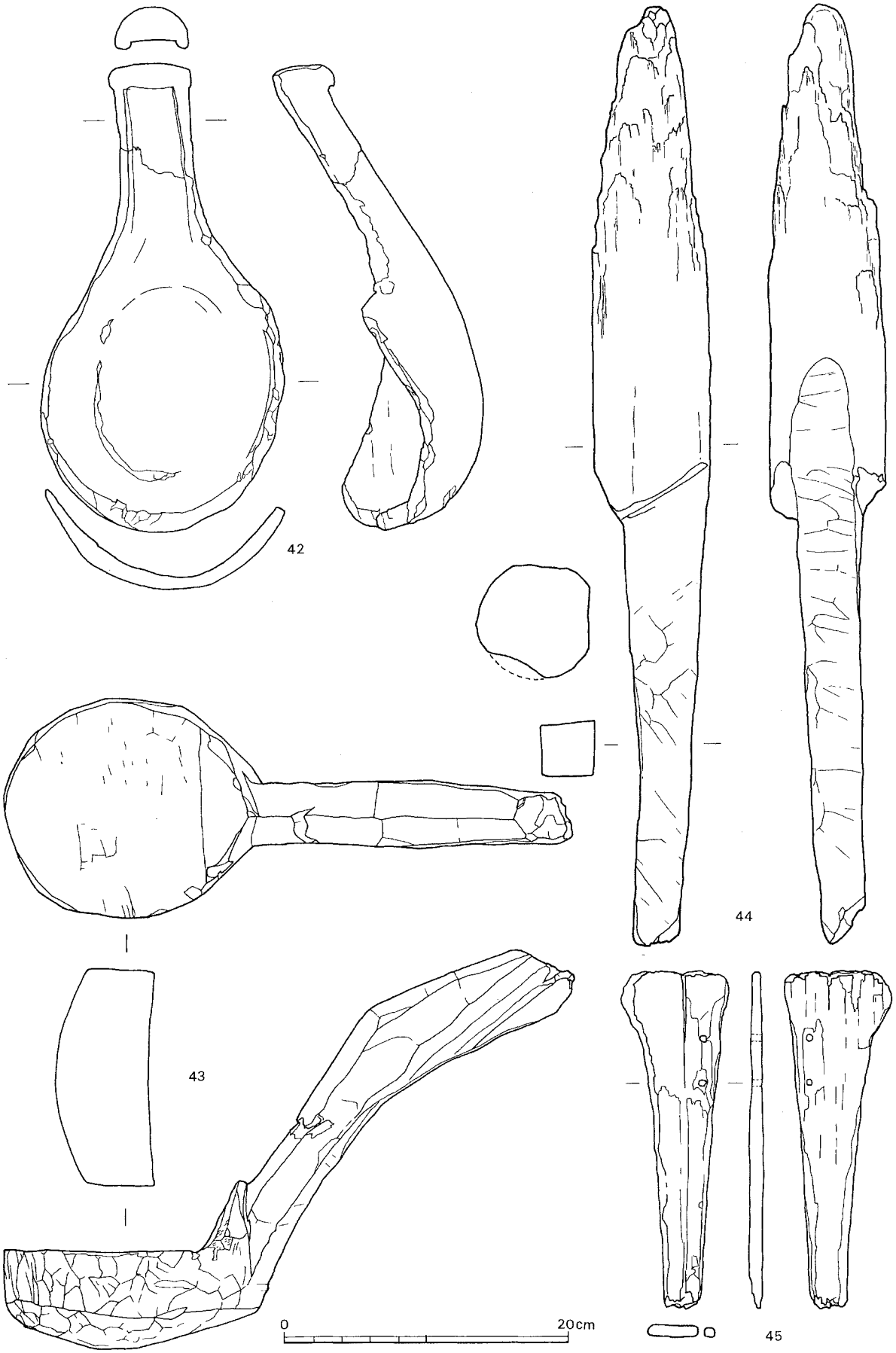
59～63は，大形の杭材である。

⑦　**12号溝状遺構内出土**（第52・53図）

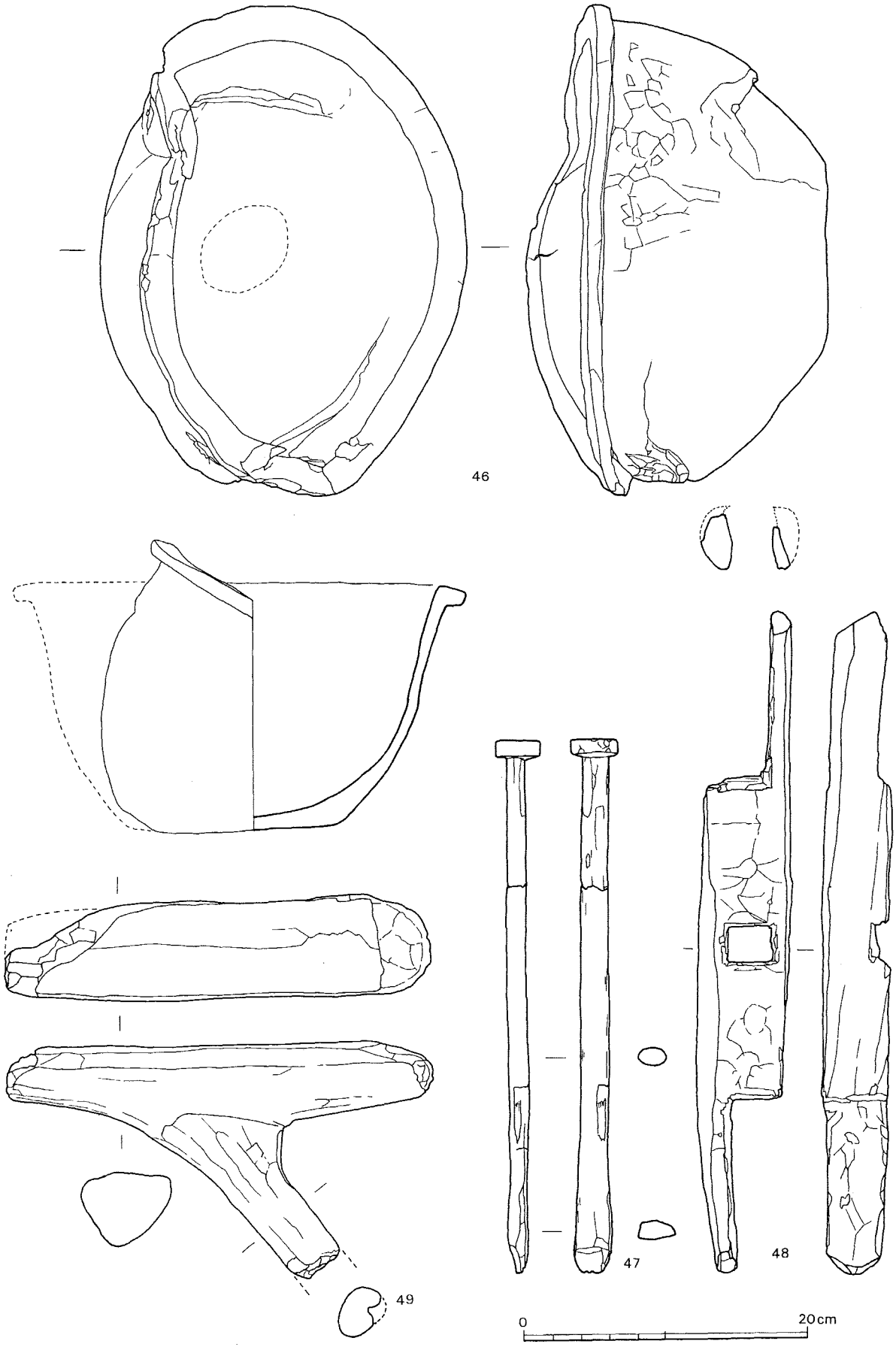
46は，大形の深鉢である。器の口縁部は幅２cm，厚さ１cmの平縁で若干外反する。法量は，口縁部の径約32cm，深さ17.5cm，底の径12.5cm，器壁１cmである。

48は，用途不明木器である。器の中央部分に穿孔を施し，両端は交互に線状になるように加工をおこなっている。法量は，器長46.6cm，中央部の幅4.8～６cm，両端部の幅１cmで，穿孔は３～3.6cmの長方形状を呈す。

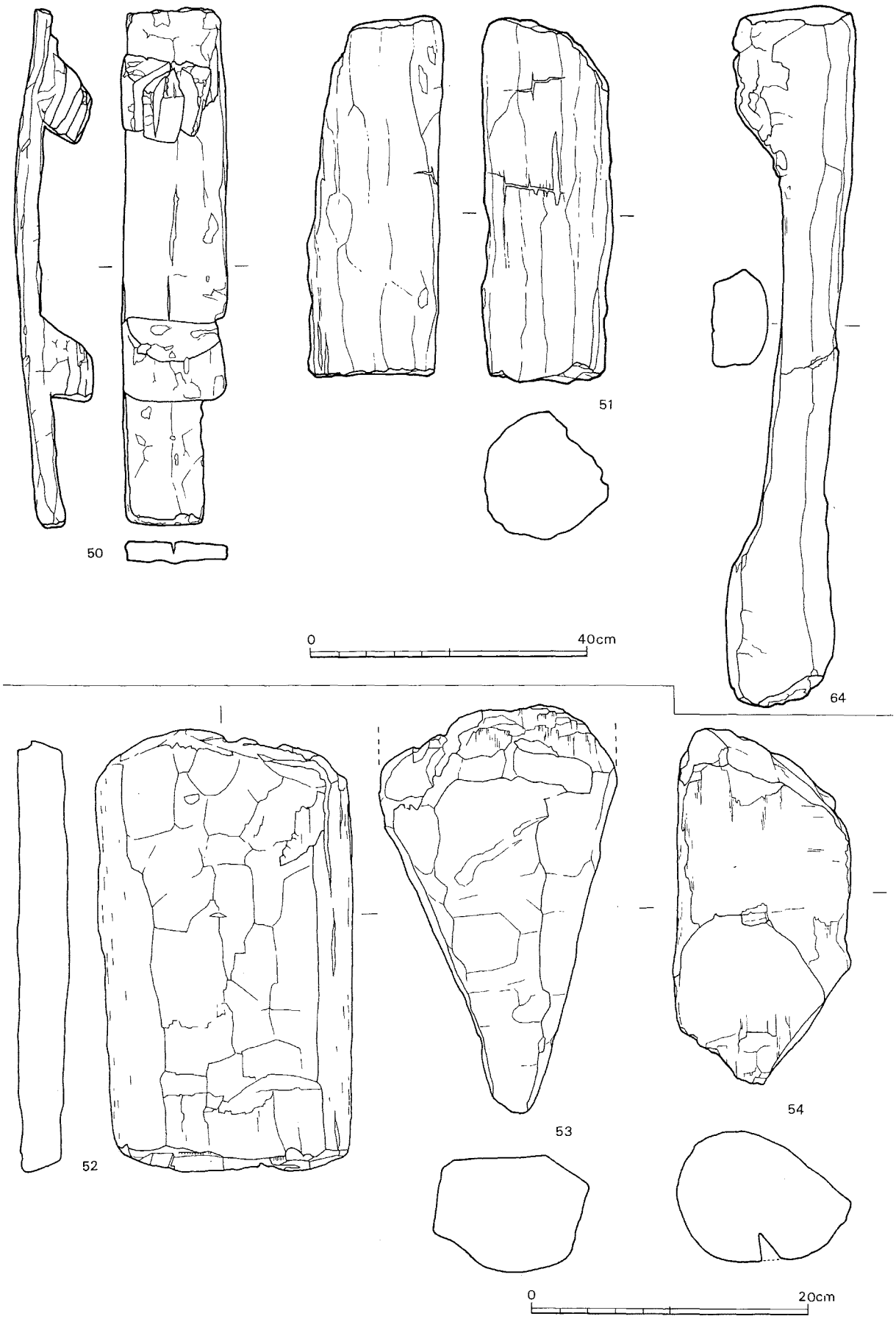
50は，梯子である。環濠内の溝壁に立て掛けた状況で検出されたもので，一部毛欠損している。器の２箇所に踏み段が約130～135度の斜角度に作出され，その面は他に比べて摩耗度が著しい。法量は，現長74cm，幅14.5cm，厚さ約３cmである。



第51図　木器実測図⑧（4号・5号溝出土 1/4）



第52図　木器実測図⑨（11号・12号溝出土 1 / 4 ）



第53図　木器実測図⑩（２号・５号・12号溝出土１／８・１／４）

第54図　木器実測図⑪（大溝・２号・11号溝出土１／４）

	器　種	材　質	地区	遺溝名称	備　考	番号
1	楯	スギ	I	大　溝	赤色顔料を塗布	
2	矢柄の根ばさみ		I	大　溝	組合せ式	
3	木鏃	散孔材	I	大　溝		26
4	スプーン状木器	マキ属	I	大　溝		12
5	不明木器	環孔材	I	大　溝	内部，掘込み	11
6	机の脚部	ヤブツバキ	I	大　溝	先端部欠損	7
7	把手付容器	サイカチ	I	大　溝	半身欠損	9
8	脚付容器の脚部		I	大　溝	漆器（赤・黒）欠損	88
9	脚付容器の脚部		I	大　溝	漆器（赤・黒）欠損	87
10	織機具	サカキ	I	大　溝	経巻具	16
11	織機具	針葉樹	I	大　溝	経巻具	13
12	木偶	スダジイ	I	大　溝	未製品	18
13	用途不明木器	散孔材	I	大　溝	欠損	19
14	横打具	ヒノキ	I	大　溝		17
15	台状木器	タブノキ	I	大　溝	上端部欠損	38
16	しゃもじ	ヤブツバキ	I	大　溝	未製品	3
17	諸手鍬	ヤマグワ	I	大　溝		5
18	建築部材	クリ	I	大　溝	現長52cm，幅 8 cm，加工あり	46
19	不明木器	ヤブツバキ	I	大　溝	現長150cm，径 9 cm	77
20	板材	コナラ，アカガシ亜属	I	大　溝		50
21	板材	カヤ	I	大　溝	大部分欠損	49
22	手斧の柄	ヤブツバキ	I	大　溝		68
23	手斧の柄	ヤブツバキ	I	大　溝	未製品，大型	14
24	手斧の柄	サカキ	I	大　溝	未製品	53
25	手斧の柄	サカキ	I	大　溝	未製品	36
26	手斧の柄	スダジイ	I	大　溝	未製品	15
27	手斧の柄	マキ属	I	大　溝	未製品，一部欠損	35
28	手斧の柄	サカキ	I	大　溝	未製品	37
29	手斧の柄	サカキ	I	大　溝	未製品	71
30	手斧の柄(ヨキ)	ミズキ属	I	大　溝	未製品，現長78cm	6
31	手斧の柄	サカキ	I	大　溝		70
32	杓子	マキ属	I	1 号 溝		33
33	不明木器	スギ	I	1 号 溝	コ字形の加工	48
34	えぶり	コナラ属	I	2 号 溝		8
35	脚付容器	コナラ，アカガシ亜属	I	1 号 溝	半身欠損	10
36	用途不明木器	マキ属	II	1 号 溝		69
37	手斧の柄	アカマツ	I	2 号 溝	未製品	4
38	手斧の柄	コナラ属，クヌギ節	I	5 号 溝	未製品，柄の大部分欠損(Ⅰ型)	64
39	杭	マキ属	I	5 号 溝		60
40	**ねずみ返し**		I	5 号 溝	未製品	85
41	短甲		I	5 号 溝	未製品	86
42	杓子	クスノキ	I	4 号 溝	保存処理済	30
43	杓子	マキ属	I	5 号 溝	未製品	31
44	不明木器	マキ属	I	5 号 溝	未製品	61
45	不明木器	スギ	I	5 号 溝		58
46	深鉢	マキ属	VI	12 号 溝	丸底	34

表 3　出土木器一覧表①

	器　種	材　質	地区	遺構名称	備　考	番号
47	杓子の柄	ヒノキ	VI	11 号 溝	身を欠損	1
48	不明木器	ヒノキ	VI	12 号 溝	前形の穿孔一箇所	2
49	手斧の柄	マキ属			III型末	51
50	梯子	タブノキ	VI	12 号 溝	上端部欠損	20
51	柱材	クリ			折れ，径　大型材	81
52	加工痕ある板材	クリ	I	5 号 溝	扁平で両端切断	39
53	杭材	ナシ亜科	I	5 号 溝	大型杭	66
54	杭	タブノキ	I	2 号 溝	一部焼けている　三面加工	65
55	杭材	ヤマグワ	I	大　溝	一部欠損	57
56	杭	マキ属	I	大　溝	先端部のみ焼けている	40
57	杭	スダジイ	I	大　溝		67
58	杭材	マキ属	I	2 号 溝	現長138cm，径７～7.6cm	76
59	杭材	シャシャンボ	VI	11 号 溝	折れ	79
60	杭材	ヤブツバキ	VI	11 号 溝		62
61	杭材	イチジク属	VI	11 号 溝	先端部のみ三面	59
62	杭材	散孔材	VI	11 号 溝	先端部のみ	42
63	杭材	ムクノキ	VI	11 号 溝		63
64		スダジイ				82
65	板材	タブノキ			両端欠損	21
66		環孔材				22
67		タケ亜科				23
68		散孔材				24
69		ナシ亜科				25
70		ヤマグワ				27
71		マキ属				28
72		イヌガヤ				29
73	杓子	マキ属	I	1 号 溝	33と同一個体	32
74		クリ		5 号 溝	柱材と楚板	41
75	不明	スダジイ			加工面	43
76	丸太材	スダジイ	I	大　溝	両端欠損	44
77	板材	スダジイ			幅狭	45
78	不明	ニレ属			切断面有り	47
79	板材	広葉樹	I	大　溝		52
80	板材	スダジイ			現長38.5cm，幅6.5cm，厚み1.8cm	54
81	板材	トネリコ属			幅狭	55
82	不明	ヒノキ	I	2 号 溝	加工品	56
83	杭材	マキ属	I	5 号 溝	現長135cm，径2.5cm	72
84	杭材	マキ属	I	大　溝	現長143cm，径2.5cm	73
85	杭材	ヤブツバキ	I	1 号 溝	現長 96cm，径３cm	74
	不明	マキ属			現長106cm，径3.5cm	75
	不明	マキ属	I	大　溝	現長131cm，径5.5cm～4.5長方形	78

表４　出土木器一覧表②

(6) 骨角器（第55，56図）

骨角器には狩猟具・工具・装身具などがあるが，狩猟具が多く出土した。

銛　頭（第55図３，４）

３は，典型的な燕形銛頭である。開窩式の銛頭を組み合わせて閉窩式の銛頭とした，非常に珍しい形をしている。先端部は蝮の頭状の突起部を削り出し，左右の合わせ目は先端から3.1cmの所までは0.15cm幅の刃溝をつくり，鉄製鏃を挟めるようにしている。ソケット部は左右銛頭の腹面，海綿質部分を『U』字状に抉りとり，組み合わせたときに窩ができる仕組みである。逆刺の付け根部には幅1.5cmの間に約17本の緊縛痕を残す。重さは13.8ｇを計る。Ｓ７―28区２号溝内から出土した。

４は，閉窩式である。先端部は欠損している。鹿角製と思われる。残存長5.13cm，逆刺も含めた最大幅1.78cm，重さ3.5ｇを計る。海綿質部が側面に見られるが破損している。Ｑ５―18区５号溝内から出土した。

骨　鏃（第55図９～15）

過去，原の辻遺跡の調査で骨鏃の報告が数例ある(1)。

12～14は，鏃身の断面が三角形を呈する，三稜鏃である。

12は，茎が二段になり篦被と呼ばれる部分は三角形の角を取り，断面六角形に作られ，径0.6cm～0.2cm，長さ1.68cmで円錐台状の篦代が下につづく。鏃身の先端部分では断面正三角形を呈するが，外の部分の一稜は骨本来の稜を利用し，他の二稜は加工による鋭い稜をなす。全長6.54cm，最大幅1.06cm，重さ4.0ｇを計る。Ｑ５―18区５号溝内より出土した。

13は無段の三稜鏃で，鏃身と茎の区別がつきにくいが茎の部分に色調の異なる部分が見られる。おそらく矢柄との結合部で，竹の矢柄に差し込まれていたことが考えられる。全長5.54cm，最大幅0.8cm，茎の長さ1.45cm，径0.5～0.45cm，重さ2.4ｇを計る。Ｔ９―27区１号溝内より出土した。

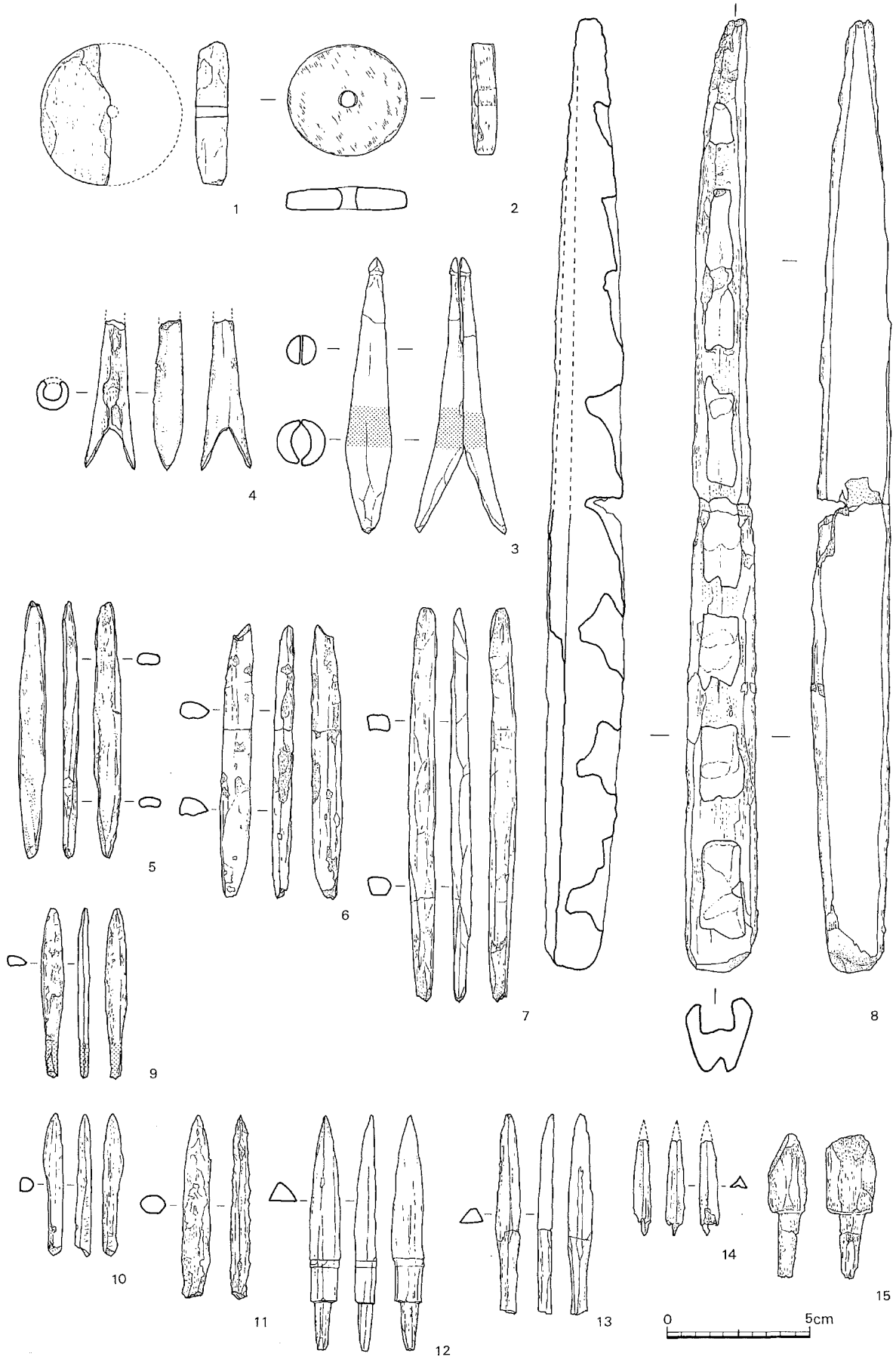
14も，13と同様の三稜鏃の破片である。残存長3.3cm幅0.67cm，重さ1.0ｇを計る。Ｓ７―13区２号溝排土表採品である。

９は，柳葉式鏃である。長さ5.87cm，幅0.76cm，厚さ0.33cm，重さ1.4ｇを計る。Ｓ７―20区２号溝排土表採品である。

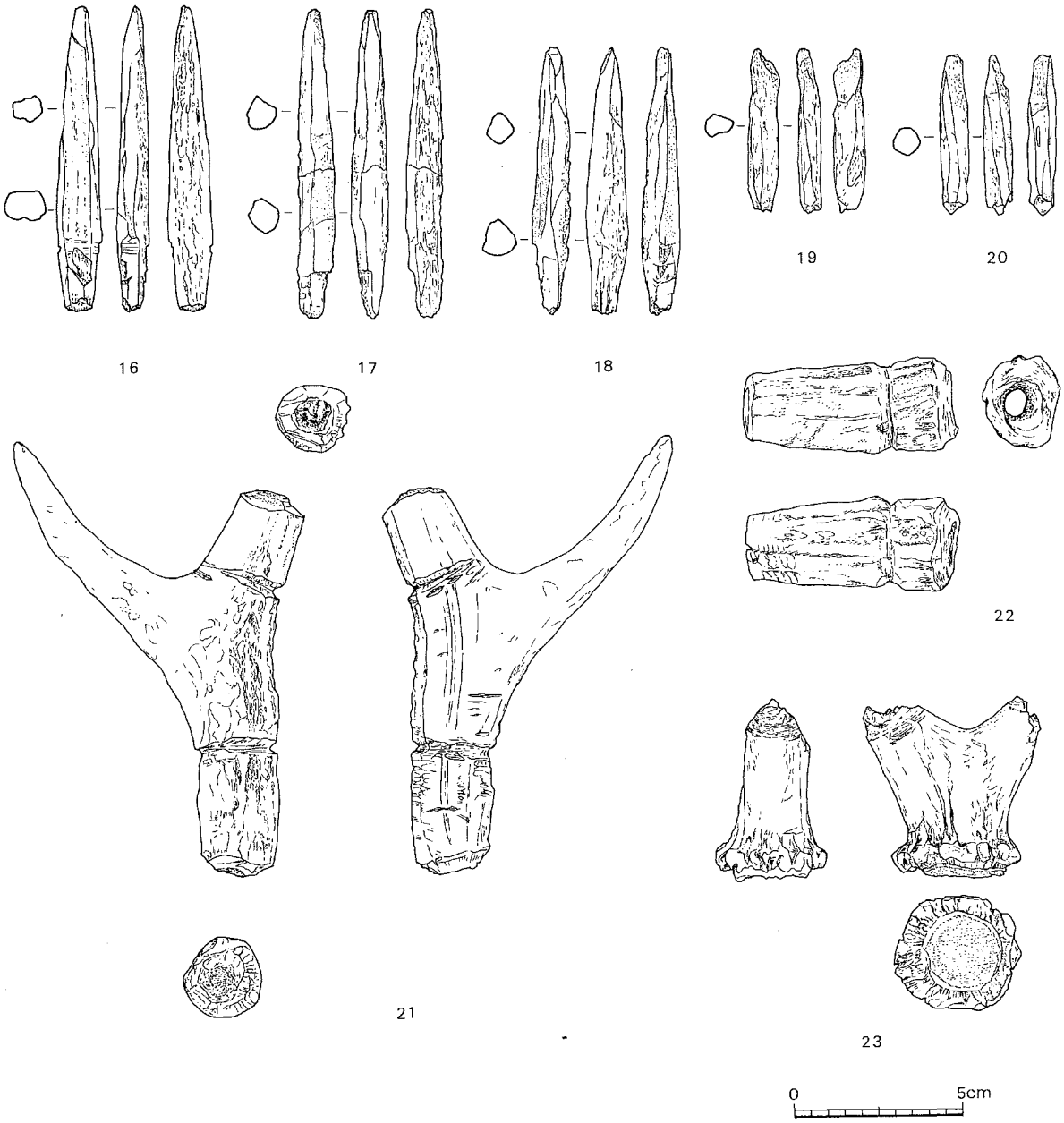
10も，柳葉式鏃である。長さ4.92cm，幅0.67cm，重さ1.4ｇを計る。Ｔ９－９区２号溝内より出土した。

11は，茎部を欠損した柳葉式鏃である。残存長6.37cm，幅0.97cm，重さ3.9ｇを計る。Ｔ９―32区１号溝内より出土した。

15は，鏃身の断面が長円形で厚ぼったく，先端を山形に削り出している。残存長5.03cm，幅1.7cm，厚さ1.26cm，茎の径0.8～0.5cm，長さ1.45cm，重さ4.8ｇを計る。細胞組織が粗く，海獣骨と思われる。未製品の可能性もある。Ｔ９―15区５号溝より出土した。



第55図　骨角器実測図①（1/2）



第56図　骨角器実測図②（1/2）

刺突具（第55図5～8）

5～7は，ヤス状刺突具と思われる。

5は，長さ8.96cm，幅1.0cm，厚さ0.45cm，重さ4.8gを計る。未製品の可能性もある。

6は，残存長9.51cm，幅1.0cm，厚さ0.65cm，重さ5.9gを計る。先端と基部を欠く。T8—32区2号溝内より出土した。

7は，長さ13.7cm，幅8.5cm，厚さ0.64cm，重さ7.6gを計る。T9—14区大溝内より出土した。

8は，大型の刺突具状骨角器で，用途は不明である。長さ32.5cm，幅2.65cm，厚さ2.45cm，重さ92.2

gを計る。T8—32区2号溝内より出土した。イルカ類の下顎骨かと思われる。

紡錘車（第55図1，2）

1，2は，紡錘車である。

1は，1／2を欠損している。復元径5cm，厚さ0.98cm，残存重9.5gを計る，穿は推定で0.46cmある。片抉りで穿っている。骨組織の粗い材質である。鯨骨製かと思われる。Q5—24区5号溝内より出土した。

2は，径4.23×3.93cm，厚さ0.89cm，重さ16.0gを計る。穿は上穿が0.55～0.59cm，下穿が0.63～0.64cm，両面抉りで穿っている。材質は不明であるが，緻密な骨組織を利用している。Q5—18区5号溝内より出土した。

未製品（第56図16～23）

16～20は一括出土で，T9—8区大溝上層より出土した。21・22・23は鹿角を利用し，粗削りを行っただけでいずれも未製品と思われる。21～23は，弭形角製品の未製品である(2)。

21は，両端に切断痕を残し，支枝の側の2箇所にも切断痕を残す。刀子柄に加工途中かと思われる。T9区大溝内より出土した。

22は，長さ6.2cm，最大径2.7cm，重さ28.6gを計る。海綿質の部分は抉り取り，端から約2cmの表面に，深さ0.2cm位の溝を掘っている。過去の調査で鹿角製管玉が報告されている(3)が，同様のものなのか分からない。用途は不明である。未製品と思われる。Q5—12区5号溝より出土した。

23は，切断痕のある鹿の角座である。Q5—18区5号溝より出土した。

	長さ(cm)	最大幅(cm)	重さ(g)
16	8.97	1.25	6.7
17	9.05	1.05	6.0
18	7.85	1.15	5.8
19	4.80	0.91	2.6
20	4.65	0.83	2.8

5表　未製品骨角器計測表

註

(1)　鴇田忠正「長崎県壱岐郡田河村原ノ辻遺跡の研究」『日本文化史研究』　星野書店　1944

(2)　岡崎　敬「日本における初期鉄製品の問題」『考古学雑誌』第42巻第1号　日本考古学会　1956

(3)　前掲　註(1)

参考文献

金子浩昌・忍沢成視『骨角器の研究』縄文編Ⅰ・Ⅱ　慶友社　1986

和田晴吾「ヤス・モリ」『弥生文化の研究』5　雄山閣　1985

小田富士雄・韓　炳三編『日韓交渉の考古学』弥生時代篇　六興出版　1991

(7) **土製品**（第57図・表６）

投　弾（１～12）

全て紡錘形の土製投弾である。１号溝出土のものが５点と最も多く，２号溝が２点，３号溝・５号溝・９号溝・大溝・３号土壙がそれぞれ１点ずつの出土である。破損品を除く法量の平均値は，長さ4.52cm，最大径2.80cm，重さ31.8ｇである。１が長さ・重さともに最大で，径は４が最大である。７が，長さ・重さともに最小で，径は８が最小である。ほとんどが均整のとれた紡錘形であるが，８と12は若干形態が異なる。つまり，８は長さに対し径が小さく細身であり，逆に12は長さに対し径が大きく丸みを帯びている。胎土は全体に砂粒は少なく，３・７は特に顕著でほとんど砂粒を含まない。

土　錘（13・14）

13は２号溝（Ｔ８―32区）排土の採集品である。管状土錘で紡錘形を呈し，断面は円形である。14は５号溝（Ｒ５―32区）出土の棒状土錘である。紡錘形を呈し断面は円形である。両端に穿孔があり，端部は僅かに膨らみを持ち溝を施す。

(8) **装飾品**（第57図）

勾　玉（15）

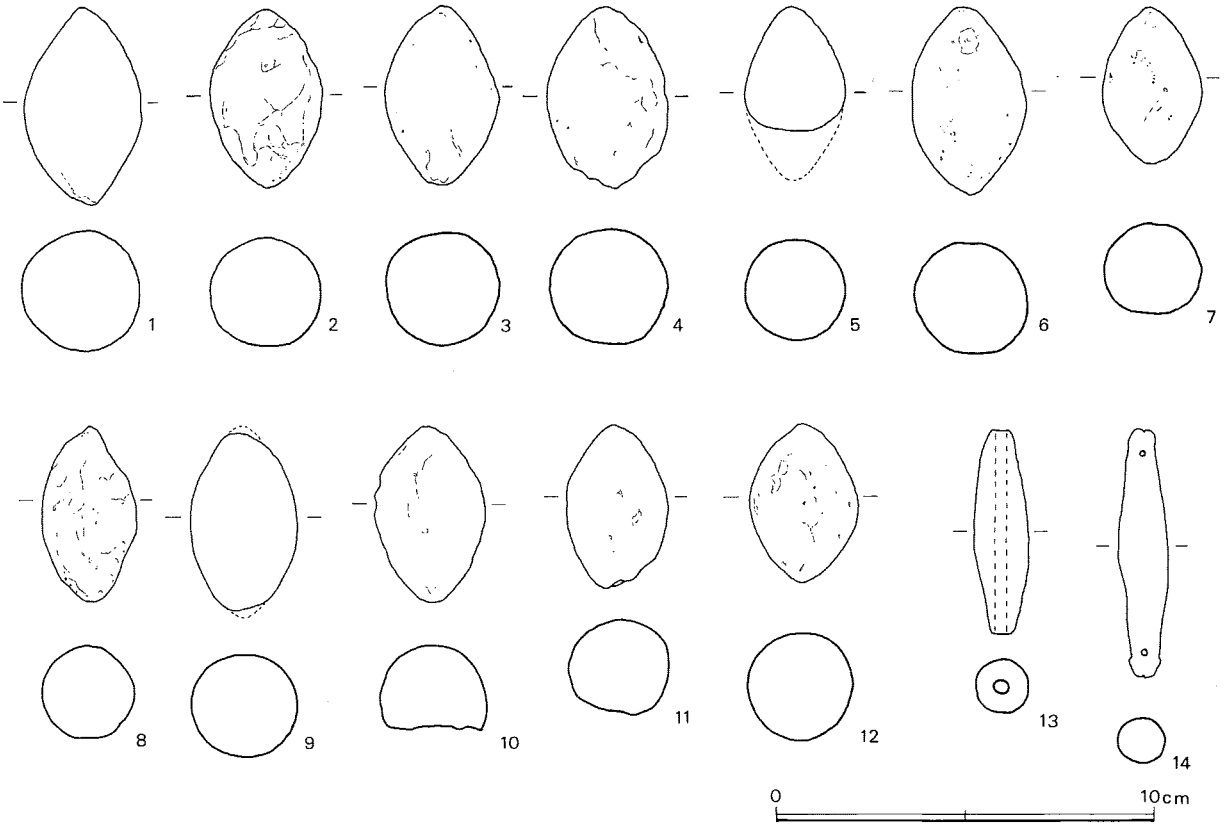
９号溝（U13―22区）上層出土である。透明感のある緑色で部分的に白色が混じる。穿孔は両側から施している。長さ1.83cm，厚さ6.4㎜を測る。石材分析は行っていないが，翡翠製と思われる。

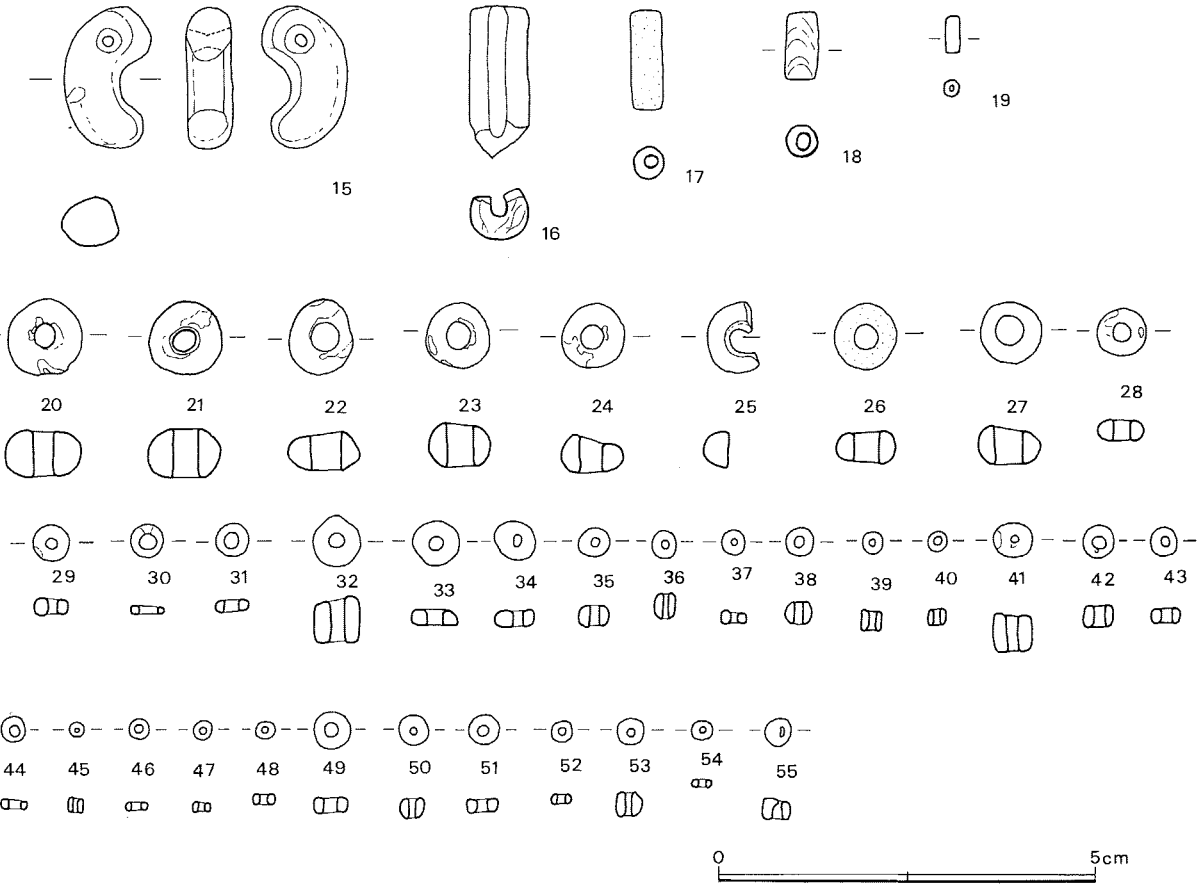
管　玉（16～19）

16は１号溝（T11―10区）上層出土である。濃緑色を呈す。１／２程を欠損し，現存長2.0cm，径7.8㎜を測る。17・18はいずれも１号溝（T11―34区）排土採集品で，灰緑色を呈す。17の表面は他と比較すると光沢がない。17が長さ1.34cm，径4.2㎜，18が長さ0.91cm，径4.0㎜を測る。19は２号溝（Ｓ7―28区）排土採集品である。灰緑色を呈し，長さ0.48cm，径2.3㎜を測る。管玉も石材分析を行っていないが，碧玉製と思われる。

小　玉（20～55）

20～25以外は，排土の洗浄選別によって検出されたものがほとんどである。但し調査区は広範囲に渡るため，全ての排土を洗浄選別することは困難であった。重点的に洗浄選別を行ったのは，排土中から小玉の採集された１号溝（T11―34区），大溝周辺（Ｔ９区），人骨が出土した２号溝（Ｓ7―28区）である。小玉の出土点数は，１号溝９点，２号溝９点，５号溝２点，７号溝１点，Ｔ９区９点，１号土壙１点，調査区外表採２点，T10―8区Ⅳ層出土が６点である。20～25はT10―8区Ⅳ層から６点まとまって出土した。出土地点は１号溝の西側である。ガラス小玉であると思われるが風化して白色を呈する。径は10.2～8.3㎜である。26～30も風化して白色を呈す。径は4.8～8.8㎜である。31は風化して黒灰色を呈す。径は4.1㎜である。32～40は紺色を呈す。径は2.6～6.9㎜である。41～44は濃紺色を呈す。径は3.2～5.8㎜である。45～48は黄緑色を呈す。径は1.9～2.9㎜である。49～52は水色を呈す。径は2.9～5.0㎜である。53は黒濁した紺色を呈す。径は3.8㎜である。54・55は赤褐色を呈す。径は3.0





第57図　土製品（1/2）・装飾品（1/1）実測図

mmと4.0mmである。

番号	種類	出土遺構	出土グリッド	層位	長　さ	最大径	重さ	色　調	胎　　土	備　　考
1	投弾	1 号 溝	T10－27	中層	5.11	3.04	41	にぶい赤褐色	石英・黒色・赤色砂粒	
2	投弾	1 号 溝	T10－14	排土	4.59	2.91	32	灰　白　色	石英・黒色砂粒・角閃石	
3	投弾	1 号 溝	T10－27	上層	4.65	2.96	34	にぶい褐色	金砂粒・金雲母	砂粒は少ない
4	投弾	1 号 溝	T10－27	中層	(4.70)	3.06	(37)	にぶい橙色	石英	
5	投弾	1 号 溝	T9－32	下層	(3.27)	2.60	(16)	にぶい橙色	石英	
6	投弾	2 号 溝	S7－35	上層	4.87	2.96	39	明灰褐色	石英・黒色・赤褐色砂粒	
7	投弾	2 号 溝	S7－27	中層	4.08	2.54	23	明灰褐色	石英	砂粒は少ない
8	投弾	3 号 溝	T8－2	上層	4.54	2.44	24	赤　褐　色	石英	
9	投弾	3号土壙	R5－25	——	(4.63)	2.77	(32)	にぶい橙色	石英多い	土壙覆土内出土
10	投弾	5 号 溝	R5－31	上層	4.58	2.89	(28)	にぶい赤褐色	石英・赤色砂粒	
11	投弾	9 号 溝	U13－22	排土	4.26	2.60	(28)	明赤褐色	石英・黒色・赤色砂粒	
12	投弾	大　　溝	T9－9	排土	4.08	2.88	30	にぶい赤褐色	石英・黒色・赤色砂粒	
13	土錘	2 号 溝	T8－32	排土	5.36	1.41	10	赤　褐　色	石英・金砂粒	管状土錘
14	土錘	5 号 溝	R5－32	上層	6.48	1.27	8	にぶい橙色	砂粒ほとんど含まず	棒状土錘

表 6　土製品計測表

単位：長さ・径は cm，重さは g

VI まとめ

原の辻遺跡は，遺跡の発見から平成５年度に至る数多くの発掘調査の結果，旧石器時代，弥生時代～古墳時代，中世に至る複合遺跡で，分布範囲が約80ヘクタールに拡がる遺跡である。

特に紀元前二・三世紀から後三・四世紀頃（弥生時代前期から古墳時代初頭）にかけて形成された大規模な多重環濠集落を主体とすることが明らかになった。また，「魏志倭人伝」記載の「一支国」の領域は，現在の壱岐島全域で，その中心集落は発掘調査成果から原の辻遺跡と考えられる。

平成５年度の調査箇所は，丘陵部の東側部分の現水田に計画された農道と排水路建設工事予定地で幅５～８ｍ程のトレンチ状の調査壙のために，検出遺構の全容が不明な部分が多いが，判明したことについて述べたい。

Ⅰ～Ⅵ調査区検出遺構の性格と時期及び環濠の規模等について

溝状遺構は，１～２・７号溝状遺構が環濠の内濠，３～５・８・９号溝状遺構が中濠，６・10・12・15号溝状遺構が外濠と推察される。環濠の時期は，環濠内の遺物出土状況から弥生中期から後期が主体で，終末期にかけての時期と考えられる。（環濠の構築は，少くとも弥生前期末から初頭頃と考えられよう。）また，部分的に環濠上面に古墳時代初頭の遺物が出土している。

環濠の規模は，東西約350m，南北約750mの平面楕円形状で，環濠内面積は約24ヘクタールである。環濠は，北端部分で河道に係り河川を利用した環濠であることが明らかになった。濠は，防禦用の施設であると共に水溜め及び洗い場跡等の水場の施設が検出されたことや科学的分析でも環濠内は常に湿潤な状況であったことが明らかになったことで，原の辻遺跡では用排水路としての利用も考えられる。また，環濠内では，弥生後期の多数の土器類がほぼ完形のまま廃棄された状況下での出土や水場の施設周囲の内濠，中濠からはイヌの骨が集中して出土している状況が見られる。

その他の遺構として，弥生前期末～中期の大溝遺構が丘陵部から東へ向かって形成され，その一部を埋めて，石敷遺構や環濠を構築している。その溝内から木製楯等の多量の木製品が出土している。

通路状遺構は，並行した２状の溝状遺構の間を通行帯としての利用が考えられ，溝を利用した同様な遺構は当該遺跡で数例確認している。この遺構は，集落内から外部に向けての通路としての性格が推察される。その他にも各地区で，柱穴群が検出されているが詳細については不明である。

主な出土遺物について

遺物は，楽浪系統の瓦質土器等や朝鮮系統の無文土器等の中国大陸や朝鮮半島及び国内との交流を示すものや50本もの銅鏃，鉄鏃，石剣等の戦いに関するものが多く出土している。また，弓矢の矢柄先端部に装着する弥生前期の木製及び骨製の根挟み部分が環濠内から出土し，魏志倭人伝に記載された竹製の矢柄を想定出来る資料の出土があった。

原の辻遺跡の発掘調査は，80ヘクタールの分布面積の内，僅か２ヘクタール程について実施されているに過ぎないので，規模・内容についてはまだ明らかではないが，「一支国」の中心集落としての集落構造等の様相について，継続的な発掘調査による究明が必要であろうし，期待されるところである。

図　　版

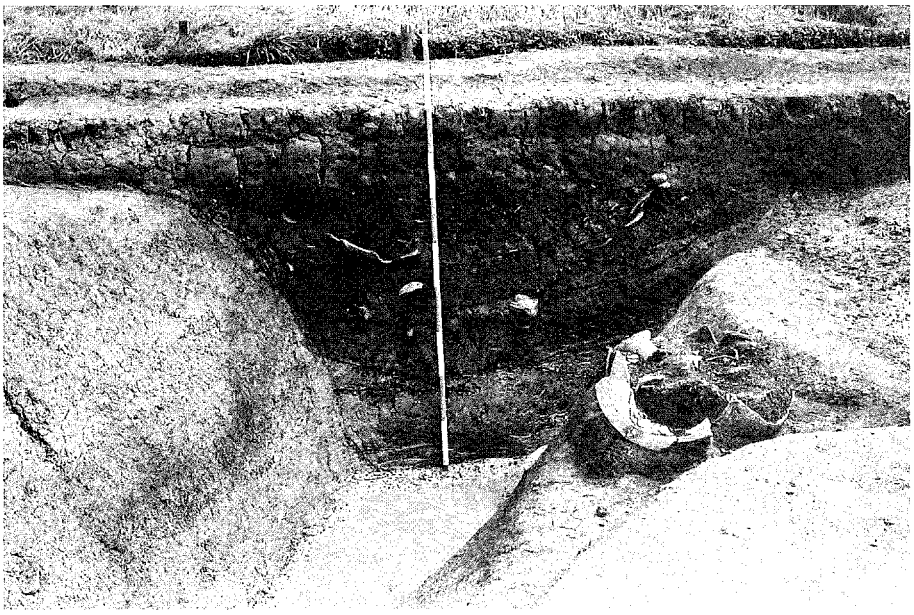
図版 1

原の辻遺跡遠景
（大塚山古墳より）

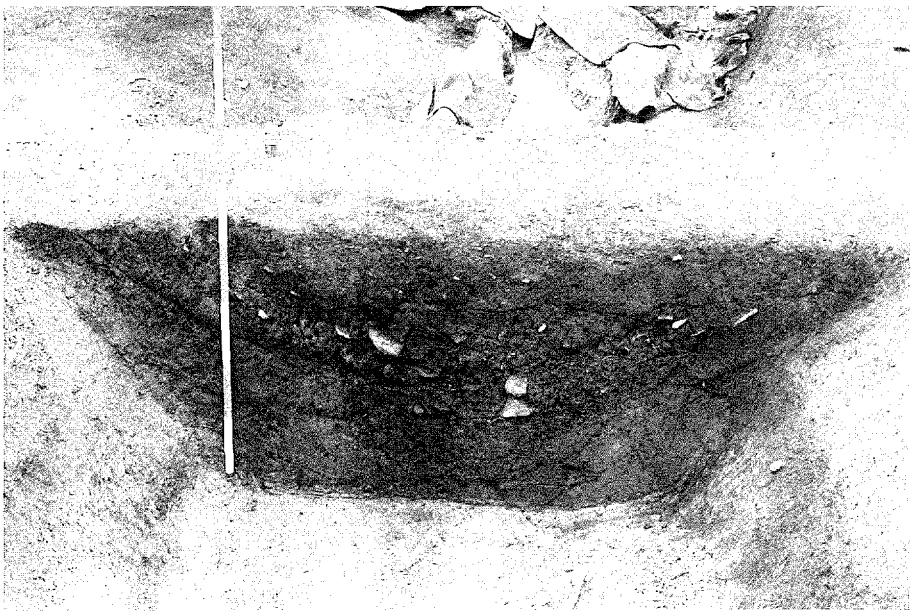
7 号溝調査風景

石敷遺構及び 2 号溝

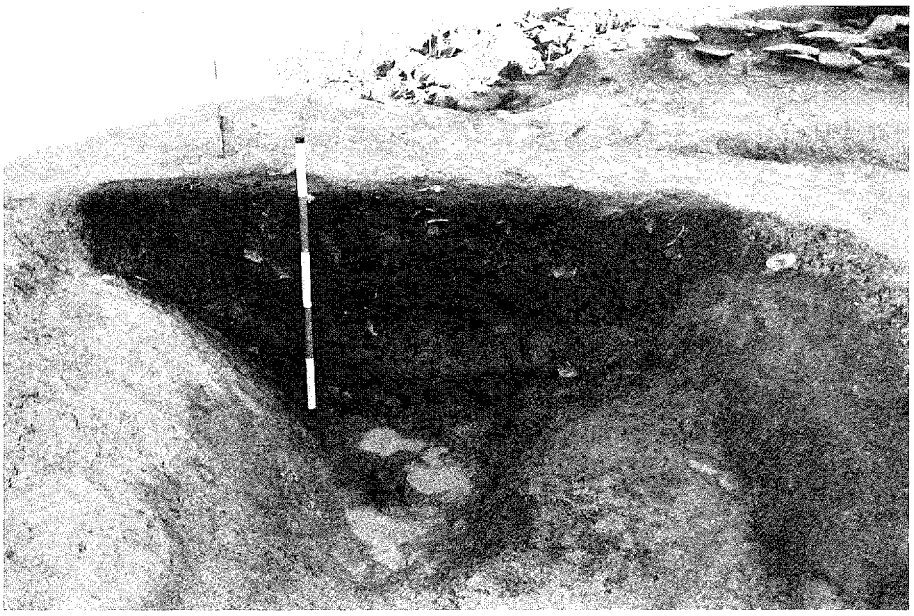
図版 2



1号溝土層（C—D）

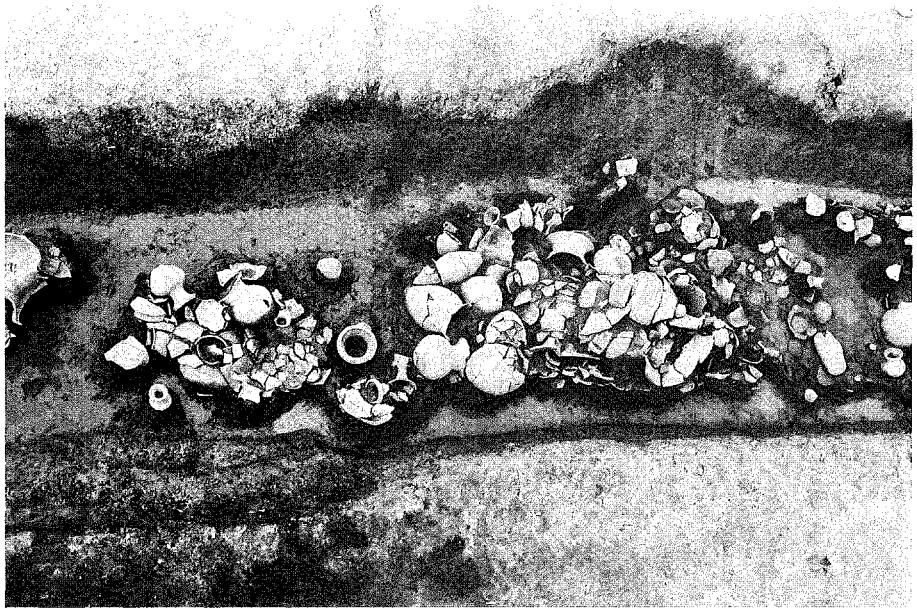


1号溝土層（A—B）

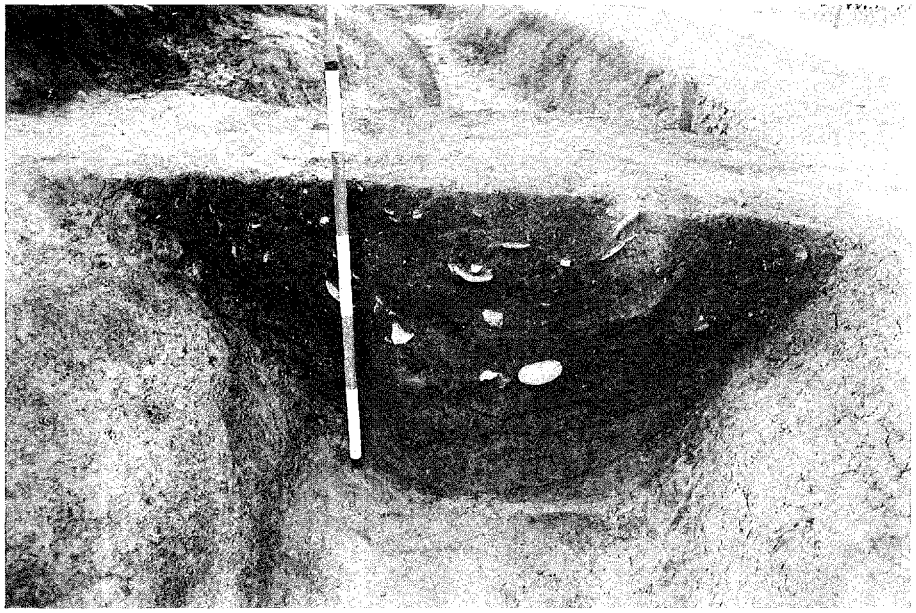


2号溝土層（E—F）

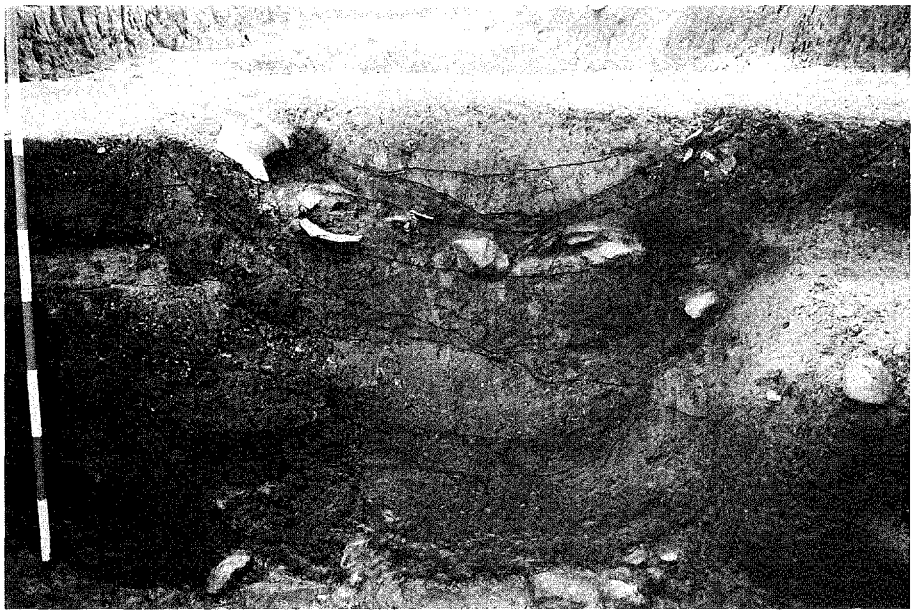
図版 3



1 号溝遺物出土状況

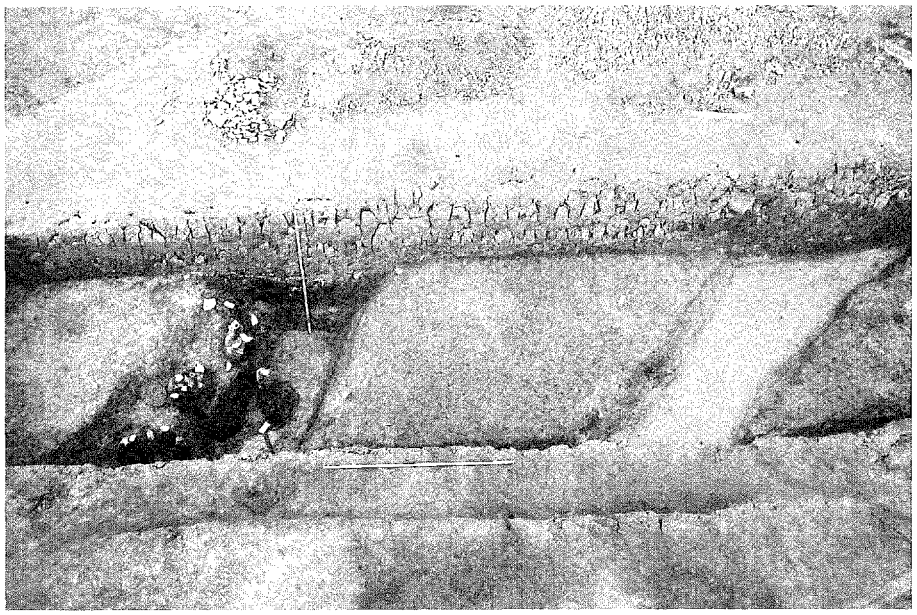


2 号溝土層(C—D)

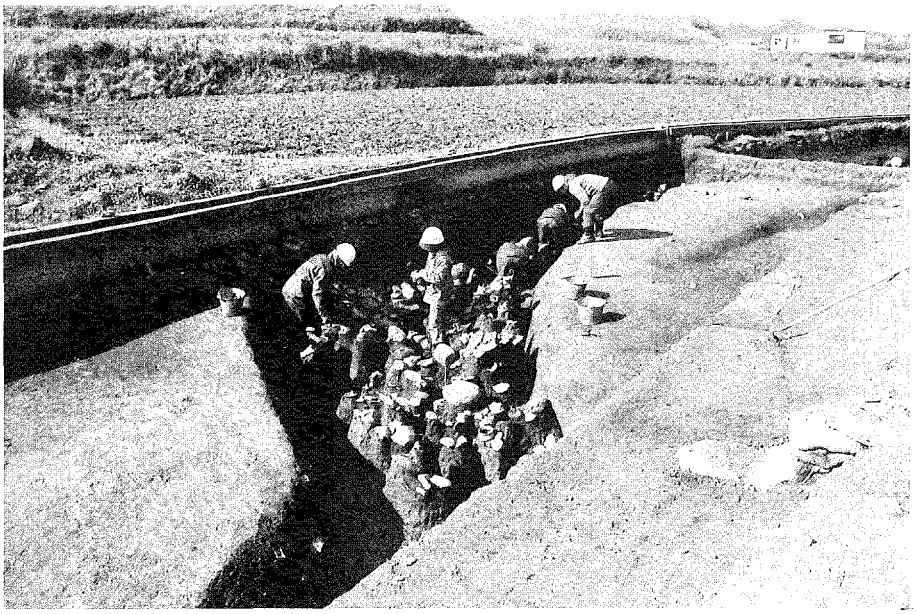


2 号溝土層(A—B)

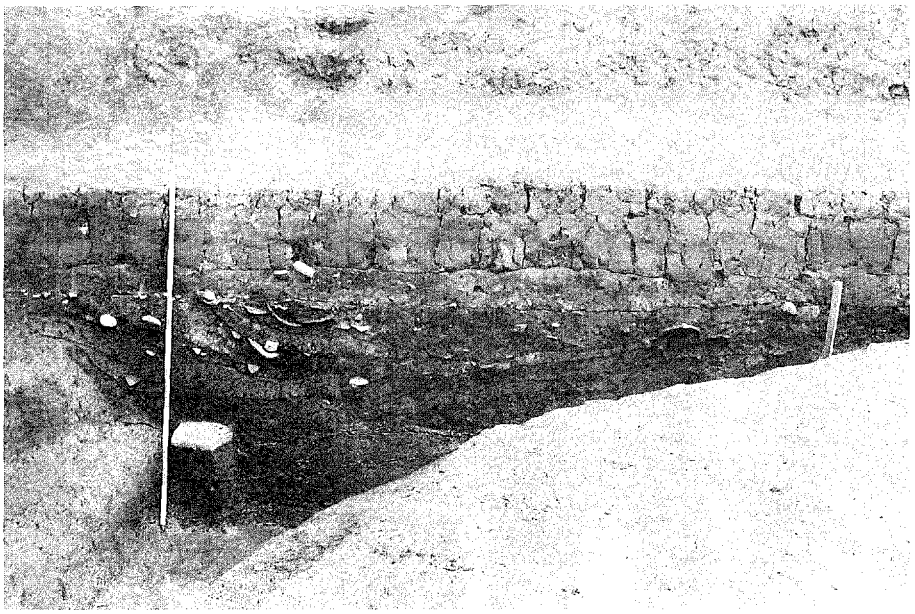
図版 4



3 号溝・16号溝

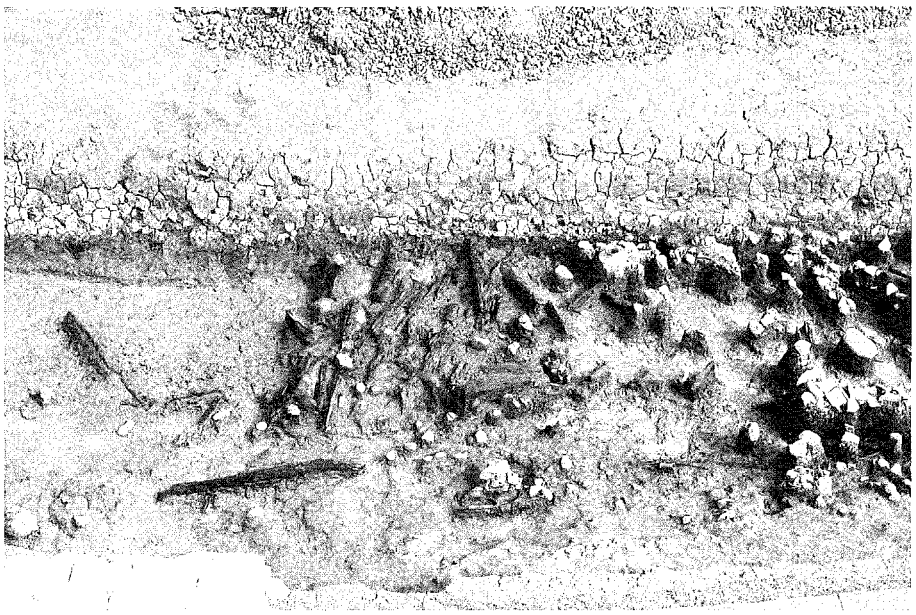


5 号溝調査風景

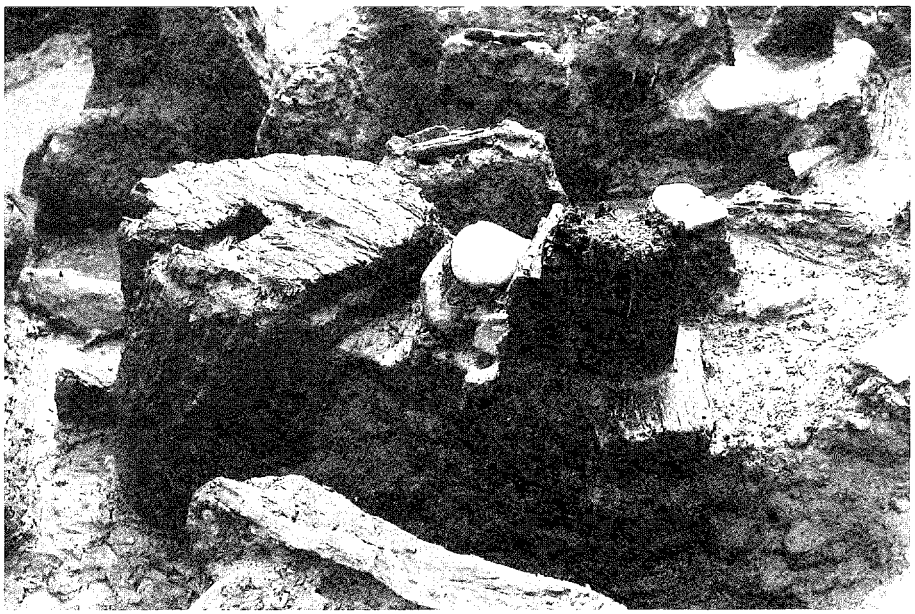


5 号溝土層（C—D）

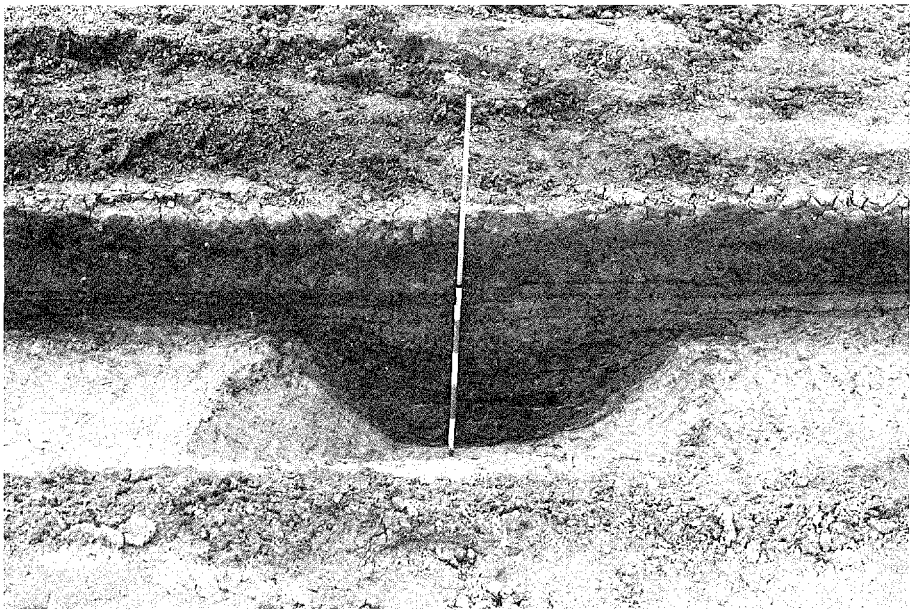
図版 5



5 号溝木材出土状況

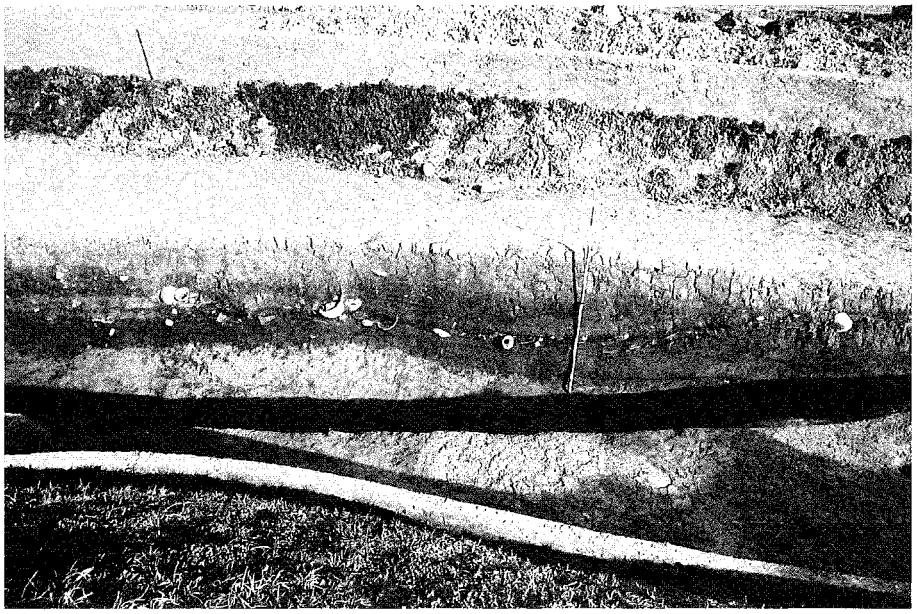


5 号溝礎板・柱材

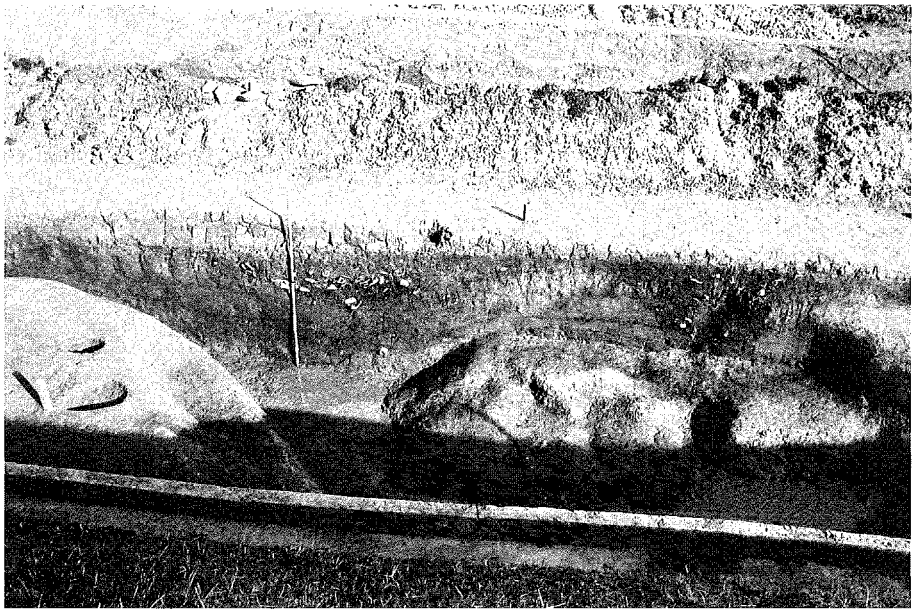


6 号溝土層

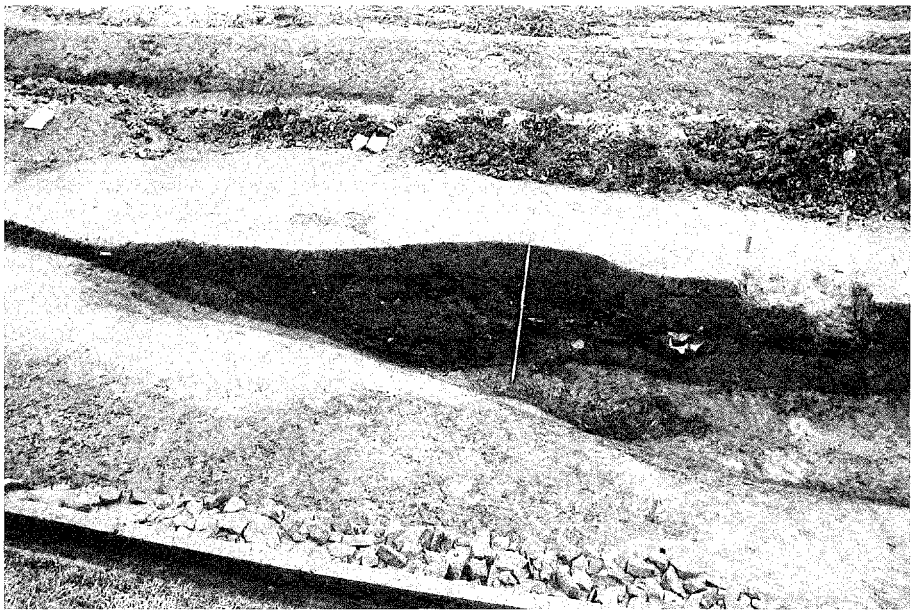
図版 6



7 号溝土層①

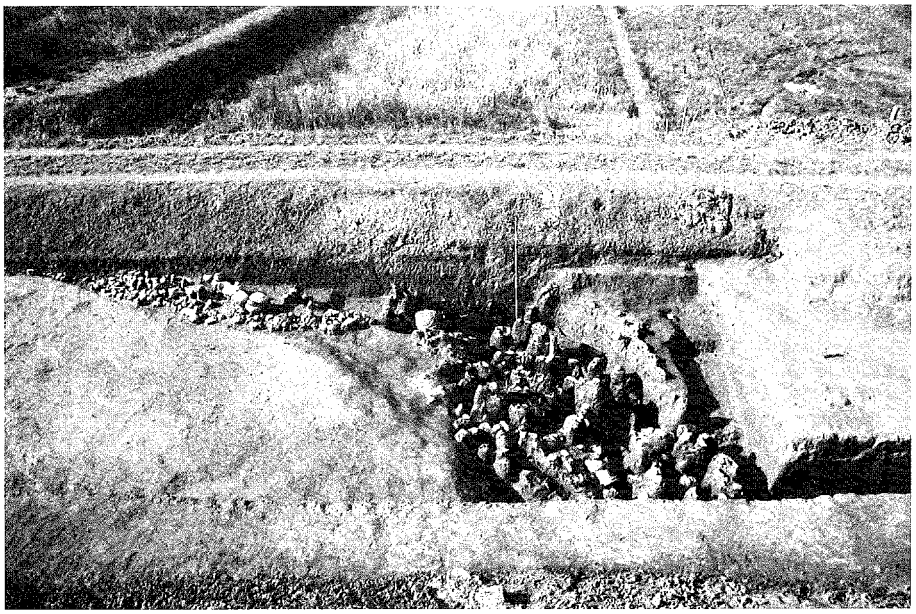


7 号溝土層②

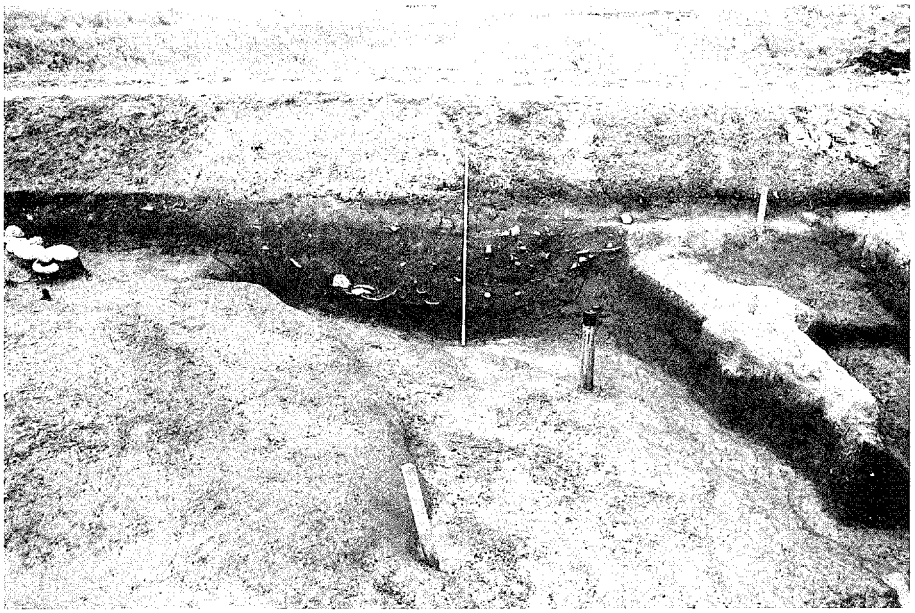


8 号溝土層

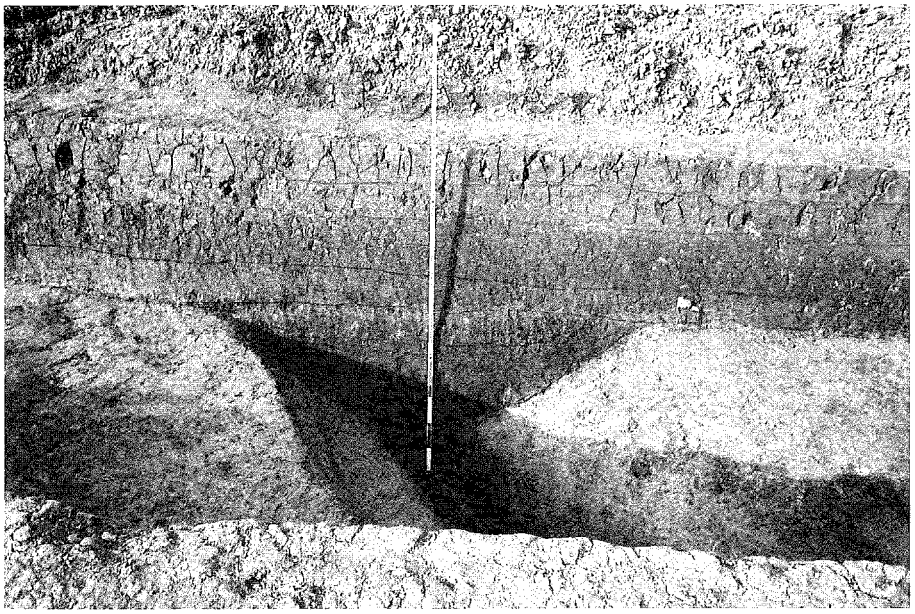
図版 7



9 号溝遺物出土状況



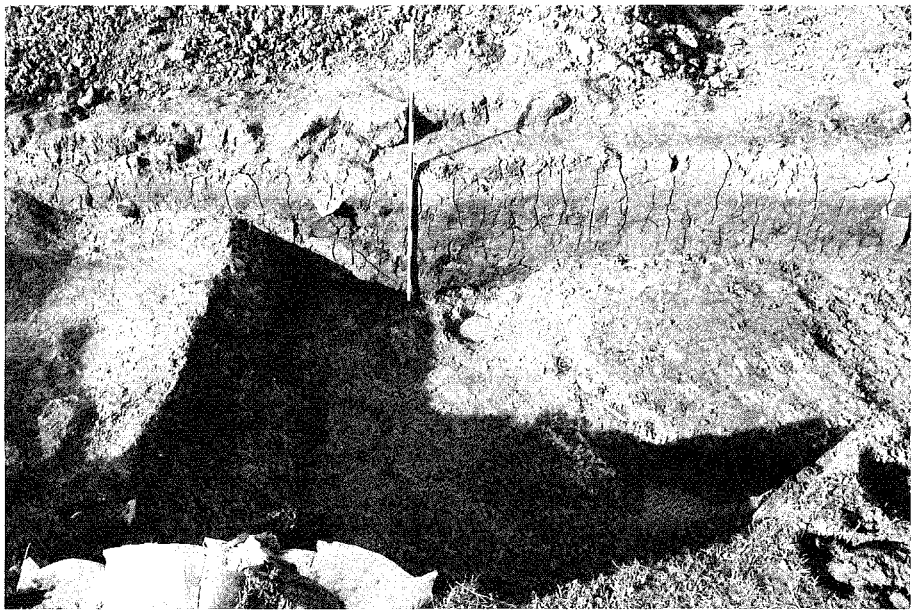
9 号溝土層



10号溝土層

図版 8

11号溝



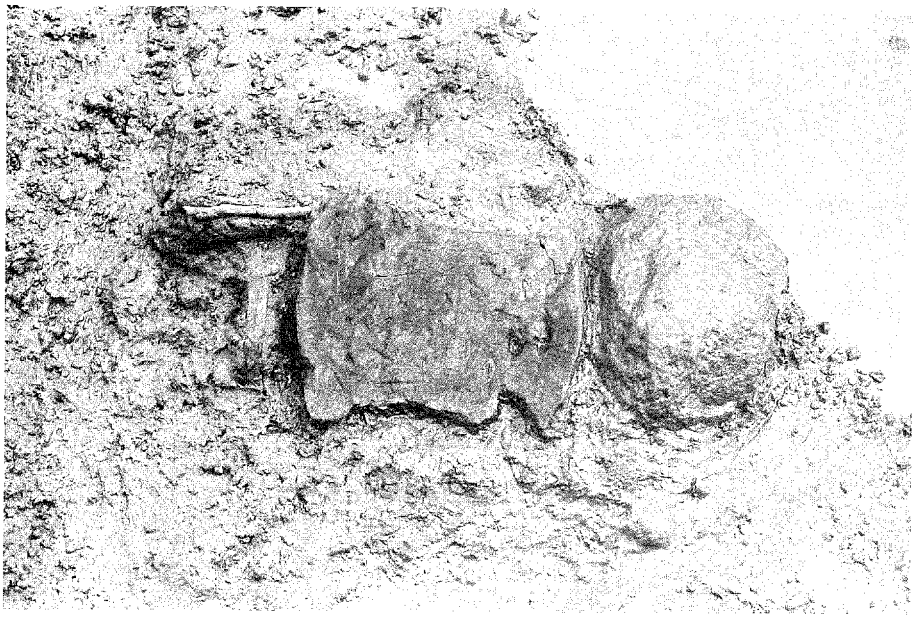
15号溝土層

U15区柱穴群

図版 9

W 7 ・ 8 区柱穴群

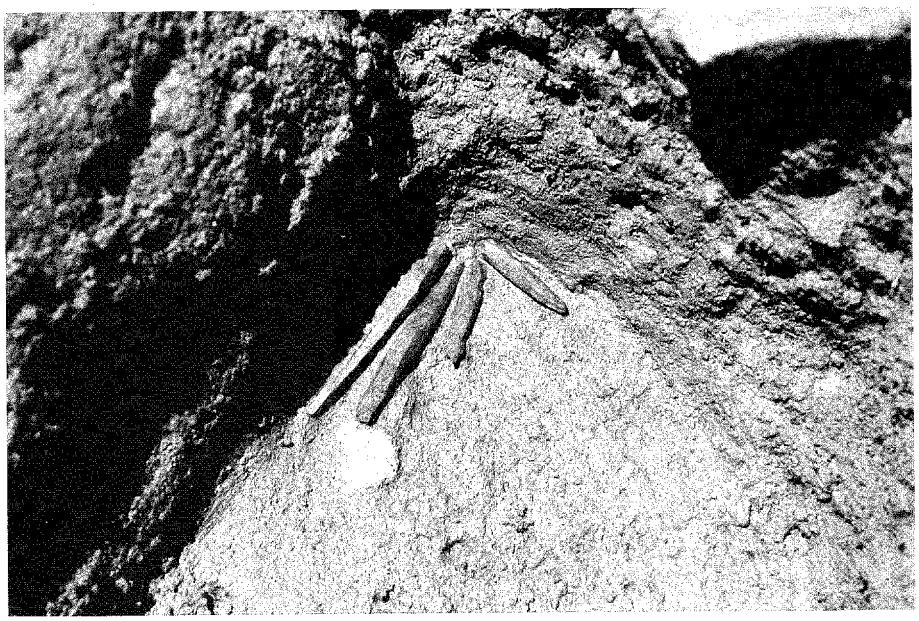
前期土器出土状況
(大溝)



木製短甲出土状況
(5 号溝)

図版10

梯子出土状況
(12号溝)



骨角器（ヤス）出土
状況（T 9 — 9 区）

小玉出土状況
（T10— 8 区）

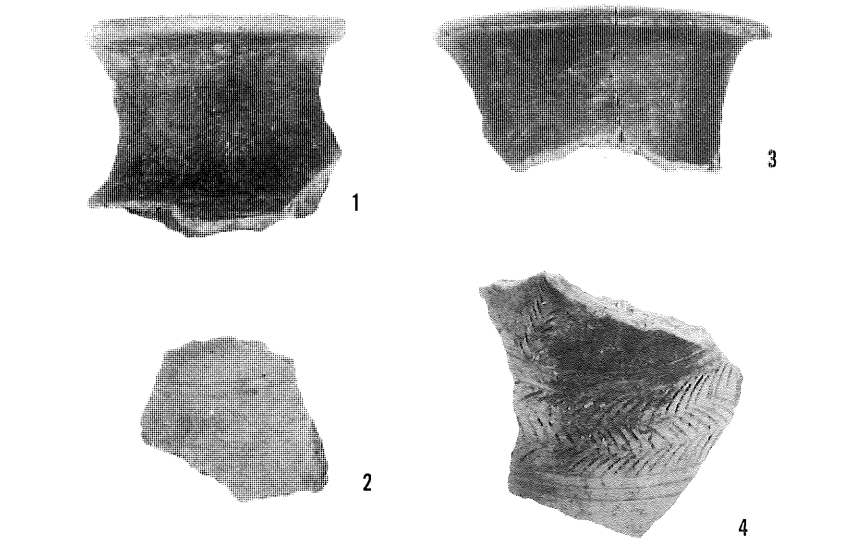
図版11

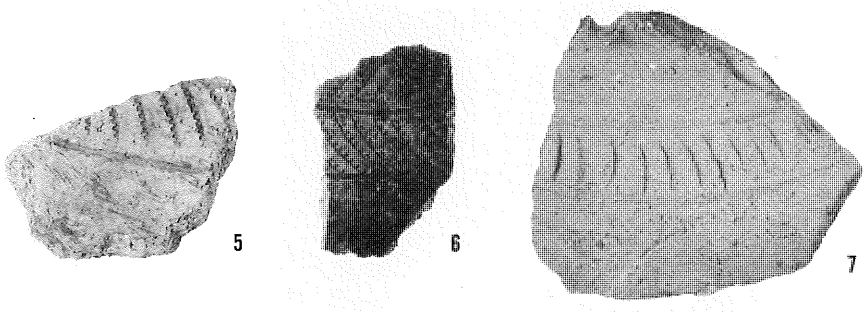
人骨出土状況
（2号溝）

人骨出土状況
（2号溝）

犬骨出土状況
（T 9 — 9 区）

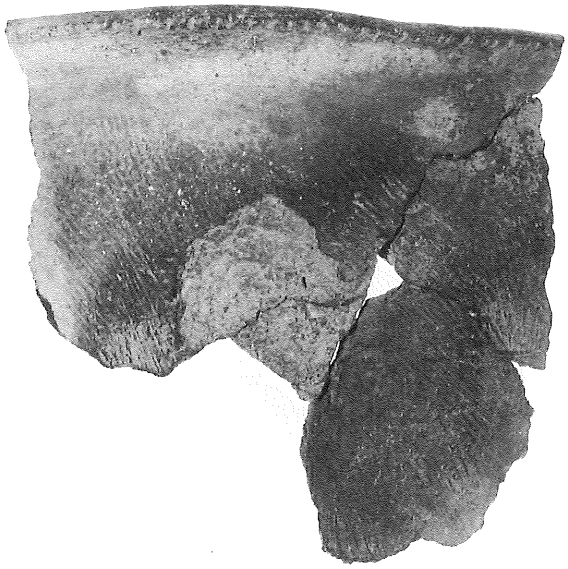
図版12



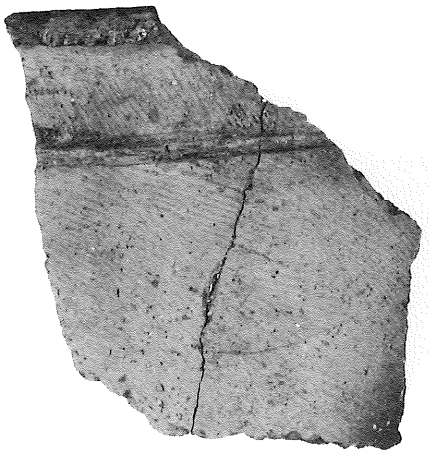


大溝出土土器

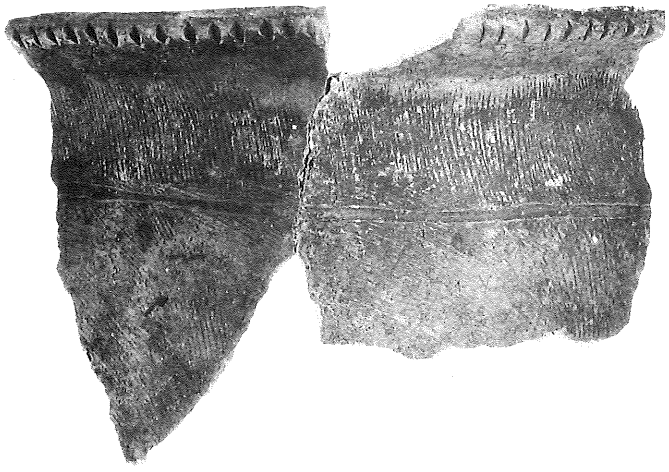
図版13



9



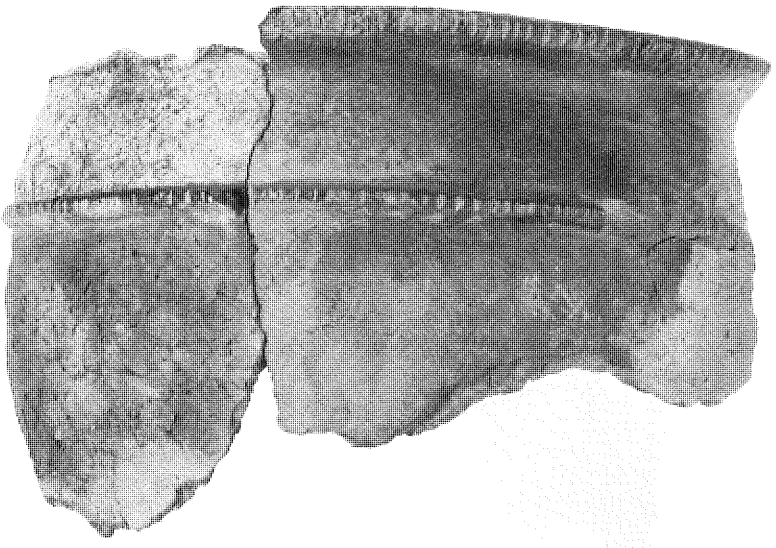
11



12

大溝出土土器

図版14



13（大溝）

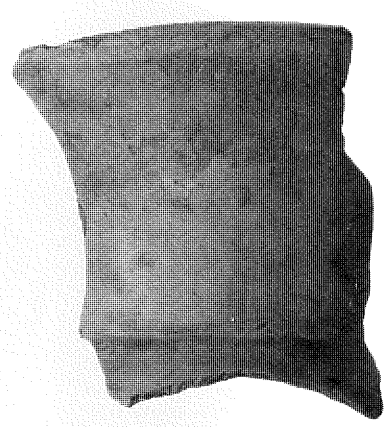
1（5号溝）

2（5号溝）

大溝・5号溝出土土器

図版15

3

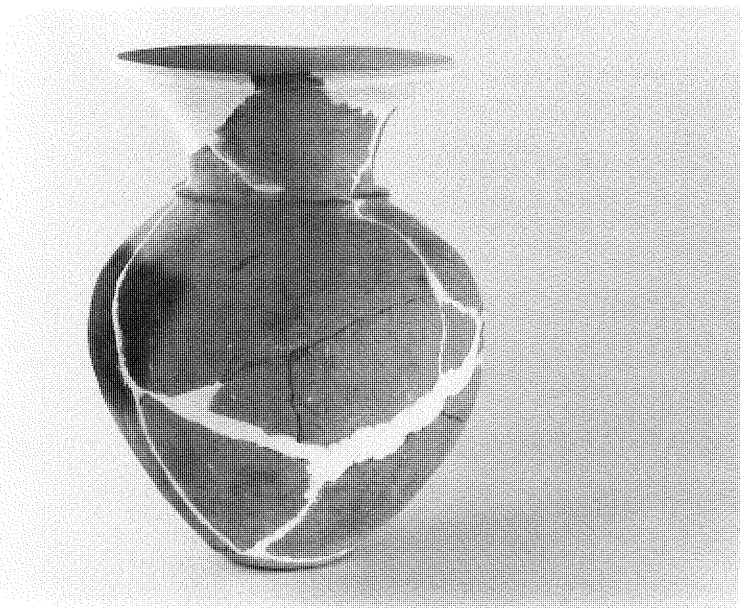


4

5

5号溝出土土器

図版16



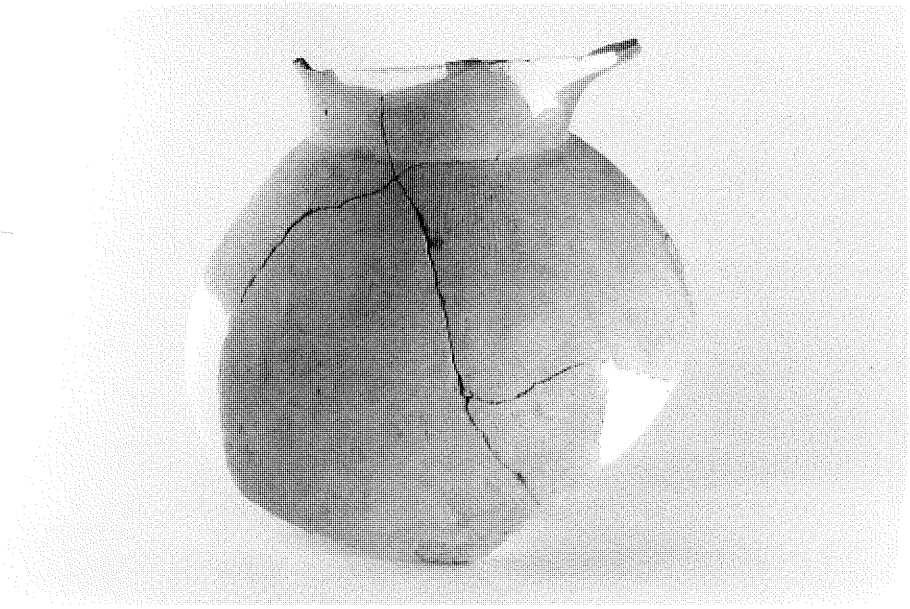
6

7

8

5 号溝出土土器

図版17



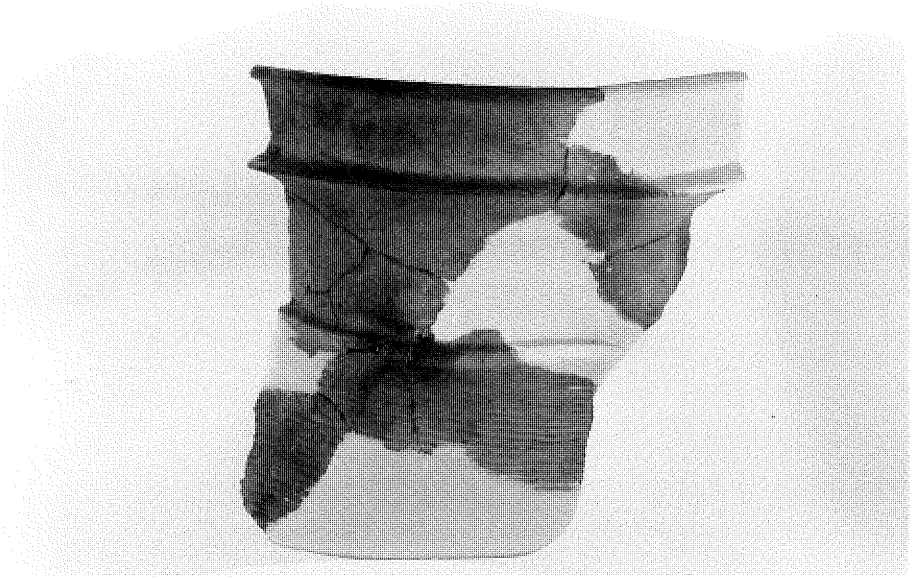
9

10

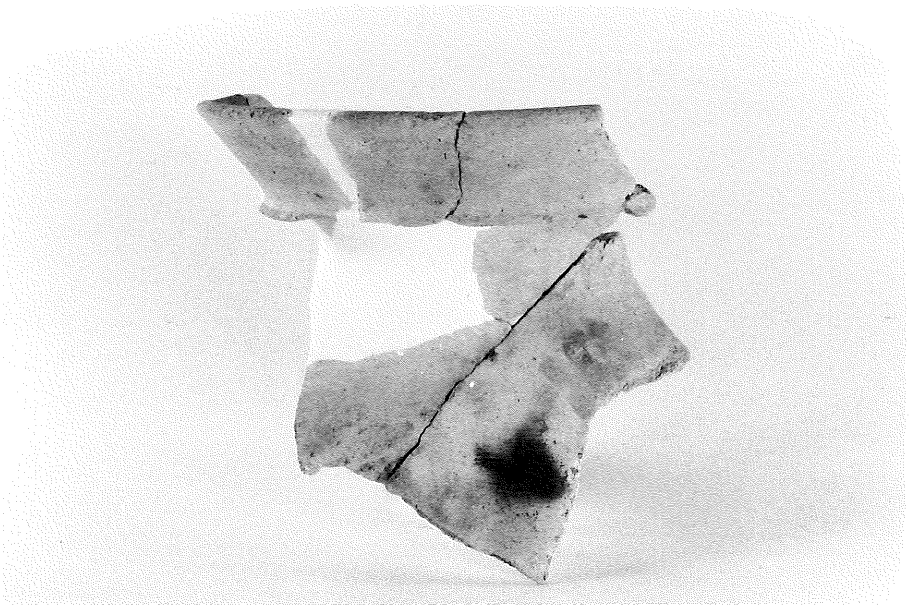
11

5 号溝出土土器

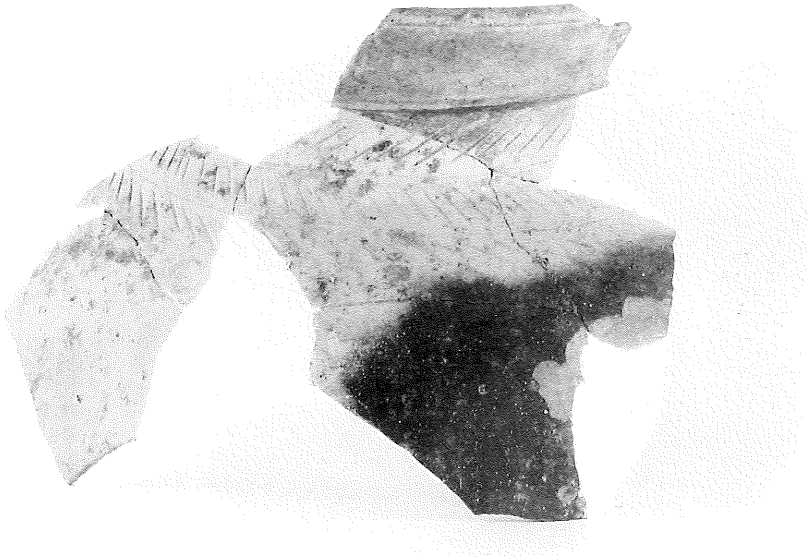
図版18



12



13



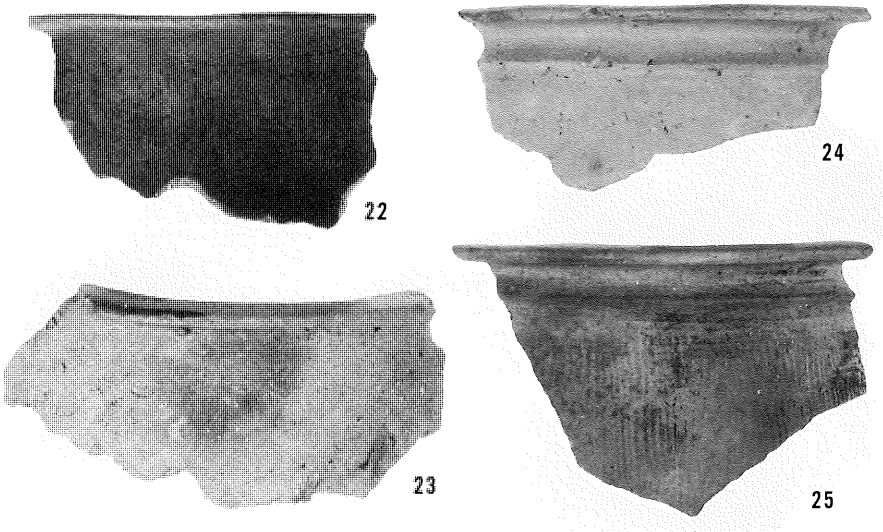
14

5号溝出土土器

図版19

5 号溝出土土器

図版20



5号溝出土土器

図版21

28

29

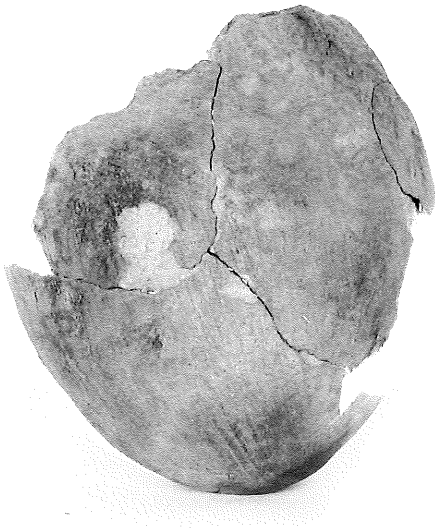
30

5号溝出土土器

図版22

31

32



33

5 号溝出土土器

図版23

34

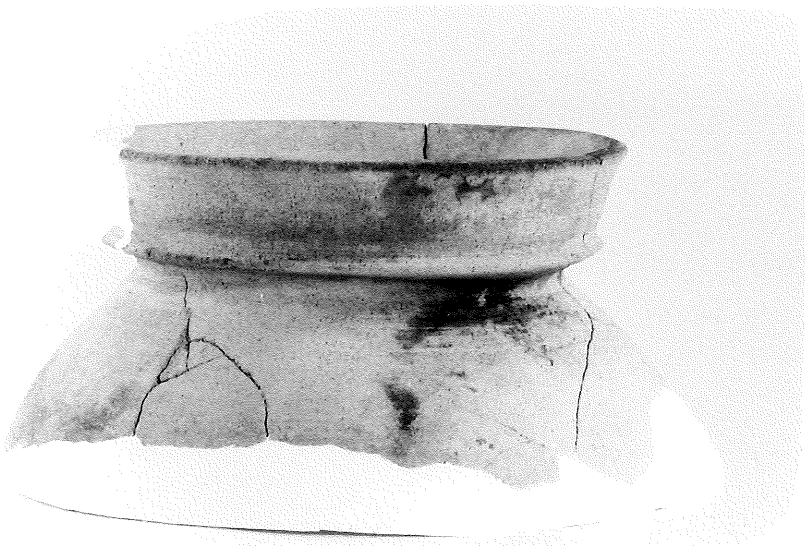
35

36

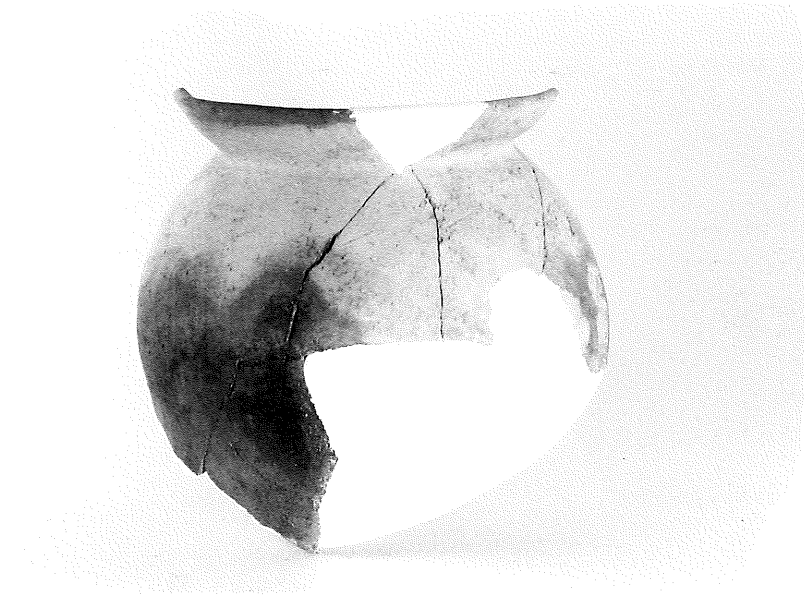
5号溝出土土器

図版24

37



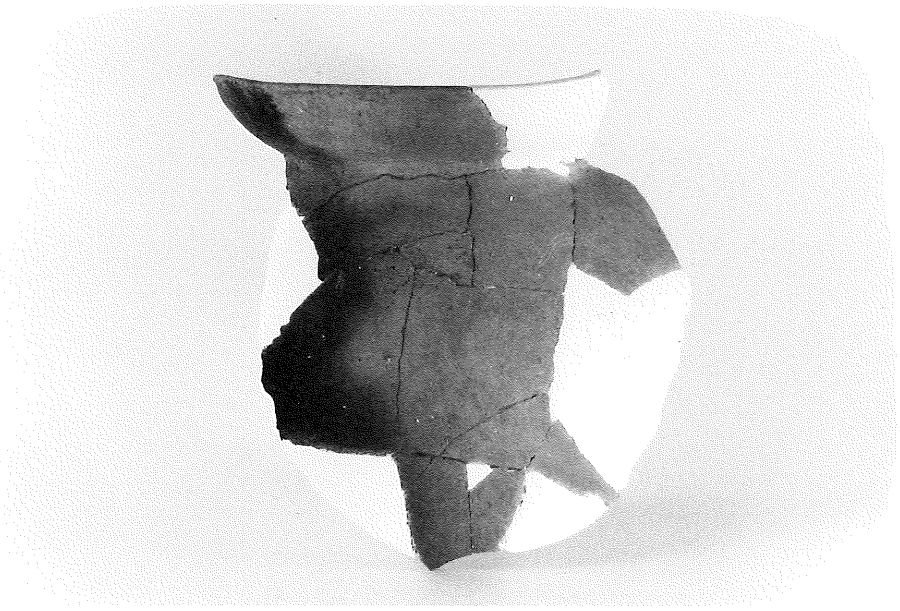
38



39

5 号溝出土土器

図版25



40

41

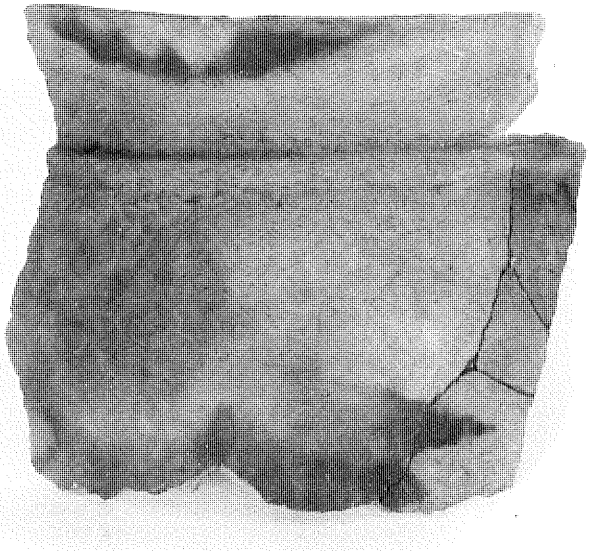
42

5号溝出土土器

図版26

43

44



45

図版27

46

47

48

5 号溝出土土器

図版28

49

50

51

52

53

5号溝出土土器

図版29

54

55

56

57

5 号溝出土土器

図版30

58

59

60

61

5号溝出土土器

図版31

62

63

64

5 号溝出土土器

図版32

65

66

67（2号溝）

2号・5号溝出土土器

図版33

69（2号溝）

70

71

2号・5号溝出土土器

図版34

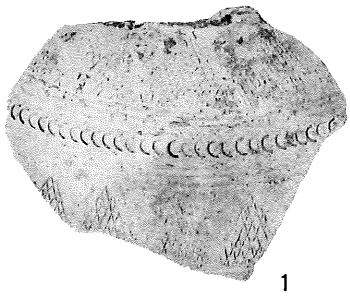
72

73

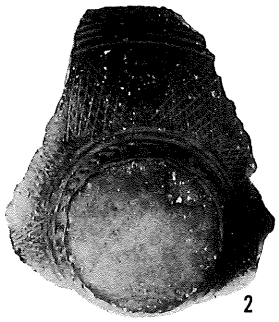
74

5号溝出土土器

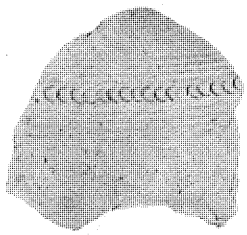
図版35



1

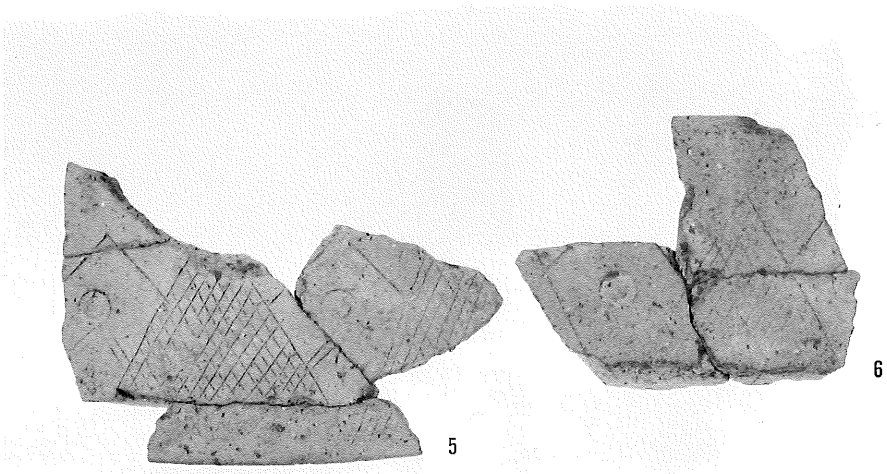


2



3

4

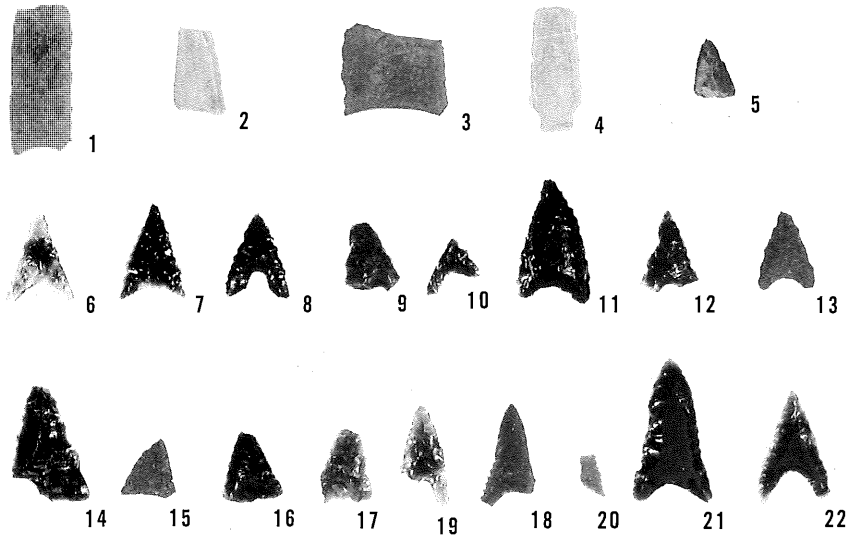


5

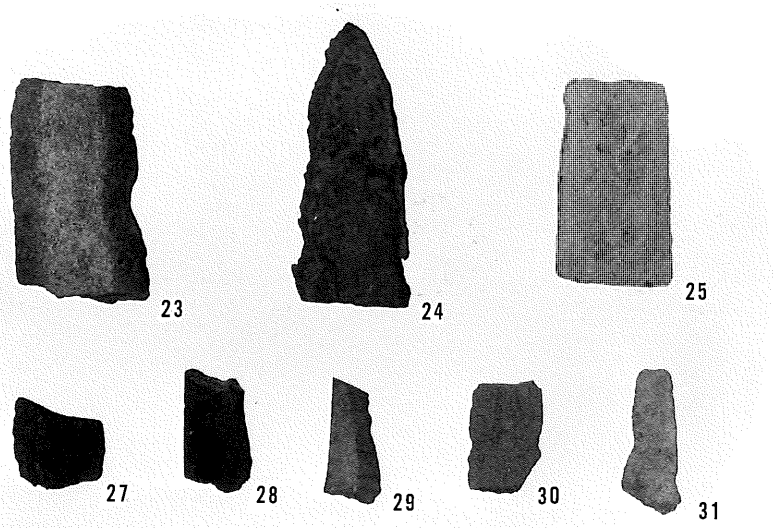
6

搬入土器

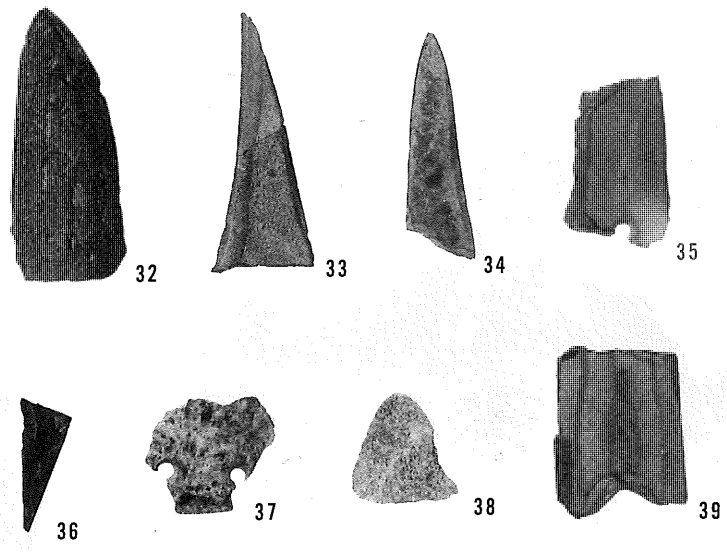
図版36



石鏃



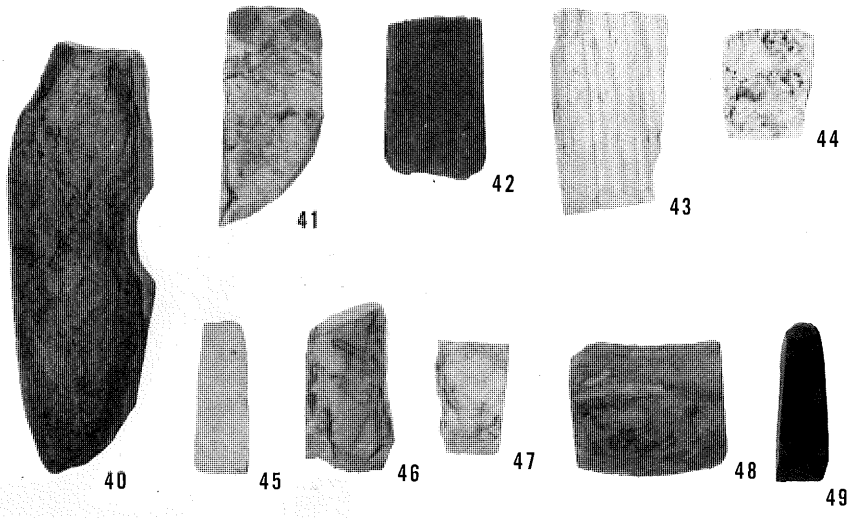
石剣



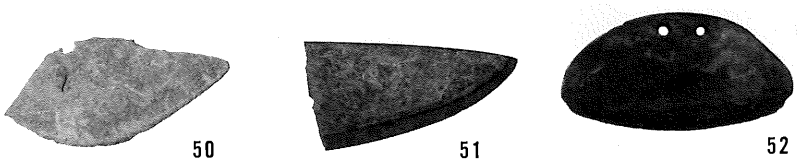
石戈

石器

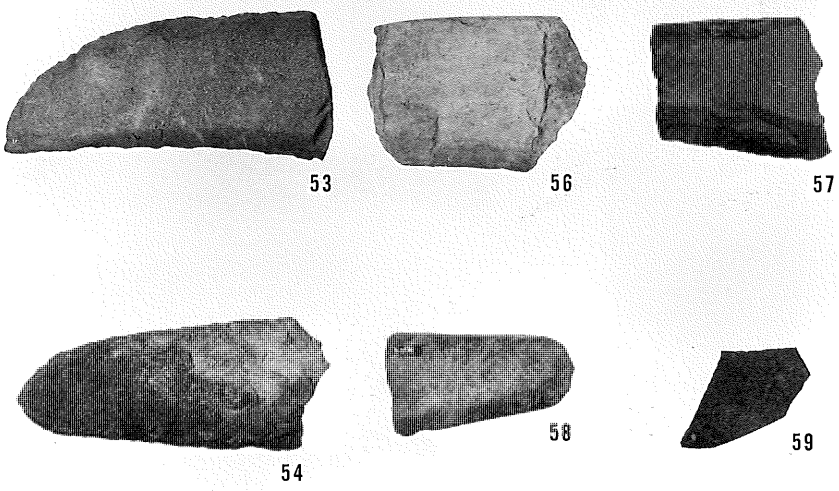
図版37



石斧



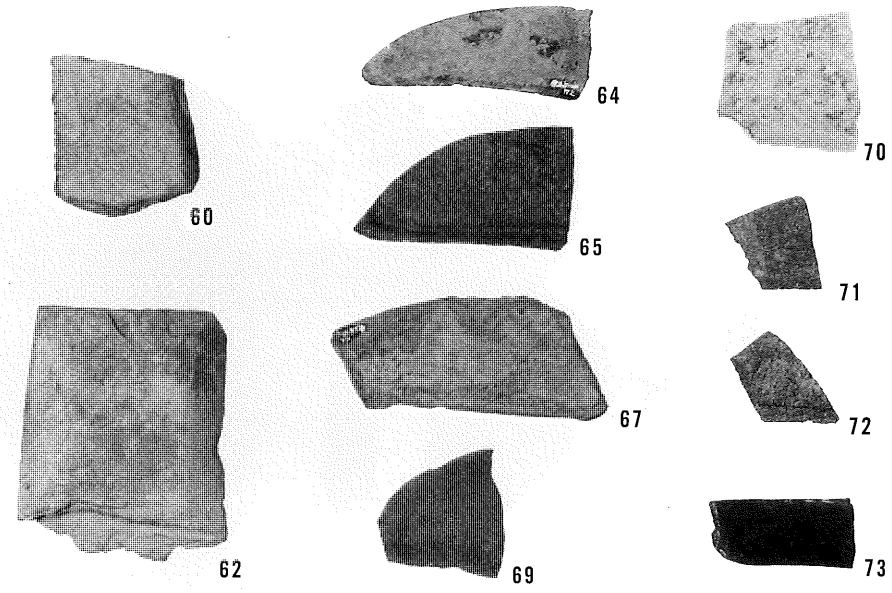
石庖丁



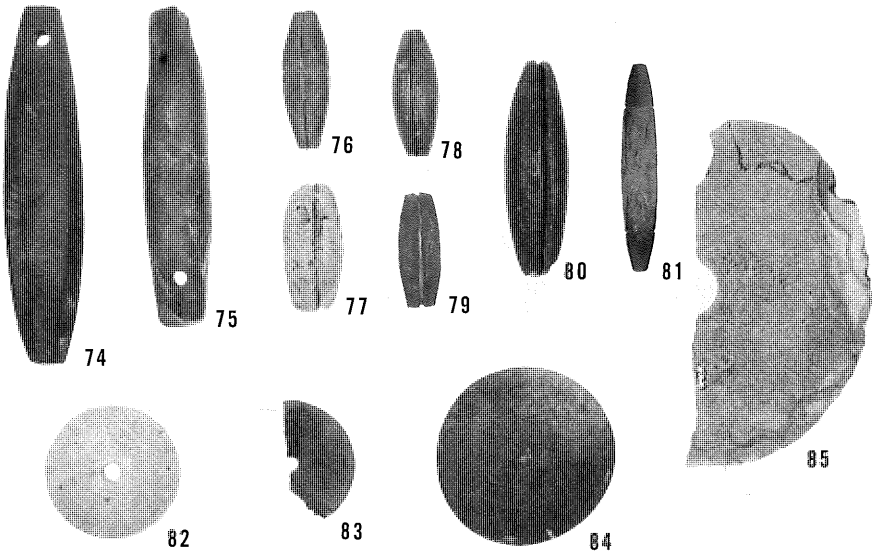
石鎌

石器

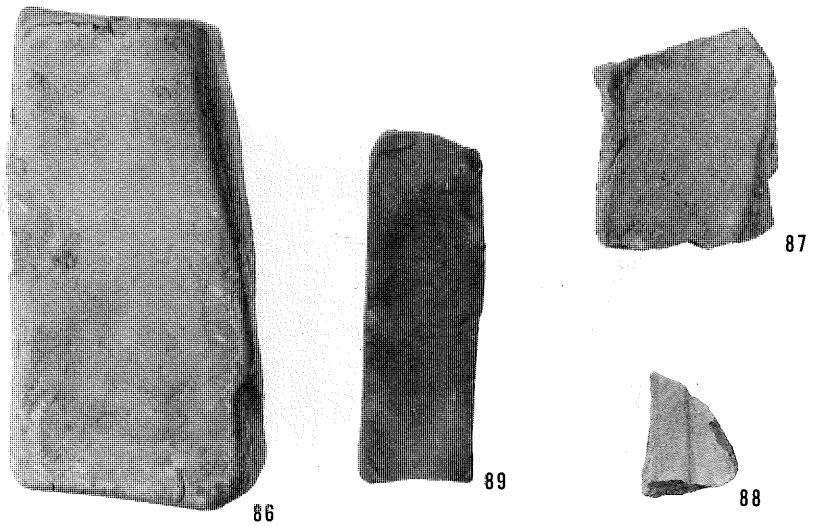
図版38



石鎌



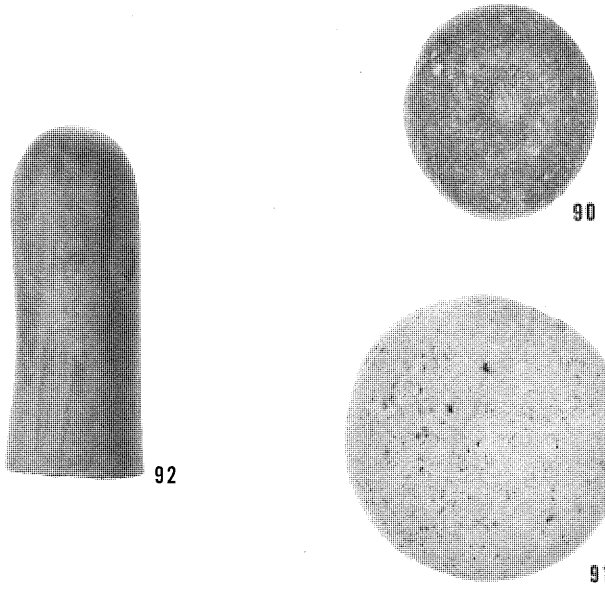
石錘・紡錘車



砥石

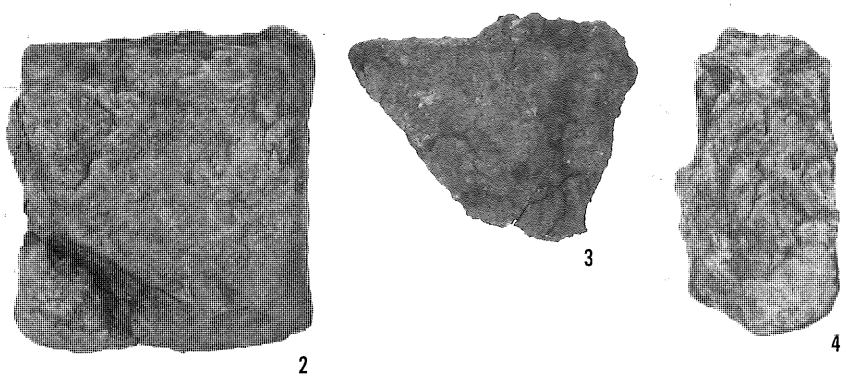
石器

図版39



磨石・凹石

鉄斧

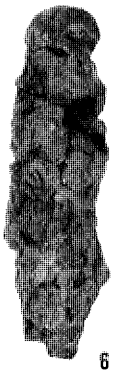


鉄斧

石器・鉄器

図版40

5

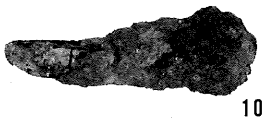


6

7

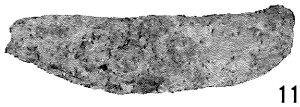
鉇

8



10

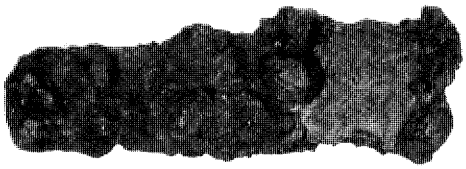
9



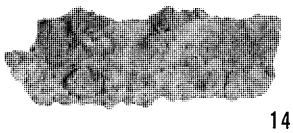
11

刀子

12



13

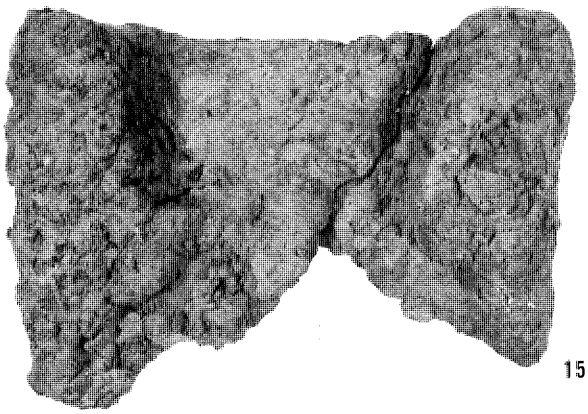


14

鉄鎌

鉄器

図版41



15

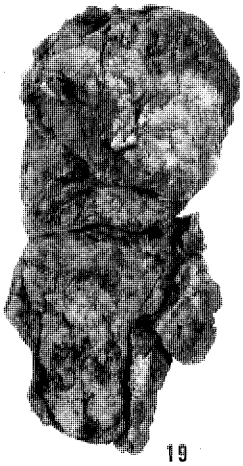
鋤先

16

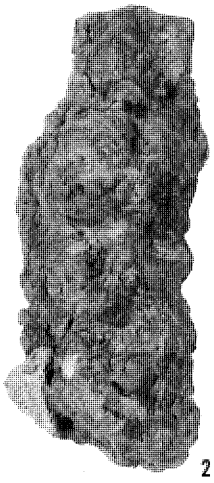
17

18

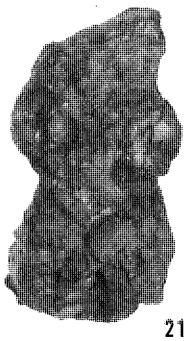
鉄鏃



19



20



21

鉄剣

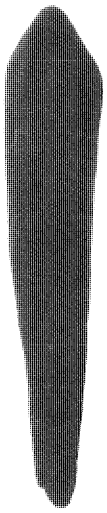
鉄器

図版42

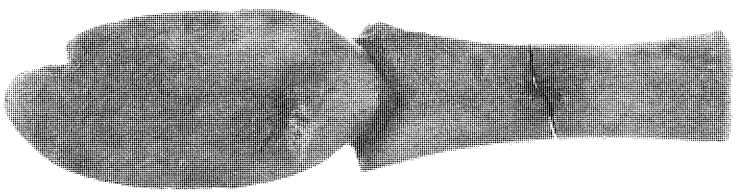
22

24

不明鉄器



3

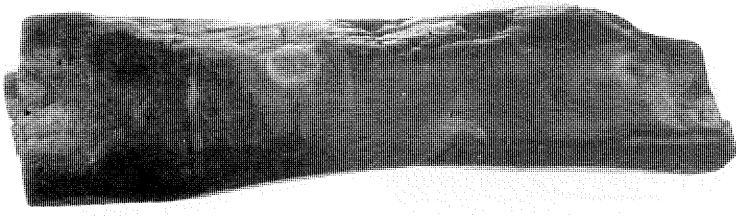


4

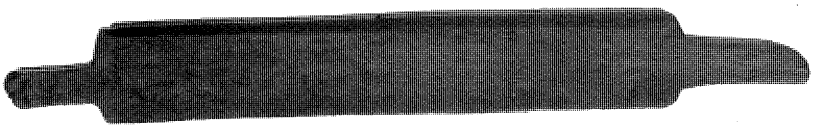
鉄器・大溝出土木器

図版43

5



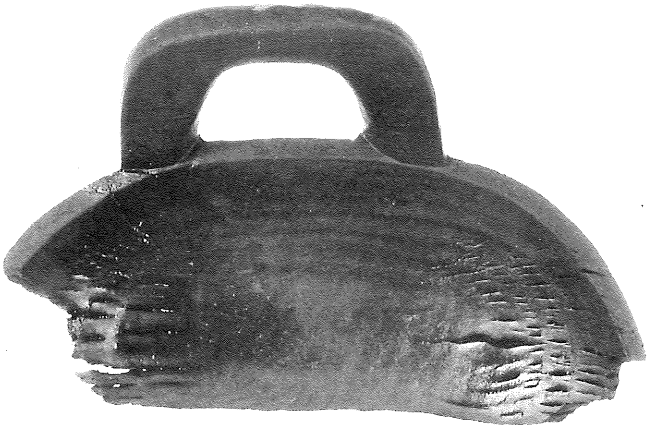
6



10

大溝出土木器

図版44



7

7

11

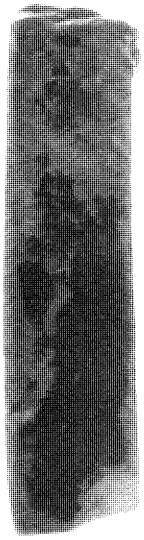
47

（47のみ11号溝出土）

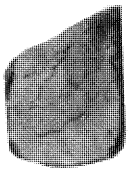
大溝・11号溝出土木器

図版45

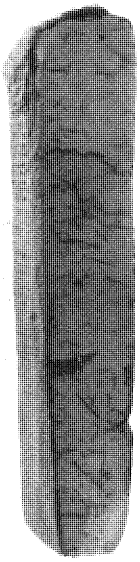
8



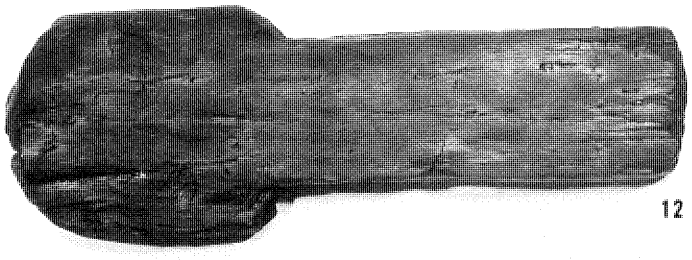
9



8



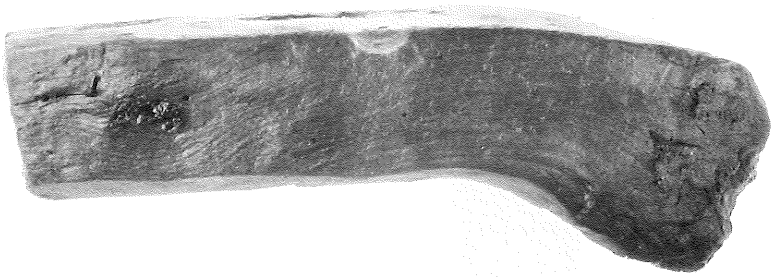
9



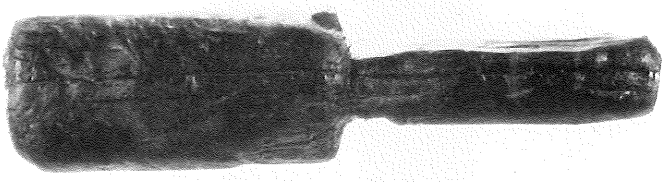
12

大溝出土木器

図版46



13

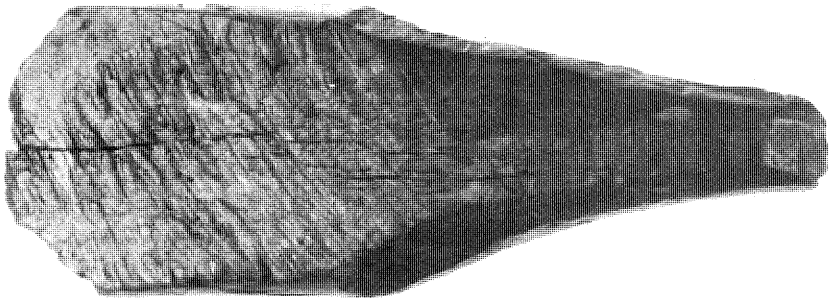


14

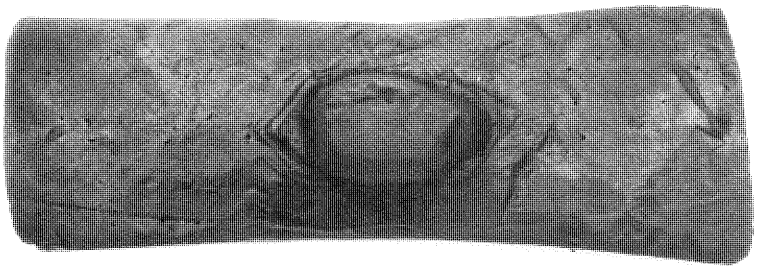
15

大溝出土木器

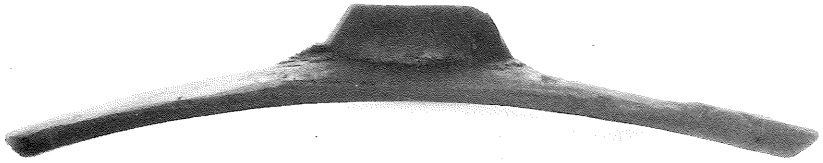
図版47



16



17



17

大溝出土木器

図版48

22

23

24

大溝出土木器

図版49

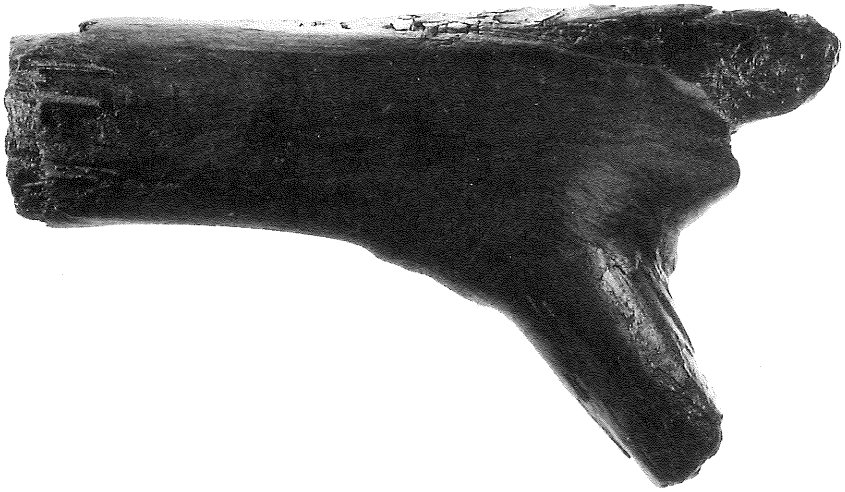
25

26

27

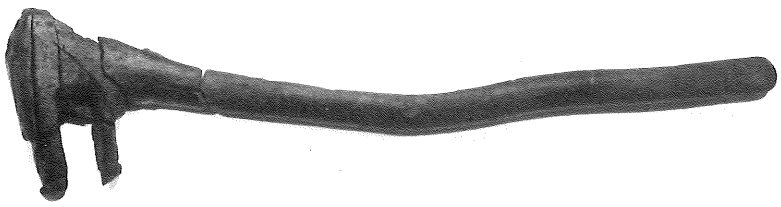
大溝出土木器

図版50



29

30

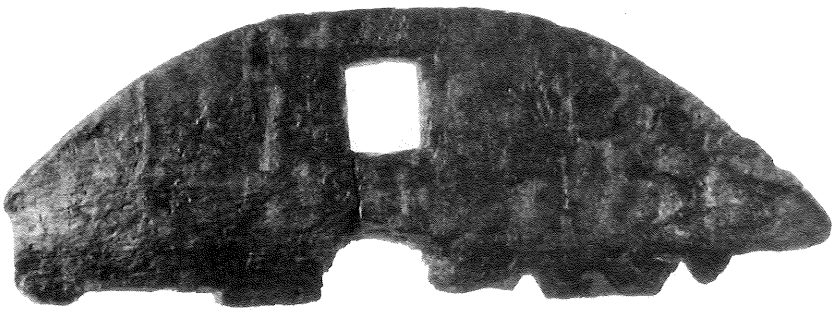


31

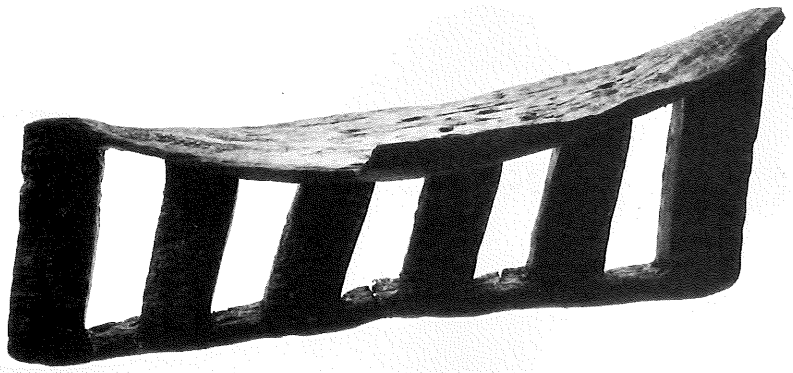
大溝出土木器

図版51

33（1号溝）



34（2号溝）



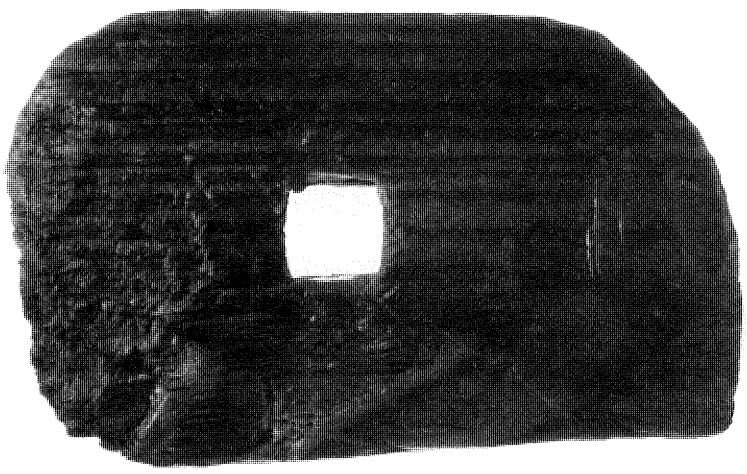
35（1号溝）

1号・2号溝出土木器

図版52

37（2号溝）

38（5号溝）

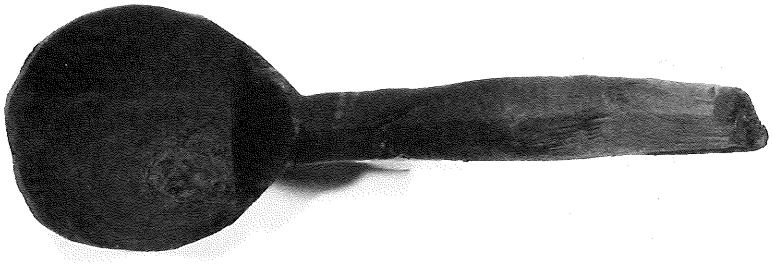


40（5号溝）

2号・5号溝出土木器

図版53

42（4号溝）

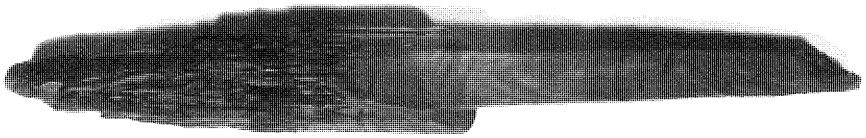


43（5号溝）

43（5号溝）

4号・5号溝出土木器

図版54



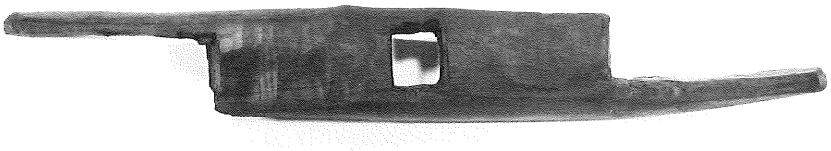
44（5号溝）

45（5号溝）

46（12号溝）

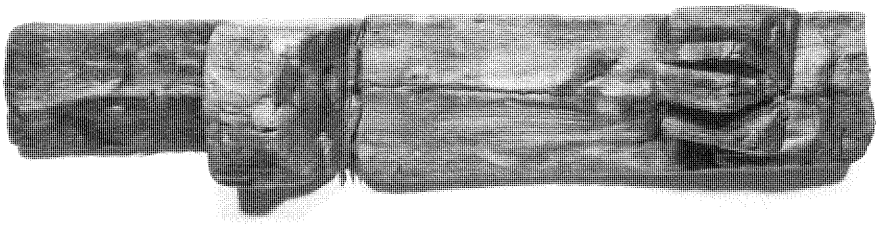
5号・12号溝出土木器

図版55



48（12号溝）

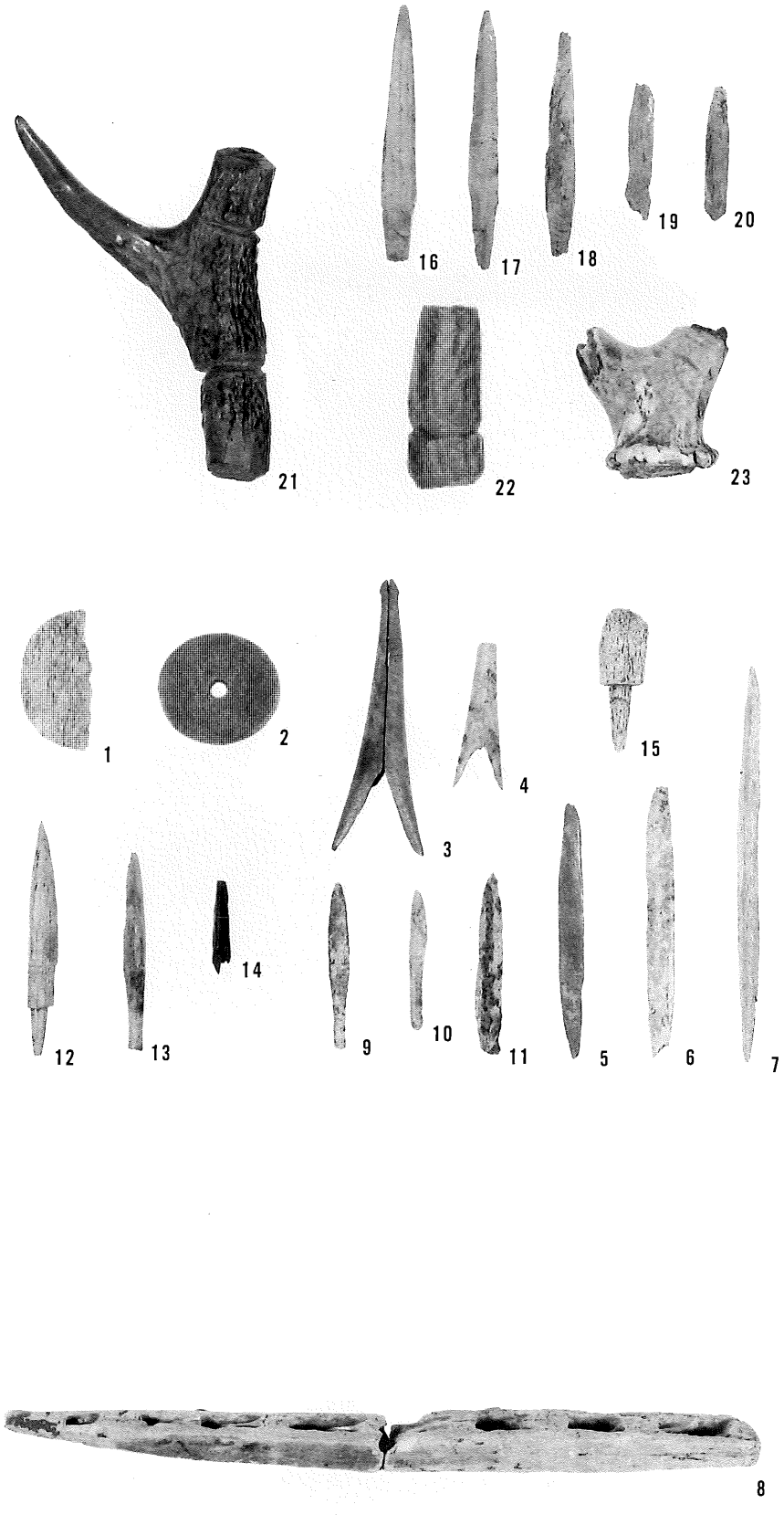
49



50（12号溝）

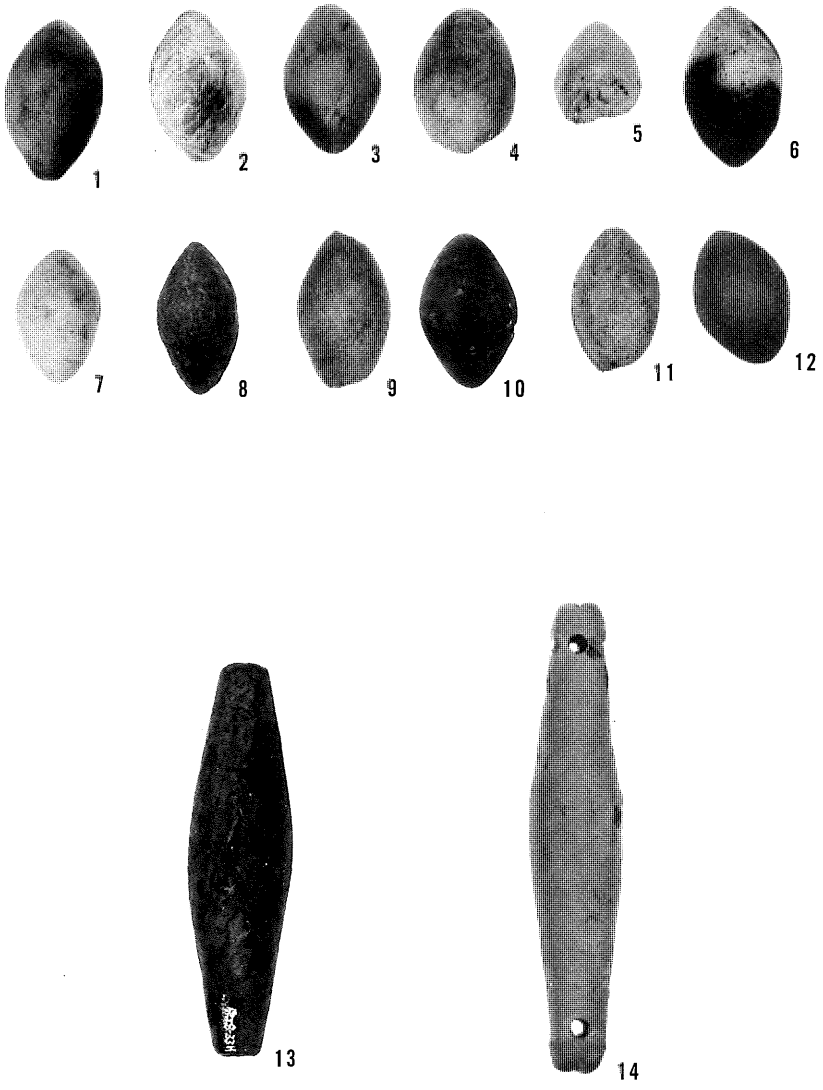
12号溝出土木器

図版56



骨角器

図版57



土製品・装飾品

Ⅶ. 付　　編

朝鮮半島系の土器

武末　純一

はじめに

1993年度に発掘された朝鮮半島系の土器についての執筆を求められたため，1995年３月13～15日に資料の調査を行なった。当年度の出土土器は膨大な量で，いまでもまだ登録整理中なため，筆者が直接すべての土器片にあたって抽出することはとうてい不可能であり，整理の過程で「朝鮮半島系か」としてすでに選び出されていた資料を対象とした。またその量も予想外に多かったために，時間的な制約もあって，その中から，確実な資料やどうしても今回報告しておくべき資料に限定せざるを得なかった。したがって当年度出土の朝鮮半島系土器は，本報告以外にもまだかなりの量があり，見落している器種や器形の存在は当然予想されるが，大まかな様相は今回の報告でつかみえたと考えている。なお，原稿執筆中や提出後にも収録すべき資料が続出したため，追補を２回行なった。

朝鮮半島系の土器は，無文土器系土器，三韓系土器，楽浪系土器，三国陶質土器の大きく四者に大別できる。無文土器は朝鮮半島の青銅器～鉄器時代初期の土器である。楽浪土器は楽浪郡一帯を中心に使われた中国漢式系の土器で，谷豊信氏によれば(1)灰色泥質系土器，(2)滑石混入土器，(3)白色土器，(4)縁釉陶器，(5)灰釉陶器があり，(1)～(3)は土城や墳墓から多数発見される楽浪郡産の土器，(4)(5)はほとんどが中国からの搬入品である[1]という。帯方郡産の土器もこの中に含む概念である。三韓土器は朝鮮半島南部の原三国時代の土器で，古くは金海（式）土器とも呼ばれ，最近では瓦質土器という名称も有力になってきているが，筆者は時代と分布地域が三韓の時代や領域と重なることから三韓土器と呼んでいる[2]。その内容は楽浪の灰色泥質系土器の系譜をひき，密閉した窯の中で還元焔で焼かれて青灰色や灰白色を呈する軟い瓦質土器と，無文土器以来の酸化焔で焼かれた赤焼土器（韓国では軟質土器と呼んでいる）の二者がある。縄目や格子目の叩きも特徴的である。三国土器はほぼ朝鮮半島の三国時代に相当する土器である。還元焔で焼かれ，硬質でガラス質の皮膜が器全面をおおう陶質土器が特色だが，瓦質土器や赤焼土器も存在する。今回の原の辻遺跡出土資料に「系」の字を付したのは，無文土器に日本列島産かとみられるものを含むことや次の三韓土器までの存続幅があって三韓赤焼土器との区別が難しいものがあること，三韓瓦質土器には楽浪灰色泥質系（瓦質）土器との区別が難しいものがあることや，三国土器までの存続幅があって特に破片では三国瓦質土器との区別が難しいものがあることなどの理由による。

(1)　無文土器系土器（第１図１～７，図版１・２）

１～５は朝鮮半島南部の無文土器時代後期の粘土帯甕である。

１は同一個体の口縁部の破片で，２点ある。断面円形の粘土紐をそのまま貼りつけ，横方向のナデ

と研磨で仕上げる。器形は胴部へ向かってひろがる。胎土は精選されており，断面は青味がかった灰色だが表面は内外ともに黒色を呈し，黒色研磨の甕として良いと思われる。口径は12.0cmである。

2は粘土紐を貼りつけるが，ややかぶせたようになって，外面は断面円形を呈するものの，内面は直線的で，粘土紐の直下の器壁も厚い。口縁部は暗茶褐色だが，体部は淡茶褐色である。3はやはり口縁部に断面円形の粘土紐をかぶせるように貼りつけているが，ヨコナデで仕上げて口縁上端が幅6mmほどの水平面をなす。口縁上面を平坦につくるこうした特色は朝鮮半島ではほとんどみられず，佐賀県土生遺跡など日本列島製の擬無文土器とされる粘土帯甕に多くみられる(3)。器面は淡乳灰色を呈し口径は12.3cmである。

4も断面円形の粘土紐を貼りつけた甕で，口縁外面下半に指おさえの痕がのこり，体部は指で縦にナデている。器形は口縁部に最大径があり底部に向かって単純にすぼまっている。口径は11.4cmで，淡茶褐色を呈するが，体部外面にはススが付着している。

5は同一個体の口縁部の破片で，2点ある。粘土紐を貼りつけた断面三角形の口縁である。口縁部は指おさえとヨコナデ，体部内面は指で縦にナデている。体部外面は図版1—5bの部分写真からもわかるように叩き目と刷毛目の痕がわずかに残っており，平行叩き目を縦の刷毛目で調整した後，さらに指で縦にナデて消している。口径は19.7cm，胎土は淡赤褐色で細砂粒を多く含むザラザラした質感の土器である。

6はやはり粘土紐を貼りつけた断面三角形口縁の甕である。体部外面の刷毛目が粘土紐の接合面まで入り込んでいるから，接合する前に縦刷毛目で調整したことがわかる。刷毛目は一部ナデ消されている。口縁外面は指おさえ，体部内面は指で縦にナデている。口径16.0cmで，淡褐色を呈し砂粒を多く含んでいる。

7は完形に復元された把手付の壺である。底部はやや上げ底となった平底で，外底面にはナデが一周しており，底部から胴部へと移行する部分には強いオサエがみられる。胴部はやや長胴で最大径が胴中位よりもわずかに上の方にあり，すこし肩の張った卵形をなす。外面は器壁の剝落が著しいために調整はほとんど不明で，肩部の一部にミガキの痕がみられる。内面は横方向のあらい刷毛目に指おさえで仕上げている。把手は横断面が横長の楕円形をなす牛角形で，向かいあわせに一対が貼りつけられている。つけねは広く，先端へ向かって急激にすぼまる。端部は丸くおさめられ，全体に指おさえとナデで仕上げられている。把手が貼りつけられた部分の内面は，盛り上がって黄褐色を呈し，そのまわりは全体に暗茶褐色となっている。器壁外面と把手が接する面積よりも黄褐色胎土の範囲が狭いことからみて，把手の内壁側部分を一段細く円棒状につくって押し込み，あるいは差し込んで，内面にとびでた部分と器壁との落差を粘土を塗ってなだらかに仕上げた可能性が高い。把手の差し込み部分を細くする技法は無文土器の把手では勒島遺跡に例(4)がある。

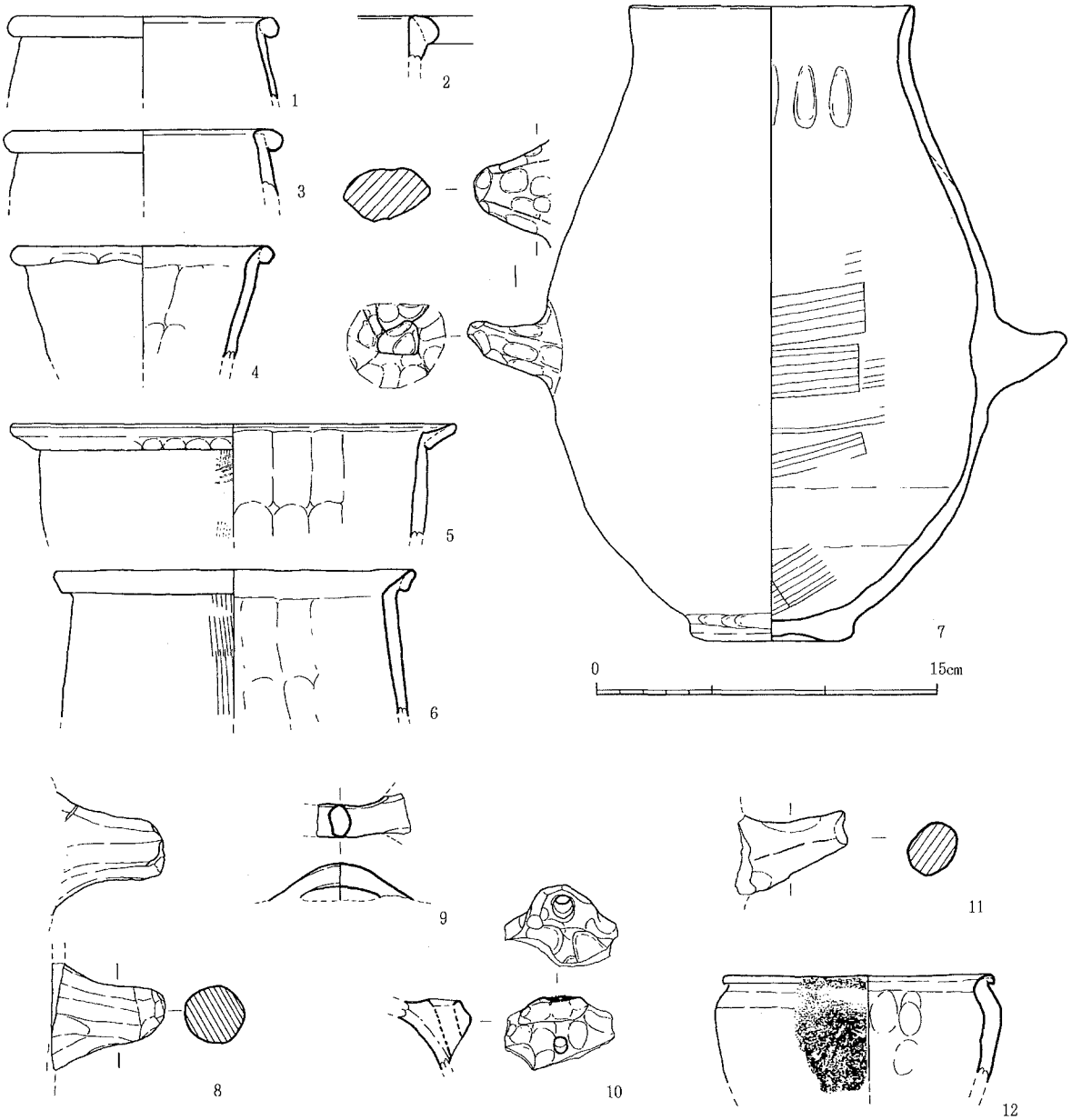
肩部から頸部の器形は上部へ向かってゆるやかにすぼまっている。頸部のつけねでは胎土の接合部で剝離しているが，接合面は外傾して幅2cmとかなり広く，粘土板の貼り合わせに近くなっている。口縁部は頸部からゆるやかに反転し，短く直立気味に外反して端部を丸くおさめる。頸上半部の内面

は指ナデで仕上げている。

器高22.9cm，口径12.6cm，底径7.2cm，胴部最大径は約20cm，把手をふくめると26.4cmである。胎土はあらく，砂粒を多量に含んでいる。

以上の無文土器系土器のうち１・２・４・５・７は朝鮮半島産ないし日本列島での忠実復元型とみられるものである。６は，外面に刷毛目がそのまま残る。無文土器は刷毛目を残さないのが原則だが，勒島遺跡例では刷毛目を残しているため列島産と決めつけるわけにはいかない。３は口縁上面をヨコナデで水平に仕上げる手法からみて日本列島，それもこうした擬無文土器の甕が多く発見されている北部九州（壱岐・対馬を含む）産の可能性が高いといえよう。

これらの時期はいずれも無文土器時代の後期にあたる。後期無文土器は前半の水石里式と後半の勒



第１図　無文土器系土器および三韓系赤焼土器

島式に細分される。本報告例も１～４が水石里式，５～７が勒島式の段階に比定されよう。

この中でも１は粘土紐の形状や接合のつくりからいって，もっとも早い時期に比定される。出土した層からの共伴の土器も前期末を中心としている。２・３は中期初～前半頃に比定されるであろう。４も同様だが，この資料については前期までさかのぼる可能性もある。

７については底部のつくりや全体の形状をみると一見古そうに思われるが，朝鮮半島南部の無文土器であることは間違いなく，朝鮮半島南部での牛角形把手の出現時期は勒島式以降とみられる(5)からこの時期に比定される。横断面形が横長で古い形態を示すことから，三韓土器の時期まで下ることはないと思われる。残念ながら明確な共伴関係はとらえられていないが，日本の土器との関係でいえば５～７は中期前半を中心とする時期に相当しよう。

(2) 三韓系赤焼土器 （第１図８～12，第３図28，図版１）

把手が数点でており，ほかに小形の鉢がみられる。

８は牛角形の把手で，７の把手に比べると棒状になり，端部もだいぶ直線化がすすんでいる。横断面形も円形に近くなっているが，まだ厚さに比べて幅がやや広い。把手はナデで全体を仕上げているが，内面には粗いタテハケと丹塗の痕が残る。

９は小形の把手である。蓋の上面としたが，横位につく把手の可能性もある。復元すれば長7.4cm,中ほどの幅1.5cm，厚1.05cmである。

10は壺の肩に横につく小さな把手である。上面で径1.2cmをはかるが，貫通している孔径は0.7cmである。器面に貼りつけて，そのまま指おさえとナデで仕上げている。全体に方形に近いが中央に稜ができている。正面から見た時の横の長さ3.5cm，縦の長さ2.7cm，上面での器体までの長さは2.5cmである。胎土は精選され外面赤褐色，内面灰赤褐色を呈する。福岡県前原市浦志遺跡Ａ地点で出土したような短頸直口の小形壺(6)になるかと思われる。

11は断面円形となり棒状化がすすんだ牛角形の把手である。側面からみると端部は直線的に終わっているが，上面からみると先端がすぼまっている。長さは4.5cmである。二次的に熱を受けて淡赤灰色を呈している。

12は小形の鉢である。肩の部分に最大径があって頸部は内傾する。口縁部は短く外反して端部を方形に近くつくるが，観察したところでは小さく外に折り曲げて上から粘土をかぶせたようにみられる。後期無文土器の口縁部のかたちをそのまま受けついでいるかのようである。口縁部はヨコナデで仕上げる。胴部外面はナデ消されているため不鮮明だが，粗い斜格子目の叩きで成形された痕跡がみられる。内面は指ナデで仕上げており，口径12.1cm，最大径12.6cmである。赤褐色を呈し胎土には砂粒を多く含んでいる。胴径が器高を上回り，大きな平底がつく器形となろう。

三韓土器は大きく前期と後期に分かれるが，今回の報告例では８・12が前期に，９～11が後期に位置づけられよう。なかでも８は無文土器の末期にさかのぼる可能性もあり，12も前期でも古くなるか

とみられる。このほかに図版１－９に示した牛角形把手も，一応三韓系土器に入れておく。12は朝鮮半島産であろうが，他の把手については日本列島産の可能性も残る。

(3) 楽浪系土器　（第２図，図版３・４・５）

多くは灰色系泥質のいわゆる瓦質（13～21・23）だが，滑石混入土器（22）もみられる。13～18は壺，19・20は洗形の杯，21は大鉢，22は植木鉢形の鉢，23は筒杯である。

13は口縁部が外側に方形に張り出し，上面を水平につくる。厚手だが，頸部は外反しつつ下方にわずかに開くから，植木鉢形ではなく，胴部が球形になる壺の口縁部としておく。ヨコナデ後に口縁端部をさらに指でナデているため，口縁端部の下方が，場所によっては下にはみ出す。胎土は精選されているが，砂粒が混じる。全体に淡茶褐色だが，口縁端部だけは黒い。口径は10.6cmである。

14は厚さ３～3.5mmと薄手の壺の小片で，外面に縄目叩き，内面には同心弧の当具痕が残る。胎土は精選されて内外面ともに灰色を呈する。

15も無文の壺の胴部破片でロクロの痕跡がよく残っている。胎土は精選され，器壁の断面と内面は灰色だが，外面は灰黒色を呈する。胴最大径20.4cmである。

16は外面に縦方向の縄目の叩きがみられる壺の下半部である。三韓瓦質土器との区別が難しいが胴部が屈曲しているところから，18のような器形を考え一応楽浪系としておく。

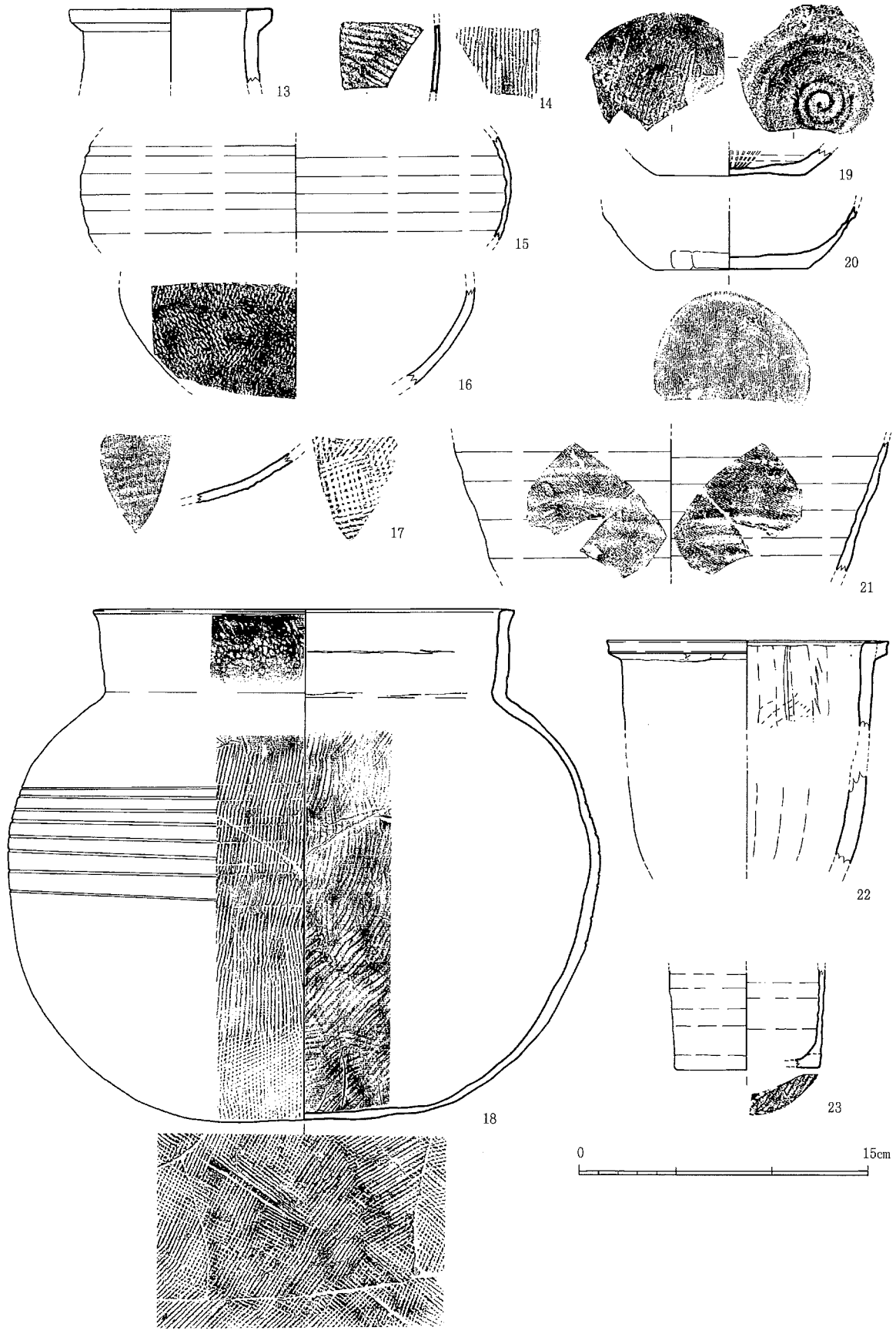
17は壺の底部付近の小破片である。縄目叩きで内面の当具の痕は同心弧をなしており，楽浪土器（系）とした。

18は１号溝から出土し完形に復元できた大形の壺である。底部は平底気味の丸底である。胴部は球形だが，胴部最大径30.6cmに対して頸部つけねまでの高さ21.4cmとやや横長の器形であり，肩部と胴下半部に屈曲点があって，胴中位は直立気味になる。口径は12.9cm，総高26.4cmである。口頸部は内弯気味に直立し，端部は水平で外方にわずかに張り出す。成形は，口縁内面の粘土の接合痕跡からみて，粘土を積み上げた後に，縦方向の縄目で底部から口縁部まで叩いており，したがって底部外面では叩き目が縦横に交差する。また，口縁部から肩部にかけては，内外面ともにヨコナデで消している。胴部外面には幅２mmの横方向のラセン沈線を９回転させて刻んでいる。胴部内面には同心弧の当具痕が残る。青灰色を呈し焼成は良好である。

19・20は洗形の杯の下部である。おそらく口縁上面を水平にし，端部が断面三角形で外に張り出す器形になるとみられる。

19は底径7.8cmで，外底面は静止糸切りの後に外周だけをヘラで削って消している。内面にはロクロの痕跡がよく残り，かすかではあるが６条の縦方向の集線文が，上からみて十文字をなすように３個所まで確認できるから，４個所に刻まれたとわかる。色調は灰色である。胴部外面の残りは悪いが，底部付近は横に削ってからナデ消しているようである。

20は底径8.0cmで，外底面は回転糸切りの後にやはり外周だけをヘラで削っている。内面および外面



第2図　楽浪系土器

にはロクロの痕がよく残るが，胴部外面の最下部には横方向のヘラ削り痕がみられる。色調は灰色である。

21は器壁が薄いが，大鉢の胴下半部の破片としておく。灰色無文で内外面ともにロクロの痕がよく残っている。この破片での最大径は22.6cmだが，このまま開いて水平な口縁部へいたるとみられる。

22は滑石混入の植木鉢形の鉢で大きな平底がつくとみられる。2片あり，明茶褐色の色調やつくりから同一個体とした。口縁部は外方へ断面方形の粘土紐を貼り付けて上面を水平につくるが，端部はヨコナデでくぼみ，口縁下面には指おさえの痕が残る。内面は縦方向のヘラケズリをナデ消してととのえているがヘラの痕が残っており，一部にはかすかに同心弧をなす当具の痕跡がみられる。ただし，外面は丁寧にナデ消されて叩き目の痕は明らかではない。口径は14.6cmである。また上半部の破片の内面下方には，ごく一部に細かな平織の布目痕が残っていて，たしかに楽浪土器であることを証明してくれる。

23は2片あり，筒杯の下半部である。底部の円盤に筒状の胴部を接合する。底径7.6cmで外底面には静止糸切りの痕がそのまま残る。上方にいくにつれて，やや外に開くであろう。胴部は内外面ともにロクロの痕がよく残っている。そして胴部の外面は最終的に斜方向のヘラ研磨で仕上げられているために明瞭ではないが，底部付近は面取風にヘラで削ったとみられる。胎土は精選され色調は灰色である。

28は灰色で非常に軟質の壺で，口頸部を欠失するが，頸部つけねから高台部まで残っている。肩部には高さで1.0cmの間隔をおいて，幅1㎜の横沈線が上に1条，下に2条めぐっている。胴部は球形で削り出しの高台がつく。外面の胴中位以下は回転ヘラケズリで仕上げられる。内面上半部は丁寧なヨコナデ仕上げだが，下半部には上からみて「の」字のロクロ痕が顕著に残っている。外底面の高台付近には同心円状の痕跡があり，回転糸切り痕に似ているが，高台の部分にまで及んでいるため，カキ目と考えた。現高7.8cm，底径5.85cm，胴部の最大径は11.7cmである。

このほかに図版4－4～6・9～11に示すようなロクロ痕の顕著な土器片や，縄目叩きで内面に同心弧の当具痕が残る土器片があって楽浪土器（系）として処理しておく。

これらの土器はいずれも朝鮮半島産である。三雲遺跡番上II－5土器溜[7]での楽浪土器（系）の発掘結果からみても弥生中期後半～後期の中におさまる。中でも18・21・22・23は比較的古く，中期後半～後期前半代に相当するであろう。

(4) 三韓系瓦質土器 （第3図24～35，第4図36～41，図版6・7・8）

いずれも壺の破片である。

24は短頸球形壺の破片で同一個体が6片あり，頸部つけねから胴下半部までを図上復元した。下ぶくらみの扁球形胴を縦方向の平行叩き目で成形し，幅0.5㎜～1㎜の細い横沈線を上半部に密にめぐらしている。おそらくラセン沈線である。底部付近は格子目叩きで成形している。頸部つけねは，強い

ヨコナデで幅0.9cmほどの平坦面をつくる。口縁部は直線的に外反するであろう。胎土は精選され灰色を呈するが，器表の一部に丹がついている。胴部最大径は30.6cmである。同様な器形としては対馬島の小姓島5号石棺例[8]があるが，本例の方が胴部が丸味を帯びており，最大径も上方にあって，やや新しい傾向を示している。

25は長胴丸底の体部に，やや長く外反する口頸部をもつ壺の上部破片である。胴部は縦方向の平行叩き後に横沈線をめぐらすが，内面全体と口頸部内外面はヨコナデで仕上げている。口頸部つけねの外面には，わずかに平坦面が形成されている。灰色で砂粒が混じるが，焼成は良く，瓦質土器の中ではかなり硬質である。

26は口頸部の小片で直線的に外反する。内外ともにヨコナデで仕上げているが，頸部のつけねのあたりに平行ないし縄目の縦方向の叩き目痕がかすかに残っており，口縁部まで叩き目で成形したことがわかる。緑灰褐色でやや軟い質である。口径は17.3cmである。

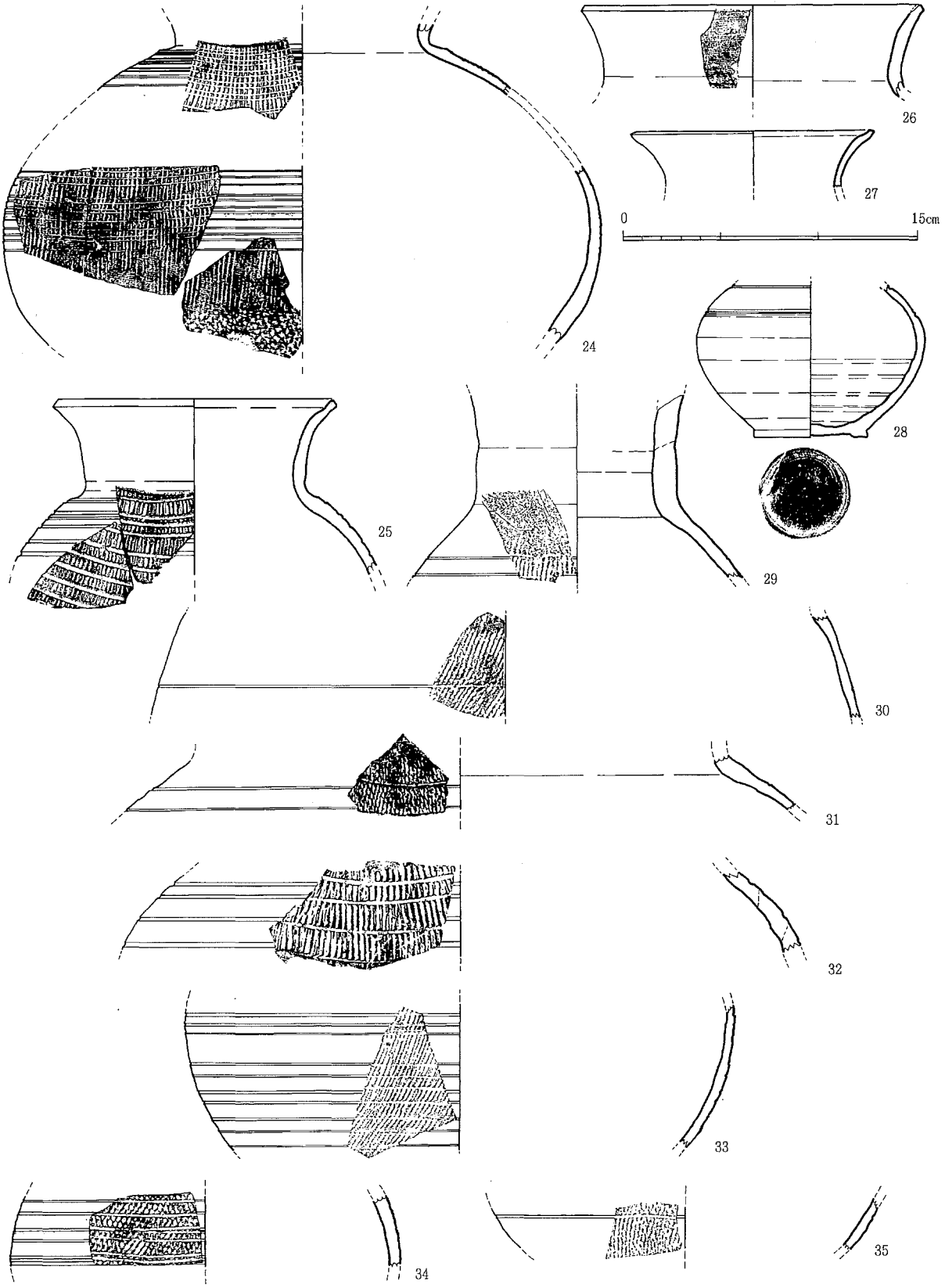
27は灰色を呈する非常に軟質の小形壺の口縁部片である。口縁端部は水平に近く，口縁内面が一度くぼむのが特色である。

29は胴上部から口頸部にかけての破片である。縦方向の縄目叩き後に横沈線をめぐらすが，肩上部から上は叩き目をナデ消している。頸部には粘土のつぎ目の痕がよく残っている。胎土は精選され白濁色の軟い質である。器形がナデ肩で，胴部よりも頸部つけねから上が分厚く，頸部も長く直立してわずかに開くことから，韓国慶尚道地方の前期三韓土器によくみられる長頸壺，卵形長胴丸底の体部に組合式の牛角形把手がつく長頸壺である。胴部内面は当具の痕がナデ消されている。

30は29と同様な色調と質の土器で，肩部の破片である。やはり粗い縄目叩きの後に横沈線をめぐらしている。29と同一個体の可能性もないではないが，胴径や厚さが29とは異なるために別個体として扱い，短頸球形壺とした。いずれにしても小片のため断定はできない。

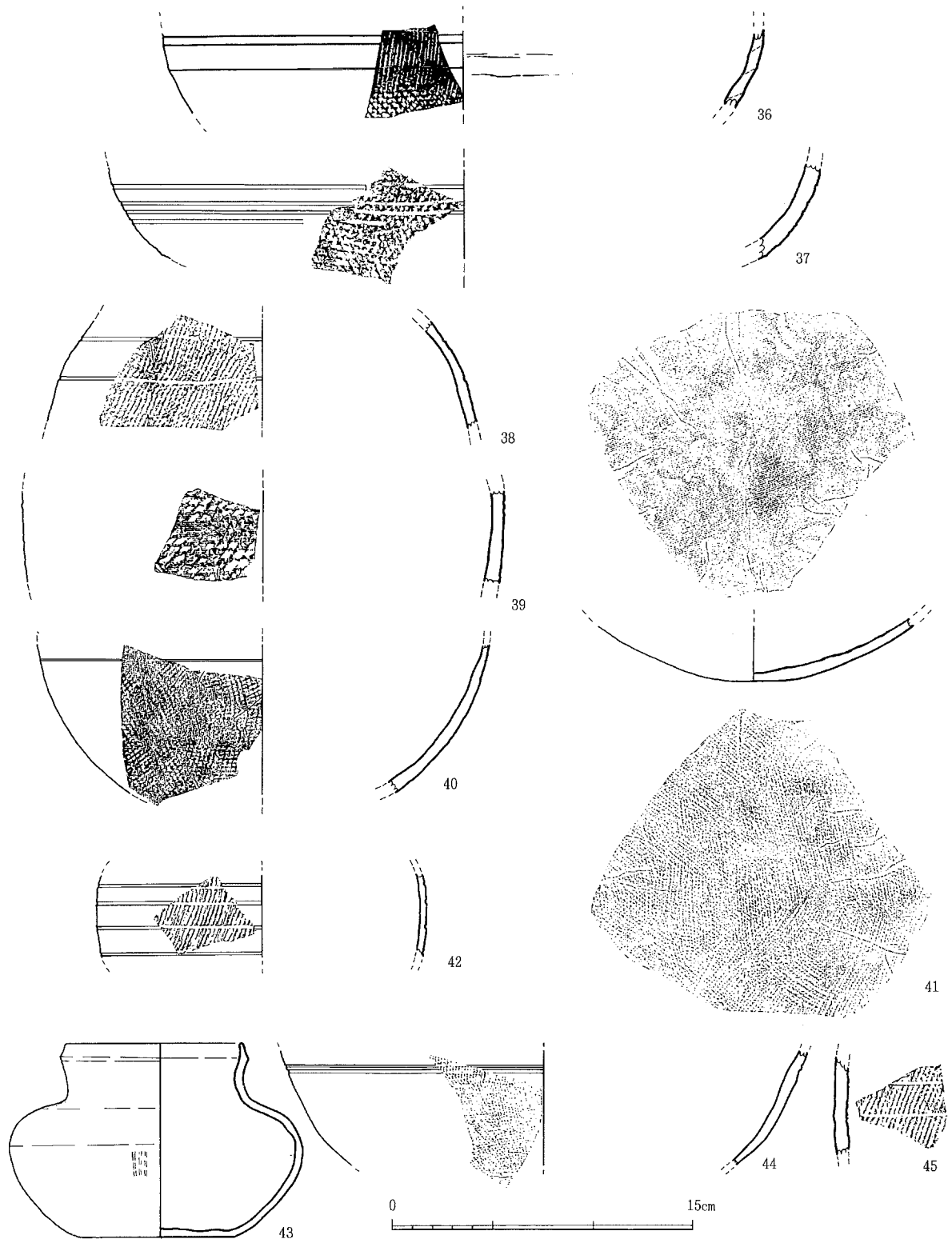
31は大形の短頸球形壺の破片である。縦方向の縄目叩き後に横沈線をめぐらし，頸部つけねから上はヨコナデで消している。内面はナデで仕上げている。灰色で細砂がかなり混じりザラザラした質感の土器である。

32～40は壺の胴部破片である。32は非常に粗い縄目叩きに幅25㎜ほどの太い横沈線をめぐらしている。胎土は精選され器表は暗赤褐色を呈し，断面や内面に接合の痕が残る。33も縄目叩きに横沈線をめぐらしており，内面はナデ仕上げである。胎土は精選されて灰白色を呈し焼成は良い。34は斜格子目の叩き後に横沈線をめぐらすが，途中で沈線が一度途切れてひき直している。内面は指おさえとナデ仕上げである。胎土は精選されて灰白色を呈し，焼成は良い。35は縄目の叩き後に横沈線をめぐらしている。内面はナデ仕上げである。胎土は砂粒を含んでやや粗く，灰色を呈する。36は胴上半の平行叩き目と，その後の底部付近の格子目叩きが重なる部分である。細い平行叩き目には幅0.5～1㎜の細い横沈線がめぐる。内面はヨコナデ仕上げである。細粒を含み外面黒灰色，内面は暗茶褐色を呈する。37も胴下半部の破片で，斜格子目の叩き後に幅2.5㎜前後の太いラセン横沈線がめぐるが，沈線の開始部が残っている。やや粗い胎土で淡灰赤褐色を呈する。内面はナデ仕上げである。38は胎土が精



第3図　三韓系瓦質土器（24～27，29～35），楽浪系瓦質土器（28）

選された白濁色を呈する軟い質で，縦方向の縄目叩き後に横沈線がめぐる。29ないし30と同一個体とみられる破片である。39は太い斜格子目叩きの破片で，内面はナデ仕上げである。胎土は精選され，灰白色を呈する。40はやや細かい格子目叩きの胴下半部で，幅１㎜の横沈線の最下段部がかろうじて



第４図　三韓系瓦質土器（36～41）陶質土器（42～45）

みとめられる。黒灰色の胎土は細粒を含みやや軟い質である。

41は丸底部の大きな破片で，外面は細かい縄目の叩きが縦横に交差している。内面は指ナデで仕上げるが，無文当具の痕がよく残っている。外面青灰色，内面黒灰色を呈する堅緻な焼成で，人によっては陶質土器とするような資料である。

以上の三韓系瓦質土器はいずれも朝鮮半島産とみられる。24・25・26・29は確実に三韓土器前期に属し，弥生中期後半～後期前半に相当する。なかでも24はやや古く位置づけられよう。25の長胴壺と29の長頸壺は日本国内では初めて報告された器種である。

これに対し27・28・40・41は，器形や質からみて，後期に位置づけられる。なかでも28・40は，三国土器まで下る可能性をもっている。

このほかにも図版６・７・８に示したように，叩き目をもったり無文瓦質の土器片が，かなり出土している。格子目にも大小ある(図版８－２～７)。また図版８－１は外面に陶質に近い光沢がみられる無文の壺の肩部破片で，釜山市老圃洞遺跡[9]などで出土している陶質土器出現期の瓦質土器との比較検討が必要だが，これらについては別の機会にゆずりたい。

(5) 三国陶質土器 （第４図42～45，図版９）

陶質土器には完形の壺１点（43）と，若干の破片がある。

42・44・45はいずれも叩き目をもつ壺の胴部の破片である。

42は縦方向の縄目叩きを横方向の沈線で区切り，内面は横方向のナデで仕上げている。

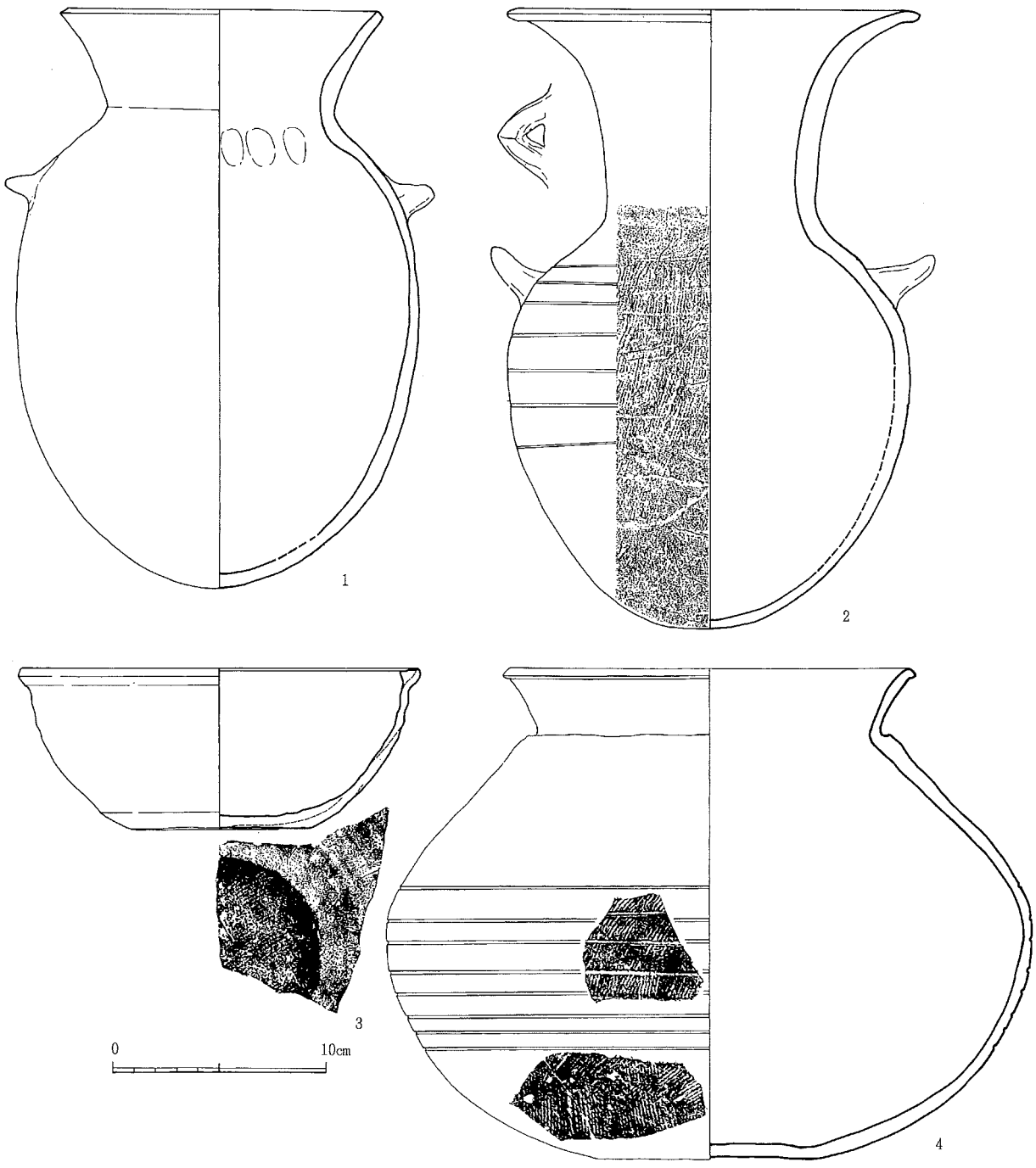
43は無文の小形短頸壺の完形品で，肩が張った扁球形の胴部に大きな平底がつく。口頸部は短く直立気味に外反しており，さらにその上部は反転内傾して複合口縁状となる。胴部は無文の叩き後に，口縁部から胴下半部までヨコナデで仕上げているが，頸部つけね外面に指おさえの痕が残る。口径8.7cm，器高9.7cm，胴最大径14.7cm，底径8.3cmで，暗灰色を呈するたいそう堅緻な土器である。

44は外面が青味がかった暗灰色を呈し，平行叩き後に浅い沈線をめぐらした胴の下半部で，内面は無文の当具とナデの痕が残る。

45は斜方向の縄目叩き後に，横沈線をめぐらす外面灰色の小破片である。

このほかに無文の陶質土器の小片が３片みられる（図版９－４～６)。

これらの陶質土器はいずれも朝鮮半島産で，そのつくりからみておおむね３世紀後半～４世紀代の古式新羅加耶系であり，韓国の慶尚道とのつながりが強いとみられる。ただ43については，近年大成洞29号墳で同様な大きな平底をもつ扁球胴の小形短頸壺が出土してはいるが[10]，複合口縁や大きな平底は全羅道方面に多くみられる特色であり，いまのところ韓国南海岸一帯の土器としておきたい。



第5図　参考となる瓦質土器（1・2・4三韓土器，3楽浪土器）
1・2　韓国密城高校　3　福岡県三雲番上Ⅱ－5土器溜
4　長崎県小姓島遺跡3号石棺
（『日韓交渉の考古学―弥生時代篇』1991年による）

(6) 小　結

以上，原の辻遺跡から1993年度に出土した朝鮮半島系の土器についてみてきた。無文土器系土器の一部に日本列島産とみられるものがあるが，大部分は朝鮮半島産である。今回の調査結果からすれば，原の辻遺跡の朝鮮半島系土器は後期無文土器にはじまり，楽浪土器や三韓土器が主体をなして，古式の三国土器まで及んでいることがわかる。これを今回の原の辻遺跡での日本側の土器の様相や共伴関係から考えると，上限は弥生前期末で，弥生中～後期が主体をなし，下限は古墳時代前期（有田Ⅰ式＝布留式土器併行期）となる。これまでの調査で出土した資料も，以上の枠組の中でおさめて大過ない。

弥生前期末～中期前半にかけては後期前半～後半の無文土器系土器がみられ，弥生中期後半～後期にかけては楽浪系および三韓系土器が主体を占めている。楽浪系土器が中期前半までさか上るか否かについては，今後の検討課題である。三国陶質土器は，共伴関係が不明なのが惜しまれるが，他遺跡での成果などを参照すれば，古墳前期が主体をなし，一部は弥生後期末までさか上る可能性がある。

注目されるのは楽浪系土器で，壺・杯・筒杯・大鉢・滑石混入の植木鉢形鉢があり，壺の器形も，大形厚手の壺や縄蓆文壺，無文の中型壺など器種・器形が多様である。三韓系よりも量はやや少ないものの，これは弥生時代の通常の遺跡にはない特色で，単に広く掘ったから出たというようなものではない。また三韓系土器も前期・後期とみられ，無文土器や三国土器の様相も合わせて考えるならば，前期末以降，原の辻遺跡と朝鮮半島との密接な交流は古墳時代前期まで絶えることなくつづき，特に中期後半～後期が最盛期であったことがわかる。

また，今回出土した朝鮮半島系土器の故地を探ると，朝鮮半島南部，それも南海岸地方一帯との関係が強いが，弥生中期後半～後期には楽浪郡や帯方郡との関係も，それに迫るほどであったことがわかる。ただし，これらの朝鮮半島系土器は，遺跡内の全面に散漫に分布しており，狭い範囲から集中して出土する傾向はみとめられない。したがってこれらは渡来漢人や韓人が集団的に固まって居住したことを示すというよりは，倭人や韓人・漢人が交易の際にもたらしたものであり，原の辻に居住した人々を主体とした海上活動の結果であろう。

『魏志倭人伝』が一支国について対馬国とともに「また南北に市糴す」と記し，女王国について「王，使を遣して京都・帯方郡・諸韓国に詣り」と記した内実の一端が，これらの朝鮮半島系土器からもうかがわれるのである。

註

(1) 谷豊信「楽浪土城出土の土器（上）・（中）・（下）―楽浪土城の研究その2・3・4―」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』3・4・5　1984年・1985年・1986年

(2) 武末純一『土器からみた日韓交渉』1991年
武末純一「弥生時代の楽浪系土器と三韓系土器　――瓦質土器を中心に――」『地方史研究』第

41巻5号　1991年

(3) 後藤直「朝鮮系無文土器」『三上次男博士頌寿記念論文集』　1979年

(4) 釜山大学校博物館『勒島住居跡』　1989年

(5) 安在晧「梁山蓴地里新平遺蹟出土無文土器」『伽耶通信』第10号　1984年

(6) 前原町教育委員会『浦志遺跡A地点』　1984年

(7) 福岡県教育委員会『三雲遺蹟』III　1982年

(8) 長崎県教育委員会『対馬—浅茅湾とその周辺の考古学調査—』　1974年

(9) 尹炳鏞『釜山老圃洞古墳』釜山直轄市立博物館調査報告書第2冊　1985年

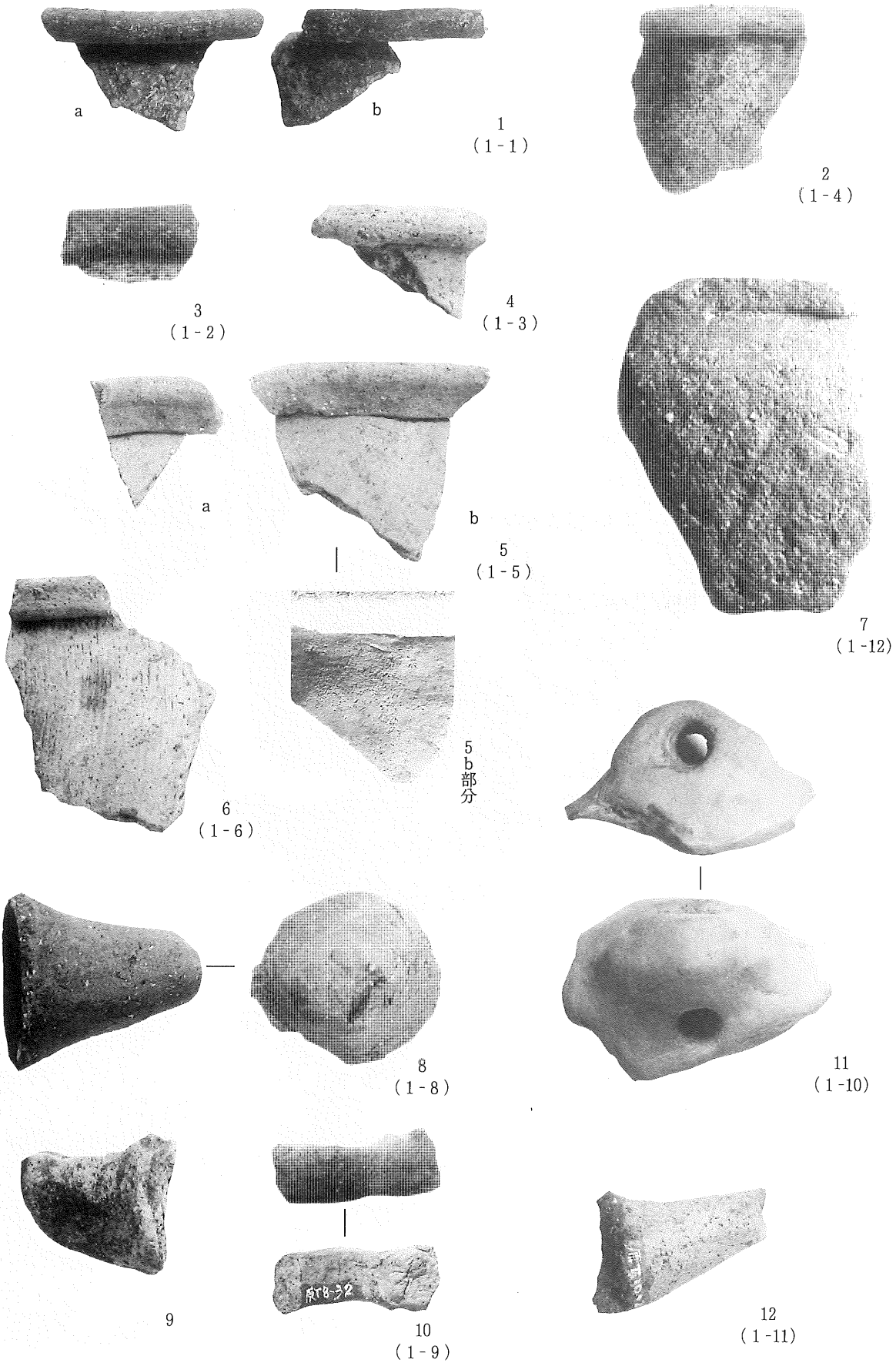
尹炳鏞・宋桂鉉『釜山老圃洞古墳』II　1988年

釜山大学校博物館『釜山老圃洞遺跡』　1988年

(10) 申敬澈「金海礼安里160号墳에　대하여－古墳의　発生과　관련하여－」『伽耶考古学論叢』1　1992年

※ 本稿を成すにあたっては次の方々から，さまざまな御助言・御協力をいただいた。記して謝意を表する次第である。

小田富士雄，谷豊信，崔鍾圭，申敬澈，安在晧，全玉年，筌瀬明宏，是田敦，境靖紀



図版1　無文土器系土器（1～6）および三韓系赤焼土器（7～13）

全体（1－7）

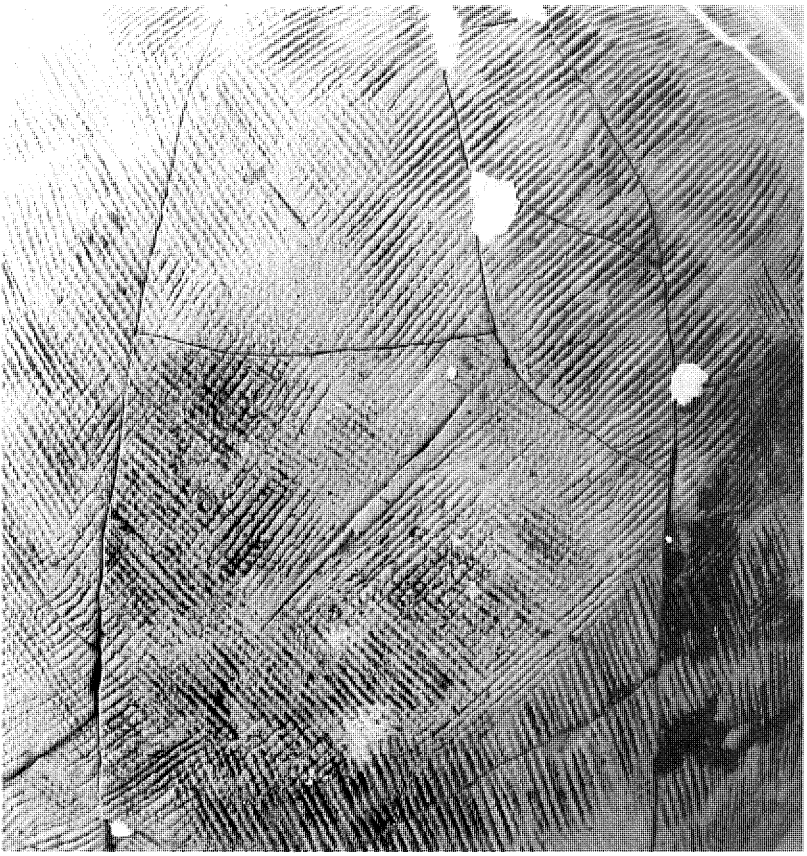
把手

把手の内面

底部

図版 2　無文土器系土器(2)

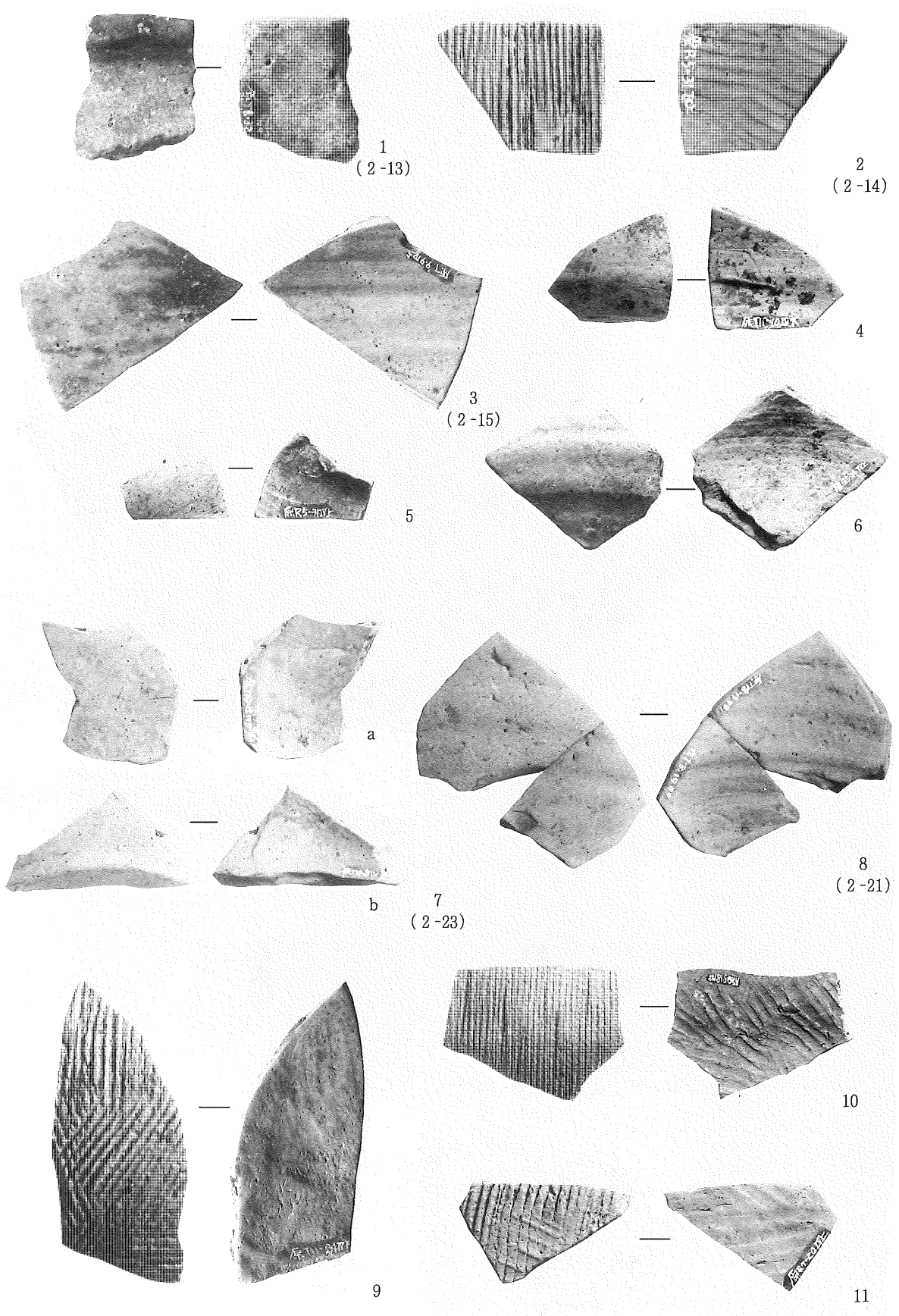
全体（2—18）



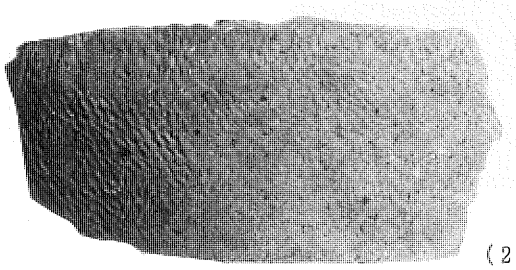
底部

口縁部

図版 3　楽浪系土器(1)

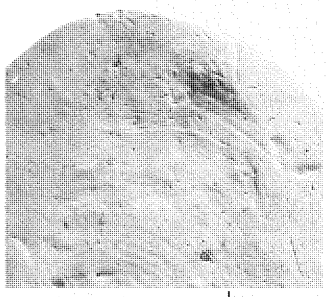


図版 4　楽浪系土器(2)

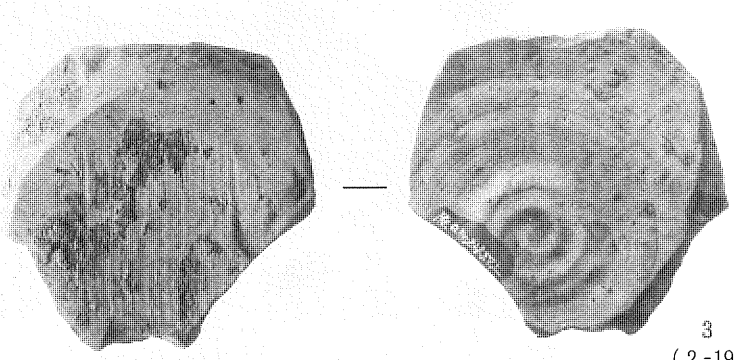


1
(2-16)

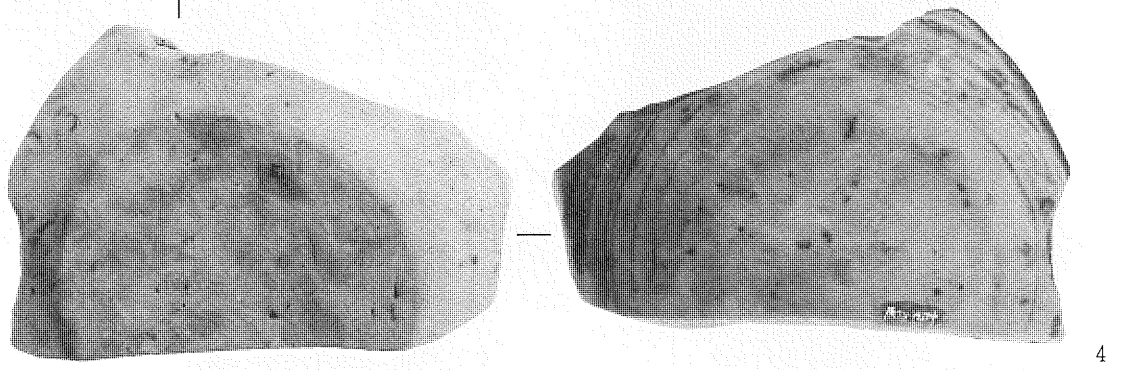
2
(2-17)



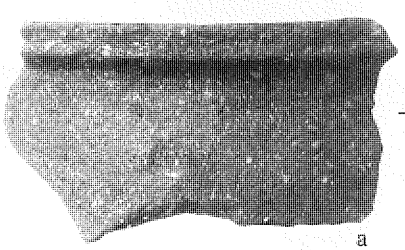
(4の底部部分)



3
(2-19)

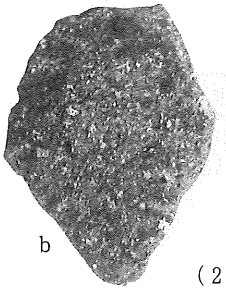


4
(2-20)



a

(内面部分)

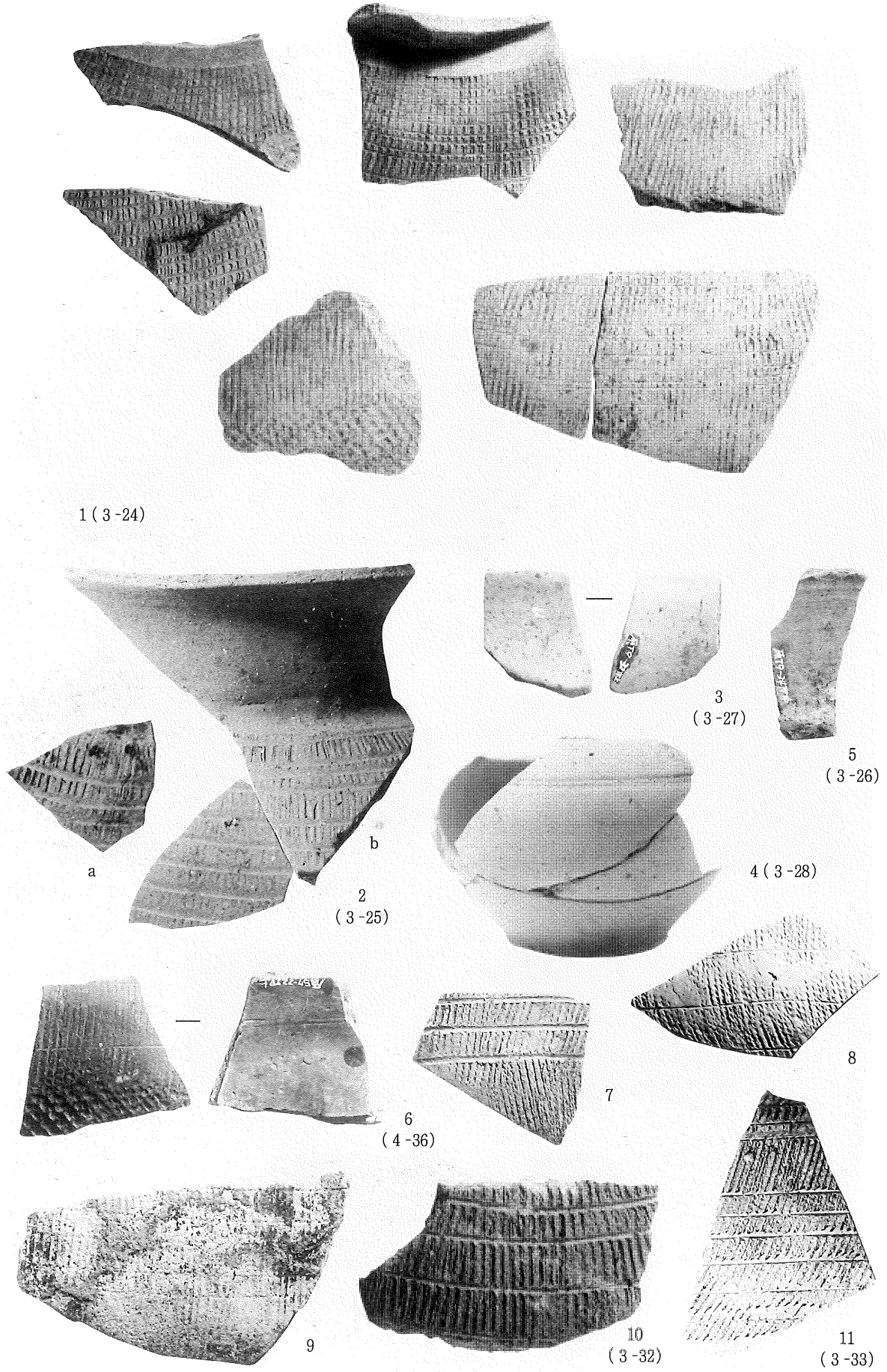


b

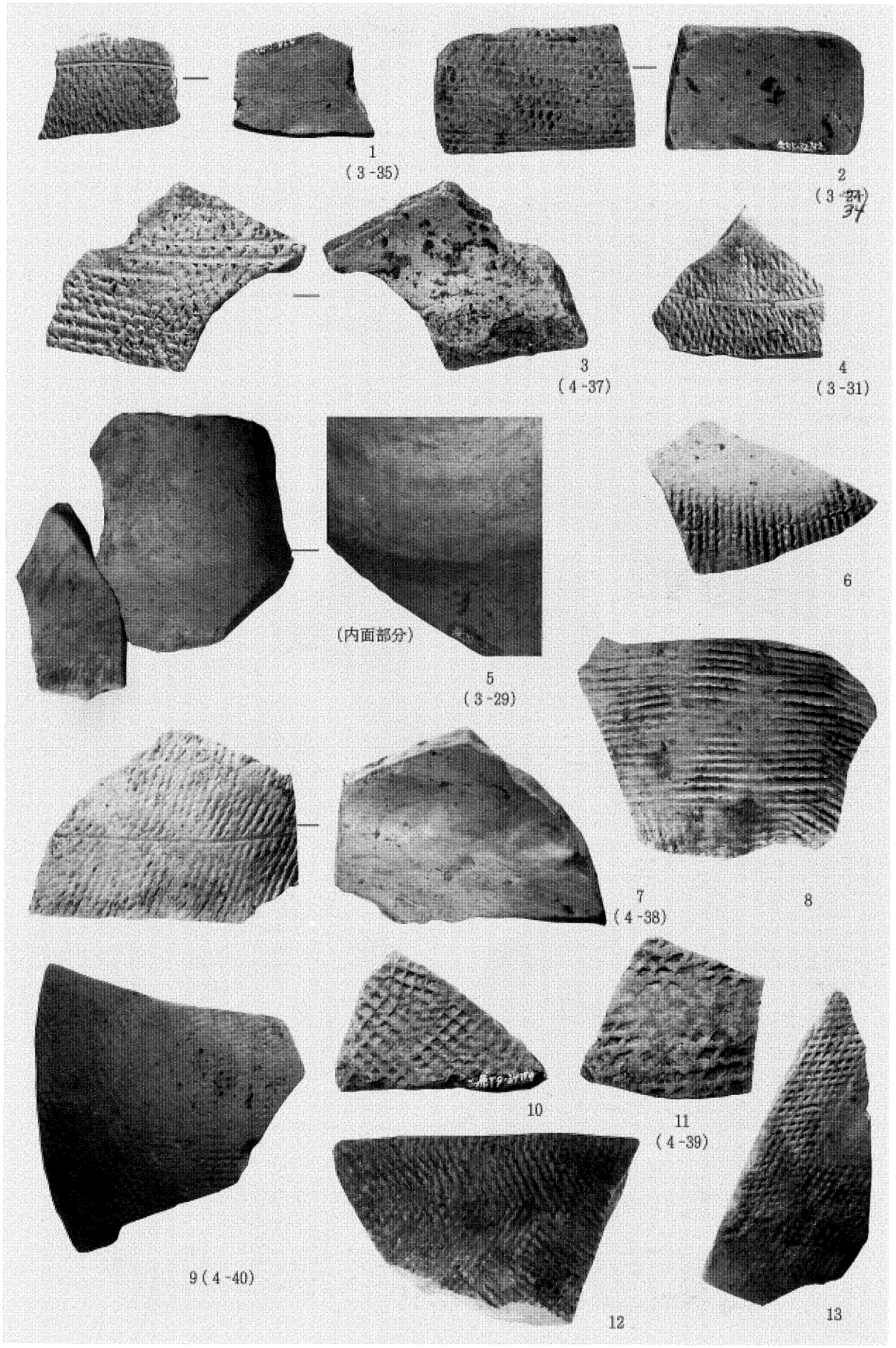
5
(2-22)

(内面部分)

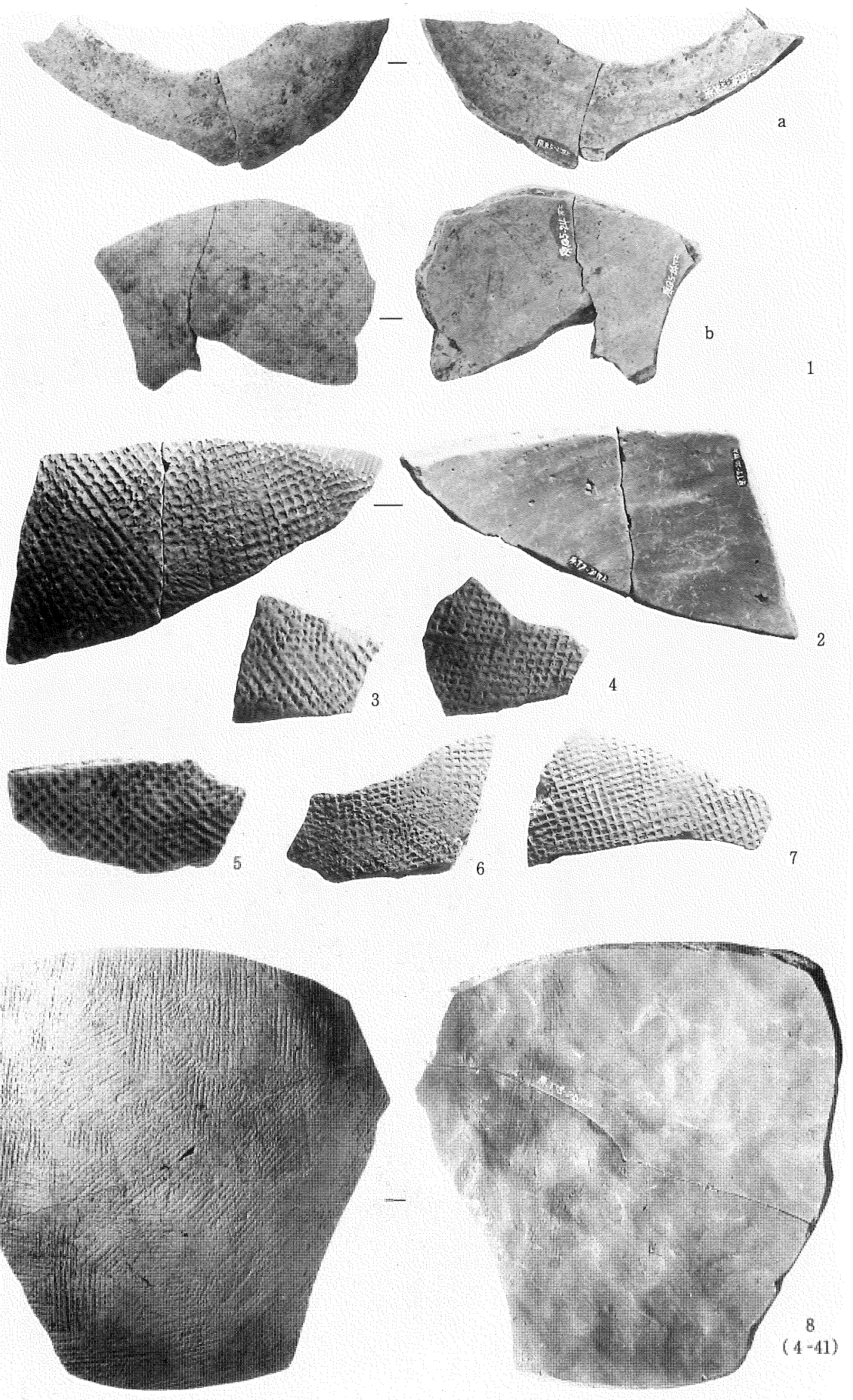
図版5　楽浪系土器(3)



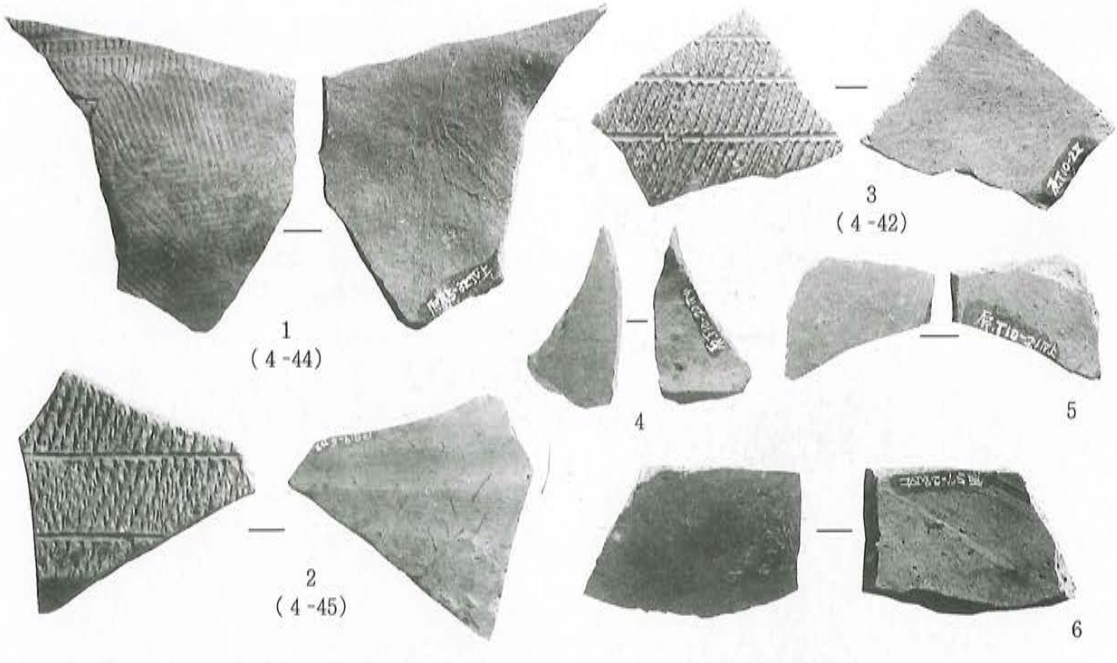
図版 6　三韓（系）瓦質土器(1)，楽浪系土器(4)



図版 7　三韓（系）瓦質土器(2)



図版 8　三韓（系）瓦質土器(3)



1
(4-44)

2
(4-45)

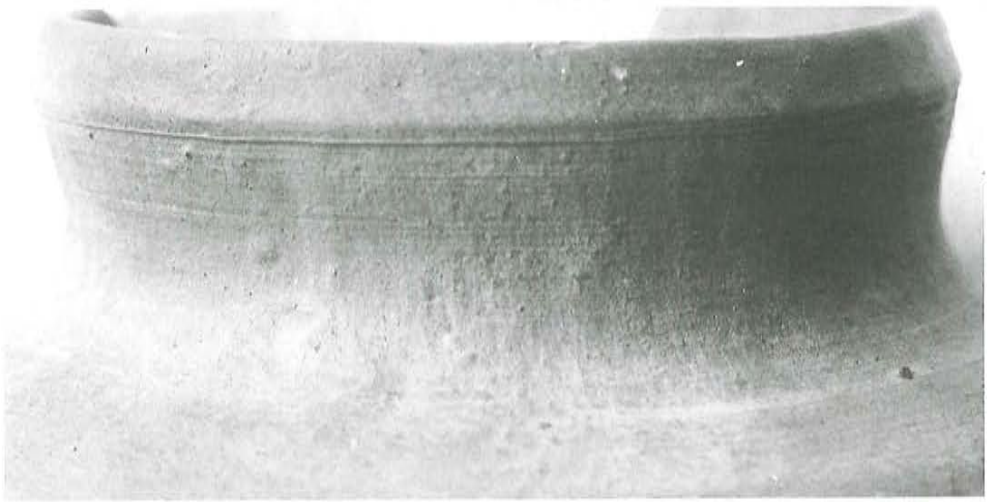
3
(4-42)

4

5

6

7



7の口頸部
(4-43)

図版 9　陶質土器

原の辻遺跡出土の動物遺存体

京都大学霊長類研究所　茂原　信生
奈良国立文化財研究所・京都大学大学院人間環境学　松井　　章

1）はじめに

原の辻遺跡から出土した軟体類をのぞく動物遺存体は，軟骨魚類数種，硬骨魚類４種以上，爬虫類１種以上，鳥類２種以上，哺乳類11種以上にのぼる。その大部分は環濠内埋土からの出土で，環濠が集落のゴミ捨て場の機能を果たしていたこともわかる。採集された動物遺存体は，破片数では2000点を越えるが，現段階では集計が終わっておらず，整理途上での概要であることをあらかじめ断っておく。本資料の分析には，茂原，松井の両名が1995年12月に原の辻遺跡の発掘調査事務所を訪れ，現地で出土した動物遺存体全体の観察，選別を行い討議した。さらに３月になって出土した資料をすべて奈良国立文化財研究所の松井の手元に搬入し，現生標本と比較しながら同定の確認を進め，部位別に集計を行った。本文は，主として茂原が現地での観察，計測をもとに犬骨を分担執筆し，松井が動物遺存体一般を分担執筆し，各々の観察，意見を交換しながら文章に纏めた。

2）種類ごとの概要

A）軟骨魚類

大型のサメ類の歯，椎骨が多数出土している。サメの歯のなかにはかなり大型のものが含まれている。歯を目的として集落に持ち込まれたものであろう。また椎骨には中央部に穿孔してペンダントに加工したものもあり，大型のサメが精神世界になんらかの重要な役割を果たしていたことであろう。

B）硬骨魚類

他の遺跡でも見られる現象であるが，タイ類のうちマダイ，クロダイ，ヘダイが多い。この３種の中でもマダイは特に骨が大きくて頑丈なため，イヌも食べずに遺跡に残りやすい傾向がある。岩礁性の海岸が近くにあるので，岩場に生息するカンダイ（コブダイ）の咽頭歯が目に付く。発掘時にフルイを用いていないので，微細な小型魚類が存在したかどうか不明であるが，現地で環濠の土壌を少量調べた結果，水漬けの低湿地の土壌では，小型魚類の骨の遺存は期待できず，さらに集落で飼われていた多くの犬が小型の魚類の骨を食べていたことは想像に難くない。このことは丘陵の上部の高元地区の調査で検出された人為的に埋め戻されたことがあきらかな土坑から，小型のベラ科，コチ，フサカサゴ科の魚類などが検出されていることからも裏付けられる。

C）爬 虫 類

ウミガメの甲板（甲羅）が多い。長時間煮られた結果か，白く粉を生じるまでに硬度を失っているものも多い。四肢骨は見あたらない。

D）鳥　　類

キジまたはヤマドリに相当する資料が見られる。鳥類の骨は少ないが，魚類と同じようにイヌの餌になった可能性が高い。ワシ，タカなどの猛禽類の爪が出ている。古墳時代には鷹狩りが存在したことが埴輪から明らかであるが，弥生時代に行われた証拠はまだない。

E）哺 乳 類

原の辻の動物遺存体のなかで最も特徴のあるのは，大量のイヌの骨の出土である。出土した動物遺存体の半分以上がイヌの骨であろう。

ウマの歯が一点出土しているが，上層の包含層からのもので弥生時代の可能性は少ない。環濠の中からは皆無であるので，『魏志』倭人伝に記された「其の地，虎豹牛馬鵲無し」とする記事は，少なくともこの壱岐に関する限り正しいようである。

この遺跡の特徴となるのは，アシカと思われる鰭脚類の遺存体が多いことである。日本海沿岸，島嶼部には絶滅したニホンアシカが，近年まで多数生息していたことから，壱岐周辺でも捕獲可能であったのだろう。ただし，大部分が破片であるうえ，ニホンアシカの標本と比較することが出来ず，正式報告書までは最終同定は保留したい。

イルカもまた多く出土している。椎骨が大部分であるが，鰭脚類と並んで貴重な海のタンパク源であっただろう。

アカシカと思われる，巨大な角座が出土している。明らかにニホンジカよりは数段大きく，骨角器の素材として大陸よりもたらされたものであろう。

ニホンジカに相当する大きさの四肢骨も存在するが，量は多くない。現在では壱岐にはシカは生息しないが，弥生時代には少数，生息していたのか，それとも九州から搬入されたものか不明である。上腕骨の4点が最も出土例が多い。

弥生時代には，すでにブタが存在していることを西本豊弘は述べている。本遺跡でも上下顎骨が24点出土しているが，西本の基準に基づいた形態上の検討はまだ行っていない。多くの骨には，関節部を中心にイヌの噛み跡が残り，大部分の骨がイヌの餌になったことを窺わせる。

イヌは別項で述べるように，本遺跡で最も多くの個体数をしめる。破片数を含めると，数百点にのぼり，これまでに日本中の弥生時代の遺跡から出土したイヌの骨の総数をも凌ぐかもしれない。分析はまだ始めたばかりであるが，本稿では，部位別の破片数量と計測値を明らかにして，後日の正式報告書に詳細をゆずる。

原の辻遺跡出土動物種名表

魚　類

軟骨魚綱　Class Chondrichthyes

サメ類　種不明

Fam. et gen. indet.

硬骨魚綱　Class Osteichthyes

マダイ　*Pagrus major*

クロダイ　*Acanthopagrus schlegeli*

カンダイ　*Semicossyphus reticulatus*

ベラ科の一種　Labridae gen. et sp. indet.

マフグ科の一種　Tetraodontidae gen. et sp. indet.

フサカサゴ科の一種　Scorpaenidae gen et sp. indet.

コチ　*Platycephalus indicus*

爬虫綱　Class Repitalia

ヘビ科の一種　Colubridae gen. et sp. indet.

ウミガメ科　属，種不明　Chelonidae gen. et sp. indet.

鳥　綱　Class Aves

ガンカモ科　属，種不明　Anatidae gen. et sp. indet.

キジまたはヤマドリ　Genus *Phasianus* sp. indet.

ワシ・タカ科

カイツブリ科の一種　属，種不明　Podicipidae gen. et sp. indet.

哺乳綱　Class Mammalia

ヒト　*Homo sapience*

クマネズミ属の一種　Gen. *Rattus* sp. indet.

ノウサギ　Lepus *brachyurus*

ウマ　*Equus caballus*

イノシシ　*Sus scrofa*

アカシカ　*Cervus elaphus*

ニホンジカ　*Cervus nippon*

鯨目の一種　Cetacea Fam. et gen. indet.

イルカ科の一種　Delphinidae gen.et sp.indet.

イヌ　*Canis familiaris*

タヌキ　*Nyctereutes procyonoides*

表1

1	シカ	左　右		イヌ	左　右		イノシシ	左　右	
2	鹿角	左	1	頭蓋骨	中	2	頭蓋骨	左	5
3		右	1	上顎骨	左	6		右	2
4		中	17		右	8	中	中	5
5	上腕骨	左	1	下顎骨	左	40	上顎骨	左	9
6		右	3		右	19		右	5
7	橈骨	左	0	環椎	中	5	下顎骨	左	6
8		右	1	軸椎	中	4		右	4
9	尺骨	左	0	その他椎骨	中	49	環椎	中	7
10		右	0	肩胛骨	左	9	軸椎	中	1
11	中手骨	左	0		右	5	その他椎骨	中	12
12		右	1	上腕骨	左	16	肩胛骨	左	6
13	寛骨	左	0		右	16		右	2
14		右	0	橈骨	左	12	上腕骨	左	8
15	大腿骨	左	0		右	11		右	11
16		右	0	尺骨	左	10	橈骨	左	5
17	脛骨	左	0		右	9		右	5
18		右	1	寛骨	左	13	尺骨	左	5
19	踵骨	左	0		右	6		右	6
20		右	0	大腿骨	左	15	寛骨	左	1
21	距骨	左	0		右	23		右	3
22		右	0	脛骨	左	13	大腿骨	左	0
23	中足骨	左	1		右	10		右	1
24		右	1	踵骨	左	2	脛骨	左	7
25	中手・中足骨	不　明	1		右	3		右	7
26				距骨	左	0	踵骨	左	4
27					右	0		右	1
28				中手・中足骨	左　右	25	距骨	左	0
29				犬歯	左　右	8		右	1
30				肋骨	左　右	27	中手・中足骨	左　右	9
31							犬歯	左　右	6
32							肋骨	左　右	3
33							腓骨	左	1
34								右	0
35							第三大臼歯上	左	3
36								右	2
37							第三大臼歯下	左	0
38								右	1
39							第二大臼歯上	左	0
40								右	3
41							第二大臼歯下	左	0
42								右	1
43							第一大臼歯下	左	1
44								右	0

テン　*Martes　melampus*

カワウソ　*Lutra lutra*

アシカ科　属，種不明　Otadiidae gen.et sp.indet.

3）イ　　ヌ

A）出土した犬骨の概観

本遺跡から出土した犬骨１は，弥生時代の犬骨としても，また大陸系と縄文犬以来の日本の在来犬との関係を探るうえで非常に重要なものである。縄文時代に日本列島で飼育されていた縄文犬は，南北に細長い国土や，１万年近くにもおよぶ長い存続年数にもかかわらず，犬の形質からすると長谷部言人の五区分のうち，オスが小中，メスが小の一系統であったと考えられている(長谷部1953)。しかし，弥生時代になると，中国大陸，あるいは朝鮮半島から，犬もまた人と共に渡ってきて，日本列島に分布する犬の形質がかなり変化したと考えられている。しかし渡来系の大型の犬が弥生時代に存在したことを証明するまとまった資料はこれまで非常に少なく，数例の出土資料から推測されていたに過ぎない。今回の原の辻遺跡出土の犬骨は，完全な頭蓋骨は少ないとはいえ，四肢骨の出土量は多く，大きさなどを推定する資料となり得る。今後の引き続き行われる発掘によって，さらに多くの犬骨，特に頭蓋骨が発掘されるであろうことを考えると，日本在来犬の系統を明らかにする上でたいへん重要な資料となることは明らかである。なお，犬骨の計測法は斎藤（1963）にしたがった。

B）出土状況

今回，取り上げる犬骨は，他の動物遺存体と同様，集落を取り巻く環濠のなかから出土したもので，

表２　原の辻遺跡出土の犬骨の下顎第一大臼歯の計測値

右		左	
近遠心径	頬 下 径	近遠心径	頬 下 径
21.5	8.6	20.5	8.6
20.7	8.0	20.5	8.2
20.6	8.0	19.6	7.7
19.6	7.8	19.3	7.8
19.1	7.8	19.1	7.6
18.9	7.6	19.0	7.3
18.9	7.5	18.6	7.6
18.8	7.7	18.4	7.4
18.8	7.7	18.2	7.4
18.7	8.7	18.1	7.5
18.3	7.0	17.9	7.2
17.7	7.0	17.9	6.8
17.5	7.0	17.9	7.0
17.2	7.2	17.3	7.0

参考データ		
田柄犬骨	♂	19.8
	♀	18.7
シバイヌ	♂	18.6
	♀	17.4

大部分が散乱状態で出土したものである。したがって，成長段階を明らかにしたり，骨端部の左右の計測値を比較するなどの個体ごとの識別が必要であるが，今回は下顎骨の左右の大きさと，頭蓋骨と下顎骨の組み合わせを識別しただけである。四肢骨の識別は難しいので，羅列的に計測値をならべて全体としての議論となる。骨の保存状態は低湿地遺跡によく見られるように非常によいものが多く，環濠内に埋没してからの風化，浸食はほとんどないと考えられる。ただし，同じ地点から出土した犬骨にも表面が白っぽく柔らかくなっているものもみられるので，煮炊きされた結果保存度に差が出た可能性もある。

C）出土犬骨の特徴

頭蓋骨（下顎骨以外）

頭蓋骨は2頭分が計測可能であった。頭蓋骨最大長は157.9ミリと159.3ミリであり，縄文犬と比べてもあまり大きくはない。弥生時代犬の平均値ではメス（157.8ミリ）に相当する大きさであり，オス（174.3ミリ）よりかなり小さい。計測値だけでなく，頭蓋の形態から判断するとどちらもメスとは考えにくく，黒色がかった個体の方（仮に1号犬頭蓋骨とする）はメス的であり，白っぽい方（仮に2号犬頭蓋骨とする）はオス的である。

1号犬頭蓋骨は矢状稜が発達しておらず，外前頭稜はやや膨隆している。また脳頭蓋はやや円型で，下顎骨は華奢である。また下顎の咬筋窩は普通だが，外側頭直筋の付着部位は左右がよく発達してオス型である(The, T. L. 他1976)。吻部では犬歯の後部にややくびれが見られ，吻が華奢である。大孔の上縁にやや切れ込みがあり，縄文時代犬には見られない特徴である。

一方2号犬の頭蓋骨は，吻の犬歯後部のくびれが小さく頑丈な印象である。また矢状稜はほとんど発達しておらず，外前頭稜の下方はやや膨隆している。外側頭直筋の付着部位はメス型である。大孔は一般的な楕円形であるがやや上方に凸である。

前頭部から鼻骨までの窪み，すなわち額段（ストップ）はどちらも小さく，直線的で縄文時代犬とほとんど代わらない大きさある。鼻骨凹陥示数は13.0と10.1で，弥生時代犬よりもむしろ縄文時代犬（オス＝11.2，メス＝10.5）とあまり変わりなく，現代のシバイヌ（オス＝18.7，メス＝17.4）などよりははるかに小さい。今後の研究を待たなければならないが，頭蓋骨から見る限り，出土した犬の個体は，縄文時代犬の影響をかなり強く示していると言えよう。一般的に考えられているように，弥生犬全体が額段（ストップ）が大きくなっているわけではなく，依然として縄文犬の顔つきを残した犬も存在したことがわかる。

下 顎 骨

計測に耐え得る保存の良好な下顎骨の出土数は，左が28個，右が16個である。ただし，完形のものはさほど多くない。さらに計測に用いなかった破片を加えると，左40個，右19個と骨の中で最も多くの出土量を示す。これらの下顎骨は大きさの変異が比較的大きく，下顎底が丸みを帯びた縄文時代犬

には見られないような下顎骨もあり異なる形質の犬が飼われていたことを示す。このような縄文犬と異なる形質の犬は，大陸の影響を示唆するものであろう。全体には縄文時代犬と比べると華奢であり，縄文犬によく見られる生前に歯が脱落したり破損したりする痕跡はほとんどない。

四 肢 骨

他の動物遺存体と同様，四肢骨はどの長骨も均等の出土をしているわけではなく，部位によって偏りが見られた。もっとも多く出土したのは大腿骨で左15本，右23本であった。続くのは，脛骨で左13本，右10本，橈骨が左12本，右11本である。逆に腓骨の本数は現段階では確認していない。脛骨は骨端が癒合しているもので最大のものが172.0㎜，最少のものが119.1㎜である。大きい脛骨の方は縄文時代の田柄貝塚犬（茂原他；1984）のオスの脛骨最大長141.80㎜や現生のシバイヌのオス（小野寺他；1987）の最大長135.1㎜よりもかなり大きく，小さいものは縄文時代犬のメスの平均値125.58㎜や現生シバイヌのメスの125.2㎜よりもやや小さい。脛骨最大長が172.0㎜の個体は，長谷部の型区分（1952）では中大級に属すことになり，小さいほうは長谷部の小級でも小さいほうに属する。多くの脛骨最大長は140㎜から160㎜の大きさで，この値は長谷部の型区分では中級に属する。この大きさの犬も，縄文時代犬には少なく，縄文時代犬はオスが中小級（脛骨最大長で131～145㎜），メスで小級（脛骨最大長で130㎜以下）であるから，原の辻の犬骨は，頭蓋骨では縄文時代犬に相当する大きさのものであったが，四肢骨を含めると全体に縄文犬よりもやや大型であると言え，他の弥生時代犬と同様の傾向を示していると言えよう。

病　　気

歯根嚢胞が２個体で認められ，歯槽の変形がＱ５-12Ⅳ上の個体に観察される。この個体の変形は第２・第３大臼歯の部分と第４小臼歯の部分である。残っている骨に骨折などは認められない。

個体数の推定

今回調査した犬骨のうち条件の良い下顎骨は，左が28個，右が16個確認された。そのうち左右の計測値，形態上の特徴の一致するもの，すなわち同一個体のものは11個であった。これを元にして下記のような推定を行った。

最少個体数は左下顎骨の数であるから28個体ということになる。しかし，左右があうものを除いた左側の下顎骨は17個，右側の下顎骨は５個であるから，この発掘された集団には少なくとも11＋17＋５＝33個体はいたことになる。さらに考えを進めて，左・右の下顎骨がなくなる確率はまったく同じと考えて「ｐ」とし，もともといた個体数を「ｎ」と仮定する。下顎骨はもともと左右あわせて合計2n 個である。　それぞれの側の下顎骨が16と28になる確率は左右とも同じはずである。

右n個が16になる確率は　1－p

左n個が28になる確率は　1－p

左右あわせて2n個が今は44個になっているのだから

$$1-p=\frac{44}{2n} \quad \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots①$$

右と左が両方のこる確率は　p×p（$=p^2$）である。それが11個あったのだから

$$p^2=\frac{11}{n} \quad \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots②$$

②から　$n=\frac{11}{p^2}$　として

①へ代入して　$1-p=2p^2$

$2p+p-1=0$

$(2p-1)\quad(p+1)=0$

$$p = \frac{1}{2}$$

したがって，n＝44である。今回は，たまたま左右の下顎骨の数をたした数になったが常にそうなるわけではない。この集団には44頭のイヌがいたということになるが，発掘された部分だけであるからさらに多い数がいたことはまちがいない。

D）弥生時代犬骨としての「原の辻犬」の位置

原の辻犬骨は全体としてみると，顔面の窪み（額段あるいはストップ）が小さく，形の上では縄文時代犬の系統を強く示しているものがある。しかし，四肢骨の大きさに見るように縄文時代犬よりは大きいものが多く，長谷部の型区分では中級のものが多い。さらに歯の咬耗が少なく，歯の破損や脱落は少ない。下顎骨はきゃしゃなものが多い。また，下顎底の形態が丸みを帯びており，樺太の鈴谷貝塚や北海道の香深井遺跡などから出土するイヌの下顎骨とよく似た形態を示す下顎骨もみられる（S7-201V）。このように朝鮮半島などからの北方系と思われる大陸型のイヌの影響があった可能性を示唆しているいる。

出土状況が縄文貝塚犬でみられたように埋葬ではなく，散乱状態や溝の中に遺棄された個体が多く，食用に供された可能性を示唆している。実際に中近世の遺跡から出土した犬骨に見られる関節部を切断した痕跡や，肉をはぎ取った時に着く細かな刃物傷が見られる例は，存在はするが数が少ない。四肢骨でも上腕骨の近位端，大腿骨の近位端などに胴体から四肢を切り放すときに破損したと思われる傷が多く見られる。おそらく，原の辻の犬は，集落内で多数飼われていたのが必要に応じて人々の食料ともなったものであろう。このような陸上の動物資源の限られた島では，貴重な動物性タンパクの供給源であったことが推定できる。関節部に焼かれた痕跡がほとんどないことから，焼く調理よりも

現代の東アジアの多くの国で見られるように煮炊きされて賞味されたものであろう。上腕骨の遠位端，尺骨，橈骨の近位端，大腿骨の遠位端，脛骨の近位端など，前肢，後肢は一体として調理されたようで，この部位に切断痕跡を持つ資料は少ない。つまり，胴体から四肢をはずした後，さらに細かくしてから煮炊きしたものではなく，胴部，四肢をまるごと煮たことを考える必要があろう。

四肢骨に比して下顎骨以外の保存状態の良い頭蓋骨が少ない点も，埋葬された例が無かったことによるものであろう。死んだものを単に投げ込んだりした食用になった以外の出土例もあることから，すべての犬が食用であったという事は言えないが，上記の観察から，出土した犬骨のかなりのものが食用となった可能性が高いということは言える。

4）ま と め

原の辻遺跡から出土した弥生時代の犬骨は，完形で残っていたイヌは縄文時代犬の形質を強く残しているが，四肢骨の大きさなどでは縄文時代犬よりも大きく長谷部の型区分では中級犬が多い。北方型の犬によくみられる，丸みを帯びた下顎底の形態を示すものもあり，大陸の犬の影響が強いことが示唆される。出土状況が大部分が散乱状態であり，人為的破損のある四肢骨も少なくないので，なんらかの形で食用に供された可能性がある。ただし，中近世の遺跡で見られるように切痕のある四肢骨は多くない。

今回の調査にあたり，観察の機会を与えて下さった長崎県教育庁文化課の方々に心から感謝致します。個体数の推定は，獨協医科大学の神崎教授のご教示を得た。神崎教授はさらにシュミレートして，この数の妥当なことを検定していただいた。厚く御礼申しあげます。

参考文献

1　茂原信生1985『古代家犬の系統と移動に関する研究』昭和59年度文部省科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書。

2　小野寺覚・茂原信生1987「骨格による性の判別—シバイヌについて」『解剖学雑誌』62(1) pp. 19-32。

3　斎藤弘吉196『犬科動物骨格計測法』私家版（東京）：1-138。

4　茂原信生・小野寺覚　1984「田柄貝塚出土の犬骨について」『人類学雑誌』92(3) pp. 187-210。

5　茂原信生1991「日本犬に見られる時代的形態変化」『国立歴史民族博物館研究報告』29，pp. 89-101。

6　松井章(1988-1989)：「生ゴミからみた草戸千軒町遺跡(1)〜(5)」『草戸千軒』№180：56，№182：6-7，№183：6-7，№184：5-6，№191：5-7。

7　The T. L. & C. O. Trouth 1976 'Sexual dimorphism in the basilar part of the Occipital bone of the dog (Canis familiaris) 'Acta Anat95 : 565-571.

＊　松井はこれまで考古学の報告書のなかでは，生物用語の慣例に従い「イヌ」というカタカナ表記を使ってきたが，以下の文中では茂原の用例に従い，「犬」と漢字表記に統一する。

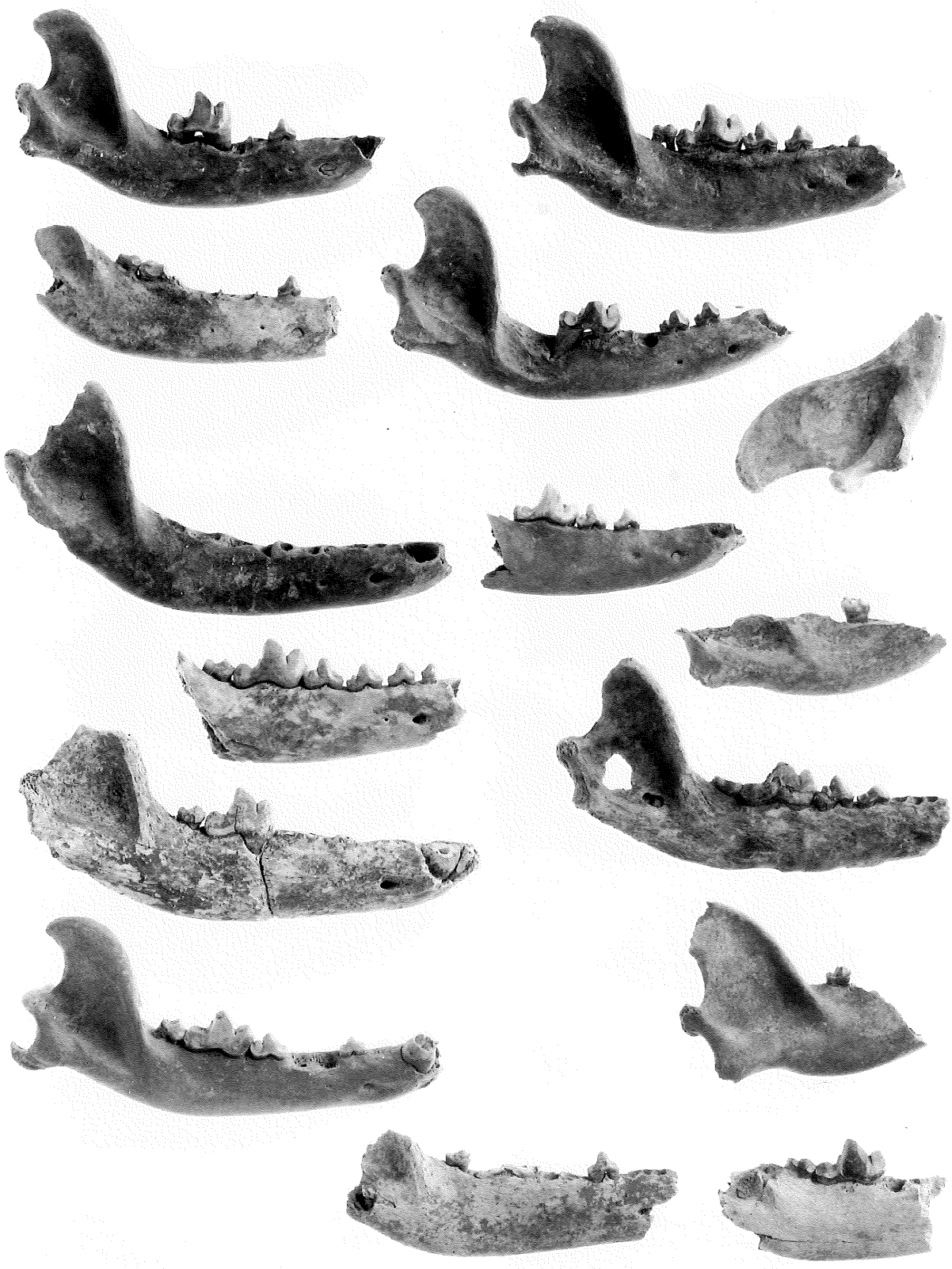
表３　原の辻遺跡出土の犬骨の計測値と比較資料（単位はmm，＊：推定値）

	原の辻遺跡出土犬骨（弥生時代）							縄文時代犬平均		弥生時代犬平均		中 世 犬 平 均		シバイヌ平均値 現　生	
	S７－21　２号溝 B５														
	（黒色）	（白色）	Q５－121	なし	7－12ⅠV上	T９－21ⅠV	なし	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂(Ave)	♀(Ave)
１：頭蓋最大長（pr-i）	157.9	159.3						168.7	156.9	174.3	157.8	177.7	157.8	155.5	145.3
２：基底全長（pr-）								158.5	148.5	165.6	148.3	167.3	150.6	147.9	137.9
３：頬骨弓幅（zy-zy）	87.2							95.4	87.5	103.5	89.4	100.8	90.6	94.8	88.1
４：脳頭蓋長（na-i）	89.4	87						90.0	84.8	97.1	86.3	99.0	86.3	86.1	80.8
５：nasion-basion（na-ba）	82.7	84.7						86.5	80.8	93.9	80.7		84.7	84.2	79.1
６：頭蓋幅(1)（eu-eu）	51.3	49						52.5	51.6	51.0	52.3	54.4	51.4	50.1	48.3
７：頭蓋高(1)（br-ho）	47.0	44.8						49.5	45.8	52.8	47.2	49.7	44.7	49	45
８：basion-bregma 高（ba-br）	59.7	62.3						65.2	59.9	68.2	59.8	67.5	61.1	65.0	61.4
９：最小前頭幅（ft-ft）	31.6	32						31.7	31.4	33.0	32.1	34.7	30.9	29.5	28.2
10：前頭骨頬骨突起端幅（ect-ect）	42.3	42						44.6	41.2	47.8	42.3	46.0	41.2	43.5	39.3
11：後頭三角幅（ot-ot）	58.0	60.9						61.6	58.8	61.5	58.0	64.3	58.3	55.2	51.6
12：両耳幅（au-au）	56.2	69.3						59.8	57.4	60.8	56.5	63.0	58.2	54.2	50.7
13：最小眼窩間幅（ent-ent）	29.5	29.4						31.1	28.2	31.6	28.6	31.3	27.6	28.7	25.4
14：顔長（pr-na）	76.1	79.1						82.9	76.4	81.7	77.4	84.2	74.4	74.6	69.4
15：吻長(1)（pr-o. a）	67.5	70						72.2	67.5	72.1	67.7	74.1	66.4	65.0	60.1
16：吻幅（犬歯部）	29.2	32.8						34.1	31.5	34.0	31.5	37.6	32.8	31.5	28.9
17：吻高（na-）	35.5	41.5						39.7	36.8	40.2	38.1	40.8	36.1	34	32
18：鼻骨凹陥深	4.6	4.2						4.5	3.9	5.6	3.9	5.1	4.0	6.4	5.5
19：硬口蓋長（pr-sta）	73.1	77.3						81.5	77.2	82.5	76.9	84.7	78.1	74.9	70.3
20：硬口蓋最大幅	53.7	57.1						57.3	55.2	58.6	54.0	61.8	56.9	59.2	55.2
21：下顎骨全長(1)（id-goc）	108.9						132＊	123.5	113.3	128.0	114.2	131.3	117.9	114.1	107.0
22：　　(2)（id-c. mid）	110.2		102＊	122.0	126.8		131＊	123.1	113.7	128.3	114.0	131.3	116.3	114.2	107.0
23：下顎枝高	41.9			49.1				48.8	43.3	50.6	44.9	52.7	47.6	44.6	41.3
24：下顎枝幅（最小値）	25.7		27.3	30.6	33.4		35.1	31.3	27.4	35.0	29.0	32.1	28.5	27.7	25.5
25：下顎体高（M１の中央）	22.0		21.0	23.1	26.3	18.9	26.7	23.6	21.1	23.5	21.4	23.3	21.0	18.9	17.2
26：下顎体厚（M１の中央下方）	9.9		9.8	11.2	12.5	9.6	12.9	11.0	9.9	12.2	10.3	10.9	10.0	9.1	8.2
27：咬筋窩深（下顎枝幅位）	6.1		7.0	6.9	7.6		9.7	7.9	6.7		5.2	7.4	6.5	5.8	5.3
頭蓋示数(1)（３/１）	55.2							56.6	55.9	59.3	56.6	56.7	57.4	61.0	60.7
脳頭蓋示数（６/４）	57.4	56.3						58.4	60.8	52.6	60.6	55.0	59.6	58.2	59.8
長高示数（８/１）	37.8	39.1						38.6	38.1	39.2	37.9	38.0	38.8	41.9	42.3
幅高示数（８/６）	116.4	127.1						124.3	116.2	134.1	114.5	124.3	118.4	129.9	127.3
横頭顔示数（３/６）	170.0							181.8	170.2	203.2	171.0	185.5	176.4	189.4	182.7
眼窩後示数（９/６）	61.6	65.3						60.5	60.9	64.8	61.4	63.8	60.2	59.0	58.3
顔面示数（14/３）	87.3							86.9	87.2	79.1	86.6	83.7	82.1	78.8	78.8
吻長示数（15/１）	42.7	43.9						42.8	42.6	41.3	42.9	41.7	42.0	41.8	41.4
鼻骨凹陥示数（18/17）	13.0	10.1						11.2	10.5	13.8	10.3	12.5	11.1	18.7	17.4
口蓋示数（20/19）	73.5	73.9						71.1	70.3	71.1	70.3	73.2	36.6	79.2	78.6
下顎体厚高示数（26/25）	45.0		46.7	48.5	47.5	50.8	48.3	47.1	46.7	51.8	48.1	46.8	47.6	48.3	47.7

表 4　原の辻遺跡出土のイヌの四肢骨の計測値，および比較資料（R：右，L：左）
各四肢骨を個別に記載したが上下の四肢骨は対応していない

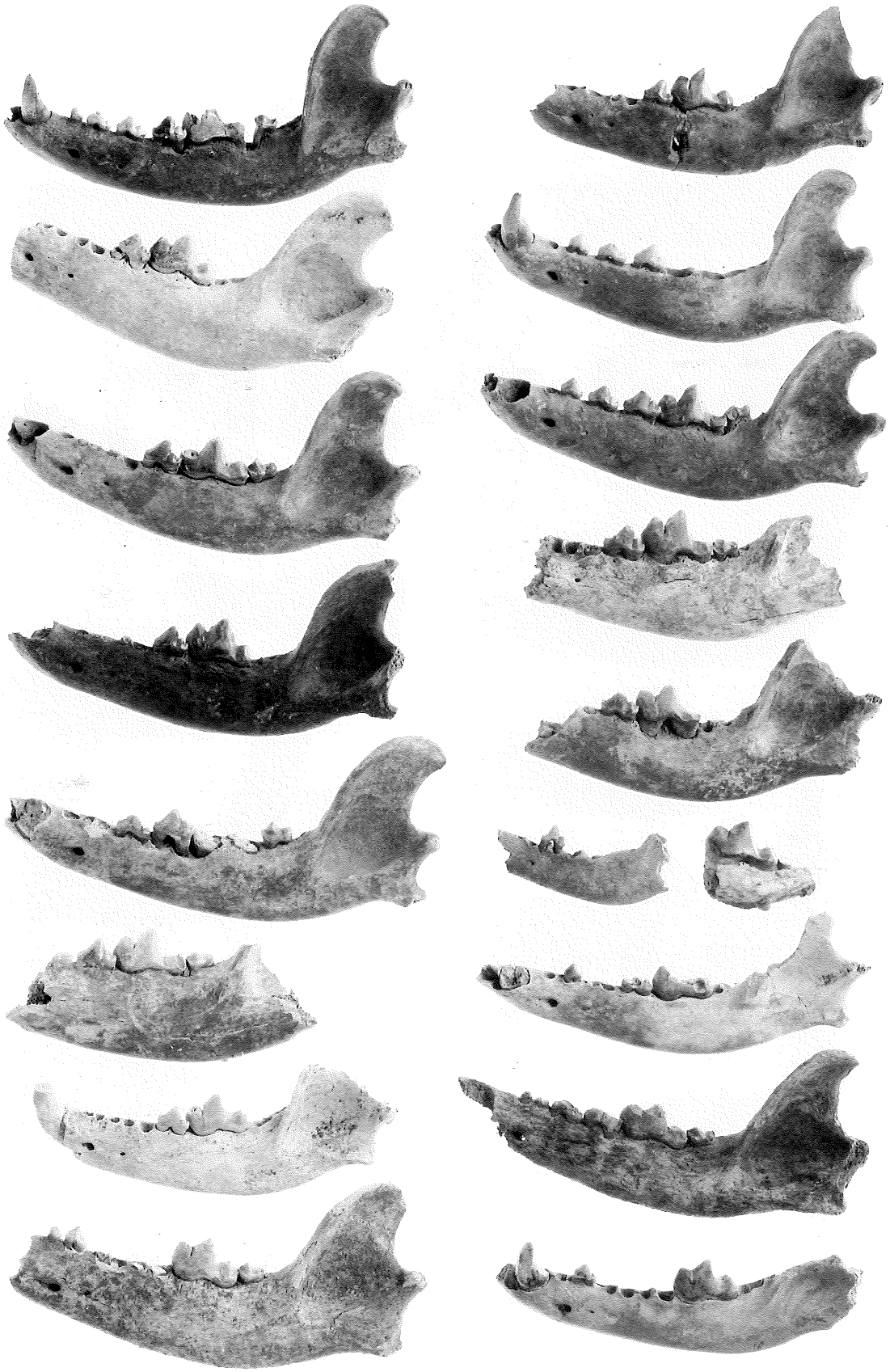
	原の辻犬骨（弥生時代）																			田柄貝塚 縄文後・晩期（茂原地；1984）		現生シバイヌ（小野寺　他；1984）	
																				♂	♀	♂	♀
上腕骨	R	R	R	R	R	R	R	L															
全長	137.1	135.3	135.1	129.6	141.3	138.3	115.1	114.8												131.28	117.34	123.0	114.5
上端最大幅	20.7	23.4	21.6	20.8	24.3	24.3	18.6	17.9												22.7	20.9	21.8	20.1
中央最小幅	10.2	11.4	11.0	9.9	11.8	12.0	8.6	8.8												11.19	10.13	9.4	8.7
中央最大幅	13.7	14.7	13.4	13.3	15.0	15.0	10.9	10.8												14.98	12.90	11.9	11.1
下端最大幅	25.1	26.4	26.3	25.6	27.6	28.4	20.5	20.5												28.36	25.88	26.1	24.3
上腕骨中央断面示数	74.5	77.6	82.1	74.4	78.7	80.0	78.9	81.5												74.75	78.70	79.2	78.7
中央頑丈示数	10.0	10.9	9.9	10.3	10.6	10.8	9.5	9.4												11.42	10.77	9.7	9.7
橈　骨	R	L	R	R	L																		
全長	124.8	122.8	120.6	108.5	132.7															125.66	112.77	118.5	109.7
上端最大幅	15.0	16.1		12.0	15.3															15.48	14.66	13.9	12.9
上端最大矢状径	9.9	10.5		7.8	9.6															10.7		9.0	8.3
頸部最小幅	11.9	12.9	12.1	9.1	11.8															12.1		10.8	9.8
中央横径	11.2	10.6	11.3	8.5	10.3															10.71	9.85	9.9	8.9
中央矢状径	7.2	7.5	7.1	5.5	7.1															7.10	6.52	5.7	5.3
下端最大幅	20.0	19.9	18.1	15.6	19.9															20.60	18.80	18.7	17.2
下端最大矢状径	11.3	11.4	10.6	8.6	11.1															12.5		10.5	9.5
中央断面示数	64.3	70.8	62.8	64.7	68.9															66.41	66.17	58.4	58.8
中央頑丈示数	9.0	8.6	9.4	7.8	7.8															8.53	8.74	8.3	8.2
尺　骨	R	R	R	R	R	R	R	L	L	L	L												
全長	148.0	136.8	148.4																	148.45	133.67	141.5	130.9
切痕中央矢状径	12.8	10.2	12.0	11.3	12.2	9.1	10.7	11.9	11.3	12.3	9.2									12.2	10.9	11.6	10.9
	7.4	6.2	6.8	7.5	8.6	6.0	7.2	7.5	7.5	7.4	6.0												
大腿骨	R	R	R	R	R	R	R	L	L														
全長	139.2	163.7	123.1	146.6	150.9	129.2	159	140.3	123.5											134.80	126.60	133.8	124.1
中央横径	12.3	14.1	10.1	12.7	11.6	10.8	14.8		9.6											12.04	11.05	10.6	9.7
中央矢状径	11.3	13.6	9.9	11.3	11.0	10.5	13.9	11.3	9.2											11.58	10.77	9.6	9.2
下端最大幅	26.3	28.3	24.7	25.2	25.7	23.5	28.3	23.4	20.3											27.52	25.90	24.5	22.8
大腿中央断面示数	108.8	103.7	102.0	112.4	105.5	102.9	106.5	0.0	104.3											104.08	102.80	110.2	106.5
中央頑丈示数	8.8	8.6	8.2	8.7	7.7	8.4	9.3	0.0	7.8											8.92	8.97	7.9	7.9
脛　骨	R	L	R	L	R	L	L	L	L	R	L	R	L	L	R	R	L	R	R	R			
全長	172.0		158.3	158.3	151.1		151.6	148.5		147.6	142.5	140.1	138.3	125.8	125.5		119.1			135.6	141.80	125.58	135.1	125.2
上端最大幅	32.7		29.6	29.6	29.8			28.7		28.9	27.0	28.9	28.5	25.3	24.6		21.9			29.1	28.90	28.05	26.8	25.2
上端最大矢状径			30.8	30.8	28.9			29.2		29.2	29.1	29.6	29.4	27.1	26.5		22.8			28.7	30.07	28.45	26.0	24.7
中央横径	13.4		12.6	12.3	10.6		11.1	11.1	11.1	10.5				8.7	8.8	9.5	8.7	8.6	10.1	11.3	10.92	9.98	10.0	9.3
中央矢状径	12.6	12.0	12.0	11.6	10.3		10.4	9.9	10.1	10.1	10.1	10.2	10.2	8.4	8.1	8.9	8.2	9.0	9.2	10.7	10.63	9.48	9.8	9.1
下端最大幅			20.3	18.7	19.4	19.3	18.3	18.5	18.8	19.6	17.5	18.4	18.9	17.0	17.1	17.7	14.5	17.1	19.0	18.6	20.10	18.20	17.9	16.7
脛骨上端示数			96.1	96.1	103.1			98.3		99.0	92.8	97.6	96.9	93.4	92.8		96.1			101.4	96.27	98.73	103.5	102.2
中央断面示数	106.3		105.0	106.0	102.9		106.7	112.1	109.9	104.0				103.6	108.6	106.7	106.1	95.6	109.8	105.6	102.86	105.46	102.9	102.1
中央頑丈示数	7.8		8.0	7.8	7.0		7.3	7.5		7.1				6.9	7.0		7.3			8.3	7.71	7.79	7.4	7.4

図版 1



1　イヌ下顎　右側

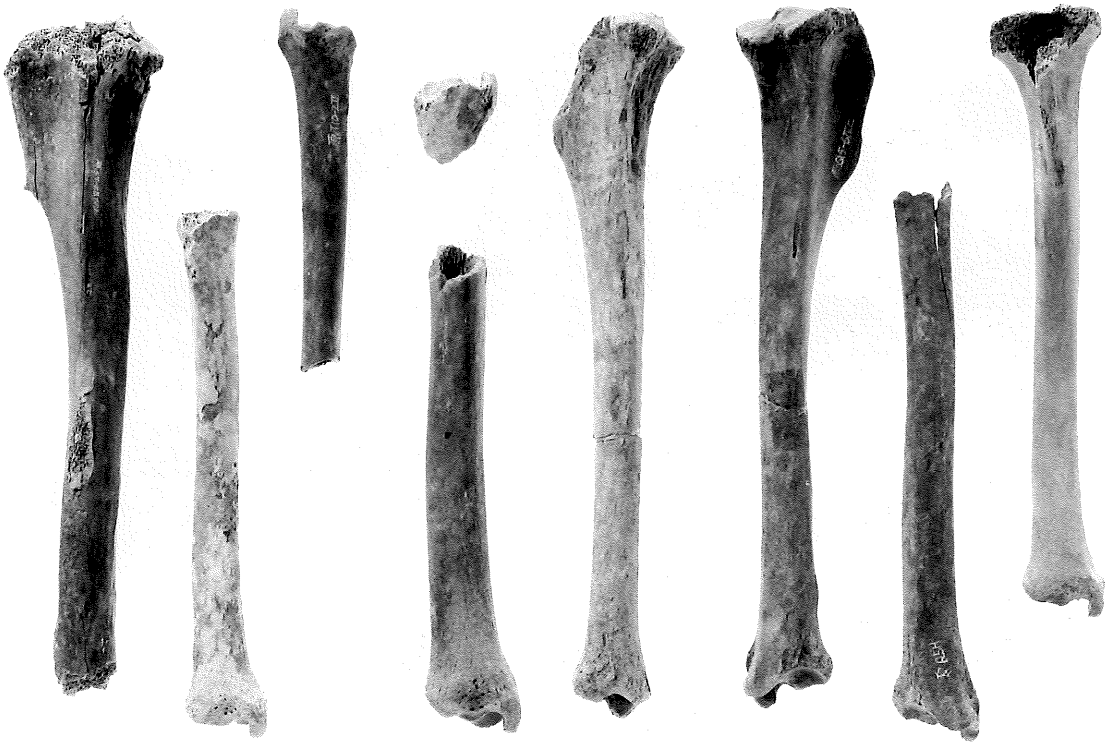
図版 2



2　イヌ下顎　左側

図版 3

3　イヌ上腕骨



4　イヌ脛骨

図版 4

5　イヌ　四肢骨　　大腿骨×４
表　左より　　左　２体は解体
右上　肩甲骨
右下　寛骨

6　海 獣 類

図版 5

7　散乱状態のヒト

長崎県壱岐・原の辻遺跡出土の弥生時代人骨

松下　孝幸*

キーワード：長崎県，壱岐，弥生時代人骨，四肢骨，きゃしゃ

はじめに

長崎県壱岐郡石田町と芦辺町にまたがる原の辻遺跡は，「幡鉾川流域の深江田原に南北に突き出す舌状の丘陵上および周辺の現在の水田面を含む約80ヘクタールの範囲に分布する旧石器時代，弥生時代～中世に至る複合遺跡である」(副島，1995)が，主体は弥生時代前期から終末期にかけての大規模な多重環濠集落跡である。この原の辻遺跡の1993年度に行なわれた環濠部分の発掘調査で，環濠の中から人骨が発掘された。今回調査された多重環濠集落跡の周辺からは甕棺墓が見つかっており，かつて発掘調査も行なわれたが，人骨は残存していなかった。墓域からではなく，環濠からの人骨検出なので，出土状況を確認したく，現場へおもむいた。人骨は一次葬の状態は保ってはおらず，量も少なかったが，環濠中に均等に散乱しているのではなく，間隔をおいてまとまって出土していることから，環濠が廃棄されたときに，土に混ざって投げ込まれたものと考えられる。

歴史的にみて，壱岐は北部九州と韓国とを結ぶ文化やヒトの交流の重要な飛び石であり，日本人の起源を考察する上では欠かすことのできない地域のひとつである。このような理由から，古人骨の出土に期待し，注目してきた。かつて石田町の海岸部に位置する大久保遺跡から人骨が出土したが，頭蓋はいわゆる西北九州タイプの弥生人の特徴を示していたが，四肢骨は西北九州弥生人的でも北部九州弥生人的でもなかった。

原の辻遺跡はいわゆる「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の中心集落であることが確認されているので，本人骨は3世紀の「一支国」の倭人(弥生人)そのものの身体的特徴を知ることのできる貴重な資料となるものと期待して，現場を訪問した。保存状態は思っていたよりも良好であったが，何分量が少なく，結果的に知りえた情報は少ないものになってしまった。それでも人類学的観察や計測を行なった結果，興味ある所見が得られたので，報告したい。

資　　料

1993年の発掘調査で得られた人骨はすべて環濠から出土したものである。人骨は表1に示すように，環濠の4カ所から発掘されたので，順番にそれぞれグループⅠ～Ⅳに区分した。

グループⅠには幼児の頭蓋1個体分と複数体と思われる成人骨が認められた。所見の項で記載しているように，頭蓋は女性2体分，四肢骨は男女各1体分，遊離歯は幼児を含む2体分と推測されるの

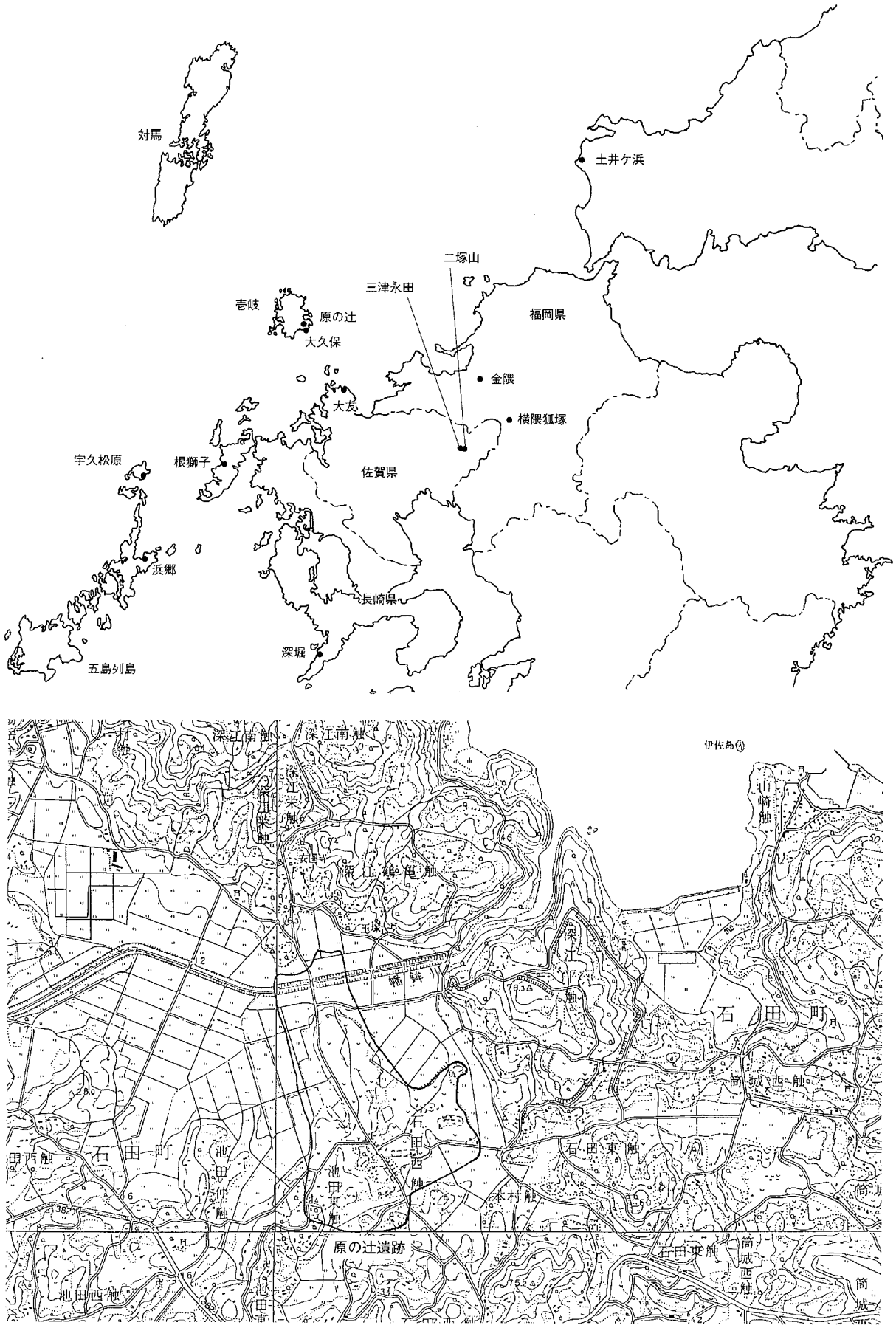


図１．遺跡の位置
(Fig 1. Location of the Harunotsuji site, Ishida cho and Ashibe cho, Nagasaki Prefecture)

で，グループⅠには幼児骨１体と成人骨３体の合計４体分の人骨が含まれているようである。グループⅡでは１体分の四肢骨，グループⅢでは１体の幼児の遊離歯，グループⅣには少なくとも１体分の四肢骨が確認できたので，今回出土した資料は合計７個体分の人骨(一部を含む)であることになる。しかし，グループⅣの四肢骨片(Ⅳ-１，Ⅳ-２)はほんの一部にすぎないので，これを１体と数えれば，

表１　出土人骨一覧（Table 1. List of skeletons)

出　土　場　所	人骨番号	性別	年齢	備　考
２号溝　Ｓ７-27区(グループⅠ)	Ⅰ-１	—	幼児	頭蓋のみ
〃	Ⅰ-２	女性	不明	前頭骨，頬骨
〃	Ⅰ-３	女性	壮年	後頭骨
〃	Ⅰ-４	不明	不明	寛骨（女性？）
〃	Ⅰ-５	男性	不明	大腿骨，脛骨
〃	Ⅰ-６	不明	不明	切歯１本
〃	Ⅰ-７	—	幼児	大臼歯冠１本
２号溝　Ｒ７-６区(グループⅡ)	Ⅱ-１	男性	不明	
２号溝　Ｒ５-25区(グループⅢ)	Ⅲ-１	—	幼児	歯　排土から採集
西向大溝　Ｔ９-14区(グループⅣ)	Ⅳ-１	不明	不明	大腿骨片（散乱骨）
〃	Ⅳ-２	不明	不明	上腕骨片（散乱骨）

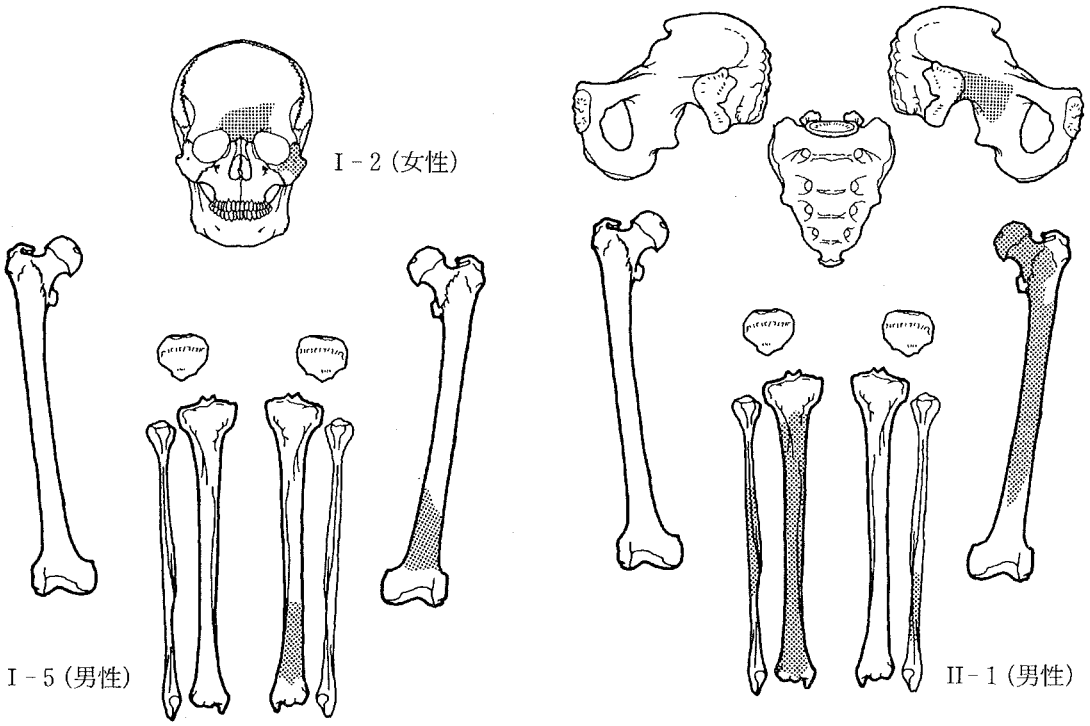


図２．人骨の残存部，アミかけ部分
(Fig 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

いたずらに体数を増やしてしまうことになるので，これはできれば散乱骨として扱いたい。

本人骨は，考古学的所見より，弥生時代中期から後期に属する人骨群である。

計測方法は，Martin-Saller(1957)によったが，脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。

なお，人骨のクリーニング，復元は人類学調査研究推進協議会の職員が行なった。

表2　資料数（Table 2. Number of materials）

成人			幼児	合計
男性	女性	不明		
2	2	1	2	7

所　　見

《2号溝・S 7-27区から出土した人骨》＝グループI

本地点から出土した人骨は，幼児の頭蓋1体と成人の頭蓋，歯2本および四肢骨である。

1．幼児骨＝I-1号人骨

バラバラに破砕した頭蓋片が多数出土した。骨質は幼児にしては堅牢で，黒色を呈している。残っていた骨は頭蓋のみで，頭蓋冠を復元することができた。

2．成人骨

前頭骨(I-2)，後頭骨(I-3)，左側頬骨(I-2)，歯2本(I-6とI-7)を確認することができた。これ以外に頭蓋片と思われる骨片が数片あるが，これは人骨ではないかもしれない。

前頭骨は左側眼窩部を中心にした部分，後頭骨は完全で，骨壁は厚い。左側頬骨も良く残っている。前頭骨は，眉上弓がやや隆起しており，前頭鱗の正中部に弱い隆起が認められるが，前頭鱗は豊かに膨隆しているので，女性の前頭骨と推定した。後頭骨は，外後頭隆起の発達が弱いので，女性の後頭骨と思われる。前頭骨と後頭骨とが女性のものと考えられることから，これらの頭蓋は同一個体とも考えられるが，前頭骨は骨壁が薄く，一方後頭骨はかなり厚いことから，別個体の可能性の方が強いので，ここでは一応別個体として処理しておきたい。

遊離歯は上顎右側中切歯と下顎右側第一大臼歯の歯冠である。後者は歯根が形成されておらず，咬耗も認めがたいので，これはI-1号人骨(幼児)のものと判断した。上顎右側中切歯は切縁部分が咬耗し，象牙質が露出しているので，これは成人のものであろう。

四肢骨(I-5)は，左側大腿骨体遠位部と左側脛骨体遠位部であり，両者とも骨質はかなり堅牢である。計測は脛骨だけしかできないが，両者とも骨体はあまり大きいものではない。しかし，大腿骨の粗線はよく発達しており，脛骨体はやや扁平で，その断面形はヘリチカのIV型を示している。径は大

きくはないが，形態的特徴から両者とも男性のものと推測されるので，同一個体とした。

また，左側寛骨（Ⅰ－4）の大坐骨切痕部分が残存していた。切痕部分は完全ではないので，切痕の角度がはっきりしないが，残存部分から推測すれば，角度は広そうである。

以上のように，女性のものと推測される2体分の頭蓋，1体の男性のものと推測される大腿骨と脛骨，女性の可能性のある寛骨，成人と幼児の遊離歯が確認されたことになり，成人骨の体数は，少なくとも3個体と推測される。

《2号溝・R7－6区から出土した人骨》＝グループⅡ＝Ⅱ－1号人骨

四肢骨のみである。左側大腿骨，両側の脛骨体と腓骨体および左側寛骨の坐骨体であるが，これらはすべて同一個体のものと思われる。

現在も水をたたえた環濠から出土したことを考えれば，保存状態は良い方ではあるが，「2号溝・S 7-27区から出土した人骨」に比べれば，脆弱である。

1．大 腿 骨

左側が残存していたが，遠位部を欠いている。骨体の径は小さいが，両側面は後方へ突出しており，粗線の発達も良好である。

計測値は，骨体中央矢状径が26mm(左)，横径は25mm(左)で，骨体中央断面示数は104.00(左)となり，示数値はあまり大きくないが，肉眼観察では示数値以上に両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は81mm(左)で，骨体は細い。また，上骨体断面示数は72.41(左)となり，骨体上部は扁平である。

2．脛　　骨

両側が残存していた。骨体はやや細い。前縁の様態は不明であるが，ヒラメ筋線は突出したり陥凹したりしていることから，ヒラメ筋の発達は良かったことが推測される。骨体の断面形は両側ともヘリチカのV型を呈している。

計測値は，中央最大径が28mm(右，左)，中央横径は21mm(右)，20mm(左)で，中央断面示数は75.00(右)，71.43(左)となり，骨体には扁平性は認められない。骨体周は79mm(右)，78mm(左)，最小周は70mm(右)，71mm(左)で，骨体は細い。

3．腓　　骨

両側の骨体が残存していた。長さは不明だが，骨体はやや大きく，稜の発達は良好で，溝も深い。

4．寛　　骨

左側の大坐骨切痕部が残存していたにすぎない。切痕の角度は明確ではない。

5．性別・年齢

大腿骨，脛骨，腓骨，寛骨はおそらく同一個体のものであろう。左側寛骨の大坐骨切痕部からは性別を判別できなかった。大腿骨体の径はけっして大きくはないが，骨体両側面の後方への発達が良好なことや脛骨体と腓骨体の径がやや大きいことから，男性と推定した。年齢は不明である。

《2号溝・R5-25区から出土した人骨》＝グループⅢ

遊離歯が6本(乳歯2本，永久歯冠4本)残存していた。環濠の排土中から採集されたものである。残存歯を歯式で示した。

		[／：不明（破損)]
／ ／ ／ ／ ／ C I_2 ／	／ ／ ／ ／ ／ M_1 ／ ／	
	i_2 ／ ／ m_2	
／ ／ ／ ／ ／ ／ I_2 ／	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	

永久歯は歯冠のみで，歯根はまったく形成されていなかったものと考えられる。乳歯もまだ歯根が完全に完成していない。また，下顎第二乳臼歯の歯冠には大きな齲触の跡(虫歯)が認められる。

年齢は，乳歯の歯根の形成状態から2.5歳から3歳と推定される。

《西向大溝・T9-14区から出土した人骨》＝グループⅣ

左側大腿骨体近位部の一部と考えられる骨片と左右不明の上腕骨体近位部の一部とみられる骨片とが残存していた。両者が同一個体かどうか，また性別・年齢も不明である。

考　　察

計測ができた男性の大腿骨と脛骨に関して，若干考察を行なっておきたい。

1．大腿骨

表3で大腿骨の主要計測値を比較してみた。中央周はどの資料よりも小さく，表3では最小値である。北部九州地域の甕棺から出土する弥生人の大腿骨体は太く，その径は大きいが，西北九州地域の弥生人や土井ヶ浜弥生人など響灘沿岸の弥生人の大腿骨はそれほど太くはない。その骨体の細い西北九州タイプの弥生人である大友弥生人や土井ヶ浜弥生人の平均値よりも本例はかなり小さいのである。骨体断面示数も表3では最小値を示しており，骨体両側面の後方への突出の程度は弱いようで，とくに大友や壱岐の大久保よりも小さい。しかし，上骨体断面示数は小さく，骨体上部はかなり扁平で，その断面示数は表3では最も小さな値を示している。

すなわち，本大腿骨は骨体が細く，骨体の両側面の後方への発達も他の弥生人ほど強くはないが，骨体上部の扁平性はかなり強い大腿骨である。

2．脛　　骨

大腿骨の場合と同じように比較してみた(表4)。脛骨も骨体の径は小さく，骨体周も最小周も表4では最小値であり，この比較資料の中では両計測値が小さい，すなわち骨体が細い土井ヶ浜弥生人の平均値に近い。一方，中央断面示数は，大友弥生人よりはやや大きいが，この示数値が異常に大きい壱岐の大久保よりは小さく，さらに三津，二塚山などの甕官弥生人よりもやや小さく，土井ヶ浜弥生人の平均値と大差ない。

表 3　大腿骨計測値（男性，右，㎜）(Table 3. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		原の辻* 弥生人		大　友 弥生人 (松下)		大久保 弥生人 (松下・他)		三　津 弥生人 (財津)		二塚山 弥生人 (松下)		横隈狐塚 弥生人 (松下・他)		金　隈 弥生人 (中橋・他)		土井ケ浜 弥生人 (財津)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	1	26	41	28.85	1	30	13	29.86	25	30.40	23	29.96	31	30.1	56	28.6
7.	骨体中央横径	1	25	41	26.07	1	27	13	27.62	26	28.12	23	27.52	31	27.1	56	26.1
8.	骨体中央周	1	81	41	87.22	1	90	13	91.00	25	91.84	23	90.44	31	90.3	56	86.6
9.	骨体上横径	1	29	42	30.62	1	34	14	32.00	22	32.23	24	31.75	26	32.5	53	31.8
10.	骨体上矢状径	1	21	42	24.83	1	29	14	28.50	21	26.62	24	26.29	26	26.2	53	25.6
6/7	骨体中央断面示数	1	104.00	41	111.72	1	111.11	13	105.91	25	108.71	23	109.22	33	110.3	55	109.8
10/9	上骨体断面示数	1	72.41	42	81.34	1	85.29	14	88.81	21	82.50	24	82.96	28	80.6	51	81.0

＊左側

表 4　脛骨計測値（男性，右，㎜）(Table 4. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

		原の辻* 弥生人 (松下)		大　友 弥生人 (松下)		大久保 弥生人 (松下・他)		三　津 弥生人 (牛島)		二塚山 弥生人 (松下)		横隈狐塚 弥生人 (松下・他)		金　隈 弥生人 (中橋・他)		土井ケ浜 弥生人 (財津)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	2	29.00	35	31.26	1	29	12	32.04	20	30.95	25	31.44	18	31.8	48	29.5
8 a.	栄養孔位最大径	1	33	30	34.63	1	36	12	36.67	17	35.35	24	35.83	31	35.9	41	33.8
9.	中央横径	2	20.50	38	21.29	1	24	12	22.96	20	22.45	25	22.36	18	23.0	48	20.8
9 a.	栄養孔位横径	1	22	32	23.22	1	27	12	24.92	16	25.00	24	24.33	31	25.4	40	24.0
10.	骨体周	2	78.50	34	82.85	1	83	12	89.92	20	84.20	25	85.04	18	86.6	47	80.7
10a.	栄養孔位周	1	87	30	92.00	1	98	12	100.25	16	95.81	24	95.04	31	96.9	38	92.3
10b.	最小周	2	72.50	34	75.35	1	77	12	80.75	14	76.55	27	75.41	24	77.5	43	75.2
9/8	中央断面示数	2	70.72	34	68.03	1	82.76	12	71.62	20	72.71	25	71.37	18	72.4	47	70.5
9a/8a	栄養孔位断面示数	1	78.57	30	67.16	1	75.00	12	68.03	16	70.86	24	68.00	31	71.0	39	71.1

＊左側

すなわち，本脛骨は大腿骨と同じように骨体の径は小さく，骨体の形態(扁平の程度)は土井ヶ浜弥生人と同じ程度である。

要　　約

長崎県壱岐郡石田町と芦辺町に所在する原の辻遺跡の1993年度に行なわれた発掘調査で，環濠の中から人骨が発掘された。この遺跡は「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の中心集落であることから，「一支国」の倭人の身体的特徴を知る上できわめて貴重な資料である。人類学的観察と計測を行なった結果は次のように要約することができる。

1. 人骨は環濠内の4地点から出土した。いずれも埋葬状態を保っておらず，散乱状態であった。
2. 人骨の所属時代は弥生時代中期から後期である。
3. 発掘された人骨は合計7個体分で，いずれも人体の一部の骨であるが，比較的まとまっていたのは，幼児の頭蓋(Ⅰ-1)と遊離歯(Ⅲ-1)，成人男性の下肢骨(Ⅱ-1)であった。
4. 計測や観察ができたのは，成人男性の大腿骨と脛骨のみであった。大腿骨体の径は小さく，骨体断面示数は他の弥生人に比べると小さいが，観察したところでは示数値以上に骨体両側面の後方への発達は良く，骨体上面の扁平性は強い。また，脛骨体も細いが，骨体の形態は(扁平の程度)他の弥生人と大差ない。このように本弥生人の男性四肢骨は北部九州の甕官弥生人よりは明らかに細く，その程度は西北九州弥生人よりもさらに小さいもので，きゃしゃである。

   四肢骨の細さとその形態的特徴は，北部九州の甕官弥生人や西北九州弥生人よりもむしろ土井ヶ浜弥生人の方により近いようである。しかし，人骨の残存量が少なかったので，得られた情報量も少なく，原の辻弥生人の形質的特徴をすべてにわたって明らかにすることはできなかったが，少なくとも四肢骨は北部九州の甕官弥生人とは異なり，また，壱岐の大久保人とも異なるものであった。

   四肢骨の特徴からもぜひ彼らの顔の特徴が知りたいものである。今回これほど人骨の保存状態が良かったことから，顔面部が保存された人骨の出土を期待したい。

謝　　辞

擱筆するにあたり，本研究と発表の機会を与えていただいた長崎県教育庁文化課の諸先生方に感謝致します。

参考文献

1．金関丈夫，永井昌文，佐野　一，1960：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨について。人類学研究，7（附録）：1—36.

2．金関丈夫，1996：弥生時代人。日本の考古学，河出書房，東京，：460—471.
3．九州大学医学部解剖学第二講座，1998：日本民族・文化の生成，２，九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成。六興出版，東京。
4．MARTIN-SALLER, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttugart: 429-597.
5．松下孝幸，1979：二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山(佐賀県文化財調査報告書46)：242-255.
6．松下孝幸,1981：大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書１)：223-253.
7．松下孝幸，分部哲秋，石田肇，内藤芳篤，永井昌文，1983：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第７次発掘調査概報（豊北町埋蔵文化財調査報告書２）：19-30.
8．松下孝幸，1985：福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土の弥生時代人骨。横隈狐塚II下巻（小郡市埋蔵文化財発掘調査報告書27集)：１-46.
9．松下孝幸，1987：弥生人の地域性。〈シンポジウム〉西南日本人—文化と人の渡来をめぐって。季刊人類学18-４：219-232.
10．松下孝幸，分部哲秋，真鍋義孝，1988：長崎県壱岐・石田町大久保遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報XI（長崎県文化財調査報告書第91集)：77-99.
11．松下孝幸，内藤芳篤，1989ｂ：(弥生人の)地域差，弥生文化の研究，１．弥生人とその環境，雄山閣，東京，65-75.
12．松下孝幸，佐伯和信，折原義行，小山田常一，石田肇，佐熊正史，1991：佐賀県神埼町志波屋六本松乙遺跡出土の弥生時代人骨。志波屋六本松乙遺跡(佐賀県文化財調査報告書第103集，九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書13)：第４章：1-62.
13．内藤芳篤，1971：西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌，79：236-248.
14．内藤芳篤，1981：弥生時代人骨。人類学講座５，日本人Ｉ，雄山閣，東京，57-99.
15．中橋孝博，土肥直美，永井昌文，1985ａ：金隈遺跡出土の弥生時代人骨。史跡金隈遺跡（福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集)：43-145.
16．牛島陽一，1954：佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究。人類学研究，1：273-303.
17．財津博之，1956：山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。人類学研究，３：320-349.
18．副島和明，1995：多重環濠が語る「一支国」の中心部。別冊『歴史読本』日本古代史「謎」の最前線，発掘レポート1995：282-285.
19．鈴木　尚，1963：日本人の骨。岩波書店，東京。

表 5　大腿骨計測値（mm）（Femur）

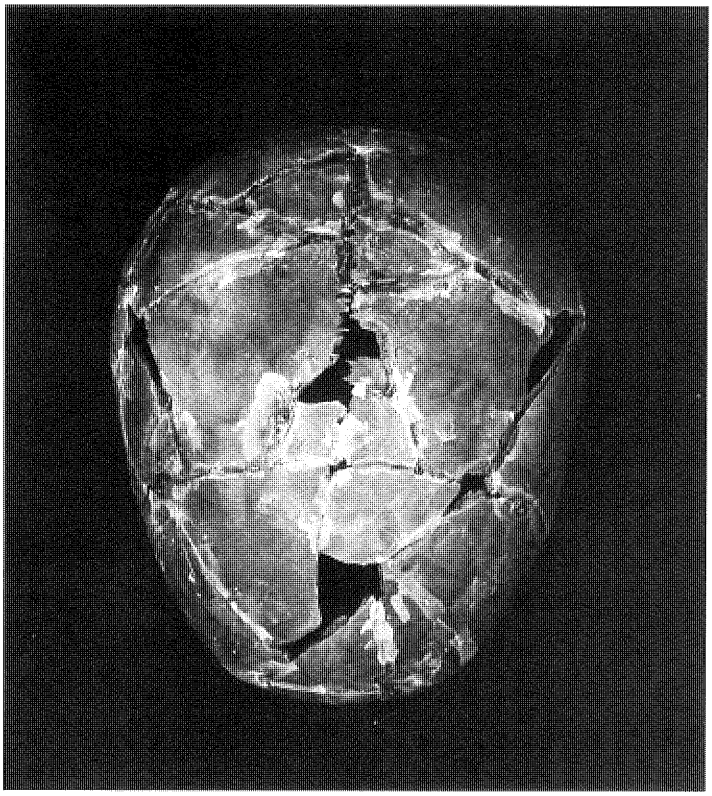
		原の辻 II－1 男性
6.	骨体中央矢状径(右)	
	(左)	26
7.	骨体中央横径（右）	
	(左)	25
8.	骨体中央周（右）	
	(左)	81
9.	骨体上横径（右）	
	(左)	29
10.	骨体上矢状径（右）	
	(左)	21
8/2	長厚示数（右）	
	(左)	—
6/7	骨体中央断面示数(右)	
	(左)	104.00
10/9	上骨体断面示数(右)	
	(左)	72.41
16/15	頸断面指数（右）	
	(左)	—
19/18	頭断面示数（右）	
	(左)	—

表 6　脛骨計測値（mm）（Tibia）

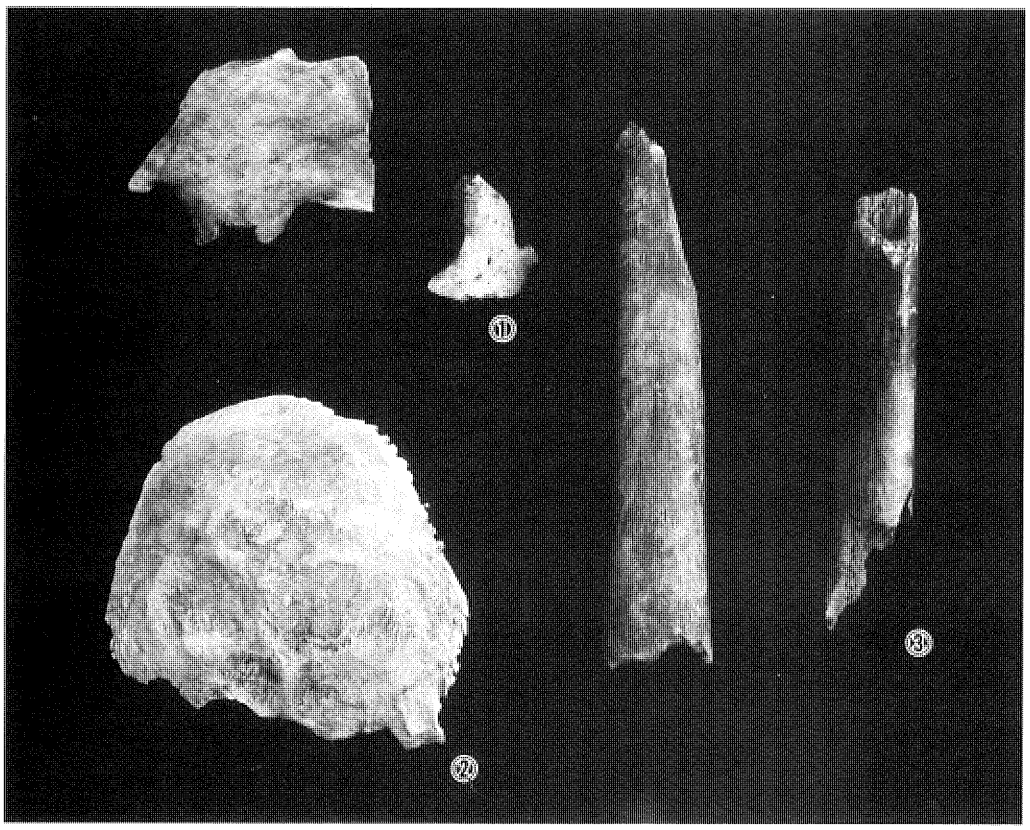
		原の辻 I－5 男性	原の辻 II－1 男性	原の辻 平均値 男性	
				n	M
8.	中央最大径（右）		28	1	28
	(左)	30	28	2	29.00
8 a.	栄養孔位最大径(右)		30	1	30
	(左)	—	33	1	33
9.	中央横径（右）		21	1	21
	(左)	21	20	2	20.50
9 a.	栄養孔位横径（右）		23	1	23
	(左)	—	22	1	22
10.	骨体周（右）		79	1	79
	(左)	79	78	2	78.50
10a.	栄養孔位周（右）		86	1	86
	(左)	—	87	1	87
10b.	最小周（右）		70	1	70
	(左)	74	71	2	72.50
9/8	中央断面示数（右）		75.00	1	75.00
	(左)	70.00	71.43	1	71.72
9a/8a	栄養孔位断面示数(右)		82.14	1	82.14
	(左)		78.57	1	78.57
10b/1	長厚示数（右）		—		
	(左)		—		

表 7　腓骨計測値（mm）（Fibula）

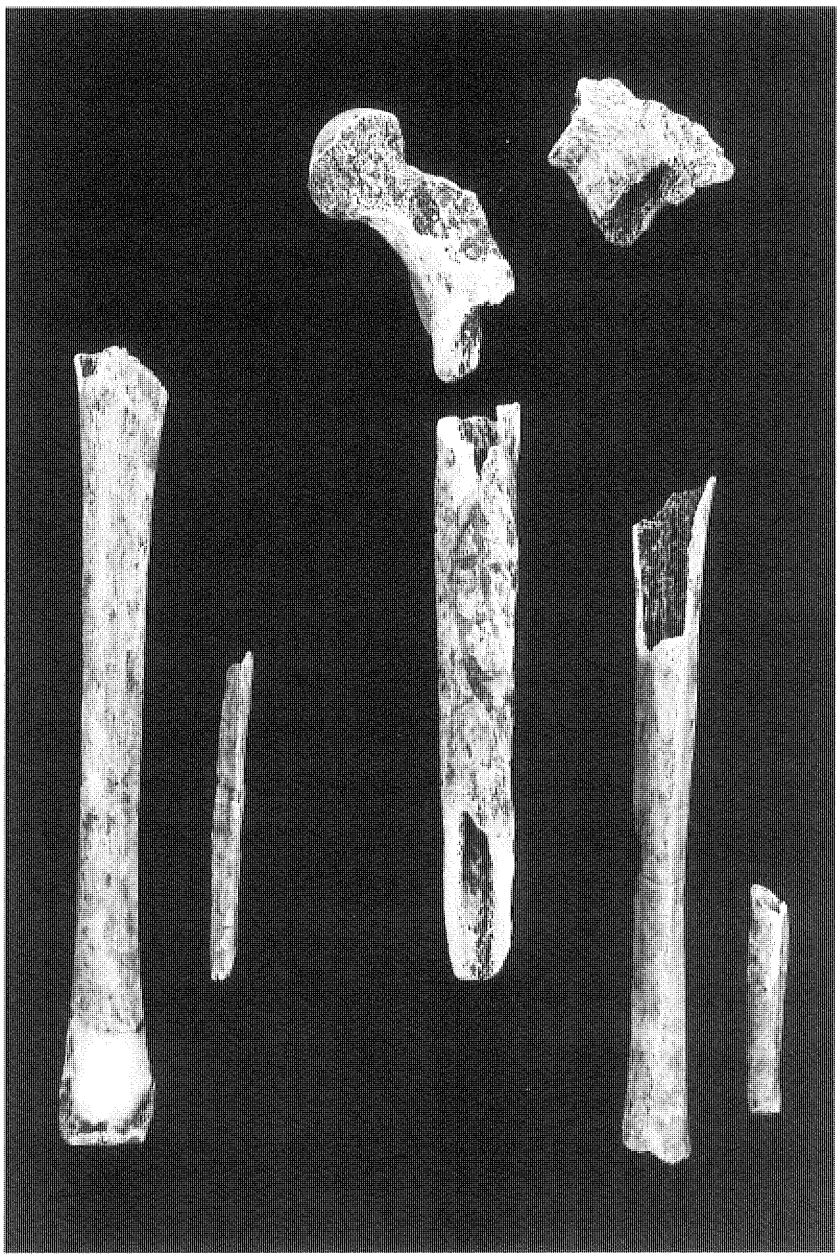
		原の辻 II－1 男性
1.	最大長（右）	—
	(左)	
2.	中央最大径（右）	14
	(左)	
3.	中央最小径（右）	10
	(左)	
4.	中央周（右）	14
	(左)	
4 a.	最小周（右）	—
	(左)	
3/2	中央断面示数（右）	71.43
	(左)	
4a/1	長厚示数（右）	—
	(左)	



頭蓋上面（Superior view of the skull）
原の辻Ⅰ—1（幼児）（Harunotsuji Ⅰ—1, Infant）



原の辻（Harunotsuji）①Ⅰ—2（女性，female），②Ⅰ—3（女性，female）
③Ⅰ—5（男性，male）



原の辻II－1（男性）（Harunotsuji II－1, male）

自然科学分析調査報告

古環境研究所

Ⅰ．原の辻遺跡の植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり，植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。この微化石は大きさや形態が植物群により固有であることから，土壌中から検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生（おもにイネ科）を復元することができる（杉山，1987）。また，イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

ここでは，環濠内の堆積物や周辺の土壌について分析を行い，イネをはじめとするイネ科栽培植物の検討および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

2．試　　料

調査地点は，第1地点（Ⅰ区4号溝断面），第2地点（Ⅰ区1号溝基盤），第3地点（Ⅰ区凹地），第4地点（Ⅰ区1号溝），第5地点（Ⅱ区1号溝），第6地点（調査区西部，三重目環濠），第7地点（調査区西部，三重目環濠の外側），第9地点（調査区中央部，三重目環濠），第10地点（調査区中央部，三重目環濠の内側9m），第11地点（調査区中央部，三重目環濠の外側8m），第13地点（Ｔ7区，トレンチ中央部深堀），第14地点（1号溝状遺構）の計12地点である。

試料は，弥生時代の土器包含層および環濠（Ｖ字型溝）や溝内の堆積物を中心に計60点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分 析 法

植物珪酸体の抽出と定量は，プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに，次の手順で行った。

1）試料の絶乾（105℃・24時間），仮比重測定

2）試料約1ｇを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40μm，約0.02ｇ）

※電子分析天秤により1万分の1ｇの精度で秤量

3）電気炉灰化法による脱有機物処理

4）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去，乾燥

6）封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

7）検鏡・計数

同定は，イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし，400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）をかけて，単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は，イネは赤米，キビ族はヒエ，ヨシ属はヨシ，ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は2.94(種実重は1.03)，8.40，6.31，1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48，クマザサ属は0.75である。

4．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表1，表2および図1～図12に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ，サヤヌカグサ属，ヨシ属，ウシクサ族(ススキ属やチガヤ属など)，ジュズダマ属，シバ属，キビ族型，ウシクサ族型，ウシクサ族型（大型），Aタイプ，ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），クマザサ属型（おもにクマザサ属），メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），マダケ属型（マダケ属，ホウライチク属），タケ亜科（未分類等）

穎の表皮細胞由来：イネ，オオムギ族

その他：表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），茎部起源，未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），ブナ科（アカガシ亜属？），マンサク科（イスノキ属），クスノキ科（バリバリノキ？），クスノキ科（タブノキ？），その他

(1) 第1地点（Ⅰ区4号溝断面，図1）

4号溝の覆土（試料1～4）について分析を行った。その結果，すべての試料からイネの植物珪酸体が検出された。このうち，試料2（6層）と試料3（7層上部）では密度が5,600個/gおよび8,400個/gと高い値であり，水田跡の検証や探査を行う場合の基準値としている5,000個/gを超えている。なお，これらの層準ではイネ籾（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も検出された。その他の分類

群では，覆土上部の試料１（５層）でメダケ節型が多く検出されたのが特徴的である。

(2) 第２地点（Ⅰ区１号溝基盤，図２）

１号溝の上層（試料１）および溝が構築される以前の堆積層（試料２～７）について分析を行った。その結果，上位の試料１～３からイネが検出された。このうち，試料１（溝の上層，４'層）では密度が10,500個/ｇと非常に高い値である。また，試料３ではオオムギ族（穎の表皮細胞）がわずかに検出された。オオムギ族については標本の検討が十分とは言えないが，ここで検出されたのはムギ類（コムギやオオムギなど）と見られる形態のもの（杉山・石井，1989）である。

下位の試料４～６ではマンサク科（イスノキ属）が多く検出され，ブナ科（シイ属）やクスノキ科（バリバリノキ？）も検出された。樹木はイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量がかなり低いことから，植物珪酸体分析の結果から古植生を復原する際には，他の分類群よりも過大に評価する必要がある。

(3) 第３地点（Ⅰ区凹地，図３）

凹地の覆土（試料５～７）について分析を行った。その結果，ヨシ属が比較的多く見られ，上位の試料５ではマンサク科（イスノキ属）が多く検出された。イネはいずれの試料からも検出されなかった。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると，ヨシ属が卓越していることが分かる。

(4) 第４地点（Ⅰ区１号溝，図４）

１号溝の覆土（試料１～４）について分析を行った。その結果，すべての試料からイネが検出された。このうち試料１と試料４では密度が8,000個/ｇ前後と高い値である。その他の分類群では，中位の試料２でウシクサ族（ススキ属など）が43,000個/ｇと多量に検出されたのが特徴的である。

(5) 第５地点（Ⅱ区１号溝，図５）

１号溝の覆土（試料１～３）について分析を行った。その結果，すべての試料からイネが検出された。密度はいずれも10,000個/ｇ以上と非常に高い値である。

(6) 第６地点（調査区西部，三重目環濠，図６）

三重目環濠の覆土およびその上層について分析を行った。その結果，すべての試料からイネが検出された。このうち，試料１～５および試料８では密度がおよそ5,000個/ｇ以上と高い値である。その他の分類群では，メダケ節型やウシクサ族型が比較的多く検出され，ヨシ属も連続的に検出された。

(7) 第７地点（調査区西部，三重目環濠の外側，図７）

三重目環濠の外側の堆積層（試料１～４）について分析を行った。その結果，試料１～３からイネ

が検出された。

(8) 第9地点（調査区中央部，三重目環濠，図8）

三重目環濠の覆土（試料1～4）について分析を行った。その結果，すべての試料からイネが検出された。このうち，試料1，3，4では密度が5,000個/g以上と高い値である。その他の分類群では，メダケ節型が多量に検出され，とくに試料2では密度が8万個/gにも達している。

(9) 第10地点（調査区中央部，三重目環濠の内側9m，図9）

三重目環濠の内側の堆積層（試料1，2）について分析を行った。その結果，両試料からイネが検出された。密度は，試料1（②層）で13,000個/g，試料2（弥生時代遺物包含層）で15,000個/gといずれも高い値である。その他の分類群では，メダケ節型が多く検出されたのが特徴的である。

(10) 第11地点（調査区中央部，三重目環濠の外側8m，図10）

三重目環濠の外側の堆積層（試料1，2）について分析を行った。その結果，両試料からイネが検出された。このうち，試料1（②層）では密度が10,000個/gと非常に高い値であるが，試料2（弥生時代遺物包含層）では1,200個/gと低い値である。その他の分類群では，メダケ節型が多く検出されたのが特徴的である。

(11) 第13地点（T7区，トレンチ中央部深堀，図11）

本地点は二重目環濠と三重目環濠の間に位置している。ここでは，現表土（1層）から約230cm深の9層までの層準について分析を行った。その結果，1層～6層でイネが検出された。このうち，3層では密度が7,300個/gと高い値であり，5層（弥生時代土器包含層）でも4,200個/gと比較的高い値である。なお，本地点と第14地点の層名は，各地点で層相の変化ごとに付けられたものであり，地点間の対応関係を示したものではない。

(12) 第14地点（1号溝状遺構，図12）

1号溝状遺構の覆土（6層～9層）およびその上層（4層，5層）について分析を行った。その結果，すべての試料からイネが検出された。このうち，5層(弥生時代土器包含層)では密度が6,100個/gと高い値である。溝状遺構の覆土ではヨシ属が連続的に検出された。

5．植物珪酸体分析から推定される植生・環境・農耕

(1) 環濠や溝が構築される以前

環濠や溝が構築される以前の堆積層からは，マンサク科（イスノキ属）やブナ科（シイ属），クスノキ科（バリバリノキ？）などの樹木（照葉樹）が比較的多く検出され，ヨシ属も見られた。また，イネやムギ類も部分的に少量検出された。

これらのことから，環濠や溝が構築される以前は，調査区の一部でイネやムギ類の栽培が行われていた可能性が考えられるが，量的に少ないことからその耕作期間は比較的短かったもの考えられる。当時の遺跡周辺にはイスノキ属やシイ属，クスノキ科などの照葉樹林が分布しており，ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたものと推定される。

(2) 弥生時代

環濠や溝の覆土および二重目環濠（中濠）と三重目環濠（外濠）の間の弥生時代遺物包含層からはイネが多量に検出された。また，環濠覆土の下位付近ではヨシ属，上位付近ではメダケ節型が多く検出され，ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）やネザサ節型なども見られた。メダケ節型にはメダケ属のメダケ節とリュウキュウチク節およびヤダケ属が含まれるが，植物珪酸体の形態からここで検出されたものの大部分はメダケ節（メダケなど）に由来するものと考えられる。また，ブナ科（シイ属）などの樹木（照葉樹）も多くの地点で検出された。

以上のことから，当時は二重目環濠（中濠）と三重目環濠（外濠）の間をはじめ，調査区の比較的広い範囲で稲作が行われていたものと推定される。環濠内はヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられるが，イネが多く検出されることから，用水や排水路として利用されていたことも想定される。

当時の遺跡周辺は，メダケ節（メダケ）などのタケ亜科が多く生育し，ススキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生であったものと推定される。メダケは高さ７m，直径３cmにもなり，建築用材や竹細工の材料などとして有用である(室井，1969)。ススキ属やチガヤ属は，日当たりの悪い林床では生育が困難であることから，環濠周辺はかなり開かれた環境であったものと推定される。なお，周辺ではシイ属などの照葉樹林もある程度見られたものと推定される。

参考文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第２号：p.27-37.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号：p.70-83.

杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村，ＦＰ直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析．日本第四紀学会要旨集，19：p.94-95.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—．考古学と自然科学，9：p.15-29.
藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定—．考古学と自然科学，12：p.29-41.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—．考古学と自然科学，17：p.73-85. 室井綽（1969）竹・笹の話—よみもの植物記—，北隆館.

表１　長崎県，原の辻遺跡の植物珪酸体分析結果

（単位：×100個／ｇ）

分類群＼試料	№1（Ⅰ区4号溝断面）				№2（Ⅰ区1号溝基盤）							№3（Ⅰ区凹地）			№4（Ⅰ区1号溝）				№5（Ⅱ区1号溝）		
	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7	5	6	7	1	2	3	4	1	2	3
イネ科																					
イネ	20	56	84	36	105	21	22								79	6	14	86	124	165	103
イネ籾殻(穎の表皮細胞)		14	14																		
オオムギ族(穎の表皮細胞)							7														
サヤヌカグサ属	14			7																	
ヨシ属	7							18	41			27	34	72							
ウシクサ族(ススキ属など)						7		6	7	7		11			7	428	7		104	34	
ジュズダマ属											6										
シバ属																					
キビ族型													14								
ウシクサ族型	61	21	63	36	98	14	22	30	129	14	6	11	20	52	14	147	36	43	78	103	90
ウシクサ族型(大型)						7		6								6				14	
Aタイプ										7	13		27								
タケ亜科																					
ネザサ節型	48			7	28										29	13	7		39	7	
クマザサ属型	34	21	21	7	14	7	15	24	14		6	5	20	20	36	6	29	7	7	76	
メダケ節型	244				91										144	13	79		52		19
マダケ属型																					
未分類等	258	7	14	14	223		7	6			6	5	7	7	123	140	129	14	65	76	78
その他のイネ科																					
表皮毛起源	27	21	21	7	28	7		12	7		6	5	14		7	13	7	14	20	48	45
棒状珪酸体	197	106	357	166	244	29	141	54	109	57	89	32	102	98	72	549	129	136	372	625	355
茎部起源																					
未分類等	713	415	525	397	677	214	430	535	586	481	342	398	470	512	563	715	580	343	562	646	562
樹木起源																					
ブナ科(シイ属)	7	7						36	7	14			20	26	7					14	6
ブナ科(アカガシ亜属？)																					
マンサク科(イスノキ属)	7	7	7				7	125	170	359		344	75								
クスノキ科(バリバリノキ？)				14	7	7	7	18	14	22		5	27	26	7	6			7		13
クスノキ科(タブノキ？)												5									
その他			7				7		20	7		5		7	7	6					
(海綿骨針)											32		7		7			7			
植物珪酸体総数	1636	676	1113	693	1515	314	667	868	1104	970	475	855	831	820	1098	2049	1017	643	1430	1807	1272

表 2

（単位：×100個／g）

分類群＼試料	No.6（調査区西部三重目環壕）								No.7（調査区西部）				No.9（調査区中央部三重目環壕）				No.10（中央部）		No.11（中央部）	
	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	1	2
イネ科																				
イネ	83	46	64	70	47	34	27	51	43	39	15		85	15	60	52	134	146	99	12
イネ籾殻(穎の表皮細胞)																				
オオムギ族(穎の表皮細胞)																				
サヤヌカグサ属																				
ヨシ属	14		21	19	34	7	14	15	6	6	15	43	6	23	20					12
ウシクサ族(ススキ属など)						7	34	7		13					7	89	14	27	14	12
ジュズダマ属																				
シバ属									6											6
キビ族型		8	7			7	7	15	12		7									
ウシクサ族型	69	107	43	70	61	154	204	145	98	45	124	18	151		40	74	49	53	99	66
ウシクサ族型(大型)	7				7					6										6
Aタイプ											37	32								
タケ亜科																				
ネザサ節型	21	15	28	45	41	128	68	22	43	6			61	38	127	170	14	40	78	72
クマザサ属型	28	53		6	7	20	20	29	12	6		6	36		20	37	21	53	21	24
メダケ節型	76	46	114	77	196	161	109	51	12	91			109	803	433	214	283	199	198	292
マダケ属型			7																	
未分類等	166	168	184	274	257	295	258	204	86	78	37		376	75	220	251	240	305	169	119
その他のイネ科																				
表皮毛起源	7	46	21	32	14	27	27	7	25	32	15	6	67	23	13	7	14	33	64	24
棒状珪酸体	104	114	270	402	250	564	740	487	289	110	292	61	576	173	133	354	304	226	290	137
茎部起源									6						7			7		
未分類等	381	366	468	555	540	712	727	705	554	545	599	474	836	360	520	693	699	744	551	555
樹木起源																				
ブナ科(シイ属)			7	13		7			6		7							7	7	
ブナ科(アカガシ亜属？)																				
マンサク科(イスノキ属)	14	15			14				6											
クスノキ科(バリバリノキ？)	7	15	7	13		13			18				6				7	7	14	12
クスノキ科(タブノキ？)																				
その他	7					13		7												
(海綿骨針)			7	6		7		7	12		7	18	6			7	7			
植物珪酸体総数	985	1000	1242	1575	1465	2149	2234	1745	1225	980	1148	632	2308	1509	1599	1940	1780	1846	1603	1348

表 3

（単位：×100個／g）

分類群＼試料	第13地点（トレンチ中央部深掘）													第14地点（1号溝状遺構）					
	1-2	1-2	2	3	4	5	6	7-1	7-2	7-3	8	9-1	9-2	4	5	6	7	8	9
イネ科																			
イネ	20	36	40	73	21	42	11							28	61	7	13	7	7
イネ籾殻(穎の表皮細胞)																			
オオムギ族(穎の表皮細胞)																			
サヤヌカグサ属																	7		
ヨシ属	7	14	7		14	12								14		55	27	7	22
ウシクサ族(ススキ属など)	27	22		7	7	12	22								41	14	13		7
ジュズダマ属																			
シバ属	7										7		8	7					
キビ族型						6													15
ウシクサ族型	40	36	13	13	35	30	16	6		8			8	21		28	20	134	30
ウシクサ族型(大型)						6								7		7	7		7
Aタイプ					7			13											
タケ亜科																			
ネザサ節型	13	14	7		14	6								14	7	7			
クマザサ属型		7	13	13		6			8			7		28	34	21		7	
メダケ節型	13	36		13	7														
マダケ属型																			
未分類等	20	57	101	73	91	91	11	6			14		8	56	225	55	101		30
その他のイネ科																			
表皮毛起源	13	7	20	7	28	24	22	6					8	14	48	48	54	35	30
棒状珪酸体	193	129	141	212	189	175	44	64	38	15	21	22	15	247	348	221	376	373	275
茎部起源																			
未分類等	253	230	282	264	377	314	163	167	38	23	159	15	30	332	355	352	329	267	327
樹木起源																			
ブナ科(シイ属)	13			7	7	6				8							13		
ブナ科(アカガシ亜属？)	7	14		7	14	6	16							7	7	7			
マンサク科(イスノキ属)															7	14	7		
クスノキ科(バリバリノキ？)					7	6								7			13		
クスノキ科(タブノキ？)																			
その他						12	11		8			7	8		7		20		
(海綿骨針)	33	14	7			6	5	13		15		7		14		14	13	28	59
植物珪酸体総数	625	603	623	688	818	755	316	263	91	53	201	52	83	783	1139	835	1000	830	750

表4　主な分類群の植物体量の推定値

（単位：kg/m²・cm）

分類群＼試料	No.1（Ⅰ区4号溝断面）				No.2（Ⅰ区1号溝基盤）							No.3（Ⅰ区凹地）			No.4（Ⅰ区1号溝）				No.5（Ⅱ区1号溝）		
	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7	5	6	7	1	2	3	4	1	2	3
イネ科																					
イネ	0.60	1.66	2.47	1.06	3.08	0.63	0.65								2.34	0.19	0.42	2.52	3.65	4.85	3.04
ヨシ属	0.43							1.13	2.58			1.70	2.15	4.55							
ウシクサ族（ススキ属など）						0.09		0.07	0.08	0.09		0.13			0.09	5.30	0.09		1.30	0.43	
タケ亜科																					
ネザサ節	0.23			0.03	0.13										0.14	0.06	0.03		0.19	0.03	
クマザサ属	0.25	0.16	0.16	0.05	0.10	0.05	0.11	0.18	0.10		0.05	0.04	0.15	0.15	0.27	0.05	0.21	0.05	0.05	0.57	

※表1の値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数をかけて算出。

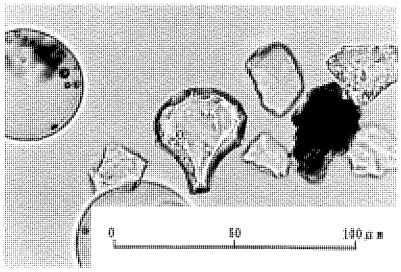
（単位：kg/m²・cm）

分類群＼試料	No.6（調査区西部三重目環壕）								No.7（調査区西部）				No.9（調査区中央部三重目環壕）				No.10（中央部）		No.11（中央部）	
	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	1	2
イネ科																				
イネ	2.45	1.35	1.88	2.06	1.39	0.99	0.80	1.50	1.27	1.14	0.43		2.49	0.44	1.76	1.52	3.95	4.29	2.91	0.35
ヨシ属	0.88		1.34	1.21	2.13	0.42	0.86	0.92	0.39	0.41	0.92	2.69	0.38	1.42	1.26					0.75
ウシクサ族（ススキ属など）						0.08	0.42	0.09		0.16					0.08	1.10	0.18	0.33	0.18	0.15
タケ亜科																				
ネザサ節	0.10	0.07	0.14	0.21	0.19	0.61	0.33	0.10	0.21	0.03			0.29	0.18	0.61	0.81	0.07	0.19	0.37	0.34
クマザサ属	0.21	0.40		0.05	0.05	0.15	0.15	0.22	0.09	0.05		0.05	0.27		0.15	0.28	0.16	0.40	0.16	0.18

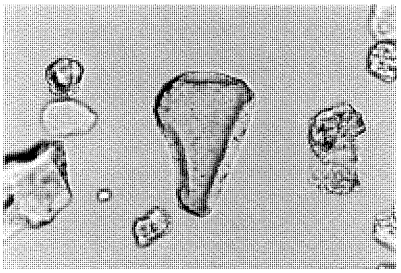
（単位：kg/m²・cm）

分類群＼試料	第13地点（トレンチ中央部深掘）												第14地点（1号溝状遺構）					
	1-1	1-2	2	3	4	5	6	7-1	7-2	7-3	8	9-1	9-2	4	5	6	7	8	9
イネ科																			
イネ	0.59	1.06	1.18	2.14	0.62	1.24	0.32							0.83	1.81	0.20	0.39	0.21	0.22
ヨシ属	0.42	0.91	0.42		0.88	0.76								0.89		3.48	1.69	0.44	1.41
ウシクサ族（ススキ属など）	0.33	0.27		0.08	0.09	0.15	0.27								0.51	0.17	0.17		0.09
タケ亜科																			
ネザサ節	0.06	0.07	0.03		0.07	0.03								0.07	0.03	0.03			
クマザサ属		0.05	0.10	0.10		0.05			0.06			0.06		0.21	0.26	0.16		0.05	

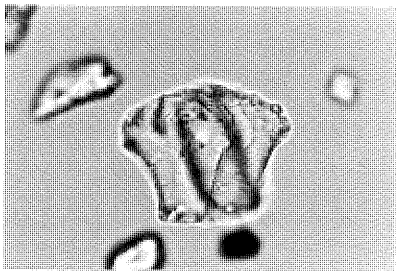
図版 1



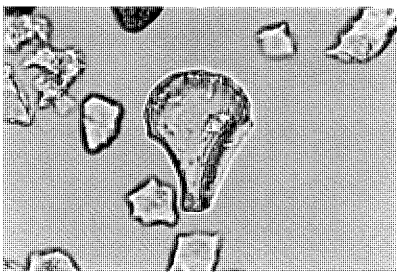
1．イネ
10地点　1試料



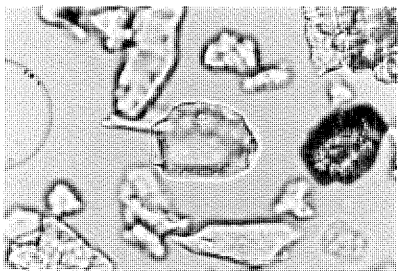
6．ウシクサ族(ススキ属など)
4地点　2試料



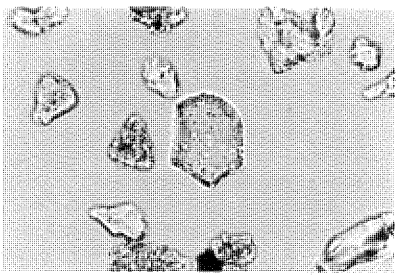
11．ネザサ節型
7地点　1試料



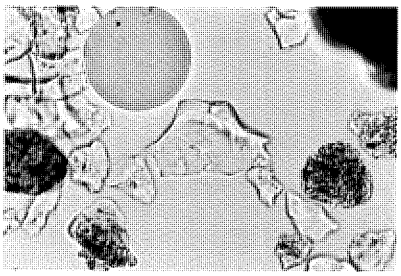
2．イネ
4地点　2試料



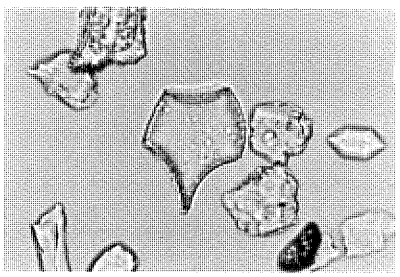
7．ジュズダマ属
2地点　7試料



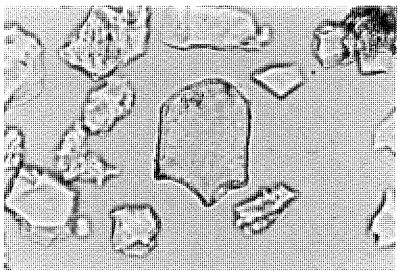
12．クマザサ属型
2地点　4試料



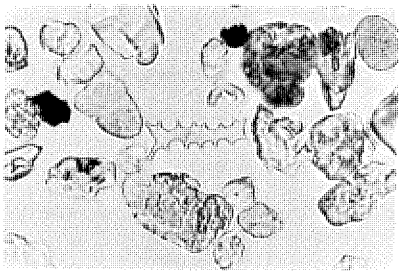
3．イネの初殻(頴の表皮細胞)
1地点　3試料



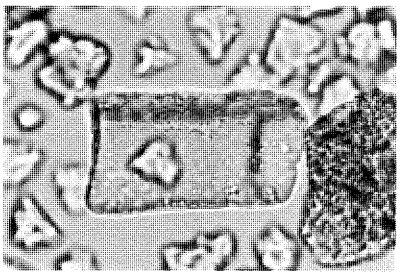
8．シバ属
7地点　1試料



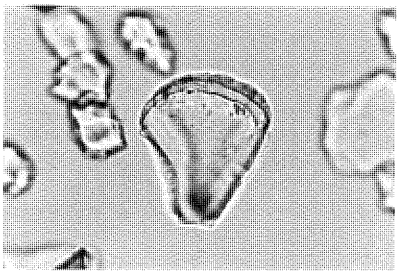
13．クマザサ属型
6地点　8試料



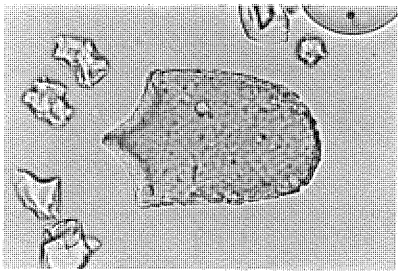
4．オオムギ族(頴の表皮細胞)
2地点　3試料



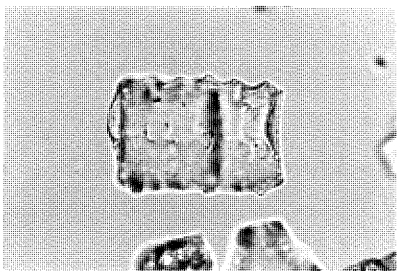
9．キビ族型
3地点　6試料



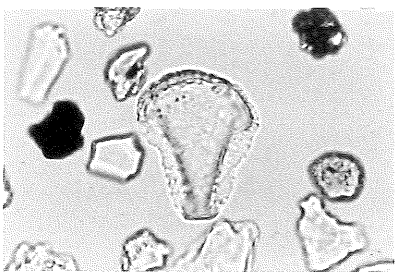
14．メダケ節型
9地点　2試料



5．ヨシ属
6地点　8試料

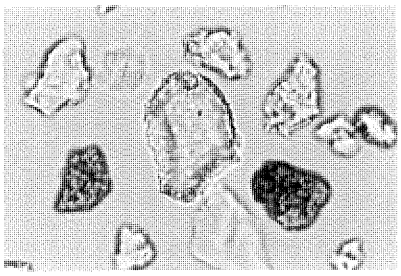


10．ネザサ節型
9地点　4試料

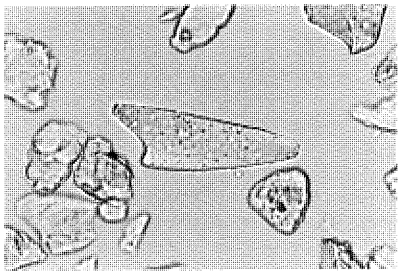


15．メダサ節型
6地点　1試料

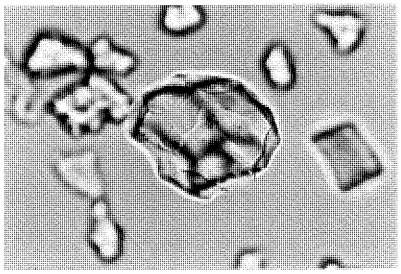
図版 2



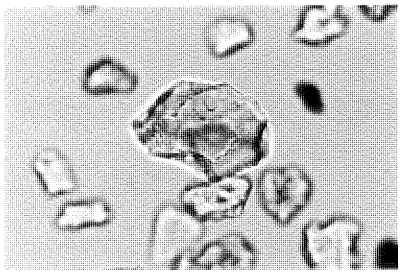
16. タケ亜科(その他)
6 地点　3 試料



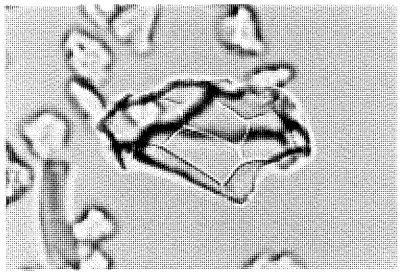
19. ブナ科(シイ属)
1 地点　2 試料



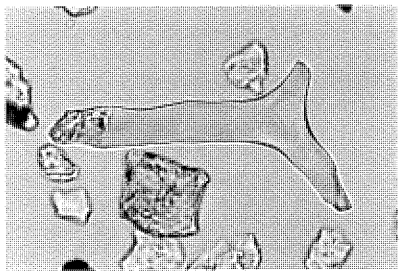
22. マンサク科(イスノキ属)
2 地点　4 試料



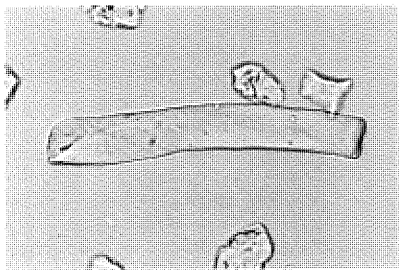
17. 表皮毛起源
11地点　1 試料



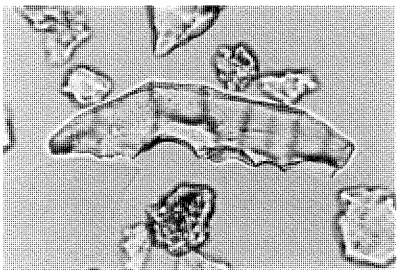
20. ブナ科(シイ属)
2 地点　6 試料



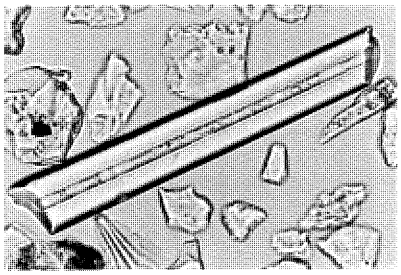
23. クスノキ科(バリバリノキ)
3 地点　7 試料



18. ブナ科(シイ属)
2 地点　6 試料



21. マンサク科(イスノキ属)
2 地点　6 試料



24. 海綿骨針
3 地点　6 試料

II．原の辻遺跡における種実同定

1．はじめに

種実同定は，従来，第四紀学や地質学の分野から化石としてあつかわれてきた。考古遺跡では，流路や遺構内堆積物に含まれており，一定量の堆積物から水洗選別して種実組成を調べることによって，植生と環境を推定することができる。種実は花粉・植物珪酸体などの植物遺体のなかで種まで同定できるものが多いため，栽培植物もわかりやすく，農耕の推定により適している。また，大型植物遺体であるため移動性も低く現地性の高い植生を復原することもできる。

北九州の弥生遺跡では，菜畑遺跡，板付遺跡などで調査が行われており，イネ籾をはじめ，ウリ類やヒョウタン類などの栽培植物が検出されている。原の辻遺跡では，以上の要因も考慮に入れ同定と復原を行った。

2．試料と方法

調査地点は，第1地点（Ⅰ区4号溝断面），第2地点（Ⅰ区1号溝基盤），第3地点（Ⅰ区凹地），第4地点（Ⅰ区1号溝），第5地点（Ⅱ区1号溝），Ⅰ区Ⅴ溝，川沿い東2トレンチ3の計7地点である。試料は，弥生時代の土器包含層および環濠や溝内の堆積物を中心に計12点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

試料は，堆積をはかった後，0.25mmと3mmのふるいを用いて水洗選別を行った。ただし，Ⅰ区Ⅴ溝の試料については，すでに選別されたものをあつかった。0.25mmふるいでは試料100ccを用いて微細遺体を調べ，3mmふるいでは試料500ccを用いて大きな遺体を調べた。選別と同定は肉眼及び双眼実体顕微鏡（ビノキュラー）下で行い，同定は現生標本との対比で行った。同定レベルによって分類は種や属の階級単位の分類群で行った。

3．分類群について

同定された種実遺体は樹木21，草本22の計43分類群であった。結果を表1・2にまとめ，主要な分類群について記載する。主要な分類群は写真に示した。

4．結果と考察

(1) 第1地点（Ⅰ区4号溝断面）の7層（図1）

樹木より草本の種実が多い。樹木ではヒサカキが最も多く，サカキ，モチノキ，キイチゴ属，サル

ナシ属などが検出された。草本ではナデシコ科，アカザ属，ギシギシ属が多く，ナス科，カタバミ属，アブラナ科の種実が検出された。

樹木より草本が多いため，周囲は比較的ひらかれた景観であったと推定される。樹木のほとんどを占めるヒサカキは照葉樹林の低木相であり，サカキ・モチノキなども中低木の要素であり，近接してこれらが生えていたと考えられる。草本で集落や畑などの乾燥地に生育する人里植物の性格をもつナデシコ科とアカザ属が繁茂していた。よって周囲はやや乾燥した人里の環境であったと考えられる。4号溝の縁辺には水路ぎわなどに多いギシギシ属が繁茂していた。

(2) 第2地点（Ⅰ区1号溝基盤，図2）

樹木のほうが草本の種実より多い。樹木ではヒサカキが多く，ニワトコなどが出現する。草本ではナス科・カタバミなどが少し含まれていた。

周囲は樹木が多く，草本は少なかった。ヒサカキを主にニワトコが分布し，高木としてはムクノキやカラスザンショウなどが生育していた。花粉分析結果ともあわせて周囲は照葉樹林に覆われていたと推定される。人里植物が認められず，自然度の高い植生であったとみなされる。堆積地は樹林内の小規模な湿地であったと推定される。

(3) 第3地点（Ⅰ区凹地）の試料1・2（図3）

下位の試料2では，樹木の種実が草本より多い。樹木ではヒサカキが極めて多く，サカキ・サルナシ属・ウドカズラ・クワ属なども出現している。草本ではタデ属がやや多い。上位の試料1になると，草本の種実が多くなる。カヤツリグサ科が多く，次にセリ科，タデ属が続く。ミゾソバやオモダカ科も含まれる。ヒサカキをはじめとサカキ・シイ属という照葉樹林の構成要素が多いため，周囲が照葉樹林に覆われていたことが推定される。ウドカズラもみられ，自然度の高い植生が分布していたと考えられる。堆積地はカヤツリグサ科・タデ科・セリ科・オモダカ科などの水湿地草本の繁茂する照葉樹林に囲まれた湿地であった。

(4) 第4地点（Ⅰ区1号溝）の試料1・2・3（図4）

下位の試料3では，種実があまり含まれておらず，ツルコウゾ・カヤツリグサ科など少量検出された。他にイネ・ウリ類が含まれていた。試料2ではキイチゴ属とシマサルナシが多い。試料1ではあまり種実が含まれず，キイチゴ属とサルナシ属がわずかに検出された。

キイチゴ属・シマサルナシをはじめツルコウゾ・サルナシ属はいずれも食用となる果実であり，栽培植物のイネ・ウリ類もみられる。このことから本地点の種実遺体は，周囲の植生が反映されたものではなく，人為要因の食用植物の種実が堆積したとみるのが妥当であろう。

(5) 第5地点（Ⅰ区1号溝）の試料1・2・3（図5）

中下位の試料2・3には種実は含まれていなかった。上位の試料1から，ツルコウゾ・キイチゴ属・ニワトコがわずかに検出された。

種実遺体が少ないのは，堆積速度がきわめて速かったか植物遺体が分解するような乾燥した堆積環境であったかが考えられる。ここでは後者が妥当であると推定される。これらも第4地点N区1号溝と同様に人為要因の食用植物の種実が堆積したとみなされる。

(6) Ⅰ区Ⅴ溝（表2）

水洗選別されていた試料で，12分類群が同定された。結果は表2に示すように，栽培植物と可食植物の種実がほとんどである。ヤマモモ，ツルコウゾ，ブドウ属は食べられる果実であり，イネ・マメ類（アズキ？）・ウリ類（マクワ・シロウリ型）・ヒョウタン類は渡来した栽培植物である。キカラスウリは塊根からデンプンがとれる有用植物である。

Ⅰ区Ⅴ溝の種実遺体は，食用植物が投棄されたりして人為的に堆積したものと推定される。マメ類（アズキ？）・ウリ類（マクワ・シロウリ型）・ヒョウタン類の畑作物の検出は，原の辻遺跡において，水田に加えてこれらの畑作が行われていたことを示唆する。キカラスウリも栽培されていた可能性が高い。

(7) 川沿い東2トレンチ3のNo.1（図6）

樹木の種実が草本より多い。樹木ではヒサカキが多く，シイ属・クワ属・カラスザンショウ・アカメガシワ・ウドカズラ・ニワトコなどが検出された。草本は極めて少ない。樹木ではヒサカキやシイ属等は照葉樹林の構成要素であり，周囲が照葉樹林に覆われていたこと示唆する。ウドカズラの検出からも人の手が加わっていない自然度の高い植生が分布していたと考えられる。

分類群			第1地点 I区4号溝断面	第2地点 I区1号溝	第3地点 I区凹地		第4地点 I区1号溝			第5地点 II区1号溝			川沿い東2トレンチ 3№1
学名	和名	部位	7層	基盤	1	2	1	2	3	1	2	3	931027
arbor	木本												
Myrica rubra Sieb. et Zucc.	ヤマモモ	核							1				
Castanopsis	シイ属	堅果			4								5
Aphananthe aspera Planch.	ムクノキ	核		1	1	1							
Morus	クワ属	種子		1	3	7			2				5
Broussonetia kazioki Sieb.	ヒメコウゾ	種子		1									
Broussonetia kaempferi Sieb.	ツルコウゾ	種子						5	5	2			
Rubus	キイチゴ属	核	3	3	1		2	53	2	2			
Phellodendron amurense Rupr.	キハダ	種子				1							2
Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et Zucc	カラスザンショウ	種子	1	2	2								7
Mallotus japonicus Muell. Arg.	アカメガシワ	種子				1							5
Ilex integra Thunb.	モチノキ	種子	1			1							2
Vitis	ブドウ属	種子							1				1
Ampelopsis leeoides Planch.	ウドカズラ	種子			1	9							3
Actinidia	サルナシ属	種子	4			10	1						1
Actinidia rufu Planch. ex Miq.	シマサルナシ	種子						18					1
Cleyera japonica Thunb.	サカキ	種子	3	1	2	18							
Eurya japonica Thunb.	ヒサカキ	種子	39	61	20	343							78
Cornus brachypoda C. A. Mey.	クマノミズキ	核							1				
Symplocos	ハイノキ属	種子											1
Styrax japonica Sieb. et Zucc.	エゴノキ	種子			1								
Clerodendrum trichotomum Thumb.	クサギ	種子											1
Sambucus Sieboldiana Blume ex graedn.	ニワトコ	種子		16	6	5		1	2	1			7
arbor＋herb	木本と草本を含む												
Araliaceae	ウコギ科	種子	1	2	1	1							
herb	草本												
Alismataceae	オモダカ科	種子			2								
Oryza sativa L.	イネ	穎							2				
Gramineae	イネ科	穎	6										
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	2		85	1			7				1
Carex	スゲ属	果実				1							
Polygonum Thunbergii Sieb. et Zucc.	ミゾソバ	果実			2								
Polygonum	タデ属	果実	1	1	11	31							1
Rumex	ギシギシ属	果実	27										
Polygonaceae	タデ科	果実											1
Chenopodium	アカザ属	種子	41		1								
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	62	1					3				
Ranunculaceae	キンポウゲ科	果実		1									
Cocculus orbiculatus DC.	アオツヅラフジ	種子			1								
Cruciferae	アブラナ科	種子	3		2								
Oxalis	カタバミ属	種子	3	1					1				
Ampelopsis brevipedunculate Trautv.	ノブドウ	種子			1								
Umbelliferae	セリ科	果実	1	1	40								
Solanaceae	ナス科	種子	11	4	1			1	3				
Cucumis melo L.	ウリ類	種子							1				
Compositae	キク科	果実							3				
arbor	木本		51	86	41	396	3	77	14	5	0	0	119
arbor＋herb	木本と草本を含む		1	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0
herb	草本		157	9	146	33	0	1	20	0	0	0	3
Total	合計		209	97	188	430	3	78	34	5	0	0	122

表5　原の辻遺跡における種実同定結果（0.25mm100cc中，3mm500cc中）

和　名	学　名	部位	個数
樹木	arbor		
ヤマモモ	*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.	核	2
ツルコウゾ	*Broussonetia kaempferi* Sieb.	種子	2
カラスザンショウ	*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.	種子	1
ブドウ属	*Vitis*	種子	1
クマノミズキ	*Cornus brachypoda* C. A. Mey.	核	2
草本	herb		
イネ	*Oryza sativa* L.	果実	2
カナムグラ	*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.	種子	2
マメ類(アズキ？)	Leguminosea (*Vigna*)	種子	2
ウリ類(マクワ・シロウリ型)	*Cucumis melo* L.	種子	2
カラスウリ	*Trichosanthes cucumeroides* Maxim.	種子	2
ヒョウタン類	*Lagenaria siceraria* Standl.	種子	2
トウガン	*Benincasa cerifera* Savi	種子	2
計	total		22

表6　Ⅰ区Ⅴ溝における種実同定結果

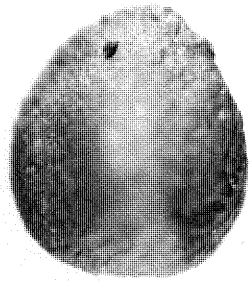
表7　追加種実同定結果（金原正明同定提供）

分類群 学名	和名	部位	A 前期後半	B 中期前半	Ⅰ区	Ⅰ100 -2	Ⅰ区中央 排土表採	Ⅰ区1号 黒色排土	Ⅰ区中央 黒色
arbor	樹木								
Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	カヤ	種子	20	3		2			
Cephalotaxus harringtonia K. Koch	イヌガヤ	種子	1						
Myrica rubra Sieb. et Zucc.	ヤマモモ	核	5	5	1				
Quercus	コナラ属	堅果							
Castanopsis	シイ属	堅果	1	1				3	
Aphananthe aspera Planch.	ムクノキ	核		18	1				
Broussonetia Kaempferi Sieb.	ツルコウゾ	種子	85						
Michelia compressa Sargent	オガタマノキ	種子		3					
Cinnamomum camphora Sieb.	クスノキ	種子	1						
Prunus salicina Lindley	スモモ	核			1				
Prunus sect. Pseudocerasus	サクラ属サクラ節	核	1	1					1
Aleurites cordata R. Br. ex Steud.	アブラギリ	種子				2			
Mallotus japonicus Muell. et Arg.	アカメガシワ	種子	3						
Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et Zucc.	カラスザンショウ	種子	11	5					
Zanthoxylum armatum DC. var. subtrifoliatum Kitam.	フユザンショウ	種子	7	1					
Phellodendron amurense Rupr.	キハダ	種子		1					
Melia azedarach L. var. subtripinnata Miq.	センダン	核					1		
Ilex integra Thunb.	モチノキ	種子	1						
Euscaphis japonica Kaniz	ゴンズイ	種子	2	20					
Vitis	ブドウ属	種子	5	10					
Cleyera japonica Thunb.	サカキ	種子		1					
Camellia japonica L.	ヤブツバキ	種子		7	3	1		1	
Cornus brachypoda C. A. Mey.	クマノミズキ	核	8	1					
Styrax japonica Sieb. et Zucc.	エゴノキ	核	5	48			3	4	1
herb	草本								
Oryza sativa L?	イネ？	炭化種子							
Triticum aestivum L.	コムギ	炭化種子	7	1					
Humulus scandens Merr.	カナムグラ	種子	12						
Leguminosae	マメ類(アズキ？)	炭化種子	3						
Trapa dispinosa Roxb. var. linumai Nakano	ヒシ	果実(破片)	4						
Cocculus orbiculatus DC.	アオツヅラフジ	種子		2					
Ampelopsis brevipedunculata Trautv.	ノブドウ	種子		2					
Trichosanthes cucumeroides Maxim	カラスウリ	種子	8						
Trichosanthes kirilowii Maxim. var. japonica Kitam	キカラスウリ	種子	10	21	1				
Lagenaria siceraria Standl.	ヒョウタン類	種子	3	3	2		1		1
Cucumis melo L.	ウリ類	種子	16	3	2				
Total	合計		219	157	11	5	6	8	4

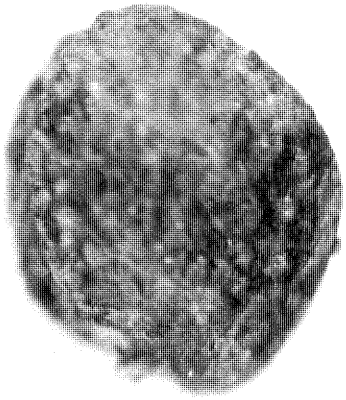
図3　原の辻遺跡出土種実Ⅰ

1．シイ属堅果　1mm

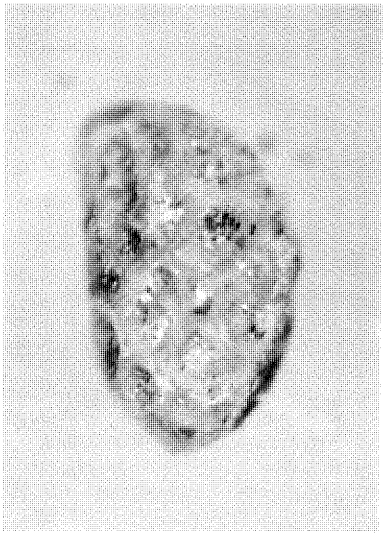
2．ムクノキ核　1mm



3．クワ属種子　0.1mm

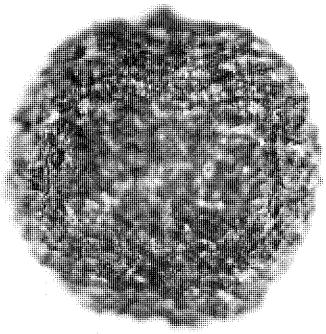


4．ヒメコウゾ種子　0.2mm



5．キイチゴ属核　0.2mm

6．キハダ種子　1mm



7．アカメガシワ種子　1mm

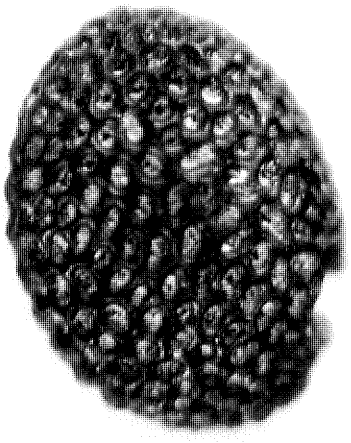
8 a．モチノキ種子

8 b．同左　1mm

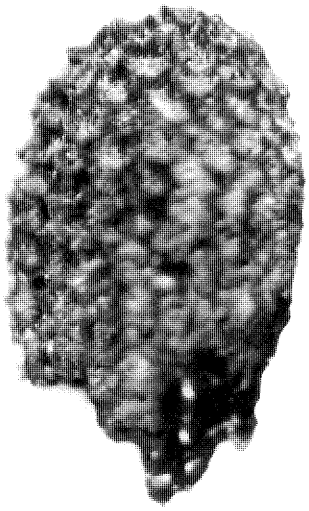
図4　原の辻遺跡出土種実II

9a．ウドカズラ種子

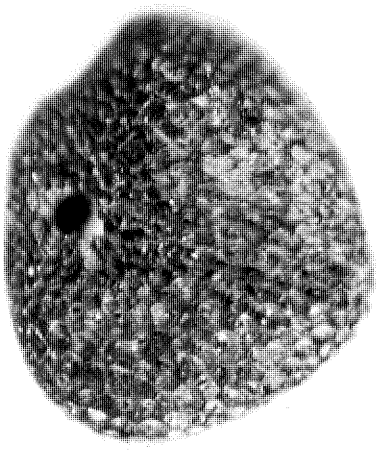
9b．同左



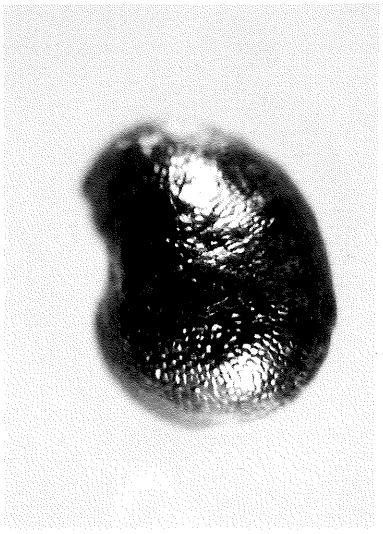
10．マタタビ属種子　0.5mm　0.2mm



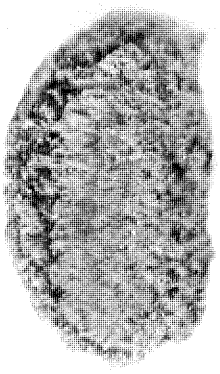
11．シマサルナシ種子　0.2mm



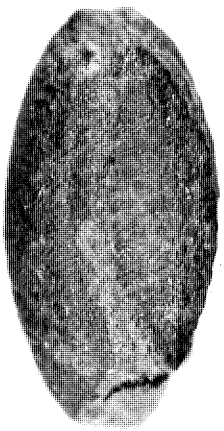
12．ヒサカキ種子　0.2mm



13．サカキ種子　0.5mm



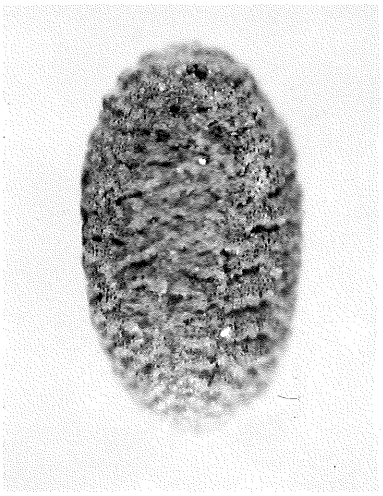
14．ウコギ科種子　0.2mm



15．エゴノキ核　1mm

16．クサギ種子　0.5mm

図 5　原の辻遺跡出土種実III

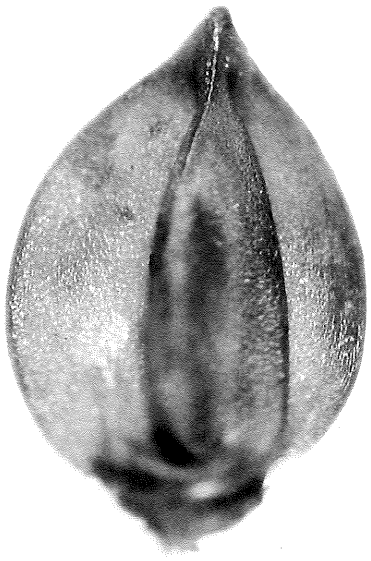


17. ニワトコ種子　0.5mm

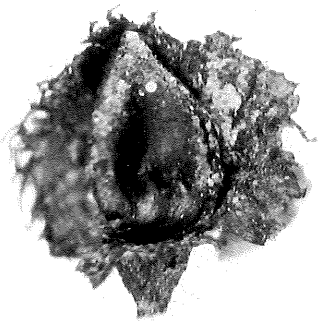
18. オモダカ科種子　0.2mm

19. イネ科頴　0.2mm

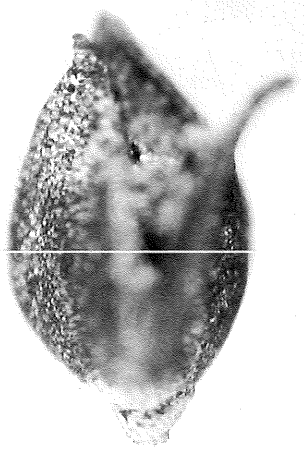
20. カヤツリグサ科果実　0.2mm



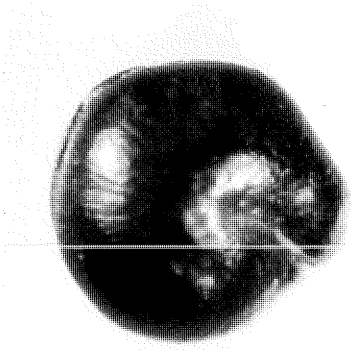
21. ミゾソバ果実　0.2mm



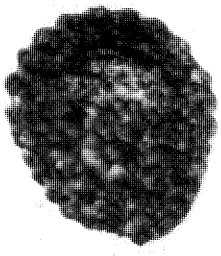
22. ギシギシ属果実　1 mm



23. タデ科果実　10mm

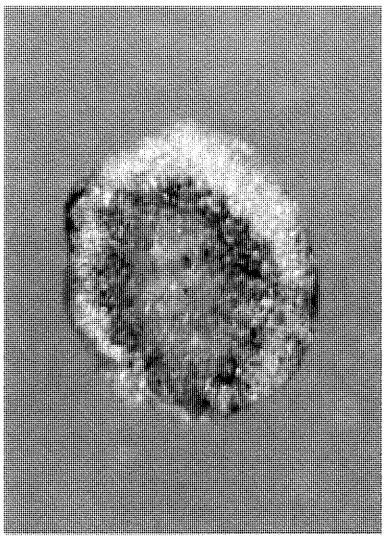


24. アカザ属種子　1 mm



25. ナデシコ科種子　0.5mm

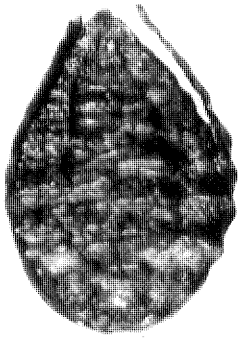
図 6　原の辻遺跡出土種実Ⅳ



26．キンボウゲ科果実　0.2mm

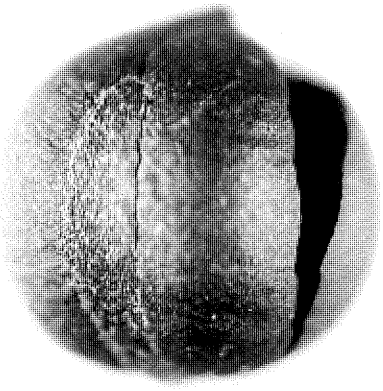
27．アオツヅラフジ核　0.5mm

28．アブラナ科種子　0.2mm



29．カタバミ属種子　0.2mm

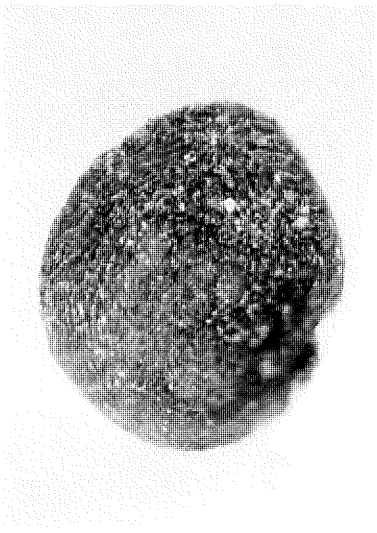
30a．ノブドウ種子



30b．同左　0.5mm

31a．セリ科果実

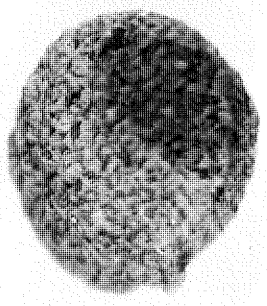
31b．同左　0.3mm



32．ナス科種子　0.3mm

図7　原の辻遺跡出土種実Ⅴ（Ⅰ区Ⅴ溝）

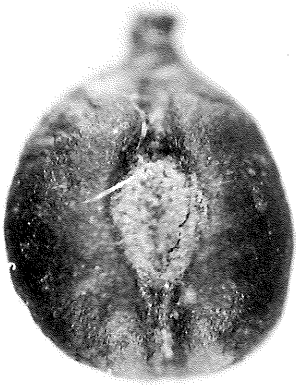
33．ヤマモモ核　——1㎜



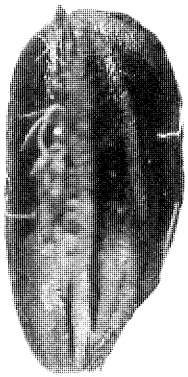
34．ツルコウゾ種子　——0.5㎜

35．カラスザンショウ種子　——0.5㎜

36a．ブドウ属種子　——0.5㎜

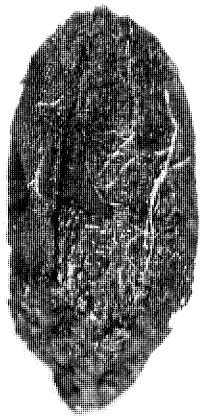


36b．同左　——0.5㎜



37．イネ果実(炭化米)　——0.5㎜

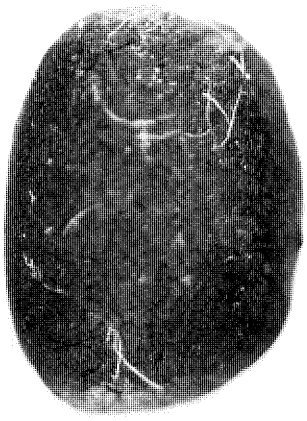
38a．イネ果実(炭化米)



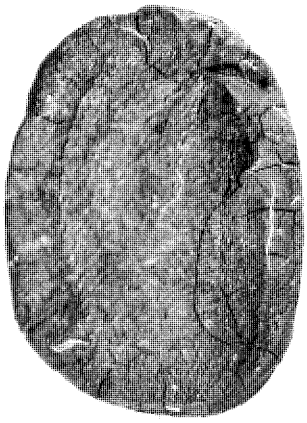
38b．同左　——1㎜

39．マメ科炭化種子　——1㎜

図8　原の辻遺跡出土種実Ⅵ（Ⅰ区Ⅴ溝）

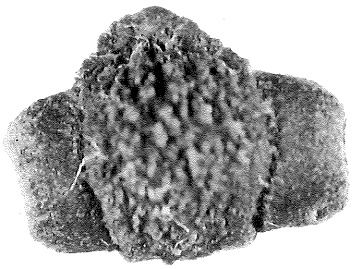


40a．マメ科炭化種子

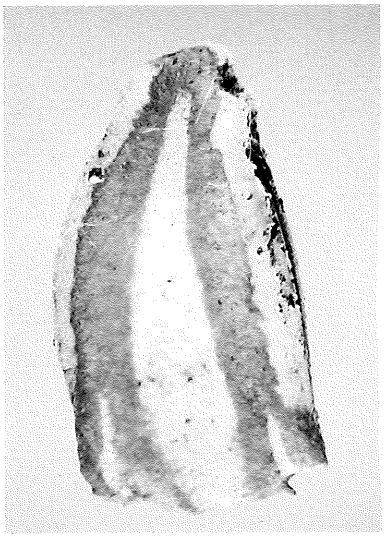


40b．同左　0.5mm

41．マメ科炭化種子　0.5mm



42．カラスウリ種子　1mm



43．ヒョウタン類種子　1mm

44．キカラスウリ種子　1mm

45．キカラスウリ種子　1mm

46．ウリ類種子　1mm

47．ウリ類種子　1mm

III. 原の辻遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は，従来湖沼や湿原の堆積物を対象として広域な森林変遷を主とする時間軸の長い植生や環境の変遷を復原する手法として用いられてきた。考古遺跡では，埋没土壌や遺構内堆積物など堆積域や時間軸の限定された堆積物を対象とすることによって，狭い範囲の植生や短い時間における農耕を含む植生や環境の変遷を復原することも可能である。また，植物遺体分析は植物珪酸体・種実・花粉などによって特性が異なる。原の辻遺跡ではこれらのことも考慮に入れて植生・環境・農耕の復原推定を行った。

2. 試　料

調査地点は，第1地点（I区4号溝断面），第2地点（I区1号溝基盤），第3地点（I区凹地），第4地点（I区1号溝），第5地点（II区1号溝），第6地点（西部三重目環濠），第8地点（大溝敷石付近），第9地点（中央部三重目環濠），第12地点（弥生時代溝），第15地点（調査区東V字溝）の計10地点である。試料は，弥生時代の土器包含層および環濠や溝内の堆積物を中心に計22点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 方　法

花粉粒の分離抽出は，基本的には中村（1973）を参考にし，試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1）5％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
2）水洗した後，0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
4）水洗した後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃　硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
5）再び氷酢酸を加えた後，水洗を行う。
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い，グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は，1500rpmで2分間の遠心分離を行った後，上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉（1973）および中村（1980）を基本とし，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによっ

て，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(—)で結んで示した。なお，科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては，中村（1974，1977）を参考にし，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し，個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4．結　果

(1) 分類群

分析の結果，樹木花粉29，樹木花粉と草本花粉を含むもの4，草本花粉29，シダ植物胞子2形態の計64分類群が同定された。結果は花粉遺体一覧を表（表1・2）にまとめ，花粉総数が200個以上の試料は花粉総数を基数とする百分率を算定して花粉組成図にあらわした。なお，主要な分類群は写真に示した。

以下に同定された分類群を示す。〔樹木花粉〕

マキ属，モミ属，ツガ属，マツ属複維管束亜属，スギ，イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科，ヤマモモ属，サワグルミ，ハンノキ属，カバノキ属，ハシバミ属，クマシデ属—アサダ，クリ—シイ属，ブナ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属—ケヤキ，エノキ属—ムクノキ，キハダ，アカメガシワ，ウルシ属，モチノキ属，カエデ属，ツバキ属，モクセイ科，トネリコ属，シナノキ属，グミ属，タニウツギ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科，マメ科，バラ科，ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属，サジオモダカ属，オモダカ属，マルバオモダカ，イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，ミズアオイ属，ギシギシ属，タデ属サナエタデ節，ソバ属，スベリヒユ，アカザ科—ヒユ科，ナデシコ科，キンポウゲ科，アブラナ科，フウロソウ属，ノブドウ，ヒシ属，セリ科，ナス科，オオバコ属，シソ科，オミナエシ科，ゴキヅル，タンポポ亜科，キク亜科，オナモミ属，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

(2) 花粉分析結果

1）第1地点（I区4号溝断面）

下位の7層では樹木花粉より草本花粉が多い。樹木花粉ではクリ—シイ属・エノキ属—ムクノキが優占する。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科とオナモミ属が優占する。

5層では草本花粉の占める割合がより高くなる。樹木花粉ではマツ属単維管束亜属とクリ—シイ属が優占する。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科とアブラナ科・ヨモギ属が優占し，アカザ科—ヒユ

科・タンポポ亜科なども出現する。

2）第2地点（I区1号溝基盤）

樹木花粉の占める割合がきわめて高い。樹木花粉ではクリ―シイ属・エノキ属―ムクノキが優占し，ツバキ属やモクセイ科が伴われる。草本花粉は著しく低率でイネ科やヨモギ属などが出現する。他にガマ属―ミクリ属やマルバオモダカも出現している。

3）第3地点（I区凹地下部）

樹木花粉の占める割合がきわめて高い。樹木花粉ではクリ―シイ属が優占しコナラ属アカガシ亜属・エノキ属―ムクノキが伴われる。草本花粉は著しく低率である。他にガマ属―ミクリ属も出現している。

4）第4地点（I区1号溝）

下位の試料3では樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉ではエノキ属―ムクノキ・キハダ・ツバキ属が優占する。セリ科・イネ属型を含むイネ科・ヨモギ属・アカザ科―ヒユ科が優占する。他にサジオモダカ属・マルバオモダカも出現している。試料2ではキハダやツバキ属が減少し，エノキ属―ムクノキのみが優占する。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科・アカザ科―ヒユ科・ヨモギ属が優占する。試料1には花粉がほとんど含まれていない。

5）第5地点（II区1号溝）

下位の試料3では，樹木花粉より草本花粉の占める割合が著しく高い。樹木花粉ではクリ―シイ属・ニレ属―ケヤキなどが出現する。草本花粉ではイネ科・アカザ科―ヒユ科・セリ科・ヨモギ属が優占する。試料2・1では花粉があまり検出されなかった。

6）第6地点（西部三重目環濠）

樹木花粉の占める割合が草本花粉より少し高い。樹木花粉ではクリ―シイ属・エノキ属―ムクノキが優占する。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科・ヨモギ属が優占し，アブラナ科も伴われる。他にガマ属―ミクリ属・オモダカ属・マルバオモダカも出現している。

7）第8地点大溝石敷付近

試料3は弥生時代前期であり，試料1は弥生時代中期である。試料3と試料2はほぼ同じ花粉組成を示し，樹木花粉の占める割合が草本花粉より極めて高い。樹木花粉ではクリ―シイ属・エノキ属―ムクノキが優占する。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科がとヨモギ属が出現するほかは低率である。試料1になると，草本花粉の占める割合が著しく高くなり，オナモミ属が高率となり，イネ属型を含

むイネ科・アカザ科—ヒユ科も増加する。

8）第9地点（中央部三重目環濠）

樹木花粉と草本花粉はほぼ同程度の割合を占める。樹木花粉ではクリ—シイ属が優占し，コナラ属コナラ亜属・エノキ属—ムクノキが伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科・アカザ科—ヒユ科・アブラナ科・セリ科・ヨモギ属の出現率が高い。

9）第12地点（弥生時代溝）

6試料あるが，花粉組成は同傾向を示す。樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高い。樹木花粉ではクリ—シイ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属が多い。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科・ヨモギ属が優占しカヤツリグサ科・セリ科などが伴われる。

10）第15地点（調査区東Ⅴ字溝）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではクリ—シイ属が優占し，コナラ属コナラ亜属・エノキ属—ムクノキが伴われる。クワ科—イラクサ科も多い。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科・アカザ科—ヒユ科・アブラナ科・セリ科・ヨモギ属の出現率が高い。

5．花粉分析および種実同定から推定される植生・環境・農耕

花粉分析結果および種実同定結果から原の辻遺跡の植生と農耕について推定すると次のようである。

(1) 環濠や溝が構築される以前

第2地点（Ⅰ区1号溝基盤）と第3地点（Ⅰ区凹地下部）の分析結果は，樹木花粉の占める割合がきわめて高く，人里植物の花粉が検出されない。第2地点（Ⅰ区1号溝基盤），第3地点（Ⅰ区凹地下部），川沿い東2トレンチ3№1の種実同定結果では，人為干渉によって増加する人里植物がほとんど含まれていない。このことから，自然度の高い植生が推定され，人間の営みが著しくなる以前の自然植生を反映しているとみなされる。

これらの地点の花粉分析から，クリ—シイ属（ここではシイ属）が主要高木とする照葉樹林が周辺に分布していたと推定される。種子が多く検出されたヒサカキは森林内の低木相を構成する主要な樹木と考えられ，堆積地に近接して繁茂していたのだろう。種実が検出されたヒサカキをはじめクワ属・ニワトコ・サカキ・カラスザンショウ・サルナシ属・ウドカズラなどは，照葉樹林中に生育する種類で林内に混在して生育していたと考えられる。花粉でやや高率なエノキ属—ムクノキは，種実からムクノキとみなされる。ムクノキは落葉樹であるが，暖地の肥沃な適潤地に生育する高木であり，周囲に分布していたと推定される。なお，試料採取地点は，ガマ属—ミクリ属などの生える樹林内の小規

模な湿地であったと考えられる。

以上のように，原の辻遺跡において人々の活動が活発となる以前の自然植生は，シイ林を主とする照葉樹林が分布し，低木として主にヒサカキが繁茂していたと推定される。樹林内には小規模な湿地が分布し，その周辺の適潤地にはムクノキも繁茂していたと考えられる。草本の生えるような日当たりの良い裸地はほとんどなく，森林の状態であったと推定される。

(2) 弥生時代

1）弥生時代前期から中期への変化—第8地点（大溝敷石付近）—

弥生時代前期から中期への変化は第8地点（大溝敷石付）の花粉分析から読みとることができる。

弥生時代前期には，クリ—シイ属・エノキ属—ムクノキの樹木が多く分布し，草本の多い開けた景観は少なかったと推定される。イネ属型を含むイネ科が低率ながら出現しており，ある程度の水田が営まれていたと推定される。

弥生時代中期になると，周囲の樹木が急速に減少し，オナモミ属をはじめイネ属型を含むイネ科・アカザ科—ヒユ科などの人里植物の繁茂する開けたところが多くなる。中期になって急速に開発されたと推定される。

2）1号溝（第4地点Ⅰ区，第5地点Ⅱ区）

第4地点Ⅰ区と第5地点Ⅱ区では，樹木花粉の組成にやや違いがあるが，局地性の反映とみなされる。樹木では，第4地点Ⅰ区にエノキ属—ムクノキ（種実よりムクノキ）・キハダ・ツバキ属の樹木が生育し，第5地点Ⅱ区には樹木はあまり分布していなかったと推定される。周辺は人里植物の性格をもつイネ属型を含むイネ科・アカザ科—ヒユ科・セリ科・ヨモギ属が繁茂し，かなり開けた景観であったとみなされる。また，アカザ科—ヒユ科・ヨモギ属は集落や畑地などのやや乾燥したところを好んで生える人里雑草であり，同様の環境がⅠ区とⅡ区の1号溝周辺に広がっていたとみなされる。1号溝の上位では花粉が少なく，植物遺体が分解する乾燥した堆積環境となったと推定される。

種実では，第4地点Ⅰ区からキイチゴ属・シマサルナシをはじめツルコウゾ・サルナシ属の食用となる種類とイネ・ウリの類栽培植物が種実が検出され，人為的な食用植物の種実が堆積したと考えられる。第5地点Ⅱ区でも同様とみなされるが，植物遺体が分解するような乾燥した堆積環境であったと推定される。自然植生が反映される種実はあまり認められず，1号溝に隣接して居住域があったと考えられる。

3）第1地点（Ⅰ区4号溝），第6地点（西部三重目環濠），第12地点（弥生時代溝），第15地点（調査区東Ⅴ字溝）

これらの溝の周辺は，イネ属型を含むイネ科・アカザ科—ヒユ科・アブラナ科・セリ科・オナモミ属・ヨモギ属の人里植物が多く，第1地点（Ⅰ区4号溝）の種実同定結果からも，ナデシコ科とアカ

ザ属等の集落や畑に多い乾燥地の人里植物が繁茂していたと推定される。食用植物の種実遺体が多い１号溝とは対照的で，周辺に農耕地が分布していた可能性が高い。

周辺地域は，基本的にはクリ―シイ属（ここではシイ属）・エノキ属―ムクノキ（ここではムクノキ）の森林が分布していたと考えられるが，これらの溝の周囲には種実遺体からヒサカキ・サカキ・モチノキなどの中低木が少し生える程度であったと推定される。第１地点（Ｉ区４号溝）の５層ではマツ属単維管束亜属（ニヨウマツ類），第12地点（弥生時代溝）ではコナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属がそれぞれ優勢であり，森林の構成が異なるため，他地点ないし他の層準とは時期差があると考えられる。

なお，三重目環濠など各濠ないし溝のほとんどは，当初ガマ属―ミクリ属・オモダカ属・マルバオモダカなどが繁茂する水湿地状であったと考えられる。

(3) 可食植物と農作物

Ｉ区Ｖ溝からは，ヤマモモ・ツルコウゾ・ブドウ属・イネ（炭化米）・マメ類（アズキ？）・ウリ類（マクワ・シロウリ型）・ヒョウタン類・キカラスウリなどの食用となる植物の種実が多く同定された。他の地点および追加試料も加えると，カヤ・イヌガヤ・ヤマモモ・コナラ属・シイ属・ムクノキ・クワ属・ヒメコウゾ・ツルコウゾ・キイチゴ属・スモモ・サクラ属サクラ節・ブドウ属・サルナシ属・シマサルナシ・ヒシなどが可食であり，これらは当時採集されて食べられていたと考えられる。キイチゴ属・サルナシ属・シマサルナシはかなり多く，よく食べられていたようだ。

栽培植物としては，イネに加えてマメ類（アズキ？）・ウリ類（マクワ・シロウリ型）・ヒョウタン類の畑作の栽培植物が認められた。キカラスウリも塊根からデンプンがとれ，栽培されていた可能性が高い。したがって，原の辻遺跡においては，水田に加えてこれらの畑作が営まれていたと考えられる。

参考文献

日本第四紀学会編（1993）第四紀試料分析法，東京大学出版会．

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類，弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版．

鳥浜貝塚研究グループ編（1987）鳥浜貝塚，若狭歴史民俗資料館．

吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出，月刊考古学ジャーナル12月号（№355），ニュー・サイエンス社．

粉川昭平（1976）板付遺跡出土の種子について，板付，福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集，福岡市教育委員会．

粉川昭平（1980）種子類について，池上・四池遺跡発掘調査報告書第６分冊自然遺物編，大阪文化財センター．

藤下典之（1982）菜畑遺跡から出土したメロン仲間 Cucumis melo L. とヒョウタン仲間 Lagenaria siceraria Standl. の種子について，菜畑遺跡，唐津市文化財調査報告第５集，唐津市教育委員会．

分類群		第1地点 I区4号溝断面		第2地点 I区1号溝	第3地点 I区1号溝	第4地点 I区1号溝			第5地点 II区1号溝		
学名	和名	5層	7層	基盤		1	3	4	1	2	3
Arboreal pollen	木本花粉										
Podocarpus	マキ属		1	1	16			1			
Abies	モミ属	3			1		2	1			2
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	17	2	1	6	1	12	5			6
Cryptomeria japonica	スギ	2	1	1	1		2				1
Taxaceae-Cephalotaxaxeae -Cupressaceae	イチイ科—イヌガヤ科 -ヒノキ科				1		1				
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ						3				
Alnus	ハンノキ属			1				1			2
Betula	カバノキ属				2						
Corylus	ハシバミ属				1						
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属—アサダ				1		1				
Castanea crenata-Castanopsis	クリ—シイ属	16	65	95	218		12	8			10
Fagus	ブナ属							1			
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	4	3	4	5		6	9	1	1	8
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	2	13	10	64		12	7			1
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属—ケヤキ						4	1			10
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属—ムクノキ	2	51	176	33		136	99	1		7
Phellodendron amurense	キハダ	1	3	1			2	106			8
Rhus	ウルシ属										1
Ilex	モチノキ属			1	1						
Camellia	ツバキ属		10	22	3			45			
Oleaceae	モクセイ科		1	22	5			10			
Fraxinus	トネリコ属				16						
Elaeagnus	グミ属			1							
Arboreal-Nonarboreal pollen	木本・草木花粉										
Moraceae-Urticaceae	クワ科—イラクサ科	4	2	3		2		1			
Leguminosae	マメ科	1									
Rosaceae	バラ科							1			
Araliaceae	ウコギ科		1	1				1			
Nonarboreal pollen	草本花粉										
Typha-Sparganium	ガマ属—ミクリ属			1	1						
Alisma	サジオモダカ属							1			
Caldesia parnassifolia	マルバオモダカ			1				2			1
Gramineae	イネ科	37	99	11	2	5	55	33	7	10	48
Oryza type	イネ属型	4	6				11	7			2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	2	1				1			1
Rumex	ギシギシ属		3								
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	1									
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	11	4	1		1	27	13			38
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	2					2			2
Cruciferae	アブラナ科	41	2	2		2	9	3			4
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ			1	1						
Umbelliferae	セリ科	18	5	1	3		4	92	1	1	38
Labiatae	シソ科	1									
Valerianaceae	オミナエシ科							1			
Lactucoideae	タンポポ亜科	10		1		1	3	1			4
Asteroideae	キク亜科	1	3				1				
Xanthium	オナモミ属	2	125								
Artemisia	ヨモギ属	40	14	19	4	4	19	39	3	5	29
Fern spore	シダ植物胞子										
Monolate type spore	単条溝胞子	8	3	17	8	3	4	28	4	3	25
Trilate type spore	三条溝胞子	6	1	8	5		11	4	3	2	17
Arboreal pollen	樹木花粉	47	150	336	374	1	193	294	2	1	56
Arboreal・Nonarboreal pollen	木本・草本花粉	5	3	4	0	2	0	3	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	167	265	39	11	13	129	195	11	16	167
Total pollen	花粉総数	219	418	379	385	16	322	492	13	17	223
Unknown pollen	未同定花粉	3	1	3	5	2	7	10	1	1	4
Fern spore	シダ植物胞子	14	4	25	13	2	15	32	7	5	42

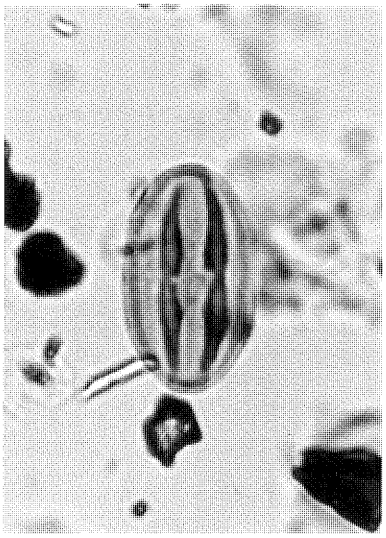
表8　原の辻遺跡における花粉分析結果(1)

分類群		第6地点 西部	第8地点 大溝敷石付近			第9地点 中央部	第12地点 弥生時代溝						第15地点 V字溝
学名	和名	三重目環壕	1	2	3	三重目環壕	1	2	3	4	5	6	
Arboreal pollen	木本花粉												
Podocarpus	マキ属							1					3
Tsuga	ツガ属							1				1	
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	2	2	12	10	10	4	3	5	5	5	7	3
Cryptomeria japonica	スギ	1	1	4	1	6	1	1	1		2	2	2
Myrica	ヤマモモ属	1						2		2			
Pterocaya rhoifolia	サワグルミ	1						1					
Alnus	ハンノキ属	3					1			1			
Betula	カバノキ属	2	1		1	1			1		1		
Corylus	ハシバミ属					1		1					1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属—アサダ	1					1	1	1				
Castanea crenata-Castanopsis	クリ—シイ属	55	8	185	235	71	16	10	21	14	22	11	32
Fagus	ブナ属							1					
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	12	2	2	9	19	12	16	24	31	15	21	17
Quercus subgen. Cyclobalanopsi	コナラ属アカガシ亜属	30	1	9	9	7	9	15	12	9	10	5	2
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属—ケヤキ	1						1	1		1		
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属—ムクノキ	56	5	104	117	25	2	2	2		2		10
Phellodendron amurense	キハダ	1		2	8			2			2		3
Mallotus japonica	アカメガシワ												
Ilex	モチノキ属	1		2	3								1
Acer	カエデ属						1						
Camellia	ツバキ属	5	3	2	7	5							5
Oleaceae	モクセイ科	18			2	1			4	1	1		3
Tilia	シナノキ属	1			1								
Weigela	タニウツギ属							2	1				
Arboreal・Nonarboreal pollen	木本・草本花粉												
Moraceae-Urticaceae	クワ科—イラクサ科	9	4						3				61
Leguminosae	マメ科	1											
Araliaceae	ウコギ科	1				2			2		2		
Rosaceae	バラ科	1					2					3	
Nonarboreal pollen	草本花粉												
Typha-Sparganium	ガマ属—ミクリ属	3							3	1	1		1
Sagittaria	オモダカ属	1						1					1
Caldesia parnassifolia	マルバオモダカ	1				3	3		3	4	14	10	
Gramineae	イネ科	39	29	23	42	51	102	151	192	129	80	106	121
Oryza type	イネ属型	7	2	1	1	1	8	37	13	43	1	7	21
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	4	1			45	48	15	11	10	16	1
Monochoria	ミズアオイ属		1					2		1		1	
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	2		2	1	2	2	1	1	2	1	1	1
Fagopyrum	ソバ属	1						1					
Portulaca oleracea	スベリヒユ	1	1										1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	5	12	3	2	28	1	1	1				17
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1					4	2		1	1		
Ranunculanceae	キンポウゲ科									1		2	3
Cruciferae	アブラナ科	11	2			23	5	4	3		4		26
Geranium	フウロソウ属							1					
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ	1			1						1		
Trapa	ヒシ属		1										
Umbelliferae	セリ科	10	1	5	3	22	7	5	35	43	15	26	11
Solanaceae	ナス科	5					2	1	10	3	1	5	
Plantago	オオバコ属	2			1								
Labiatae	シソ科	14	1		1			1	6		16		
Valerianaceae	オミナエシ科								1			2	
Actinostemma lobatum	ゴキズル						5						
Lactucoideae	タンポポ亜科	2	1			4	2	4	3			1	2
Asteroideae	キク亜科	3	1			2	8	4	6	3	24	9	3
Xanthium	オナモミ属		162							1	2		
Artemisia	ヨモギ属	51	6	9	10	54	130	39	113	135	124	111	28
Fern spore	シダ植物胞子												
Monolate type spore	単条溝胞子	3		10	12	175	3	4	4	4		3	1
Trilate type spore	三条溝胞子	2	2	10	7	14	10	5	9	9	9	10	4
Arboreal pollen	樹木花粉	191	23	322	403	146	47	60	73	63	64	47	82
Arboreal・Nonarboreal pollen	木本・草本花粉	12	4	0	0	2	2	0	5	0	2	3	61
Nonarboreal pollen	草本花粉	163	224	44	62	190	324	303	405	378	295	297	237
Total pollen	花粉総数	366	251	366	465	338	373	363	483	441	361	347	380
Unknown pollen	未同定花粉	5	2	7	1	5	3	3	15	13	5	20	10
Fern spore	シダ植物胞子	5	2	20	19	189	13	9	13	13	9	13	5

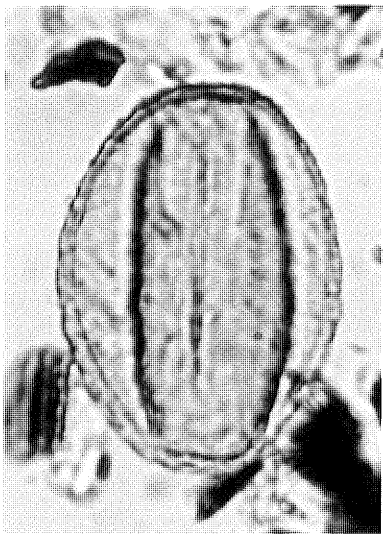
表9　原の辻遺跡における花粉分析結果(2)

中村純（1973）花粉分析，古今書院.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原，新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態，大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集.
中村純（1980）日本産花粉の標徴，大阪自然史博物館収蔵目録第13集.
中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として，第四紀研究13.
中村純（1977）稲作とイネ花粉，考古学と自然科学第10号.
畑中健一（1984）北部九州の自然環境，季刊考古学第６号，雄山閣出版.
中村純・畑中健一（1976）板付遺跡の花粉分析学的研究，板付，福岡市埋蔵文化財　調査報告書第35集，福岡市教育委員会.

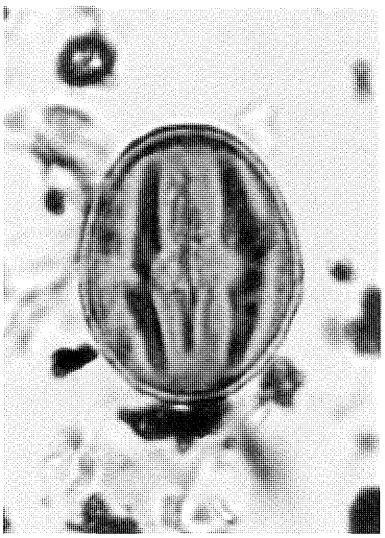
図 9　原の辻遺跡の花粉・胞子　I



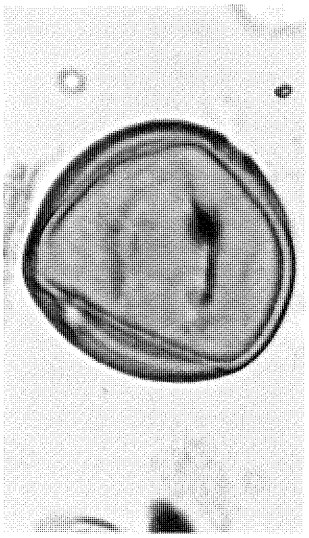
1．クリーシイ属



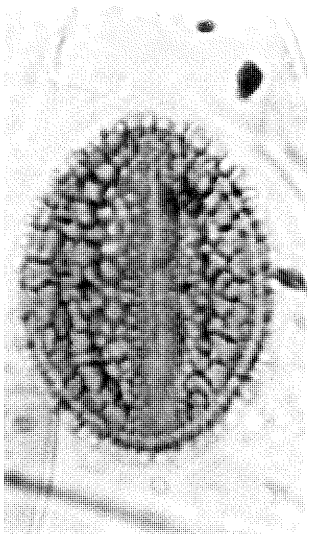
2．コナラ属コナラ亜属



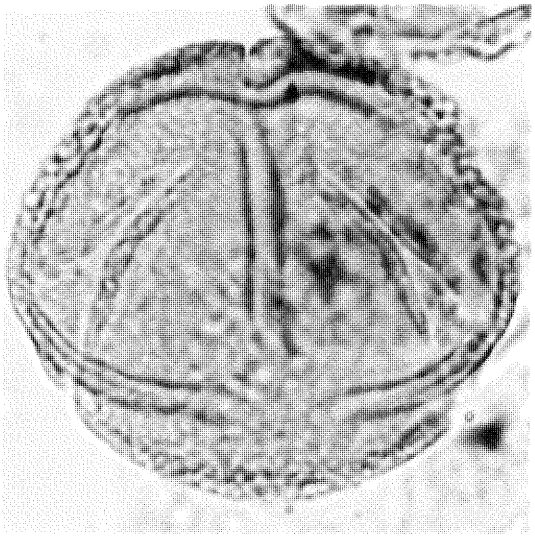
3．コナラ属アカガシ亜属



4．エノキ属―ムクノキ

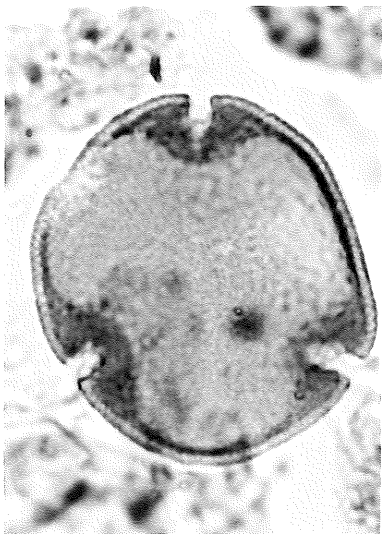


5．キハダ

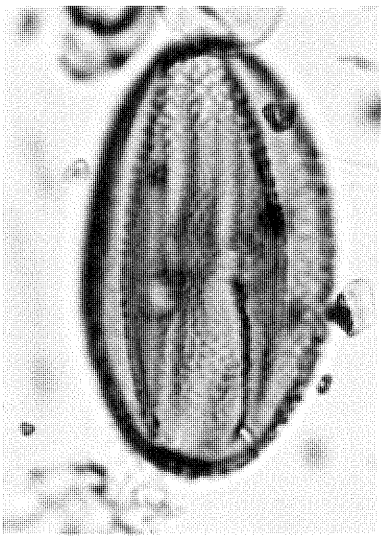


6．ツバキ属

7．モクセイ科



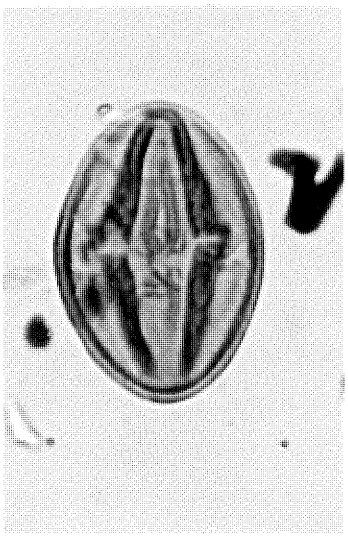
8．シナノキ属



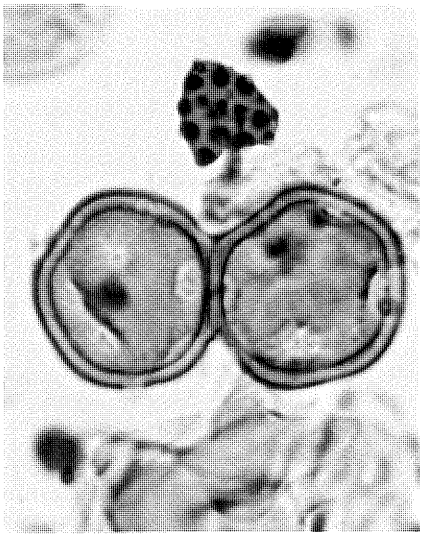
9．ノブドウ

30μm

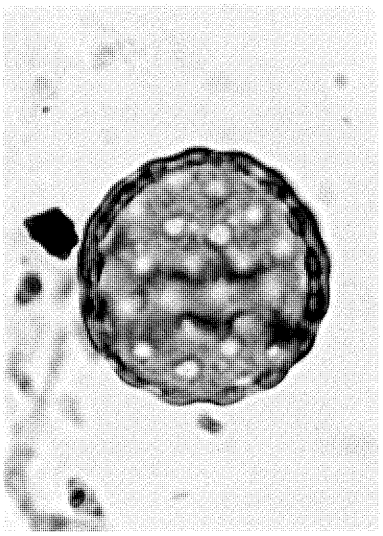
図10　原の辻遺跡の花粉・胞子　II



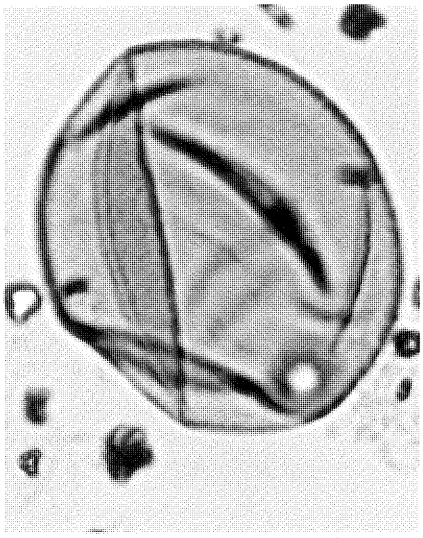
1．バラ科



2．マルバオモダカ

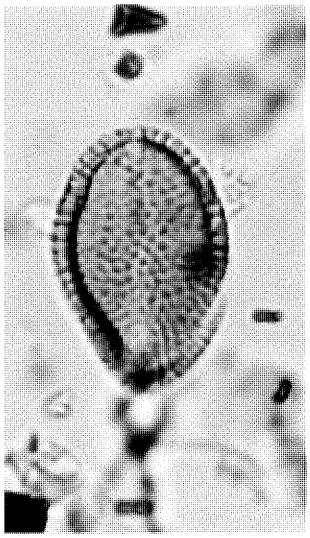


3．アカザ科―ヒユ科

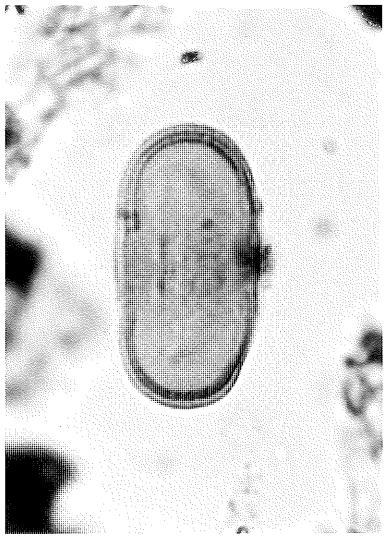


4．イネ科

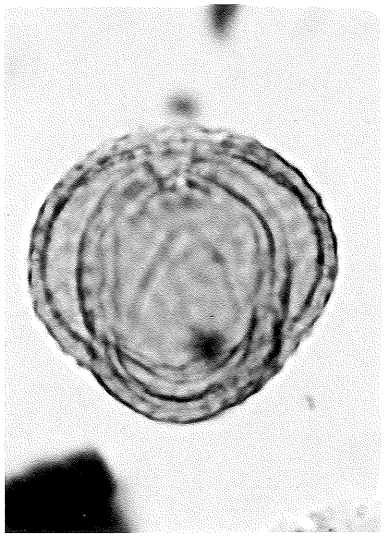
5．イネ属型



6．アブラナ科



7．セリ科



8．オナモミ属

9．タンポポ亜科

30μm

IV. 原の辻遺跡における寄生虫卵分析

1．はじめに

寄生虫卵分析は，藤原京跡の便所遺構において新たに用いられた分析法であり，まだ分析例は少ない。寄生虫卵分析は，便所遺構の検出や食生活の復原のみならず，様々な堆積物を分析することによって，農耕における施肥の検証や遺構の機能なども分析課題となる。

2．試　　料

試料は，花粉分析に用いたものと同一の計22点である。

3．方　　法

微化石分析法を基本に下記のように行った。

1）サンプルをそれぞれ1㎤ずつ採量する。
2）DW を加え攪拌する。
3）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し，沈澱法を施す。
4）25%フッ化水素酸を加え30分静置。（2・3度混和）
5）水洗後サンプルを2分する。
6）片方にアセトリシス処理を施す。
7）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
8）検鏡・計数し密度を算出する。

4．結果と所見（表，図1・2）

分析の結果，第1地点（I区4号溝）の7層，第4地点（I区1号溝）の試料2・3，第5地点（II区1号溝）の試料3，第6地点（西部三重目環濠），第8地点（大溝敷石付近）の試料1・2・3，第9地点（中央部三重目環濠），第12地点（弥生時代溝）の試料5・6，第15地点（調査区東V字溝）から寄生虫卵が検出された。

検出された寄生虫卵はそのほとんどが鞭虫であり，異形吸虫類(横川吸虫を含む)，マンソン裂頭条虫，毛頭虫類も少量見られた。いずれも1000個未満で汚染範囲内であるが，周囲にある程度の人口密度があったことが示唆される。また，溝ないし濠は汚水および下水施設としての機能も持っていたものと推定される。

鞭虫は，虫卵の付着した野菜や野草の摂取や水系により経口感染する。異形吸虫類（横川吸虫を含む）は，沿岸性の魚類やコイ科の魚を補食することによって感染する。マンソン裂頭条虫は，イヌ科を主とした肉食獣に寄生する。毛頭虫類は，草食動物や鳥類に寄生する種類である。

現状では，寄生虫卵分析の調査例は少ないが，弥生時代の奈良県鴨都波遺跡でも溝や井戸に汚染がみられる。また，鞭虫と生活史が類似する回虫は，普通伴って虫卵が検出されるが，原の辻遺跡では検出されず，時代や地域性によるものか問題点が残る。

第2地点（Ⅰ区1号溝基盤）と第3地点（Ⅰ区凹地下部）からは寄生虫卵が検出されず，人がいないか密度が非常に低かったことを示している。このことは，花粉分析と種実同定によって自然度の高い植生が推定されることと矛盾しない。

付編　犬埋葬甕の寄生虫分析および花粉分析

1．試料と方法

犬埋葬甕内の骨のそばの堆積物と炭化物の2試料を分析した。分析方法は自然科学分析本文の方法に従った。参考文献も同様である。

2．結果と考察

寄生虫卵分析では，2試料とも寄生虫卵が含まれていなかった。花粉分析では骨のそばの堆積物から，マツ属複維管束亜属・スギ・アカザ科―ヒユ科・ヨモギ属がそれぞれ1個ずつ検出されたのみであった。2試料とも写真に示すように炭化した植物遺体片が多くみられ，試料となった堆積物が土壌生成作用や風化作用によって分解を受けていることが推定される。よって，寄生虫卵が当初から含まれていなかったか，花粉が当初から少なかったのか判断できない。

参考文献

Peter J. Warnock and Karl J.Reinhard (1992). Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science19.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構，奈良国立文化財研究所．

金子清俊・谷口博一（1987）新版臨床検査講座8医動物学，医歯薬出版．

金原正明・粉川昭平・金原正子（1992）堆積土・木材の樹種・種実遺体の分析，奈良県御所鴨都波遺跡11次発掘調査報告，御所市文化財調査報告書第11集，御所市教育委員会．

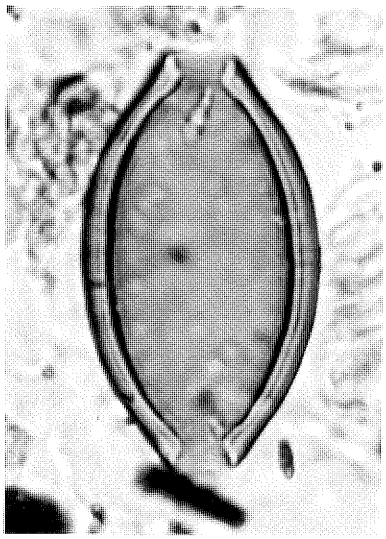
分類群		第1地点 I区4号断面		第2地点 I区1号溝	第3地点 I区凹地	第4地点 I区1号溝			第5地点 II区1号溝		
学名	和名	5層	7層	基盤		1	2	3	1	2	3
Trichuris	鞭虫卵		351				260	52			25
Metagonimus-Heterophyes	異形吸虫類卵		7								
Spirometra erinacei	マンソン裂頭虫卵		4								
Total Helminth	虫卵総数	(-)	362	(-)	(-)	(-)	260	52	(-)	(-)	25

表10　原の辻遺跡における寄生虫卵分析(1)

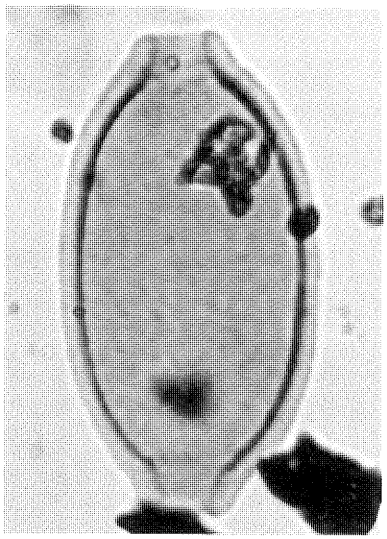
分類群		第6地点 西部	第8地点 大溝敷石付近			第9地点 中央部	第12地点 弥生時代溝						第15地点 V字溝
学名	和名	三重目環壕	1	2	3	三重目環壕	1	2	3	4	5	6	
Trichuris	鞭虫卵	36	41	24	12	129						1	49
Capillaria	毛頭虫類卵										1		
Total Helminth	虫卵総数	36	41	24	12	129	(-)	(-)	(-)	(-)	1	1	49

表11　原の辻遺跡における寄生虫卵分析(2)

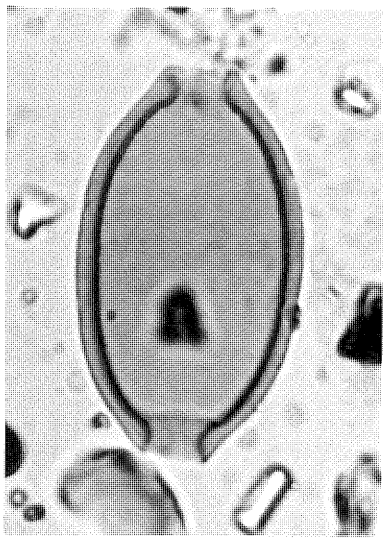
図11　原の辻遺跡の寄生虫卵・花粉・胞子　III



1．鞭虫卵

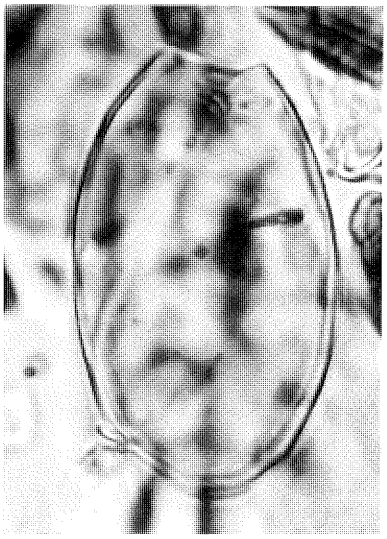


2．鞭虫卵

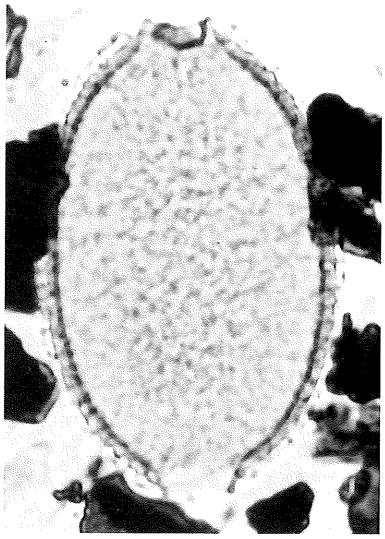


3．鞭虫卵

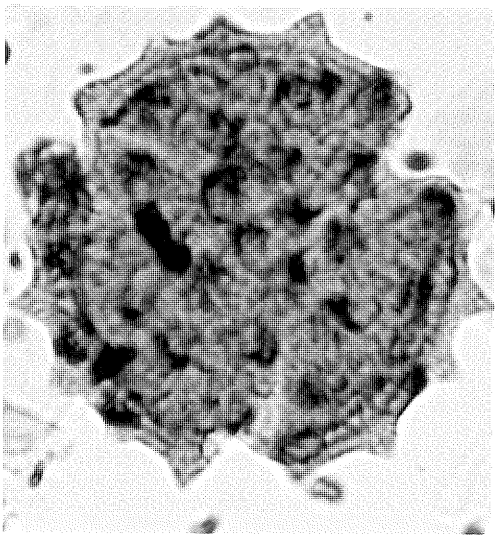
4．マンソン裂頭条虫卵



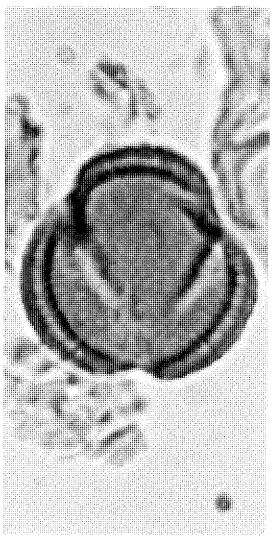
5．マンソン裂頭条虫卵



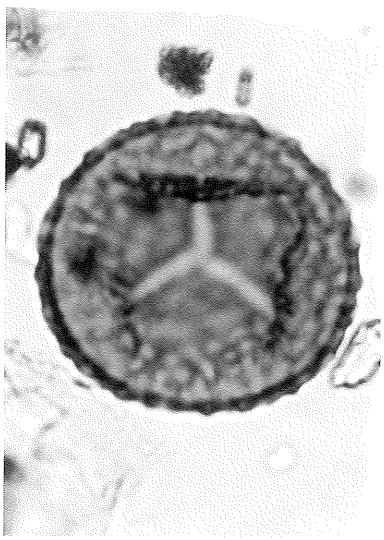
6．毛頭虫類卵



7．キク亜科



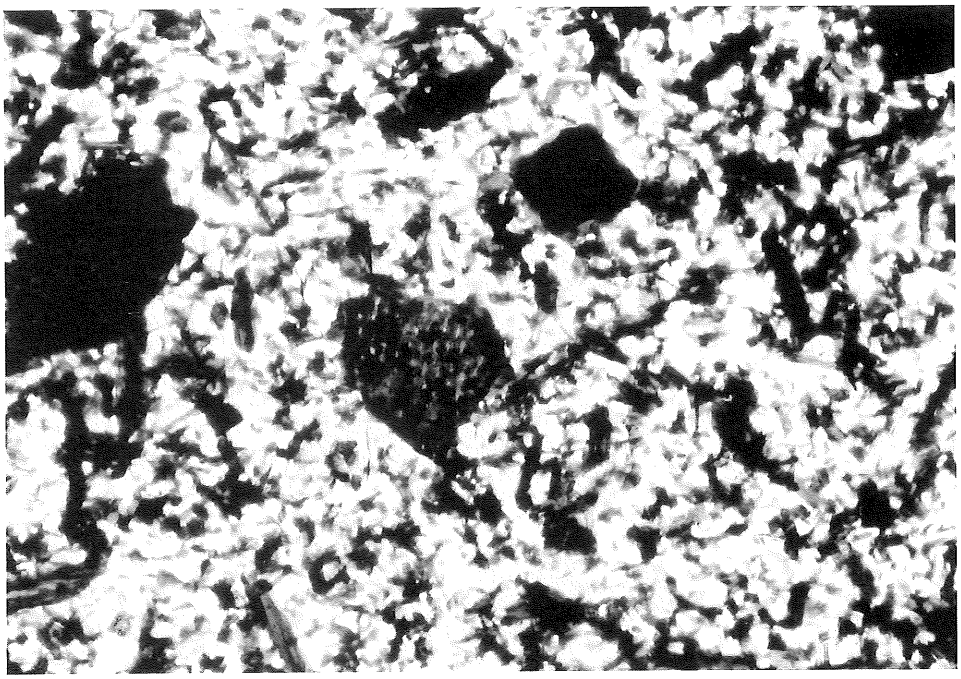
8．ヨモギ属



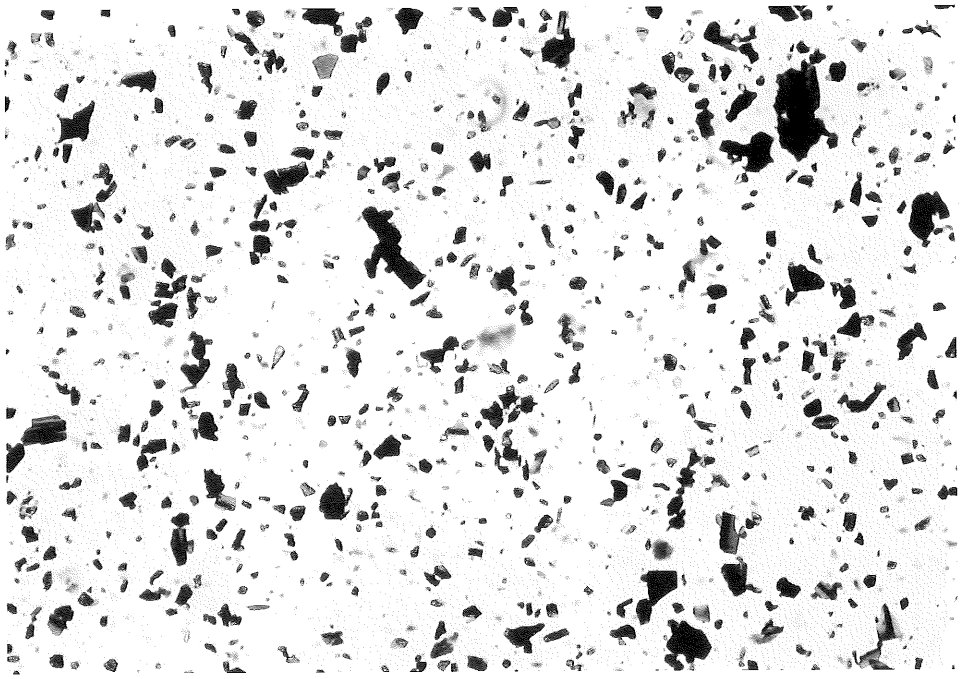
9．シダ植物三条溝胞子

30μm

図12　原の辻遺跡（犬を埋葬したカメの内容物）の顕微鏡写真



1．カメ内炭化物



2．骨のそばの堆積物

180μm

Ⅴ．原の辻遺跡出土木製品の樹種同定

1．試料と方法

試料は，木製品84点（No.1～No.84）である。これらの試料を，カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）を作製し，生物顕微鏡によって120～1200倍で観察した。同定は試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比で行った。

2．結　果

結果を表1に示す。以下に同定根拠となった特徴を記載する。

3．考　察

同定の結果，不明材を除き，25種類の分類群が同定された。多いものから，マキ属16点，スダジイ9点，ヤブツバキ6点，サカキ6点，タブノキ5点，ヒノキ5点，クリ5点とつづく。スギ・コナラ属アカガシ亜属・クスノキ・ナシ亜科がそれぞれ2点，カヤ・イヌガヤ・アカマツ・コナラ属クヌギ節・コナラ属・ニレ属・ムクノキ・イチジク属・サイカチ・ミズキ属・トネリコ属・シャシャンボ・タケ亜科がそれぞれ1点ずつであった。

不明材は，木製品で形態を損なうため切片採取が充分に行えなかったものや腐朽が著しく細分類できない試料などであり，針葉樹材1点，散孔材4点，環孔材2点，広葉樹1点あった。

マキ属がやや多いが，マキ属にはイヌマキ・ナギがあり暖地に分布する。スダジイ，ヤブツバキ，サカキ，タブノキはいずれも照葉樹林の主要構成要素で，花粉分析・種実同定から復元されるシイ属を高木相とする照葉樹林と矛盾しない。他の種類も照葉樹林内に一般的に生えている種類である。

以上のことからみて，原の辻遺跡の木製品の用材は，周辺の照葉樹林から得られたものと考えられる。良材の針葉樹材のマキ属が多く使用されるのは，本遺跡の特徴といえる。また，花粉分析から周辺地域の照葉樹林の主要高木とみなされたシイ属は，スダジイであったと考えられる。

参考文献

島地謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織，地球社.

島地謙ほか（1985）木材の構造，文永堂出版.

日本第四紀学会編（1993）第四紀試料分析法，東京大学出版会.

福岡市教育委員会（1976）板付，福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集.

唐津市教育委員会（1982）菜畑遺跡，唐津市文化財調査報告書第5集.

表12　原の辻遺跡における樹種同定結果

試料	樹種	(和名／学名)
No. 1	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
No. 2	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
No. 3	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
No. 4	アカマツ	*Pinus densiflora* Sied. et Zucc.
No. 5	ヤマグワ	*Morus bombycis* Koidz.
No. 6	ミズキ属	*Cornus*
No. 7	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
No. 8	コナラ属	*Quercus*
No. 9	サイカチ	*Gleditschia japonica* Miq.
No.10	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
No.11	環孔材	ring-porous wood
No.12	マキ属	*Podocarpus*
No.13	針葉樹	conifer
No.14	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
No.15	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
No.16	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
No.17	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
No.18	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
No.19	散孔材	diffuse-porous wood
No.20	タブノキ	*Machilus Thunbergii* Sieb. et Zucc.
No.21	タブノキ	*Machilus Thunbergii* Sieb. et Zucc.
No.22	環孔材	ring-porous wood
No.23	タケ亜科	Bambusoideae
No.24	散孔材	diffuse-porous wood
No.25	ナシ亜科	*Subfam.* Maloideae
No.26	散孔材	diffuse-porous wood
No.27	ヤマグワ	*Morus bombycis* Koidz.
No.28	マキ属	*Podocarpus*

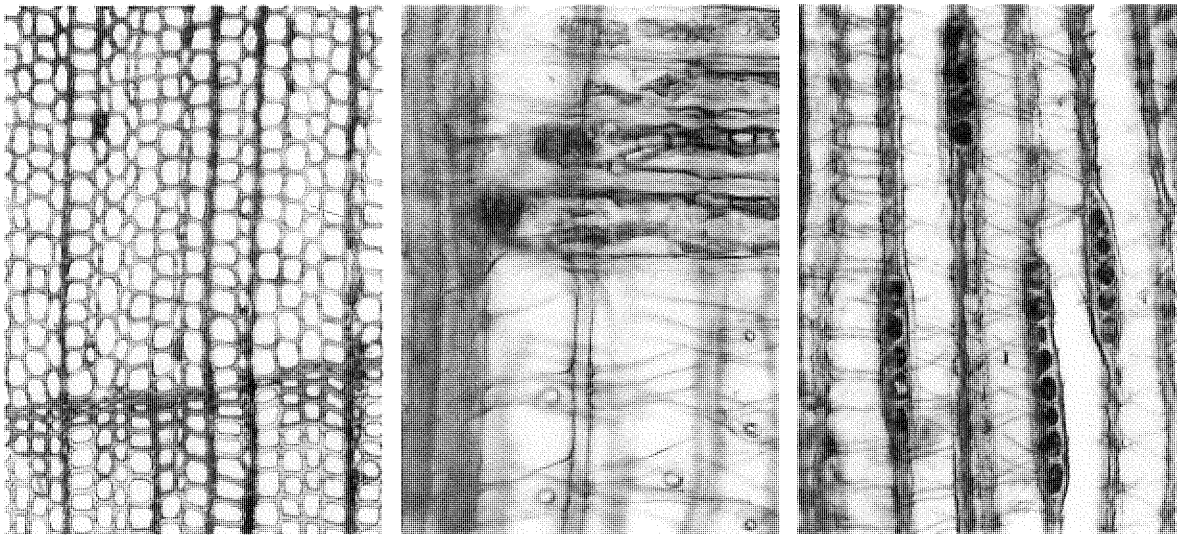
表13

試料	樹種	(和名／学名)
No.29	イヌガヤ	*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch
No.30	クスノキ	*Cinnamomum camphora* Presl
No.31	マキ属	*Podocarpus*
No.32	マキ属	*Podocarpus*
No.33	マキ属	*Podocarpus*
No.34	クスノキ	*Cinnamomum camphora* Presl
No.35	マキ属	*Podocarpus*
No.36	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
No.37	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
No.38	タブノキ	*Machilus Thunbergii* Sieb. et Zucc.
No.39	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No.40	マキ属	*Podocarpus*
No.41	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No.42	散孔材	diffuse-porous wood
No.43	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
No.44	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
No.45	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
No.46	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No.47	ニレ属	*Ulmus*
No.48	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
No.49	カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
No.50	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*
No.51	マキ属	*Podocarpus*
No.52	広葉樹	broad-leaved tree
No.53	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
No.54	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
No.55	トネリコ属	*Fraxinus*
No.56	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
No.57	ヤマグワ	*Morus bombycis* Koidz.

表14

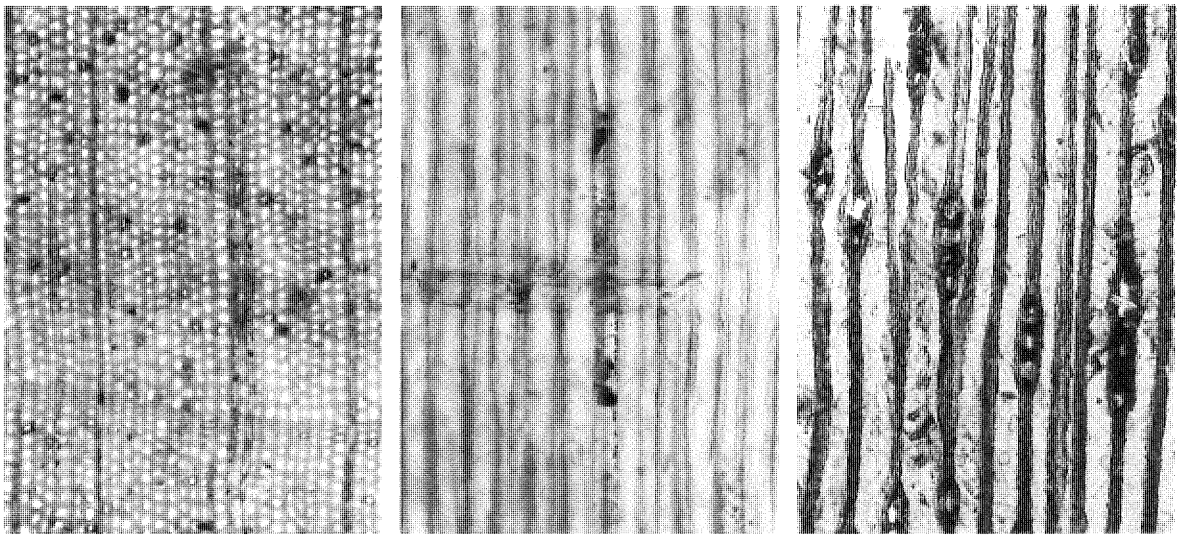
試料	樹種	(和名／学名)
No.58	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
No.59	イチジク属	*Ficus*
No.60	マキ属	*Podocarpus*
No.61	マキ属	*Podocarpus*
No.62	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
No.63	ムクノキ	*Aphananthe aspera* Planch.
No.64	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
No.65	タブノキ	*Machilus Thunbergii* Sieb. et Zucc.
No.66	ナシ亜科	*Subfam.* Maloideae
No.67	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
No.68	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
No.69	マキ属	*Podocarpus*
No.70	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
No.71	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
No.72	マキ属	*Podocarpus*
No.73	マキ属	*Podocarpus*
No.74	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
No.75	マキ属	*Podocarpus*
No.76	マキ属	*Podocarpus*
No.77	ヤブツバキ	*Camellia japonica* Linn.
No.78	マキ属	*Podocarpus*
No.79	シャシャンボ	Vaccinius *bracteatum* Thunb
No.80	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No.81	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No.82	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
No.83	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
No.84	タブノキ	*Machilus Thunbergii* Sieb. et Zucc.

図13　原の辻遺跡出土木製品の顕微鏡写真Ⅰ



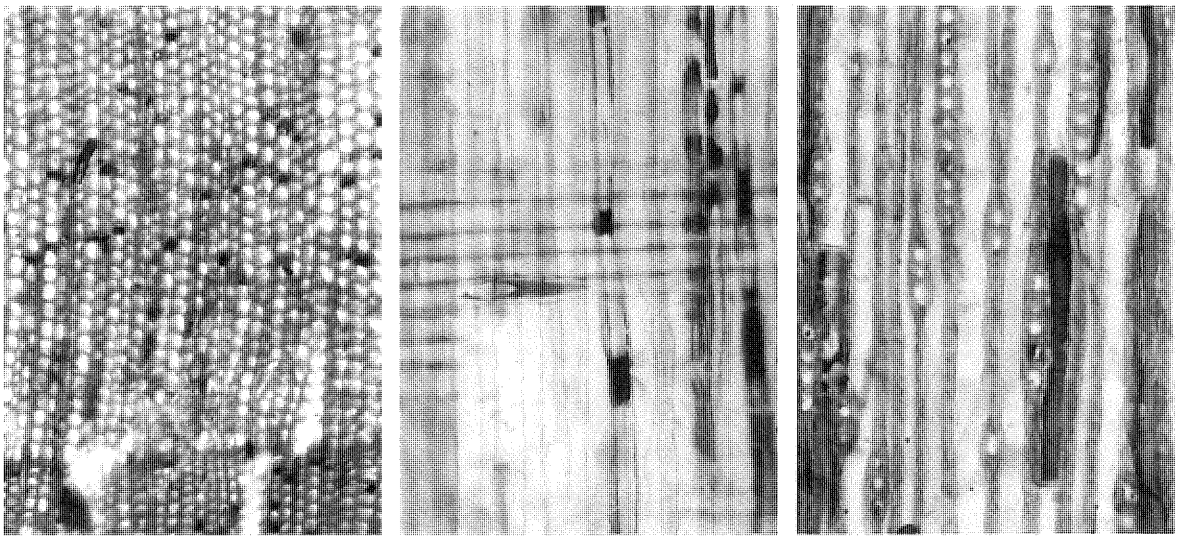
横断面 ——：250μm　放射断面 ——：50μm　接線断面 ——：100μm

1．No.49　カヤ



横断面 ——：250μm　放射断面 ：100μm　接線断面 ——：100μm

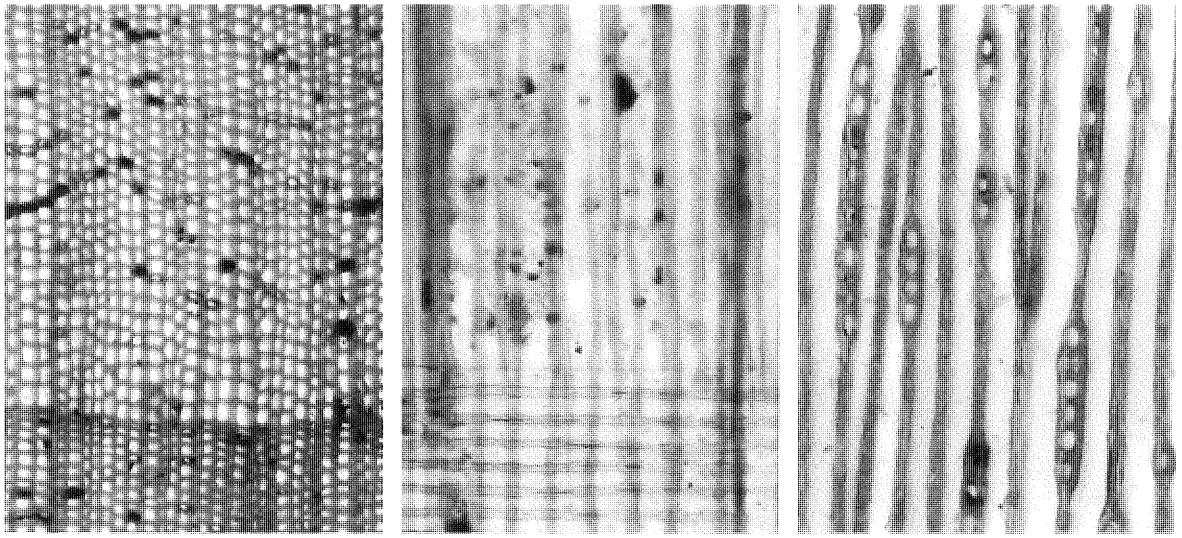
2．No.29　イヌガヤ



横断面 ——：250μm　放射断面 ：100μm　接線断面 ——：100μm

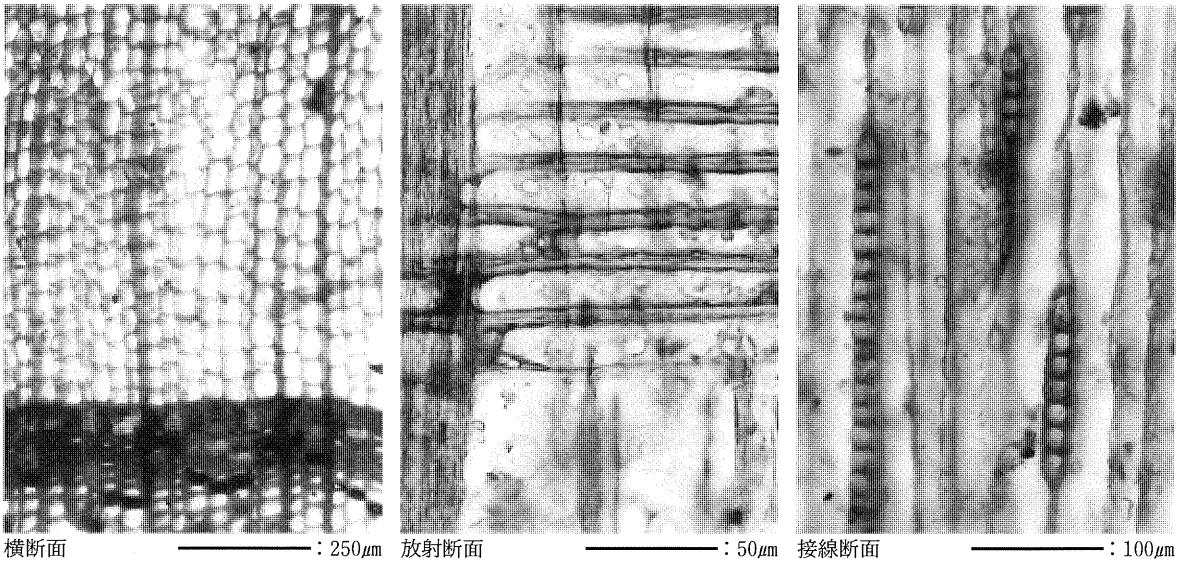
3．No.35　マキ属

図14　原の辻遺跡出土木製品の顕微鏡写真II



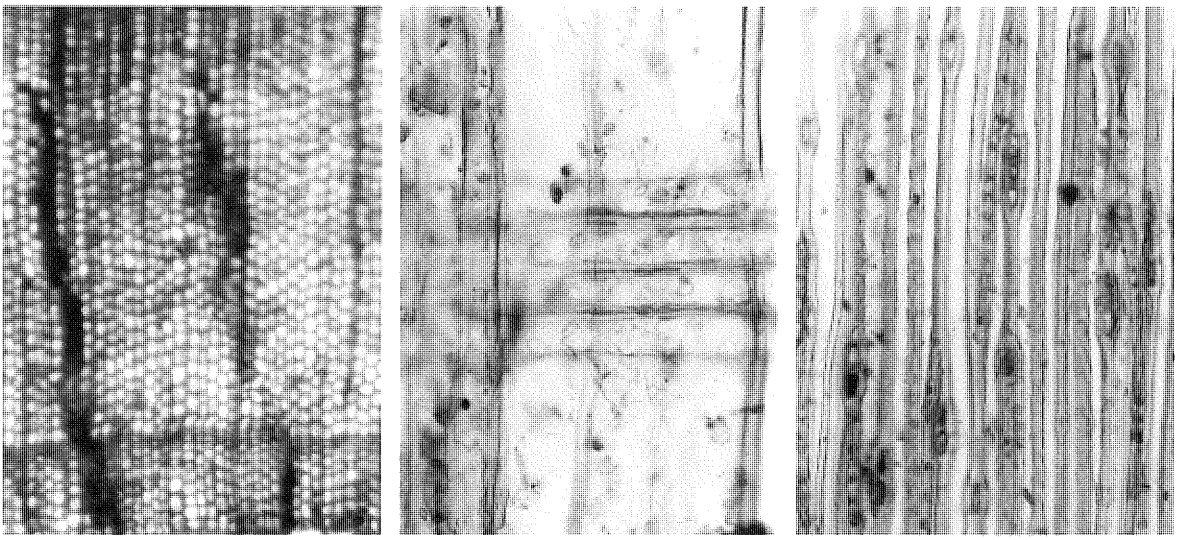
横断面 ——：250μm　放射断面 ——：100μm　接線断面 ——：100μm

4．No.78　マキ属



横断面 ——：250μm　放射断面 ——：50μm　接線断面 ——：100μm

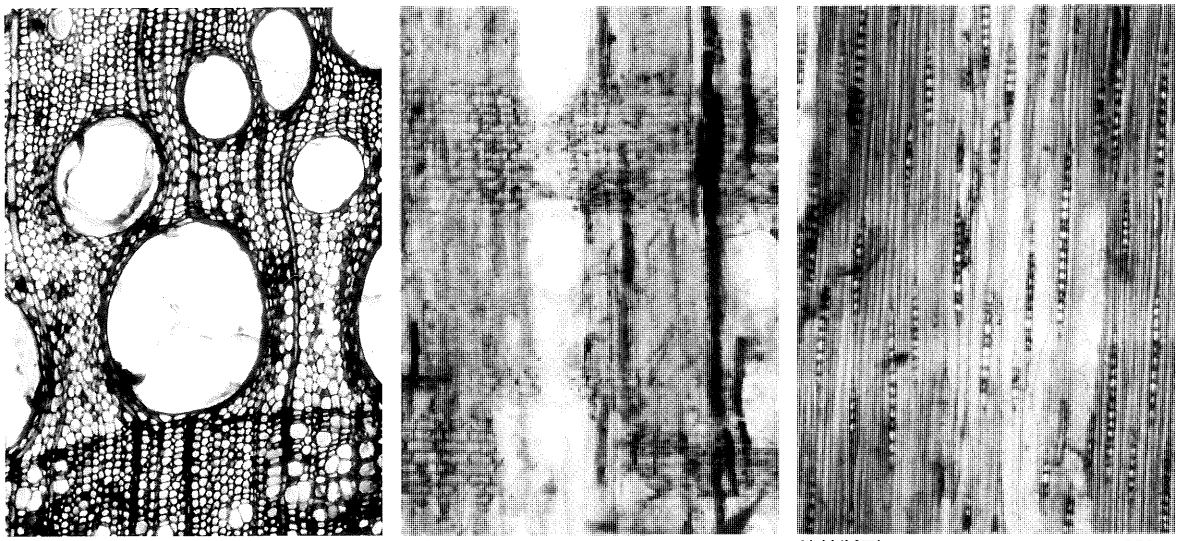
5．No.48　スギ



横断面 ——：250μm　放射断面 ——：50μm　接線断面 ——：100μm

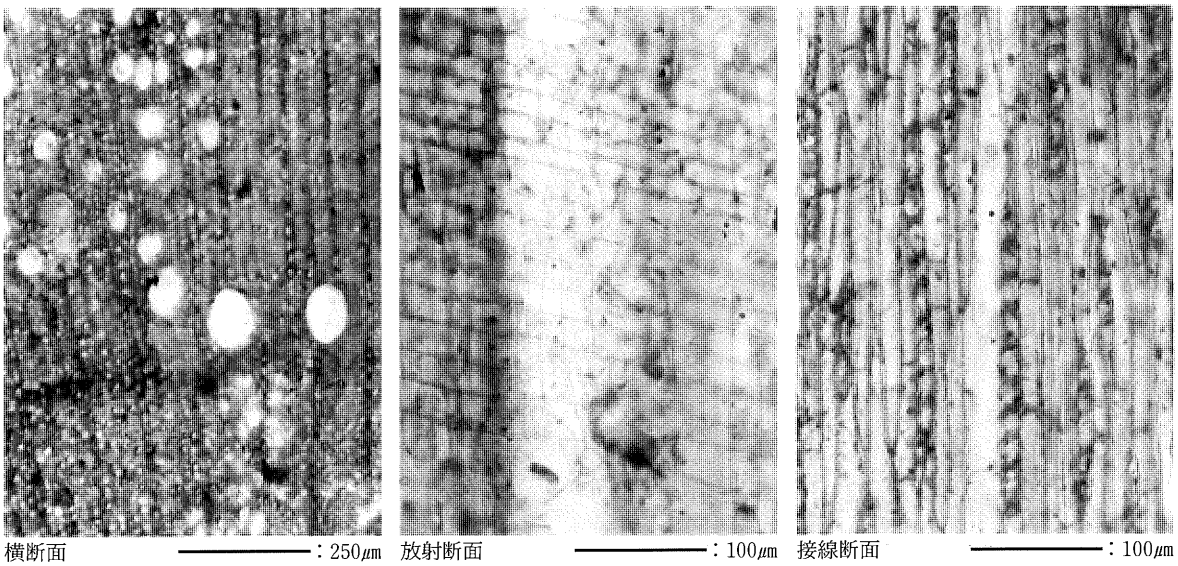
6．No.56　ヒノキ

図15　原の辻遺跡出土木製品の顕微鏡写真III



横断面 ——— : 250μm　放射断面 ——— : 250μm　接線断面 ——— : 250μm

7．No.81　クリ



横断面 ——— : 250μm　放射断面 ——— : 100μm　接線断面 ——— : 100μm

8．No.15　スダジィ

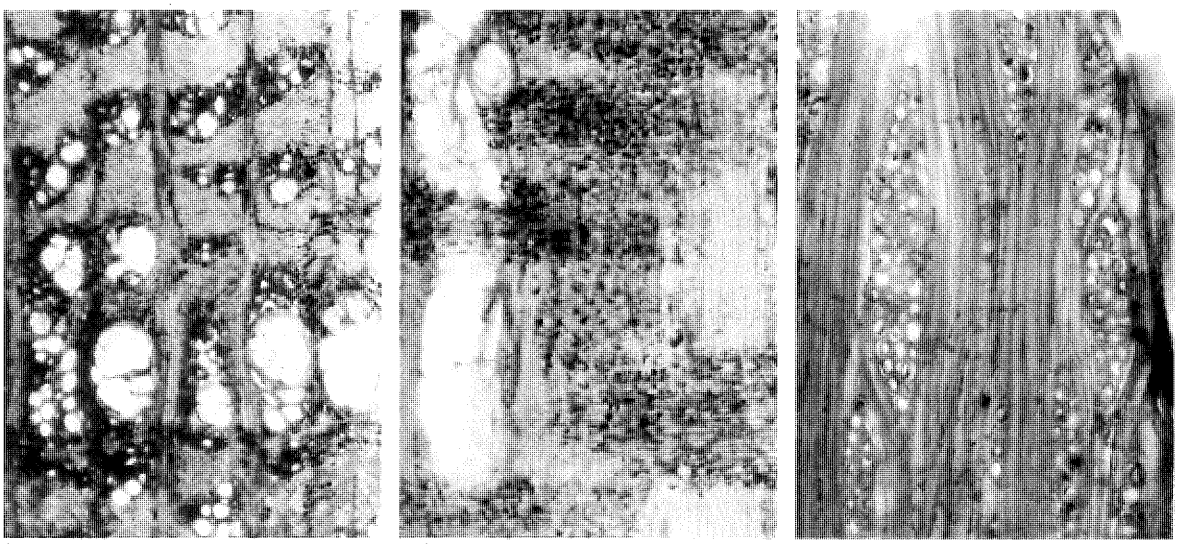
横断面 ——— : 250μm　放射断面 ——— : 250μm　接線断面 ——— : 250μm

9．No.10　コナラ属アカガシ亜属

図16　原の辻遺跡出土木製品の顕微鏡写真Ⅳ

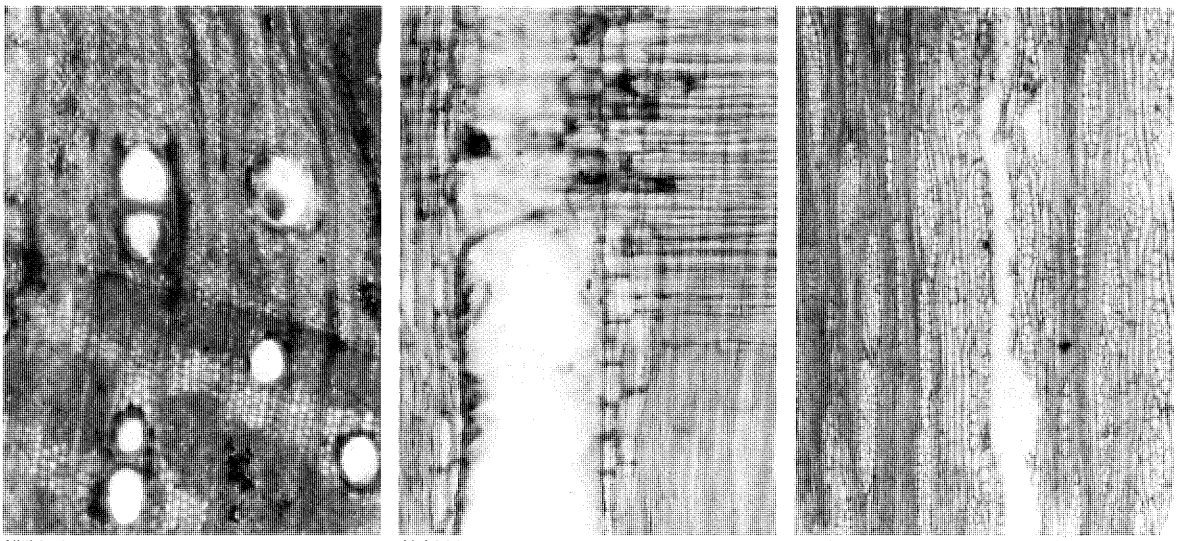
横断面 ——：250μm　放射断面 ——：250μm　接線断面 ——：100μm

10．No.64　コナラ属クヌギ節



横断面 ——：250μm　放射断面 ——：250μm　接線断面 ——：100μm

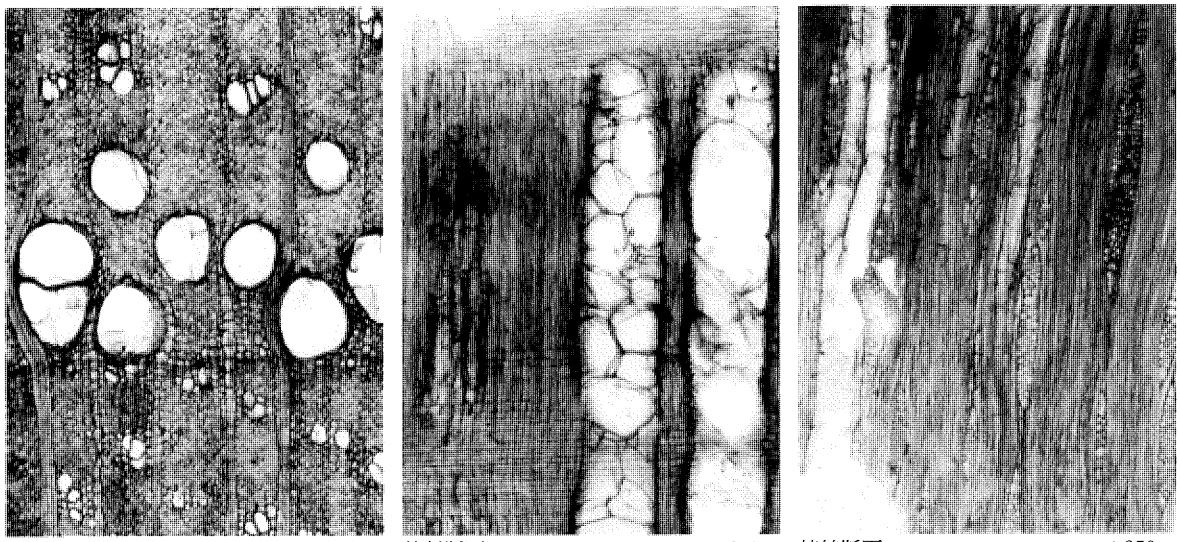
11．No.47　ニレ属



横断面 ——：250μm　放射断面 ——：100μm　接線断面 ——：250μm

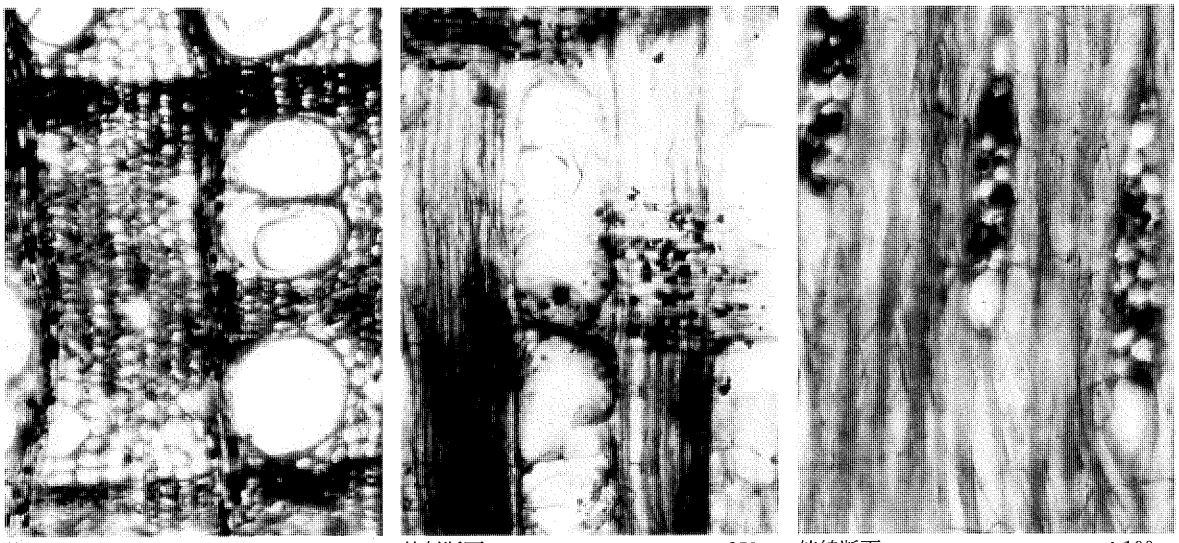
12．No.63　ムクノキ

図17　原の辻遺跡出土木製品の顕微鏡写真Ⅴ



横断面 ——：250μm　放射断面 ——：250μm　接線断面 ——：250μm

13．No.57　ヤマグリ



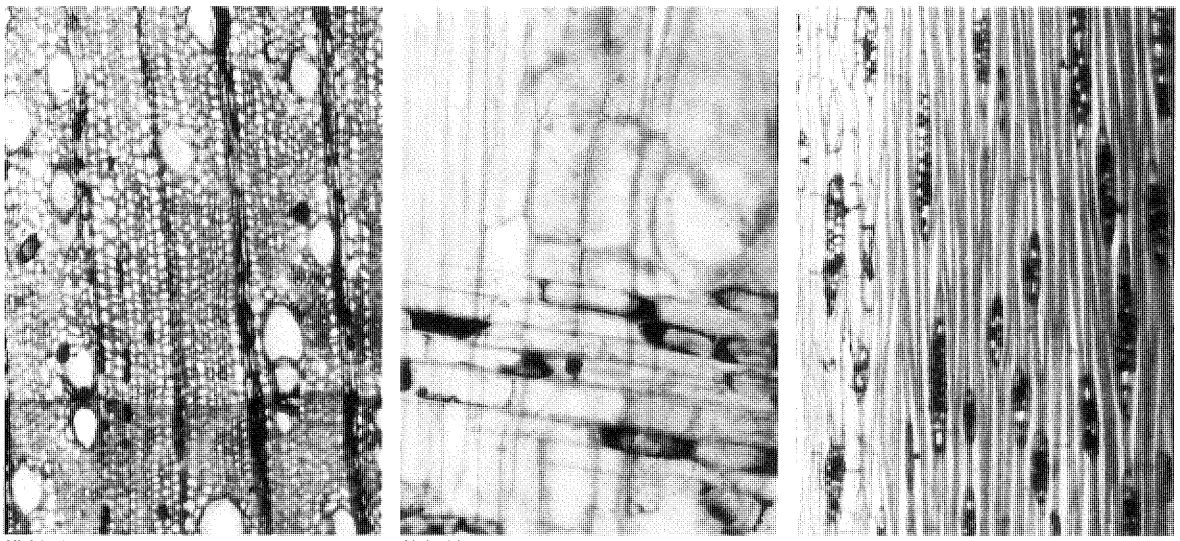
横断面 ——：250μm　放射断面 ——：250μm　接線断面 ——：100μm

14．No.30　クスノキ

横断面 ——：250μm　放射断面 ——：100μm　接線断面 ——：100μm

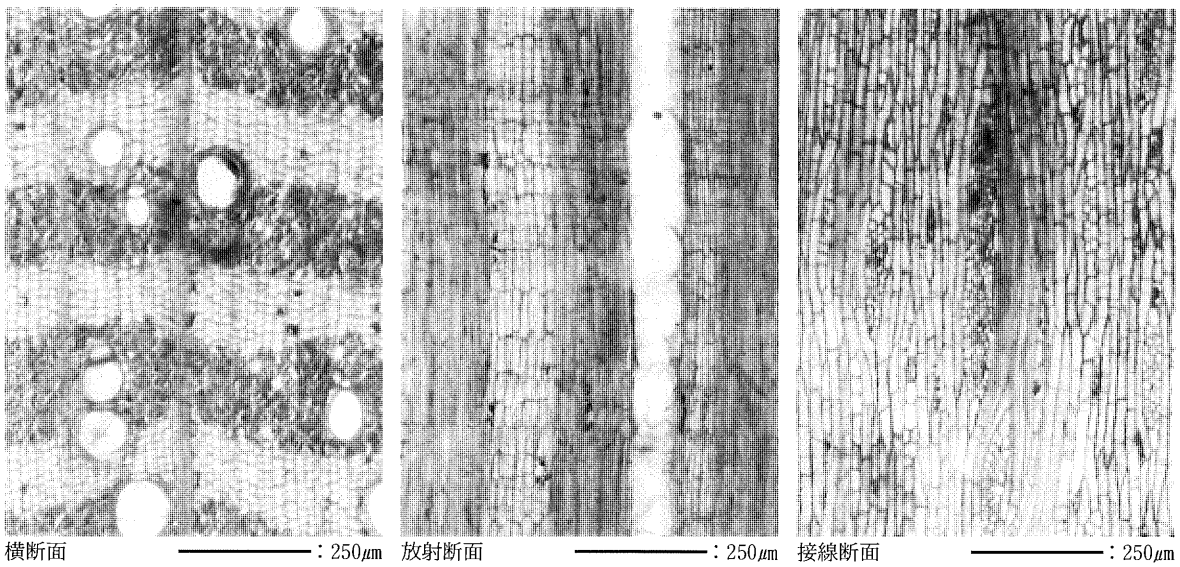
15．No.20　タブノキ

図18　原の辻遺跡出土木製品の顕微鏡写真Ⅵ



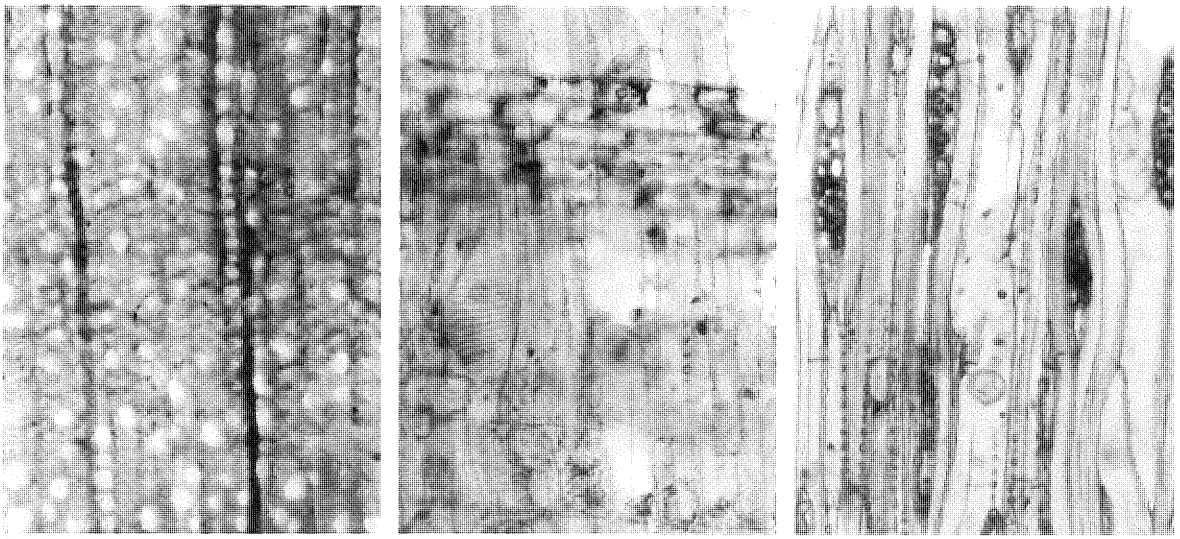
横断面 ——：250μm　放射断面 ——：100μm　接線断面 ——：100μm

16．No.38　タブノキ



横断面 ——：250μm　放射断面 ——：250μm　接線断面 ——：250μm

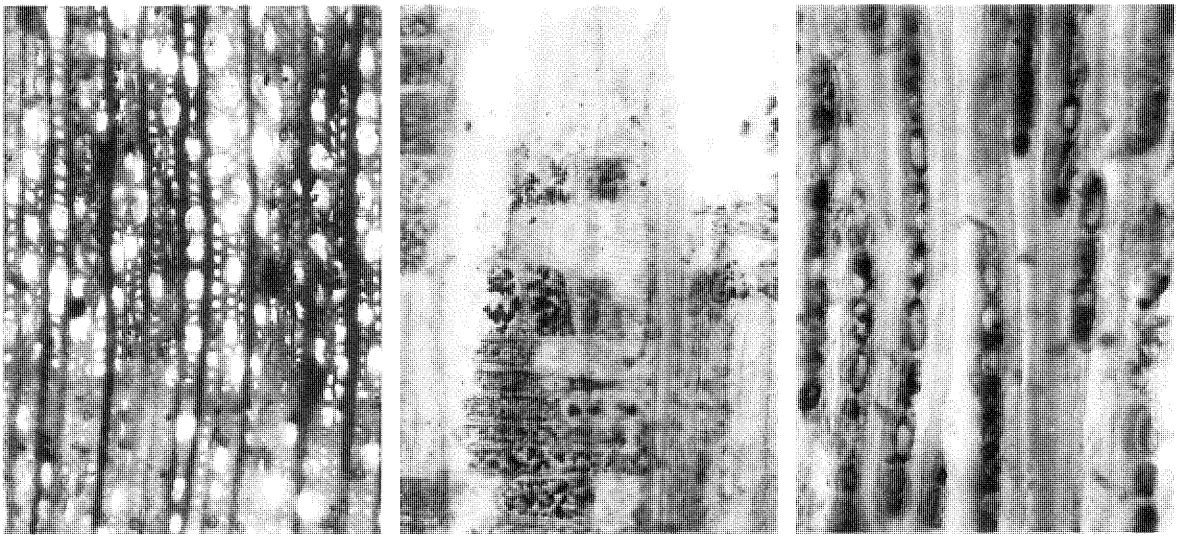
17．No.59　イチジク属



横断面 ——：250μm　放射断面 ——：100μm　接線断面 ——：100μm

18．No.14　ヤブツバキ

図19　原の辻遺跡出土木製品の顕微鏡写真Ⅶ

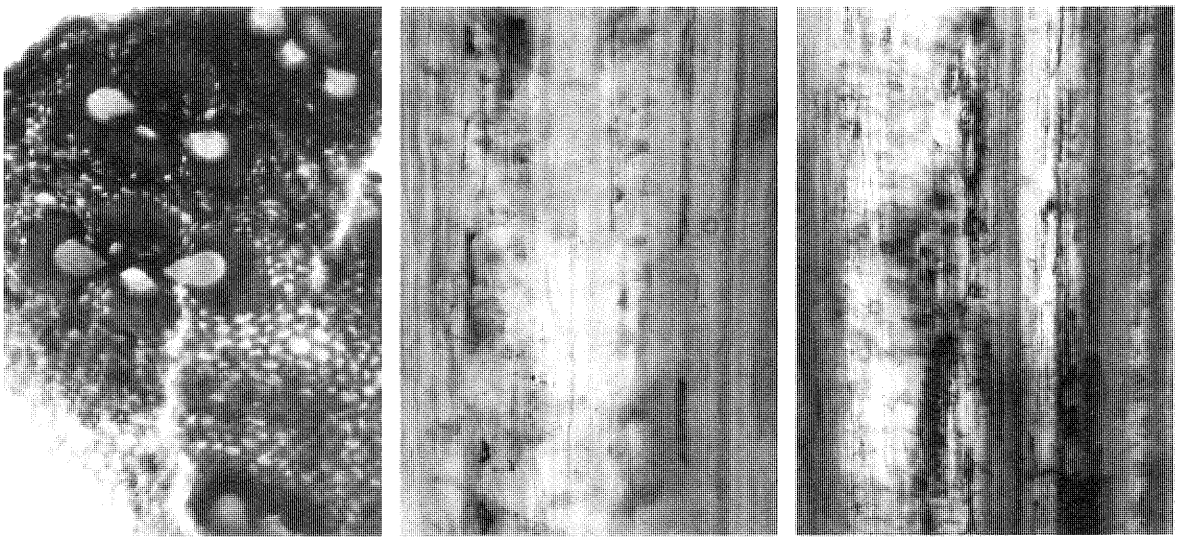


横断面 ——：250μm　放射断面 ——：100μm　接線断面 ——：100μm

19．No.16　サカキ

横断面 ——：250μm　放射断面 ——：50μm　接線断面 ——：250μm

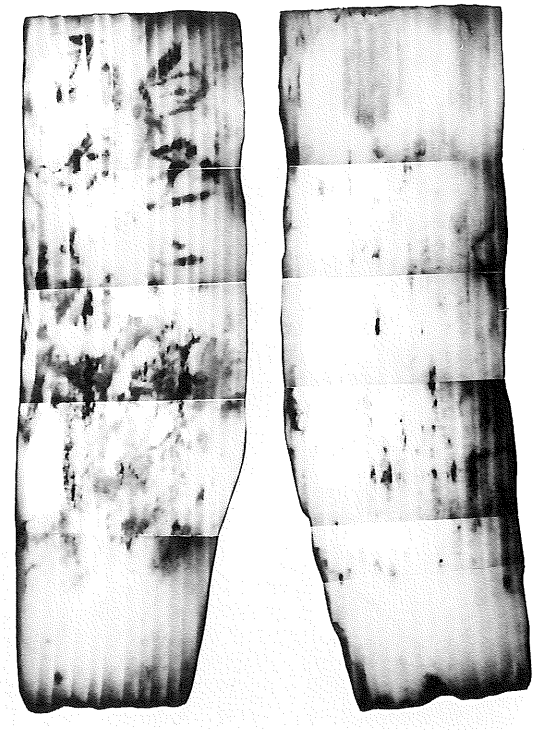
20．No.79　シャシャンボ



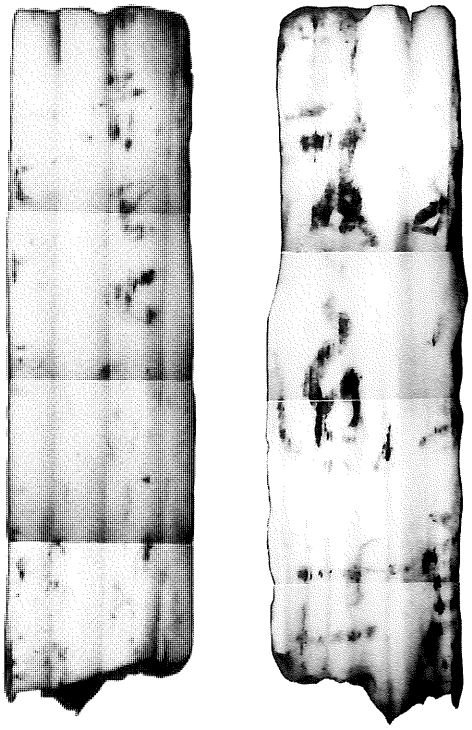
横断面 ——：250μm　放射断面 ——：100μm　接線断面 ——：250μm

21．No.23　タケ亜科

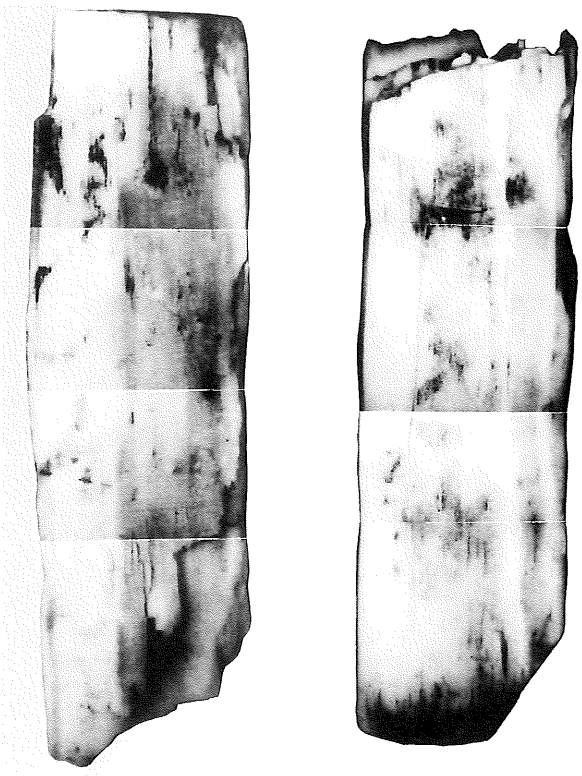
図版 1



第 1 号　木簡



第 2 号　木簡



第 3 号　木簡

第 4 号　木簡

第 5 号　木簡

玉が仮に中国産の原石に相当するならば、壱岐が古代の大陸との交易の中継基地とされているだけに、さらに貴重な資料といえる。

今後、原の辻遺跡の調査においては、弥生時代の「一支国」とともに、律令国家体制下の壱岐島の中心的施設の実態も究明する必要がある。その存在の確かな手掛かりを今回の木簡から得ることができた点が大きな意義といえるであろう。

3、内　容

不明。

第四号木簡

1、釈　文

・×壹斗一〔升か〕□」

・×□□　　」

2、形　状〔(96)×30×6〕

上部が欠損し、下部の片側の削り出しは、第一号木簡と同様に二次的加工か。本来は、短冊型と推される。

3、内　容

表の斗量と裏の人名と思われる記載からは、食品の請求または貢進文書木簡かと考えられる。

なお、数字の「壹」（大字）と「一」（小字）を併記することは、木簡の記載ではよくみられる。

例　金沢市上荒屋遺跡（第56号木簡）

56号「〈壹斛一斗一升」

（金沢市教育委員会『上荒屋遺跡II』1993年）

第五号木簡

1、釈　文

×□□□□×

2、形　状〔(80)×28×5〕

全体に傷みが著しく、特に片面は全く腐食し、木簡面をとどめていない。

3、内　容

不明。

まとめ

本遺跡の木簡の特色は、まず第一点は、すべて古代の文書木簡と考えられる。その文書の内容は、物品に関わる貢進・請求木簡と記録木簡（支給帳簿とみられるもの）とに大別される。これらの貢進および請求木簡と記録木簡は、古代の官衙内の活動を示す資料といえる。今回の発掘調査により、本遺跡が弥生時代の『魏志倭人伝』にみえる「一支国」の中心であることが明らかとなったが、さらに五点の木簡は律令体制下（奈良・平安時代）においても、壱岐島内におけるこれらの木簡を取り扱う施設が本遺跡に所在したことを示している。

すなわち、これらの木簡は通常の官衙内の活動に伴うものであり、弥生時代の環濠の一部に掘られた土壙に廃棄されていた。このことはこの土壙付近にこれらの文書を取り扱う役所が存在したことをものがたっている。

第二点は、五点の木簡のうちでも、特に第一号木簡の「白玉〔升または斤〕六□」が注目される。まず、想定されるのは、「白玉」が島内およびその周辺から調達されたものという可能性である。もう一つの可能性としては、白

□七升□〔　〕□□　×
・〔七升八升か〕
□□□□〔　〕
（進または近か）
『友□一一』　×

2、**形　状**　（(91)×(21)×3）

上端は若干欠けているが、原状をとどめている。表面の文字は墨痕がほとんど失われ、その部分がわずかに盛り上がった形となっている。

3、**内　容**

人名と斗量が列記された内容から推して、飯などの食品の支給帳簿か。次に参考までに類例をあげておきたい。

三五〇八　〔　〕
秦□〔諸カ〕万呂八
〔　〕八
〕□□□八
「六升」

阿倍枚万呂八
秦巳知万呂八
□〔津カ〕□眞□〔繼カ〕八
□〔更カ〕占眞立八
額田乙勝八
□□□山四
「五升二」

近衛
丸部駿河万呂一升二
□乃秋　一升二
山口乙万呂一升二
山口廣濱八
水取繼成八
茨田弥繼八
「八升四」

□□〔ロカ〕□〔野カ〕□八
上毛野力八
□□
「二升四」

(334)×(58)×2　6019　杉・板目

上折れ、右は割れて欠損。左下隅に孔を穿つ。飯などの食品の支給帳簿か。四段にわたって人名を列記し、各人に斗量を記し、各段ごとに斗量の小計を材を横にして追筆する。各人の斗量の合計と各段ごとの小計との比較からみて、右辺の欠損は一～二行分であろう（第二・四段では二人、第三段では一人の人名を補えば、各段の小計と合う）。

（奈良国立文化財研究所『平城宮木簡二　解説』１９７５年）

なお、「七升八升」のような記載のしかたも、次のような類例がある。

三四三三　・得客人三□
・二升　三升　□

（『平城宮木簡二　解説』）

（進または近か）

次の「友□一一」の部分は裏面の他の文字に比して大きく、一応別筆とした。これはおそらく食品支給の責任者の自署（サイン）と判断され、「一一」は画指（古代において指の形状を書いて署名の代用としたもの。左手食指の先端・末端と関節二個所を点で示す）ではないが、何らかの友近に関わる記号かと考えられる。

第三号木簡

1、**釈　文**

×　〔　〕〔　〕　×

2、**形　状**　（(58)×(19)×(7)）

材質等から判断して、直接接続しないが、第二号木簡と同一個体か。片面は全く木簡の原状の表面をとどめていない。

跡・三重県落河原遺跡・滋賀県井口遺跡・京都府平安京跡八条三坊・広島県藤ヶ迫三号墳・広島県九郎杖一号墓・福岡県観世音寺跡・福岡県大宰府跡など。

最も新しい報告例では、京都府乙訓郡大山崎町で白玉製の鉈尾が出土したという(1993年5月)。しかし、この鉈尾は専門家の肉眼観察結果では石英結晶とされた。このように、これまでの白玉製の鉈尾という報告例の多くは、石英結晶や大理石などとみられ、次にあげる正倉院宝物のいわゆる白玉製とされる「玉長坏」と異なるようである。その調査報告によると次のとおりである。

正倉院・中倉七三　玉長坏　一口

灰白色・半透明・緻密な石質で、X線解析図は透閃石と一致する結果が得られた。紫外線による蛍光は認められない。通称軟玉で、中国産と思われる。

(益富寿之助氏・山崎一雄氏・藤原　卓氏「石製宝物の材質調査報告」『正倉院年報』第十号　1988年3月)

右にあげた石帯の出土例のなかでも、大宰府跡出土の〝白玉帯〟とされる石帯は従三位に相当する大宰帥の着用したものとされている。他の〝白玉帯〟とされる石帯とは肉眼観察的には異なっているようであるが、科学的分析を行なっていない。壱岐島は、大宰府管内であっただけに、木簡の「白玉」と大宰府跡出土の〝白玉帯〟との関連が注目され、今後の分析結果が待たれるところである。

ところで、「白玉」の量目について触れておきたい。

数量単位は、「斤」よりもやや「升」に近い書体ではあるが、通常は金・銀などの貴金属や玉石類の重量単位は「斤」である。原石を細かく砕いて、体積単位「升」で表記したとも考えられる。玉石類とは異なるが、海藻類の数量単位については、次のような表記例がある。

○天平宝字五年二月六日奉写一切経所解案

(『大日本古文書』　十五巻一　十七頁)

海藻　二百廿斤四両

滑海藻五十五斤一両

末滑海藻八斗二升五合(抜粋)

斤両単位は海藻・海藻根に適用し、斛斗升合単位は、切海藻・滑海藻(末滑海藻)など、被計量体がいずれも小さく刻まれたものか、粉末状のものか、いずれかに用いる(関根真隆氏『奈良朝食生活の研究』1969年)。

まず、「斤」であるとして現量を考えるならば、唐斤について正倉院蔵の重量銘のある銀器より算出した大一斤は現量の六七一瓦(グラム)に相当するという(松島順正氏「奈良時代の度、量、衡」『正倉院の窓』1961年)。

一斤＝六七一g

六斤＝六七一g×六＝四〇二六g(約四kg)

参考までに、大宰府跡出土の白玉石帯の重量は鉈尾五〇・七g、丸鞆二〇・一gである(九州歴史資料館　横田賢次郎氏の御教示による)。

「升」とすれば、一升は現量の約四合(〇・七二ℓ)に相当し、六升＝現量二升四合＝四・三二ℓとなる。

第二号木簡

1、釈　文

・「赤万呂七八升〔高か〕□□

え、天然に産出する美しい石のことである。

一方、「白玉」を〝シラタマ〟と訓むといわゆる真珠をさす。その場合は、数量単位が丸または顆（果）となる。次の例は、志摩国の真珠に関するものである。

『延喜式』（内蔵寮）

諸國年料供進

曝黒葛（サラシツヽラ）百斤。近江國卅斤。越前國卅斤。越中國廿斤。丹波國廿斤。

白玉一千丸。志摩國所レ進。●臨時有二增減一。

麻子二斛。常陸國七斗。武藏國六斗。下総國七斗。

氈（カモ）十枚。下野國所レ進。

『延喜式』（民部下）

交易雑物

山城國　大麥三石。小麥卅石。大角豆六石。胡麻子四石。荏子四石。

大和國　大麥三石。小麥十一石七升三合。薑子六斗。大角豆四石。

河内國　大麥三石。小麥卅五石。薑子五斗。薦二千五百枚。

和泉國　小麥廿五石。

攝津國　大麥三石。小麥卅五石一斗。薑子九斗。薦一千五百枚。

伊賀國　白絹十二疋。鹿皮廿張。樽二合。加二赤漆杓一。以下皆同。

伊勢國　白絹十二疋。絹三百疋。水銀四百斤。樽二合。鹿角菜二石。青苔五十斤。海松五十斤。凝草卅斤。於胡菜卅斤。鳥坂苔五斤。海藻根十斤。那乃利曾五十斤。

志摩國　大凝菜卅四斤。白玉千顆。

尾張國　白絹十二疋。絹百五十疋。油三石。樽二合。苧一百・十斤。鹿革廿張。鹿皮十張。鹿角十枚。蒔子五石。胡麻子四石。荏子四石。鹿角菜三石。凝菜卅斤。於胡菜卅斤。

天然の原石としての「白玉」（ハクギョク）は種々加工され、器や石帯などに用いられた。古代においては、身分制の表象ともいうべき石帯として白玉は特に重要な位置を占めていた。

『日本紀略』延暦十四年（七九五）十二月丙子条には、

聽參議已上著白玉帶。

とみえ、参議以上に白玉腰帯を許している。また、『日本紀略』大同四年（八〇九）五月癸酉条には、

聽五位已上通用白木笏。其白玉玳瑁等腰帶者。亦依延暦十五年正月。十八年正月両度格。自余禁制。一如常例。

とある。この資料については、川尻秋生氏によれば、五位以上に白木笏を許すとともに、白玉腰帯は四位の参議以上に、玳瑁（タイマイ）腰帯は五位以上にそれぞれ装着を許可した規定だと解されている（「白玉腰帯について」『千葉史学』十五　１９８９年）。この条に関連するのが、『延喜式』（弾正台）白玉腰帯条である。

凡白玉腰帶。聽三位以上及四位參議著用。玳瑁。馬腦。斑犀。象牙。沙魚皮。柴檀五位已上通用。

白玉腰帯は三位以上及び四位の参議に許され、玳瑁腰帯は五位以上に許されている。

近年の全国各地の発掘調査によって、白玉腰帯とされる遺物が十数例報告されている（田中広明氏「律令時代の身分表象（Ⅱ）――腰帯をめぐる人々の奈良・平安時代――」『土曜考古』第十六号　１９９１年）。

青森県表館遺跡・宮城県多賀城跡（二個）・秋田県払田柵跡・千葉県有吉遺跡・東京都落川遺跡・神奈川県向原遺跡・神奈川県海老名本郷遺

長崎県壱岐郡原の辻遺跡出土の木簡

国立歴史民俗博物館　教授　平川　南

第一号木簡

1、釈　文

・「□□□〔進か〕×

・「白玉六□〔升または斤〕

高□□□〔仗か〕×

2、形　状〔(115)×(38)×10㎜〕

木簡の下半部は原状で平面をかなり深く削り、側面も先端を尖らせるように右側のみ削り出している。また、右側面上半部一ヶ所にも浅い切り込みが認められる。これらの加工はすべて二次的なものと判断でき、現状は短冊形であったとみなすことができる。下半部平面の削りによって墨痕は全く失われたのであろう。

なお、本木簡は、全面的に鉄分が付着し、文字を覆っていた部分もあったので、一部取り除いた。

3、内　容

表面は墨痕がほとんど失われているが、「進」が認められるとすれば、他の例に「解申進」「□□進」（役所名・職名など）などとあるような貢進文書木簡となるであろう。その場合は当然、裏面には具体的な貢進物が明記されたと考えられる。

「白玉六□」（升または斤）などがそれにあたるであろう。

類似の木簡の文例をあげると、次のとおりである。

二〇八三・北□所進　翠鎹十六隻長三寸半　牒□六隻長四寸　□尻塞卅四枚　鐶二隻

・位幷尻塞四枚　合卅二斤　本受鐵册三斤十兩　損十一斤十兩　神龜六年三月十三日足嶋　「了」　303×49×4　6011

鉄製扉金具の製作・進上に関する文書。

（奈良国立文化財研究所『平城宮木簡三　解説』1981年）

秋田城跡第七号木簡

・解　申進人事　合五人　□□□□□□□□

455×40〜35×1　6019

（秋田市教育委員会・秋田城跡発掘調査事務所『秋田城出土文字資料集II』1992年）

ここで問題となるのは、「白玉六斤」であろう。

『色葉字類抄』（1144年成立）によれば、「白玉」は〝ハクギョク〟と訓んでいる。

『延喜式』（治部省）祥瑞条に、

流黄出谷。〈土精也。〉沢谷生白玉瑯玕景。〈玉有光景者。〉〔◇注〕とみ

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
巻次	I
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第124集
編著者名	副島和明・山下英明・川口洋平・石尾和貴・松永泰彦・武末純一・松井　章・茂原信生・松下孝幸・平川　南
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850　長崎県長崎市江戸町2-13　TEL．0958-26-5010
発行年月日	西暦　1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐郡芦辺町 深江鶴亀触・石田町 石田西触	42423 42424	92 10	33°45′29″	129°45′18″	19930422 ～ 19940331	4,969 m²	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代	環濠 石敷遺構（水場） 柱穴群 通路状遺構	弥生土器 朝鮮半島系土器 土師器 石器 青銅器 鉄器 木製品 骨角器 木簡	魏志倭人伝に記された「一支国」の中心集落であると考えられる。

長崎県文化財調査報告書第124集

原の辻遺跡

平成7年（1995）3月31日発行

発行者　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号
〒850　☎0958—26—5010

印刷所　㈱昭和堂印刷
諫早市長野町1007—2